
人生山あり谷あり

北郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生山あり谷あり

【Nコード】

N4109M

【作者名】

北郷

【あらすじ】

子供を助けたと思ったら自分が電車に轢かれて死んでしまった。目が覚めて助かったと思っていたらなぜか赤ん坊になっていて、その世界は実は「ゼロの使い魔」の世界で、でも原作知識は曖昧で・・・。

そんな主人公がいろいろ頑張る話のはず。

転生主人公最強系であり、御都合主義と妄想が大量に含まれます。さらにキャラの性格とか変わってるかも知れません。

それでもいいさ読んでやらー！ と許容できる方は読んでくださいませ。

以上を許容できない方はブラウザの戻るボタンをお願いします。

エピローグとプロローグ（前書き）

ゼロの使い魔のファン小説です。

書きたいと思ってたら書いてました。

感想、誤字・脱字報告など、よろしければお願いします。

それでは、宜しくお願いします。

エピソードとプロローグ

やあ、おはようこんにちはこんばんは。

はじめまして、伊賀^{いが}貴史^{たかし}です。

突然ですが、俺こと伊賀^{いが}貴史^{たかし}は現在、人生最大のピンチに陥っている。

ああ、伊賀とか苗字についてるが別に忍者の末裔とかそんなご大層なもんじゃない。ただ、その地方に住んでたっただけだ。だから、俺はただの一般人だ。別に敵対組織の忍者に追いかけてるとか、諜報活動をミスって追い詰められてるなんてそんなことはなく、もっと現実的なヤヴァイ事に巻き込まれている。それを説明するには、ほんの数秒前からの説明が必要だろう。

そう、俺はさっきまで地下鉄のホームで買ったジャ。プを読みながらアニソンをイヤホンで聞いていた。

そんな俺が、視界の端で何かが駅の線路に落ちたと思ってそこに目をやると、小さい子供が落ちていくところだった。

さらに、どこのテンプレだと言わんばかりに電車が迫って来ていた。ヤバいと思った。

そこから先は無我夢中だった。というか、気付いたら体が動いてた。

持ってた荷物やジャ。プをかなぐり捨て、とりあえず落ちて行っただ子供を追いかけて線路に降りた。地下鉄を走る電車が警笛を鳴らしまくっている。

分かっている。今、俺は馬鹿なことをしている。それはわかっている。だが、小さい子供を見捨てるなんてできない。できるわけがない。

そして、子供を抱き上げ、ホームでこちらに手を伸ばしている見知らぬ人に子供を渡す。

んで、後は俺がホームに登れば万事解決。全てが丸く収まる。事故にならずにハッピーエンドだ。

だが、安心した俺は足を滑らせた。

ああ、馬鹿だと思っただ。そして、自分に突っ込んだ。どんだけありきたりなんだ、と。

だって、足を引っかけるところがなかったんだもんよ。つるつるだもん。側面がさあ。さすがに無理だって。

でもま、最後にいいことしたんだし、新聞にも立派だなんだと載せられ、二、三日から一週間は俺は英雄がごとく崇められるだろう。

俺の無意味な今までの人生にも、意味があったのかな。ってか、受験とかしんどかったし。丁度いいかもしれない。俺に国公立大学の理系とか無理だったんだよ。

でも、なんでだろう。やり残したこととかいろいろあるはずなのに、全然悔しくない。むしろなんか清々しい気持ちでいっぱいだよ。

あ、でも心残りがあるかも。

実は俺、彼女いない歴〃年齢のKIRINだったことが唯一の心残りかもしれない。はあ、彼女がいれば、童貞も捨てられたかもしれないのに…。

あ、そうだ。

ごめん、母さん、父さん。

恩返しとか、親孝行とか何にもしてないわ、俺。

しかも、オタクになっちまってさあ……。

ああそうだ、できれば俺の部屋にあるものは、なんにも言わずに捨ててもらいたいです。僕のためでもあり、あなたたちのためでもありますから。ほんと、言えないようなものはもちろん、18禁なゲームとかエロい系のとても親には見せられないのとかもあるから、普通に引くと思うし。それに息子のフェチを知ったら、親は何とも言えない気持ちになるだろう。

あー、昔の思い出とかが一気に流れてくらあ。これが走馬灯ってやつか。ははっ、ホントにあるんだな、こういうの。

てかあれ？ 俺、こういうの考えられてるってことは結構余裕なんじゃね？ まだ起死回生の生き残るなんかがあったりするんじゃないか？

ってまあ、完全に今、中空で電車がぶつかってくるのを待ってるだけなんですけどね。あれだぜ？ 走馬灯って死ぬ前に見るんじゃないかって、危機を回避しようと、必死に脳が昔の記憶をひっかきまわして見るやつのことなんだぜ？ イメージは、映画の時の「なんかないかな」と道具を探すドラ。もん。だから、割と走馬灯って簡単に見えるんだ。で、なんか危機回避の術を探すか、これは無理だろう、うん。積んだ。人生の投了。もう降参でさあ。あーっと、ぶつかるまでどんくらいだ？ 一メートルないよな、これ……。

ハア、最後になんか一言言えるか？

「ごめん、かあさー（ドグシャア！）」

そして、伊賀貴史の人生は幕を閉じた。
はずだった……。

第01話（前書き）

またまたよろしく願いします。

一人称とか、使うのがハチャメチャになってます。

見苦しいかもしれませんが、流して下さい。
すみません。

第01話

ん、んあ？

ふと目が覚める。さらに、自分の周囲が、やけに明るいと感じく。

つてうお！ まぶし！ 眩しいってこれ。なんだ？ 朝なんか？
ちよつとまってあと五分だけ・・・ってあれ確か俺？

なにか違和感を覚え、目を開けてみる。

『あれ？ どこだここ？ 確か俺、電車で轢かれて挽き肉になって死んだんじゃあ・・・』

見知らぬ天井だ。

周囲を見ようと首を回そうとするも、体が動かない。

『あれ、なんで、体が動かないんだ？』

ああそうか。電車で轢かれたんだもんな。生きてるだけで奇跡くさいのに、そりゃあ無傷ってわけにもいかないか。

てか俺、生きてたんだ。

あのぶつかり方は普通に死んだと思ったんだけどな。音とかマジグロな感じでしたと思っただけと……。

でも、体とか全然痛くないんだけど…。ギプスとか巻かれてる
圧迫感もないし…。

それにしても、ここの天井は病院って感じがしないなあ。石造りだ
し。

おっ！ 足音だ。その人に聞いてみるか。

『あうああー、あうあううああーあ（すみませーん、ここどこで
すかー）』

ってあれ！？ 発音がしつかりできないだど！？
あ、足音の人が来た。

「あらあら、どうしたのラウルちゃん？」

そう言いながら俺をラウルと呼んだ女性が俺を抱き上げる。

その女性は日本人には見えない。栗毛色の髪が背中まで伸びている。
普通に美人で、若そうに見える。大学生、ひよっとしたら高校生で
も十分通じそうな若さだな。

ん？ ラウル？ ラウルってだれだ？ なんで俺が抱き上げられえ
てるんだよ？ すげえ力持ちだなこの美人。

「おしめかしら？ それともおっぱい？」

なにを言い出すんだこの美人。おっぱいとか、やめろや。18歳才
タクのシャイボーイは照れてしまうじゃないですか。
それに、おしめ？ いやいや、おしめとか…。こんな美人にしても

らうのは心苦しいですから、せめて母さんと呼んでくださいよ…。

「んー、かわいいわねえー。さすが私の息子ねえ。んもー、頬擦りしちゃうわよお」

ちよ、やめ…、照れちゃうじゃないですか。あは、あはうあ、うへえあははは

「んー、ラウルちゃんー、かわいすぎるうー」

そのとき、また違う人が俺のいる部屋に入ってきた。

「アミス、ワシにもラウルを抱かせてくれんか」

「あらあなた、はい、首に気をつけてあげてくださいね」

「うむ、わかっておる」

そっついながら、アミスと呼ばれた美人からオッサンに俺が渡される。

だから、こいつらどんだけ力持ちなんだよ！

そこでふと、近くにあった鏡が目に入った。

そこには、オッサンに抱かれる赤ん坊がいた。

その赤ん坊が、俺を見ている。俺も、赤ん坊をみている。

もしかして…、俺か？ この赤ん坊が俺か？ でもちよつと待てよ。髪の色とか濃い金色ですよこれ？ 絶対日本人じゃねーだろ。純然たる日本人の俺は、黒髪黒目でさらに自分で言うのもなんだが二枚

目半の地味な18歳で大学受験勉強中のシャイボーイ男児のはずなんだが……。

「んふう、ラウルう、ワシのかわいいラウルう」

ちよ、キモイキモイ、キモイってオッサン！ やめろ！ それに髭が！ 髭が痛い！

「あうあ、あああうあー」

俺は嫌そうに体をひねってオッサンの顔を手で押して避けようとする。

「はっはっは、かわいいなあラウル、そんなにお父さんの髭に興味があるのか？ さすがワシの息子だ」

は？ 父親？ 何言ってるんだこのおっさん。こんな金髪茶目のダンディーなオッサンが俺の父親なわけがないだろうが。俺の父親は黒髪黒目で黒縁眼鏡をかけた中年オッサンなんだが。

「もうあなた、ラウルは私の息子でもあるんだから、独り占めしないでくださいな」

「はっはっは、すまないアミス。ラウルは私たちの息子だったな」

つか勝手に決めんなこいつら。俺はうちに帰りたいんだよ。

ってかここどこだよ？ あんたらは日本人か？

言葉はわかるんだが、家の作りとか服とかいろいろ現代と違う気がするんだが…。

「おおそつだアミス、もう少し落ち着いたら、オルレアン公にラウルを見せに行こうと思うんだが」

「ええ、そうですね、首都までは行けなくても、オルレアン公領くらいまでならばいけますね、隣ですし。」

「では、もうすこししたらオルレアン公のところに行こうか」

「はい」

え？ 俺の意思は？ 無視ですか？ 誠に不本意だが、まあしゃべれないしな。しかたないか。

とりあえず今は眠ろう。

強烈な眠気がさつきから押し寄せてさあ…。

このオッサン、意外と抱くのが上手いじゃないか。
やるなあ。

そう思いながら、俺は深い眠りに入っていく。

あれから数か月が経った。

この期間で、気付いたことがいくつかある。

やはりあの時見た濃い金髪の子供、あれは間違いなく俺だったようだ。

ははっ、驚いたぜ。挽き肉になって死んだと思って、気付いたら赤ん坊だぜ？

それで、俺の名前は貴史ではなくて、ラウルとなっていた。

ああ、本当に驚いたぜ……。急に泣きなくなったり、気付いたら勝手に下からいろいろでてたり……。

んで、あのアミスと呼ばれていた美人。あれ、俺の母さんらしい。

歳は19歳。あと、俺に髭を一日一回はこすりつけてくるあの金髪茶目のダンディーなオッサンだが、あれはどうやら俺の父親らしい名前がジュールというらしい。フルネームが、ジュール・アルウェルニ・デュ・マ・オーヴェルニユらしいです。やはり貴族というものは名前が長いんですね。覚えにくいっただけです。

さらに、だ。この俺の生まれ変わった世界だが、どうやらゼロの使い魔の世界っぽいんだわ。

うん、原作呼んでただけだね？　ほとんど覚えてないです。まさか転生するなんて思わなかったし。キャラの名前何人かと、そのうちでつかい戦争があるくらいしか覚えてないです。確か、戦争が起くるのはアリビオンって国だったから、このガリアではないから大丈夫だと思います。それにしても、どうしよう。

それにだ。この世界には、原作通りなら魔法がある！　それに俺は貴族の家に生まれた。これの意味するところは、俺は成長したら魔法が習えるってことだ！　楽しみすぎる！　僕の属性はいつたいど

うなるのか！ 親の属性とかは話してる事を聞いてたら、分かりましたよ。

父親が、水のトライアングル。母親が土のトライアングルらしいです。父上のいるオーヴェルニユ家は、代々水の秘薬作りの家系であつたらしく、秘薬作りに関してはエキスパートらしいです。王室御用達のポーションとか作つてゐたいです。でも、今現在病床に伏しておられるという現王の病気はさすがに治せないようです。

まあ、現王様には現王様の専属水メイジがいるらしいですが、こればかりはどうにもならないと言つてたのを、会話に上つてゐるのを聞きました。そして父上は、オルレアン公付きの水メイジをしているらしいです。流石、優秀なんですね。かつこいい上に王族付きの医者とは……。勝ち組だな……。そして母上のことですが、どうやら、領内、と言つてもこの屋敷周辺にある村限定ですが、土の魔法を使つて治水工事などをしてゐるらしいです。家の家系は、使えるものは使う、というあまり伝統に拘らない感じの家訓を持っているので、普通に駆り出されてゐるようです。まあ、母上はゴーレム使いのプロでもあるので、殆ど汚れたりしないそうです。現場全体を見渡して指示を出したり、必要に応じてゴーレムなどに手伝わせたりと現場の総監督的なことをしてゐるらしいです。母上は美人なので、現場で反発などなく、さらに人間には危険な所や無理なところは母上がゴーレムを使つてやっているので普通に人気が高いようです。流石母上です。

そんな両親の子供が僕なんですよ？ どんな魔法の才能が俺に花開くのか、これから楽しみでなりません。これを楽しみにしてたら、他のことなんてどうでもよくなるさ。おしめを取り換えられるのも普通に我慢できる！ ……ごめんなさい、本当はちよつと、いやかなり恥ずかしいです。

あ、そうそう、僕、今本にはまってるんですよ。読書つてやつです

ね。んで、最近読んだ本に『イーヴァルディの勇者』という本があるんですけどね？ あれなんですけど、なんか普通に嵌ってしまいました。

かつこいいですね、あれ。

いやあ、精神年齢18歳にもなつて、今からあんなもんにはまると思いますでした。肉体年齢に、精神年齢まで引きずられてるんですかね？ まあせっかくの二度目の人生です。あんな風に育ちたいと思います。努力してみようと思います！ 杖とか、母様達は普通の杖ですが、剣のような杖にもできるそうだし。あ、でも普通の杖も欲しいかも。

ふひひ、一度は収まったと思っていた中二病が、再び出てきたのかもしれません。

ああ、早く魔法を使いたいものです。

第01話（後書き）

編集しました。

第02話（前書き）

おはようございます。

なんか暴走しちゃいました。

第02話

ふおうも、おひはひふひです。らうるでふ。
あれふあら三年経ちました。

ふう、気持えかった。

今、僕ははママンのおっぱいをもふもふしてたんですよふひ。
これも、体が子供という役得のおかげです。

某探偵さんも、こんな気分を味わっていたんでしょうか。
まったく、けしからん事です。

あ、そうそう、確か、原作キャラだったような気がするシャルロット（タバサ）たんがオルレアン公のところで生まれたそうです。パンとママンが言っていたのを聞きました。うん、よかったよかった。

あ、私ですか？ 私は、ずっと本を読んできました。読んでたつていうか、ずっとママンなどに読み聞かせてもらってました。もうね、本しか楽しみがない今、本を置いて何を読むのかって話ですよ。で、本を読むことの幸せに今気づきました。最高ですね、書物って。この三年でもうすっかり本の虫になってしまいましたよ。

それと、実は土のトライアングルであるママンは、やはりそれなりに多忙であるらしいです。具体的には、オーヴェルニュ領の治水工事など。なので僕にかまってくれるのは週三か四くらいです。

まあ、それでも十分多いとは思いますが。で、ママンが仕事をするとき、僕はどうしてるのかというと、おっぱいがおおきい若いメ

イドさんの字が読める人に絵本とかを読んでもらってます。おっぱいもふもふしながら読んでもらうというのは、我ながら最高の思い付きだと思いました。勉強してる間ずっとご褒美だから、はかどるはかどる。もう、ずっと字のお勉強してたいですよ。ほかに、積み木したり子供らしく屋敷中を走り回ったり、子供のように振る舞い、それなりに充実した毎日を送っております。

そうこうしてる間に、だいたい字も憶えてきたので、パパンの蔵書室に入る許可をもらいに行こうと思います。というか、今は向かってるところです。ママンのおっぱいもふもふしてたら、そろそろ仕事に行くと言うので、ついでに僕もパパンに許可をもらっておこうと思い、向かっているところです。あ、付きました。ここです。

こんにちは。

ノックをすると、パパンの「入れ」と言う声が聞こえてきたので、拙いながらもドアノブを回し、中に入ります。

そう、もう勝負は始まっています。

拙くドアノブに手をかけ、必死にあけるところとか、ポイントが高いと思います。

「おお、ラウルではないか。どうしたのだ？ 一人でワシのところに来るなんて」

ラウルが、ワシの一人息子が一人でワシのところを訪ねてきた。というか、何だそのかわいさわあああ！ その上目づかい、やめてくるええ！ ぎゅってしたくなるではないかあ！ ああ、でもラ

ウル嫌がるしなあ……。この前は三日は口きいてくれなかったからなあ。愛でるだけで我慢しよう……。

「おとうたま！ おねがいがあつてきました！」

ラウルがワシにお願いがあつてきたという。うむ、なんであろうか。一人で必死にドアノブを開けて入ってきたりしてとてつもなく可愛い我が子。そんな我が子の願いならなんでも聞いてやろうと思ってしまう。だからぎゅっとさせてくれないかな？ お願い、ちよつとだけでいいから！

そんな言葉はおくびにも出さず、平静を装ってワシはラウルに返事をする。

「なんだね？ 言つてごらんラウル」

「あー、えーつと……」

とてつもなく可愛い我が子が、言いづらそうにモジモジとしている。危うく理性が崩壊して、顎をすりすりとしてしまふところであった。それにしても可愛すぎるんだが。やばい、憤死するかもしれん。これ以上我が理性が可愛い息子成分に侵略される前にお願いを聞いてやらねば、ワシが持たん。口をきいてもらえなくなるのは、なんとしても避けたい。

「なんだねラウル？ 何か言にくいことなのか？」

「えっと、ごほんのえつらんきよかをいただきましたく……」

か、かわいいiiiiiiii！　なんだこの可愛さわ！？　難しい言葉を
舌っ足らずで喋るこの破壊力うううう！　やばい！　ワシの理性
が限界をむかえてしまいううう！

どうしたのでしょうか？　父上は。さっきから僕が発言をして返答
するまでに少し間があるんですが。ふはは、わかっているさ！　僕
の可愛さに打ち震えてるんだろ？　ああ、その破壊力は俺が一番知
っているんだよ。なんたつて、最終兵器にと俺が自室の鏡の前で練
習した仕草の連続だからな！　破壊力は俺のお墨付きだ！　まあ、
部屋に来たメイドさんには早くもナルシストになってしまったのか
と思われたがな！　フハハ！　だが、これに勝てば全てが無駄では
なかったということだ。我が恥も無駄ではなかったのだ！

「んもおお駄目だああああ！！　ラウリユウウウ！　ワシの
ラウルうう！　ぎゅってさせてくれえええ！」

うおお！？　いきなり叫びだしたと思ったら理性が逝っちまったの
か！　だがしかし！　俺はこれを許さない。許可をもらうまでは！

「まってくださいちちうえ！　ごほんのえつらんきよかのはなしな
のですが！」

「そんなものいくらでもくれてやるううう！　だから！　だか
らぎゅっとさせてくれえええ！」

ミッションコンプリートだ。ふっ、ちょろいな。後はちょっと抱か
れてから、すぐに蔵書室に行くでしょうか。

「ラウルううう！ ラウルラウルラウルうう！ 私の可愛いラウルう！」

うわああああ！ キモイ！ めがつさきもい！ なんだこいつ！ あ、俺の親父か。そんなこつちゃねえ！ ぶつちゅーとしてきやがった！ ふざけんじゃねえ！ 男とキスする趣味はねえ！ たとえ愛情表現でもだ！ だからヤメロこら！ うおおおお！

俺は全力で髭親父の顎を押し少しでも離そうとする。だが、やはり三歳児、理性が壊れた三十五歳のおっさんには流石に勝てない。ていこう虚しく頬にぶつちゅーとされるかと思つたその瞬間、ドアが勢いよくあけられた。

現れたのは、母ことアミスだ。

ちようど良かった母上、助けて下さいよ！ この髭親父気持ち悪いんですよ！ それに、早く蔵書室に行つて本を読みたいですし。

母上に懇願の目線を送るが母上は黙して仁王立ち。いや、微かに震えているのが見てとれる。

震えているかと思えば、大声をあげて何かを宣言しだした。

「もう、あなた！ 私の（・・・）ラウルが嫌がつてるじゃない！ やめてあげて！ ラウルをぎゅっとするのは私なの！」

いやいや、まあ、二十二歳んぴちぴち母上になら悪い気は全然しません。むしろご褒美ですが！ そんなこたあいいからひっぱるんじゃねえ！ 髭親父の愛の接吻から抜け出せたのはいいけど三歳児が左右から引つ張られるのは体がもたん！ イダダダダ！

「こらアミス！ お前だけのラウルではない！ 私達の（・・・）

ラウルなのだ！ だからワシにも抱きしめさせてくれええ！ ちよつとでいいのじゃ！ 少しでもワシは今日も頑張れるんじゃないかああ！」

「ならあたしを抱きしめて下さい！ あなたは最近ラウルの事ばかりで私に全然かまってくれないじゃないですか！」

おおう！ 母親の本音が！ そうか、毎日毎日良く俺に付きまとうと思ってたら夫婦の時間を削ってたのか。なんだこの子煩惱っぷりは。普通、こんな若い奥さんがいるんだから、そっちに行くだろうがよ。

気を使ってメイドさんに本読んでもらったりしてたんだから、もうチヨイ空気読めよ！

三歳児に空気読めない男扱いされた父親。哀れ。

てかいいい加減離せよ！ 泣くぞ！？ 子供の専売特許「泣く」を使うぞ！ 泣きわめくぞこらああ！

って、引つ張る力がゼロになっている。というかむしろ、ひばったまま双方が固まっている。

父親と母親は俺越しに見つめ合っている。

私は、今日も朝から可愛いラウルちゃんに本を読んであげていた。ラウルちゃんは真剣に本に目を落とし、読んでいる風に思える。でも、読んではるときにときどき私のおっぱいをもふもふしてくる。これは、最近というかラウルが生まれてからご無沙汰な私には拷問に近い。二、三冊絵本を読んで上げようと思っていたのに、一冊で限

界が来た。仕事に行くと言って、ラウルから離れないと私がおかし
くなっちゃうわ。

「ごめんなさいラウル、そろそろお仕事に行かなくっちゃ」

「そうですか、ざんねんですはうえ」

ああもうかわいいわねこの子！ 流石は私とジュールの子供だわ！

こんな本当に残念そうな顔をされたら、もつとよんであげたくな
っちゃうじゃないの！ でもごめんなさい、今日はこの後ジュール
の部屋にいつて・・・。

だから、今日もいつもみたいに一日中若いメイドさんに本をよんで
もらってね。夕食の後、寝るまで相手してあげるから。そしてその
あとまたジュールと・・・。

いけないわ！ 妄想に入ってしまうところだった！

早く抜け出してジュールのところへ行かないと！

そして、心惜しいがラウルちゃんと別れ、玄関に行くふりをして人
のいない部屋に隠れました。

それからどれくらい経ったでしょう。そろそろいいかなと思い、ジ
ュールの執務室前に行くと言った声が聞こえます。ジュールの声と、
小さい子供の声です。おそらく、ラウルちゃんでしょう。何故、ジ
ュールの実務室にいるのか分かりませんが。

扉に耳を当て、中の会話の内容に耳をすませます。

・
・
・
・
・

・
どうやら、蔵書室に自由に入り、中の本を読む許可をもらいに来たようです。
そういえば、本を読んでいるとき決して詰まらなそうではないのですが、何か物足りないような顔をしていました。それで、他の難しい本を読みたいと思い、父であるジュールに許可をもらいに来たようです。

ときどき、三歳児ではありえないと思うようなことを言つてのける子です。物足りなかったというのも、仕方のないことだったのでしよう。さすが私とジュールの子です。天才なのかもしれません。あら、私もジュールの子煩惱がうつったかしら。でも、賢いのは事実だし、仕方ないわね。

それよりも、まだ会話は終わらないのかしら。ジュールも、早く許可を出しちゃえばいいのに。なんで、ラウルが喋ってから返答するまで、ちよつと間が空くのかしら。

つてジュールがラウルにとびついてぶつちゅ〜としようとしている！　なんてうらやましいのかしらあの子！　私なんてもう三年以上も・・。いいえそれより、ラウルは嫌がっている。なんて子なの！？　ジュールからのキスを嫌がるなんて！　本来ならそれは私にしてみらわなければいけないものなのに！　そんなにいやなら変わつてよラウルちゃん！

パンツ！

気付いたらドアを開け放っていた。
とりあえずジュールとラウルちゃんを引き離さない。

理由はどうでしょう？

ラウルが嫌がつてるでいいわね。事実、不屈きながらそうみたいだし。

「もう、あなた！ 私の（・・・）ラウルが嫌がつてるじゃない！ やめてあげて！ ラウルをぎゅっとするのは私なの！」

言ってやったわ。これではなれてくれるといいのだけど。

早く離れて、抱きつくなら私に抱きついてください！ 私は、あなたならいつでもいいですから！

「こらアミス！ お前だけのラウルではない！ 私達の（・・・）ラウルなのだ！ だからワシにも抱きしめさせてくれええ！ ちよつとでいいのじゃ！ 少しだけでワシは今日も頑張れるんじゃない！」

もう！ またそんなこと言って！ ゴーレムを出して無理やり襲ってやろうかしら！

ああもう、何なのよもう！ ラウルちゃんばかりずるいじゃない！ 可愛いのは分かるけど、だからって私を完全に相手にしなくてもいいじゃないですか！ 少しくらい、私にも寵愛をくれたって！ そう思ったら、口から本音が出ていた。

「ならあたしを抱きしめて下さい！ あなたは最近ラウルの事ばかりで私に全然かまってくれないじゃないですか！」

瞬間、空気が、私達の動きが、止まった。
私はジュールを涙目で見つめている。

ジュールも、私を熱い視線で見つめてくれている。
今、ここには私達だけしかない。
今、私はジュールだけしか見えない。

そう思い、私達は熱い視線を交わし合う。

あのー、俺もういいですか？

早く蔵書室に行きたいんですが。

てかただ見詰め合ってたんだあんたら。熱すぎるよ。あー、あつ
いあつい。もうバカツプルふたりに乳繰りあつてればいいよ。だか
ら俺を早く離してくれ。蔵書室に行かせてください。本が俺を呼ん
でいるんです。

軽く見詰め合いを始めて、五分はすぎただろうか。

だが、未だにふたりは熱い視線を交わし合っている。

その間、ラウルはずっとふたりにひっぱられ、ふたりの間で浮い
ている状態だ。

すると、突如、ジュールがラウルを下ろし、アミスに近づいていく。
アミスは、ラウルを下ろしながらも、ジュールを見つめている。

この二人の視線は、さっきから一度も離れていない。

「アミス。君はワシがラウルに夢中の間もそんな思いを……。しか
も、それを三年間もおくびにもださずに堪えてくれていたと言っ
たか……」

アミスはただ、うなずくだけだ。
だが、ふたりにはそれだけで十分だった。

「すまなかったアミス。今日は、今までの三年分も含めて、うんと可愛がつてあげるよ。だから、赦してくれるかい？」

その発言を聞き、アミスはうれし涙を瞳の端にため、笑顔で返事をする。

「はい。あなた」

二人は、長らく三人で使っていた寝室へ、久々に二人で向かっていく。

つてか、三歳児の息子の前でそんな会話すんなよあんたら・・・。
まあいいや、せいぜい夕食まで頑張ってください。僕は、蔵書室へ行かせてもらいますよつと。

俺は静かに、音が鳴らないようにそつと部屋をでて、蔵書室のある方向へ歩いていくのだった。

夕食の時間になり、メイドさんに呼ばれたので俺は夕食を食べるべく食堂へ向かった。

すると、父と母はすでに椅子に座っていた。

父はゲツソリと、母はお肌ツルツルの充実した感じで。

うらやましいなあ。俺も、いいステディがいたらいろんなことしたいなあ。

でも、あそこまでゲツソリとするまで搾り取られたくはないと思う。まあ、男としては幸せではあるんだろうけどな。

それにしても今日の蔵書室での一日は、とても充実したものになった。何といっても、文字が読めるようになったので大体の本の内容が理解できる。

理解は幸せだ。

オレンジの言っていたことが、第二の人生で初めて理解できた。

しかも、蔵書室というだけあって本が大量にあった。まあ、蔵書室なんだからその通りなんだが、如何せん蔵書量が半端なかった。オーヴェルニユ家が代々蒐集し、保管していた本がすべてここに収まっていたのだ。量は図書館並みであったとここに報告しておこう。読み尽くすまでに、いったい何年かかることやら。

うん、楽しみで仕方ありません。数年は暇しないだろうな。なんでもっと早くに許可をもらいに行かなかったのかと、後悔してます。

そうして、蔵書室入室許可一日目は、過ぎて行った。

さすがに今日はもう行かないだろうから、後は積木でもして寝るか。今の母上のテンションだと、第二ラウンドとして夜も頑張りそうだから、三人川の字になって寝るのは今日はおあずけたほうがいいな。父上はともかく、母上の胸に顔を埋めて寝られないのが心苦しくはあるが、母上にも気を使わないとだめだろう。ほら、俺の精神年齢って実は二十一歳だし。

そろそろ一人部屋でも両親にねだって造ってもらおうかな。

今なら、母上が二つ返事で了承して、渋る父親を説得するという構

図ができそうだし。

それにしても、問題は今日はどこで寝るかだな。

ああそうだ。いつも本を読んでもらってる、おっぱいが大きい字が読める若いメイドさんのアミーシャ（16）のところにでも内緒で泊めてもらおうかな。

三歳児だし、そんなに怪しまれずに泊めてくれるかな？

ああでも、身分の差がどうのこうのと言い出しそうだな。ふふふ、そんな時は肉体年齢の妙技、「ぼくさんさいだからわかんない」を発動しようかな。さすが俺、完璧な計画だ。早速夕食の後行動に出るとしよう。

「ねえねえアミーシャさん、きょう、アミーシャさんのおへやにためてください」

アミーシャしかいない時を見計らい、声をかける。

アミーシャは案の定驚いている。あたふたしながら予想通りのことを言ってきた。

「し、しかしラウル様、私はメイドであなたは貴族のご子息様です。一緒に寝るなど恐れ多いです」

計画発動だ。

「ぼくさんさいだからわかんない」

「なっ！ ラウル様！ いたずらが過ぎますよ！ とにかく、この

件は旦那様に一度お伺いをたて、何か別の対応を・・・」

くそっ！ 通じなかったか！ だが、アミーシャの顔は真っ赤に染まっている。通じていないわけではなかったようだ。

だがどうする。父上に報告されては、母の夜の楽しみを邪魔することになってしまう！ 三年分も溜めてしまっていたのだ、夕食までの時間など少なすぎるだろう。せめて朝までは時間をあげたい。

どうするッ！ 泣くか！？ いや、ここはもう限界眠たいですというような雰囲気醸し出したほうがいいだろうか！？ くっ、どっちがいい！？ どっちが最良の選択だ！？ いや、第三の選択肢としてここは素直に話し、一日だけ泊めてもらうなりしたほうがいいのかもしれ・・・いやだめだ！ そんなことをしては別の部屋を用意されてしまう！ アミーシャのおっぱいに顔を埋めて寝るといふ俺の計画がこれでは頓挫してしまうじゃないか！ ここは無難に眠たい限界です作戦でいこう！

「うーん、もう眠たいですアミーシャさん。ぼくはきょう、いつぱいごほんをよんだからもうねむたいのです」

ズキューーン！

ん？ なんだ？ なんか変な音が聞こえた気がしたんだが。

ってアミーシャさん！ あんたなんで顔から煙りだしてふらふらしてんですか！ 大丈夫か！？

「ら」

「らっ」

「ラララウル様、そうですか、お寝むですか、ならば仕方ないです
ね、そうですしかたないのです。仕方がないので私の部屋で今
すぐ寝ましょうそうしましょう。」

そうと決まれば至急向かいます。ラウル様が眠いのであれば仕
方がございませぬ、奥様にだけご報告申し上げておきます。それ
で私の部屋で寝ましょう。私も添い寝して差し上げますよもちろん。
三歳のお子様一人で寝るのはまだ何かと不安でしょうしね。

それにしても奥様に気を使われるなんてなんて賢い子供なのでし
ょうかラウル様は。将来が楽しみでなりませんよまったく」

早口でアミーシャが何かをぶつぶつと呟いている。

不気味だ。しばらく眺めていたが、呟くのをやめたと思ったら僕を
優しく抱きかかえ、アミーシャの部屋があるであろう方向に歩いて
いく。

途中、母上のところに寄った時には冷つとしたが、自分の部屋で寝
かせると報告だけしてアミーシャの部屋に向かったようだ。

そりゃあ、今日の母上の御乱心は屋敷中のメイドや執事の噂になっ
ており、当然アミーシャも知っていて、母様に気を使ったといふこ
となのだろつ。

すとな。

優しく、アミーシャのベッドにおろしてもらつ。

アミーシャが「ちよつと待ってて下さいね」と言って、部屋を出て

いく。

しばらくして戻ってきたかと思えば、アミーシャはすでに寝巻のよ
うなものに着替えていた。

くそう、着替え見たかったのにい。

そして、手に持っていたおそらく僕の寝巻であろうそれを僕の横に
置き、「さ、ラウル様、着替えましようね」と言つてそつと僕の服
を脱がしてくれる。いつも母様に着替えさせてもらっているので、
他の人に着替えさせてもらうのは新鮮だった。

着替え終わり、二人でベッドに入る。

使用人のベッドだと思えば、いつも僕と母さま達と寝ているベッド
と比べても何ら遜色ありません。アミーシャは、他の使用人達と少
し扱いが違う感じがしていましたがやはりどこか違う気がします。何
か、アミーシャには隠された秘密がある気がしてなりません。

それはそうと、ベッドに入つてすぐ、僕はすかさずアミーシャに抱
きつき、そのたわわなおっぱいに顔を埋めます。やっぱり気持ちい
いな。屋敷で一番のお気に入りなだけです。たわわなおっぱい
の感触をしばらく堪能しようと思っていたのに、すぐに眠気が襲つ
てきた。顔に当たるおっぱいの気持ちよさを堪能しながら、僕は深
い眠りに入っていくのだった。

第02話（後書き）

感想、誤字・脱字報告など、よろしければお願いします。

何か一言でもあれば、喜ぶと思いますんで。

第03話 杖の話（前書き）

親父がカツコよくなった！？ でもすぐに崩壊。これが、これこそがジュールなのです。子煩悩親父、ジュールなのです。

第03話 杖の話

おはようございました。

ラウル・アルウェルニ・デュ・マ・オーヴェルニユです。

四歳になり、しばらくが経ちました。

蔵書部屋に入室許可をもらい、一年と少しが経ちました。

どれくらい読んだでしょうか？

まだまだ半分も読めてません。毎日毎日通いつめて、これだけです。ホント、読むのが楽しみでなりません。

そうそう、アミーシャですが、最近しきりに一緒に寝ようと言ってます。去年、一緒に寝たのが癖になってしまったのでしょうか。

ですが、アミーシャももう17歳です。

彼氏の一人や二人、いてもいい気がするのですが、そんな話は何一つとして聞きません。

我ながら、アミーシャの将来が不安でなりません。

アミーシャの秘密は一向に分かる気配がありません。知りたいですが、そんなに詮索するような話でもありませんし、そのうち分かるでしょう。急ぎではありませんしね。

蔵書室に毎日昼から夕食までいる僕ですが、最近父様や母様、アミーシャと父様の執事のエドワードさんが、妙にそわそわしているのを蔵書部屋にいるとき以外に目にします。

何なんでしょうか。変ですね。父様だけ変なのはいつものことなのですが、あ、母様も時々ありますが。それでも、優秀なアミーシャやエドワードさんがそわそわしているのは変ですね。アミーシャは、モジモジはしますがそわそわはしません。少なくとも、僕は見たこ

とがありません。

エドワードさんは常に動じない、完璧執事のはずです。俺は、そんなエドワードさんがそわそわしているのが不思議でなりません。もはや奇妙の領域です。怖いです。

そうして、エドワードさんや他のそわそわしている面々の行動に細心の注意を払い、数日経ちました。父様がもう耐えられないといった風に話しかけてきました。

「の、のう、ラウル」

「はい、何ですか父上？」

「い、いやー、別に用という訳でもないのじゃがな？」

ちっ！　なんだよこの髭。最近そわそわしてるのがやっとなプローチかけてきたと思ったのに。俺は早く蔵書部屋に行きたいんだよ！　用がないならおとといきやがれってんだ！

そう思いつつも、そんな思いはおくびにも出さず、答える。

「ん？　なんですか父様。用がないのであれば、僕は蔵書部屋に行きたいのですが」

「ま、まま待つてくれ！　そ、そうだ！　ラウル、もうすぐ五歳の誕生日だが、杖はどんなのがいい？　とか、他にも何か欲しいものがあるか？　とか、いろいろ聞きたいのだが・・・」

なん、だと・・・！？

今何とிட்டのだ、この髭親父は……？

っ、杖だと！？　今、杖と言ったのかこの人は！？

あの、夢にまでみた魔法がついに使えると言ったのか！　なんだと！　だからあの四人がそわそわしていたのか！　う、うおおおおお おっしゃああああ！

つと、いけないいけない。杖のはなしだったな。杖杖、どんな杖にしようか。そうだ、イーヴァルディの勇者のような勇者になりたいから、杖のような剣、杖剣にしよう！　初めて読んだときからの夢だったからな。よし、それでいこう。

「父様！　僕は杖は杖剣が欲しいです！　杖剣がいいのです！」

「な、なんだと？　杖剣？　何故杖剣が欲しいのか、良ければ理由を聞かせてもらえまいか、ラウルよ」

やはり聞いてきたか。ふむ、ここはやっぱりもつともらしい理由をでっちあげて、未来でアルビオンで起きる戦争に備えよう。というか、今から何かしかやつかないと自分の身すら守れないだろうし。魔法学院って殆どの生徒がドットかラインメイジだったよねたしか？　このまんまだと俺もそんな感じで状況に流されるモブキャラと化してしまう！　それだけは！　それだけは何としても避けたい！　せつかくの二回目の人生なんだし、前世の記憶って言うアドバンテージもあるんだし。ってか、ずっとはまってる『イーヴァルディの勇者』のようになりたいし。マジで。

さて、どうでっちあげよう。やはりここは姫を守る勇者か。シャルロットいるし、それで行こう。

「わかりました父様。正直に言います。」

「う、うむ、なになに？」

俺が畏まったのを見て、父様も畏まる。

「父上、隣のオルレアン公のところで、女の子が生まれたと言っていましたよね。」

「あ、ああ。確かに言った。シャルロット様のことだな」

「はい父上。僕はそれを聞いたとき、その子を守る騎士になりたいと思ったのです。」

「し、しかしラウルよ。お前はまだシャルロット姫に会ったことがないのでないか」

「会ったことの有る無しはこの際関係ないのです。守りたいと思っただけ、思っていないかなのです」

もっともらしいことを言ってみたつもりだ。

……もっともらしかったよね？　ね？

おっと、父様がなんか「ガーン！」って感じで固まってる。こいつ、本当によく固まんのな。

俺と会話するときはいつも固まる、処理速度の遅いパソコンかっ
ての。

おっと、動き出した。

「ラウルよ。それは本当か。」

俺は真面目な顔で答える。

「はい。父様」

あまり多い言葉は不要だろう。そう思い、短く、簡潔に答える。

父様はしばらく、真剣な顔で熟考するように斜め四十五度で床を見つめながら、腕組をし、顎に指を添える。

「うわぁ、格好良いなオイ。マジで、真面目な顔をすれば相当なイケメンなんだけどな。俺の前ではゆるけた顔しか見せないの、なおさら格好良く見えた。」

「よし、わかった、ラウル。杖剣も作ろう」

「も？ も、とはなんですか父様？」

「うむ、お前は、ワシとアミスの血を継いでいるので、おそらく水か土のメイジになるだろう。、土であれば、外で杖剣を振るう機会もあるだろうが、もし水メイジになった場合、秘薬を作るために殆どを室内で過ごすだろう。」

「そうなると、無駄に長いだけの、切れ味のいい杖となり、使い勝手が悪いだろう。だから、杖剣は土に目覚め、亜人討伐に行く時など限定で使うようにし、普段は普通の杖を使えばいいだろう。」

「うん、理に適っている。凄いな。さすが父様。王族の専属水メイジをしてるだけあって、頭の回転も相当早い。だが、疑問に思ったことがある。それを聞かずに、納得はできない。」

「杖を二つ作ってもよろしいのですか？」

「そうだ。うる覚えな原作知識だが、ほとんど皆が杖は一本だけしか持ってなかった。だから、俺は二本以上杖を持つては駄目なのかと疑問に思ったのだ。そんな俺の質問に、父は何事もないかのように答える。」

「うむ、好まれぬ、というだけで二本以上持つことは別に禁止され

てはおらん。ただの非常識人扱いされるだけだ。それでも構わぬというのなら、杖と杖剣の二本を作ってやろう。」

なるほど、非常識というレッテルをはられるだけか。ま、俺からしたらほとんどの貴族は非常識というか、非人道的だし、そんな奴らにどう思われようと一向に構わんか。あ、オーヴェルニユ家とかは民からは常識の範囲内の税しかとってないよ。それに、常駐軍を整備し、亜人討伐にも力を入れてます。領民からしたら、税金も良心的だし、積極的に亜人退治をして危険を排除してくれているので、かなり住みやすい土地となっているだろう。母様も治水工事に参加したりしているし。

おっと話が逸れた。返事をしなければ。

「はい、大丈夫です父様。騎士になろうと言うのですから、その程度のことを気にしてどうすると言うのでしょうか」

「うむ、よく言ったラウル！ では、五歳の誕生日に間に合うように杖と杖剣を発注しよう。もちろん、二つとも最高の職人に作るように依頼するからな、楽しみにしているのだぞラウル」

「はい！ ありがとうございます父様！ 大好きです父様」

そう言つて、俺は父に抱きついてやる。

ま、サービスだ。嬉しいのは本当だしな。四歳児の感情表現の最上級は、やっぱり「抱きつく」だろう。

「な、ななな・・・ラ、ラウ、ラララウル、これは、抱きついてくれているのか・・・？」

「はい！ 僕は今とっても嬉しいので、抱きついてしまいました！

「

そう言って、照れくさそうに離れる。

てか、マジで恥ずかしかった。抱きつくって、こんなに恥ずかしいことだったか？ いつもは抱きつかれてるから気付かなかったぜ。

「う、う、ううおおおおおおおおお！！ ラウルがワシに抱きついてくれたぞおおおおおおお！！」

叫びながら屋敷を駆けていく。

まあ、よほどうれしかったんだろうなあ。俺から抱きついたことなんてないし、抱きつかれてもいつも嫌がってたしな。

四歳か。魔法を習うのは、五歳の誕生日に杖をもらってから、か。待ち遠しいような、来るのが怖いような、そんな気分だな。俺も、魔法が習えるのか。

思えば、ゼロの使い魔の世界に転生したと分かってから、魔法を使えるようになるのを今か今かと待っていたからな。四年待ったと思えば、五歳の誕生日までの約一年なんてすぐだろう。

俺には、蔵書室も本達も居るし、あっという間だろうな。

ってか、父が俺に杖の話をするから、皆そわそわしてたのか？ なんだ？

ますます疑問は深まり、父はテンションが崩壊して走り回っている。だが、それらのことよりも俺は、今日は蔵書室のどのへんの本を読

破しようかとまだ見ぬ楽しみへ思いを馳せるのだった。

第03話 杖の話（後書き）

実はラウル、文字通り本の虫になってます。

転生してから、本が大好きになりました。動けない頃とか、本しか楽しみがなかったですから。転生前でも、本を読むのは嫌いではなかったですしね。

第04話 アミーシャの「一緒に寝ましょう」からの受難（前書き）

戦闘もどきでも描写がすごい難しかったです。

第04話 アミーシャの「一緒に寝ましょう」からの受難

四歳になってしばらくが過ぎました。

で、僕は今、悩んでいることがあります。

それは・・・ですね。

最近、アミーシャの僕に対する視線がおかしい気がするんです。
え？ 逆？ まあ、僕もいやらしい視線をアミーシャに投げかけてるんだけど、それは勿論誰にも気づかれないように、細心の注意を払ってですよ。

だから、僕はアミーシャや他の誰にも、僕の視線のことに気づかれていません。

そういう自信があります。え？ 変態？ その通りですはい。

なのに、僕にアミーシャからの視線が有るんです。何故でしょうか？
前は、視線にも自重がみられたのですが、最近は自重もしなくなっています。僕が本を読んでいる時も、視線が僕にぶち当たってきました。

いえあのね？ 最初は僕も見間違いかな？ とか気のせいかな？

とか思ってたんですが、最近は露骨になってきたんですよ。馬鹿でも気付くよってくらいに。

もしかしてアミーシャってシヨタ……？

あはは、そんな馬鹿な、ね。でも、あながち軽視できない感じなんですけど……。

「あの、ラウル様、そろそろ夕食の時間ですよ」

「わかりましたアミーシャさん」

「では、行きましょうか」

そついい、そつと手を差し出してくる。

「はい！　ありがとうございますアミーシャさん」

僕は、返事をしながらその手をそつと握る。

アミーシャは赤面し、今にも煙を噴き出しかねないほどだ。

「ら、ラララウル様まままま、こ、ここ今夜も、わわ私と眠りませんか？」

うーん、視線が怖いんだけど、まあ僕もアミーシャのおっぱいに埋もれて眠りたいから、いいかな。

アミーシャは本当に気持ちいいしね。

「はい！　こんやもよろしくおねがいますアミーシャさん！」

「は、はわ、はわわわわ、はいいゝ。お待ちしておりますっ」

今度は顔から煙を噴き出しながら、返事をする。

そして夕食。

「母上、僕は今日もアミーシャさんのところで眠るつもりです」

「あら、そう？　わかりました、では今日はジュールとふたりで寝ることになるのね？　うふふ」

「な！？　ラウル！　どういうことだ！　アミーシャのところで寝るのは週に二回のはずではないのか

！？　ただでさえきついのに、これ以上増えるとワシが死んでしま
うではないか！」

「？　なんのはなしですか父上？」

「ぬ！？　む、むう、それはその・・・だな、えーっと」

「なんでもないのよラウルちゃん。じゃあ、今夜はアミーシャちゃん
のところで寝てらっしゃい」

「？　はい、わかりました母上」

「ラウル様、こちらが今日のデザートショットケーキです」

「アミーシャさん、ありがとうございます」

「い、いえ、ラウル様！　これが私の仕事ですから！」

そう言いながら、真っ赤になるアミーシャ。

あれ？　アミーシャってマジでシヨタなのかな……？

「ラ！ ラウル！ 考え直せ！ ワシと一緒に寝よう！ 欲しいものを何でも買ってやるから！ なっ！？」

父上が見苦しいことを言っているが、アミーシャと喋って知らないふりをする。

「ってか、美人で13歳も年下の妻をもらって何が不満だってんだ。まだ結婚して6年だろ！？」

「まだまだ若妻と乳繰りあいたいもんなんじゃないのか普通？」

「だいたい贅沢すぎんだよこのオッサン。自分がなんでも持ってるからってなめすぎだってんだ。いつか

人生の世知辛さっていうか、もっと厳しさってのを教えてやらねーと。

「あ、抱きつかれんのを嫌がるだけで十分いやがらせか。ははっ、ザマア。俺だけはお前の思い通りにならんからな！」

そんな脳裏の葛藤しながら、アミーシャと会話をしているとき、母と父はこんな会話をしていた。

「ねえジュール…？ そんなに私と二人っきりで寝るのがいやなの……？」

「なっ！？ いや、全くもってそんなことは無いのだが……」

ジュールが汗をダラダラと流し、取り繕うように答える。

「だんだん尻すぼみになっていくところとか、言い訳にしか聞こえないのは気のせいだろうか。」

「いやなんだ……」

「いや！　そういうわけでは・・・っ！」

「もういいわよ・・・クスン。私、一人で寝るわよもう・・・グスッ」
な、泣かれた！？　どどどどどどっしょー！　どっしょーラウル！？

ジュールは完全に混乱し、ラウルに助けて欲しそうな目線を必死で投げかける。

しかしラウルは、食後のデザートに食感に舌づつみをうっているところだった。

そこにすかさずアミーシャが飲み物を注ぎ、アミーシャとラウルが楽しそうに今日のデザートについて

の話などをしている。ジュールの方など微塵も観ていない。もちろん、気付く気配すらない。

この二人には助けを求められないと思い、最後の砦である我が家に曾祖父の代から仕えているエドワードに助けを求めるが、エドワードは我関せずといった風で直立不動を保っている。

くそう！　この部屋にワシが頼れる人間はいないのか！　ど、どうすればいい！？　アミスが泣くなど

初めての経験だ！　全く対応が分からない！　ワシはアミス以外に付き合ったことがないから、女性の扱いは不慣れなのだ！

ただでさえ秘薬の製造で家に籠りがちであったのに、さらに女性の扱いも完璧たれというのは酷であろう。

どうすればいい！ とりあえず、とりあえず慰めねば！

「ア、アミス！ 寝よう！ 今日は一緒に寝よう！ ハハハ！ 勿論朝まで寝かさないぞう？」

そのジュールの台詞に、アミスは泣くのをやめ、沈黙する。

「ハハハ、アミス！ さあ、そうと決まれば今からでも行こうではないか！ アミスと一つになりたくてワシは元氣洩渌だぞ！ ハハハハハハ」

「本当・・・？」

「ああ！ 本当だとも！ さあアミス！ ワシは今日は何時よりも頑張るぞ！」

「旦那様、ラウル様の前です。そういう会話は御控え願えますか？ 教育に悪影響を与えます。」

な！？ エドワード！ 今まで直立不動を保っていたのに今さらそんなことを言うのか！
だ、だがしかし、言っていることが何一つ間違っていないだけに反論できない……。
エドワードめ……。

「う、うむ。すまぬ」

エドワードと会話をしているときに、アミスは笑顔になり、意気揚々とジュールの手をとる。

「さ！ ジュール！ 今すぐ行きましょう！ ラウルはアミーシャに任せて、私達は二人目を作りましょう！」

「ちょ！ エドワード！ アミスのこういう発言は良いのか！？ おい！ また直立不動に戻るな！ ワシの話を！ ちょ、おい！ ま、アーーーーーッ！」

父上は母上に連れられて寝室のある方向に消えた。

さて、僕たちもそろそろ寝るとしましょうか。
そう思い、アミーシャに声をかける。

「アミーシャさん、そろそろ寝ましょう。僕も眠たくなってきました」

「ラウル様、食べてすぐ寝ては太ってしまいます。旦那様からラウル様を騎士にするべく、鍛えるように言われていますので、少しトレーニングをしてから寝ましょうか」

な！？ トレーニングだと！？ 俺は聞いてないぞ！？ どういうことだ髭親父め！

「さ、行きましょう。僭越ながら、私が組み手の相手をするように仰せっております」

「え、アミーシャさんが相手をするのですか？」

「はい。こう見えても私、いろいろと経験豊富ですので」

なんの経験ですか？ とは勿論聞かない。

イメージを壊したくないし。いや、壊れるかどうかは知りませんが。なんとなく、聞かない方がいい気がしたのです。

そしてトレーニングは、庭で行われました。

そういえば、この月は二つ有るんでした。やはり、一つに慣れ親しんでいたからか、二つの月に違和感がある。

「さ、ラウル様、とりあえず今のあなたには体力が圧倒的に不足しています。あと筋力なども不足していますが、それらも同時に鍛えましょう。」

「わ、わかりました」

「いきますよ。手加減はしますが、手心は加えませんので」

手加減はするが、急所は全力で狙ってくるってことか。それって手加減してダメだね？

え？ アミーシャってそんなにSっ気あったっけ？

ってちよっ！ 待ってって！

「うわっ！ とっ！ ほあっ！ うぎゃああ！」

アミーシャが一直線で走ってきて、左ジャブ、ジャブ、右下段蹴りからの右ストレートを放ってきた。

左ジャブが普通に顔面を狙ってきて、さらに足を引っ掛け転ばせようとし、全力ストレートで顔面を狙

ってきた。

俺はそれら全てをギリギリでなんとかよける。

確かに、手心は加わっていない。が、ギリギリ避けられる速度を見計らい、その速度で攻撃してくる。

「ラウル様、徐々にスピードを上げていきますので、必死に避けてくださいね。」

な！ ちょっと待ってくれよ！ まだスピード上がんのか！？ メイド服なのになんてスピードで動くんだよ！ どこの忍者だ！？ うひひひ！ 怖っ！なんて目をしてるんだよ！ 本気の目だよ！

本気と書いてマジな目力だ！

俺は抗議をしようにも、余計なことを喋れば即終了のお知らせが流れそうなので余裕がないので、何も言わずに避けているとさらに速くなっていき、攻撃にも鋭さが増していく。

ストレート、ジャブ、肘、膝、かかと落とし、アッパーなどあらゆる角度からありとあらゆる攻撃を放ってくる。だが、全てが直線的な攻撃のみで、フェイントなどは一切入っていない。おそらく、フェイントを入れないというのも手加減の内なのだろう。

俺はそれらの攻撃を必至で避ける。避け続ける。っていうか、俺には反撃する術を今は持ち合わせていない。

「ね！ ねえアミーシャさん！ これ、反撃の仕方とか分からないんだけど！」

「御安心くださいラウル様。あなたは避けるだけでだけでいいのです。避け続けて下さい」

アミーシャはそんな無茶なことを飄々と言つてのける。これには俺

も危険とかかなくなり捨てて抗議してしまった。

「ちょ！ 無茶な！ ってうわっ！ とおわっ！ どえへっ！」

四歳児になんてことをさせてんだよ全く！

精神年齢が22歳の俺だから大丈夫なもの、普通の四歳児なら最初でノックダウンだぜ！？

「フフ、流石ですラウル様、普通であれば最初でやられているものを、よく凌ぐ」

あれ、アミーシャ笑い方変わってない？ というか性格変わってない？

っていうか、やっぱり普通なら最初でやられてるんだな。

そんな一撃を初めての一撃で放つなんて、アミーシャはなんてスパルタ教育なんだよ・・・。

俺は、そんな文句を言う暇すらなく、避け続ける。喋る余裕なんて微塵もない。

「本当に、よく凌ぎますねラウル様。ノックダウンさせる気で攻撃してるのに、全て紙一重で避け続けておられる。」

だって当たったら痛そうだしな！ 小学校時代のドッジボールで最後まで残って避け続けた実績っていう実績と経験がなければ、危ないところだったぜ！

まあ、ボールの速度と攻撃の速度、比較になりませんけどね。

こういうところにアドバンテージを見出せたのは良いが、避け続けられるのもそろそろ限界だ。

本ばっか読んでるインドア派の俺だから、体力は本当になんだよ！ だからっ！ もう限界っ！ だってっ！

ゴッ！

そう思った矢先、アミーシャの大上段から放たれるチョップを、ともに脳天に受けてしまった。

「ハッ！？ ラウル様すみません！ つい、あまりに上手く避け続けられますからついムキになってしまいました・・・」

そんなことを言っているような気がしたが、頭の中が徐々に真っ白になっていく俺の記憶には残らなかった。

てかあんた…、汗一つかいてないや、ないかい……。

ズキッ！

「アイタっ！ って、え？」

外が明るくなっている。

アミーシャが俺を抱き枕よろしく抱いている。

いつのまにか着替え、ベッドの中で寝ていたようだ。

まあ、あそこから記憶がないから分からないが、おそらくアミーシヤが着替えさせてくれたのだろう。

ああっ！　ちきしょう！　アミーシャのおっぱいを俺は昨日、堪能できなかったのかっ！

なんてこったい！　このラウル、一生の不覚！

こうなれば今からでも触って堪能してやらい！

「ん、んう？　あ、ラウル様おはようございますう」

がはっ！　起きやがった！　おっぱい触れねえじゃん！　ちくせう！

「ラウル様、昨日は突然の訓練、お疲れさまでした」

「あ、うん」

「旦那様は、週に一回で良いと言われたのですが、奥様が二日に一回にしろと仰られたので、これから二日に一回、訓練をします」

マジか……。

この言葉しか出ないほど、俺は絶句した。

「あ、そうでした。奥様が、二日に一度訓練した後は、アミーシャのところで寝るようにとも仰っておられました」

あんた……。おやじと二人っきりで寝たいだけだろーが……。

体のいい厄介払いを見つけたもんだなあ、母上様よ。

だが、体を鍛えられるのはいいな。

それに、攻撃を習うようになったらアミーシャの体を触れるし、おっぱいを間違えて触っても事故で済ませられる。お？　合法的にお

っぱいに触れるって事かよ。いいじゃない。

あと、頑張って疲れないようになれば、二日に一回アミーシャにベツドの中で抱きつけるってことか！

うん、とらえ方によっちゃあこれは良い提案じゃないですか。

「わかりました。これから指南よろしくします、アミーシャ」

「はい、ラウル様。不束者ですが、よろしくお願いします」

ん？ そんなにか違うくね……？

これから、二日に一回アミーシャの戦闘訓練が始まることについて、ラウルは不安の二文字が頭に降ってくるのだった。

第04話 アミーシャの「一緒に寝ましょう」からの受難（後書き）

こんな展開になるはずではなかったはずなんですが・・・。

感想、誤字・脱字報告など、ありましたらよろしく願います。

一言でもあれば、明日もがんばろうって気になります。

よろしくお願いします。

第05話 ある日のジュールの考え（前書き）

こういう表現は大丈夫かな？

あと、感想をくださった方ありがとうございました！
とても励みになっております！

第05話 ある日のジュールの考え

こんにちは。

ワシだ。

ジュール・アルウエルニ・デュ・マ・オーヴェルニュだ。一応伯爵をやっておる。

突然ではあるが、ワシは最近、かなりの危機に陥っている。

ふむ、何のピンチだと？ よからう、教えてやる。

ワシ、ことジュール・アルウエルニ・デュ・マ・オーヴェルニュは、妻に、アミス・アルウエルニ・デュ・マ・オーヴェルニュがいる。

これは周知として君らも知っていることだろう。

妻がいるだけであるならば、ふははは、羨ましいだろう。などと君たちを煽れるのだが、この妻には問題があった。いや、ワシにも問題があるのかも知れんが。解決しなければいけない問題が一つあったのだ。

それ以外は、妻はよくしてくれている。最高の妻であると自慢しても足りないほどである。それを消して余りある唯一の問題とはそう、妻は絶倫すぎたのだ！ そりゃあ、二十三歳の若い身空、精力が有り余っているのはわかるが、有り余りすぎるだろう！ ついこの前までは、週に二回で我慢してくれていたのに、ワシがラウルの訓練をアミーシャに行うように言っただけなのに、アミスはそこに付け込み、それを二日に一回に増やすことで、週に二回を二日に一回に増やしてきた！

こ、これはワシが保たんだろう・・・。

ワシ、もう三十六歳ぜ・・・？ まだ若いと言えば若い、もう決して若くはない歳なんだよ。

そんなワシに、二日に一回絶倫二十三歳の妻の相手をしろって・
腹上死させる気が！

だが、なんとしてもそんな汚点を我が人生の最後に飾らんために、
ワシは対策を考えた。

フフフ、それが何かって？　よかろう、教えてやるさ。聞いて驚く
がいい。

我がオーヴェルニュ家は代々水メイジの系譜であるのは知っておろ
う。そう、オーヴェルニュの水メイジ歴は軽く十代を超える歴史が
ある。

そこで、我がオーヴェルニュの歴史を紐解き、ある秘薬を探し当て
たのだ。

その別名は、曰く女を寝かせない薬、曰く女を壊す薬、曰く女を
狂わせる薬、とある。

名前だけ聞くと物騒だろう。ワシも、これを妻に使うのはどうかと
思っていたさ。あの、とある記述を見るまではな。

何代か前の当主の日記にこうあった。

『女を寝かせない薬なるものを使ってみたが、あれはとんでもない
ものであった。

あれは女に使うものではなく、自分が使うべきであった。それが精
力に底を知らぬ妻であればなおさらである。この効果は数日、妻が
ワシをベッドから出さなかったほどだ。

ワシは、もう駄目だろう。この日記を見る者は、どうか注意してほ
しい。女を狂わせる薬は、自分が飲んで初めて効果を発揮するとい
うことを。先々代も、それで亡くなったのだから。』

ここから先の日記は書かれていない。

そんなことはどうでもいい。重要なのは、ベッドから数日だしても
らえなかったというものだ。

ベッドから数日出してもらえなかったとは、つまりそういうことな

のだろう。

というか、我が家は何か、女難の相などで呪われているのか…？
数代前と、その先々代。わかっているだけで、二人も女難で死んで
るみたいだし。

ってか、二人ともこれ使ったんかい！

もつとちゃんと詳しく書いとけよな開発者めまったく。

まあ、これで、ワシも絶倫になればアミスも満足、ワシも生存です
べてが丸く収まるというものだろう。さっそくこれの開発に取り掛
かろう。

アミス、我が家の歴史と、ワシの実力。見せてやろうぞ！ フハハ
ハハ！！

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ふう、材料は、我が家の秘蔵の蔵で難なく揃わせることができた。
そして、完成した……。その名も「精力丸」。小瓶いっぱいにつ
たが、これでもどれだけ持つか・・。

あ、そうだ。これを、売りに出したらどれだけ儲かるだろうか。
他にも、ワシと同じ悩みで悩んでいる貴族などもたくさんいるだろ
うから、この精力丸一粒数百エキューで飛ぶように売れるだろう。
小瓶ひとつ分で数百エキューなのだから、すべて売れば儲けもすこ
いだろう。

いけない。自分を助けるために開発したのに、新たな稼ぎ口まで見つけてしまった。

ワシ、天才？

ふはは、それは前からだ。

さて、これを見るとすれば、材料を集めなければ。別の秘薬の材料とってエドワードに買い付けるように指示をだそう。

あと、処方箋と材料も詳しく記したものを新たに作り、保管しておかねば。女難に悩まされる我が子孫のために。ラウルの将来のためにも！ いや、ラウルが女難って決まったわけじゃないんだけど、ワシとアミスの子だし、絶対モテる。これ確定。

おっと話がそれた。

今日もラウルの訓練の日だし、夕食の後にでも飲もう。

そういえば、ラウルの訓練だが、全然根を上げずに続いてるみたいだな。

あの決心は本物だったのか。ラウルの本気を試すために、アミーシヤにラウルを訓練するように言ったのだが、よく堪えているようだ。今度、アミーシヤに訓練の経過などを聞いてみるか。

アミーシヤは、本当に強いのにラウルはすごいな。さすがワシの子だ。

エドワードがああ状態で何人も出られなければ、確実にヤバかったというのに。手加減されているとはいえ、よく堪えるものだ。

ワシであれば初日でお手上げた。その自信がある。だってワシ、インドア派の秘薬調合師だし。

肉体労働はアミスかエドワードの役目だ。ワシは後衛で癒す系。畑が違うのだよ畑が。

さて、そろそろこの隠し部屋を出ようか。

このことも、オーヴェルニュ代々の当主とエドワードしか知らないが、そのうちラウルにも教えてやらねばなるまい。

なにせ、オーヴェルニュの次期当主なのだからな。

そう考えつつ、秘密部屋からでて、出入り口に魔法で偽装を施す。それから執務室に向かい、夕食まで領地経営の仕事をこなす。

さて、アミスよ、今夜は覚悟しておれよ。

今夜のワシは、今までのワシではない。ドーピングを施した、スパー・ジュールなのだから！　ぐわっはっはっは！

蔵書室にて。

「ねえアミーシャ？　さっき父上は歩きながら何をぶつぶつ言っていたの？」

「あれは見てはいけないものなんですよラウル様。旦那様はああいうご病気なのです。ええ、決して治ることのない、心の病です」

「父上の作る水の秘薬などで治らないの？」

「ええ、ラウル様。なんとかにつける薬はない、と申しますように、ジュール様のアレにはもう一同お手上げなのです。ですから、遠くから生温かい目で見ていて差し上げるのがよろしいかと」

「そうなんだ。わかった。あとアミーシャ、あそことあそことあそこの本を持ってきてくれる？」

「わかりましたラウル様」

父上、家臣や侍女からの扱いが最近ひどいな。

まあ、あんな親父だししゃあないったしやあないけど。それに、これくらいで解雇とか打ち首とかするような狭量の器でもないしね。あんな親父でも、一応周りからは尊敬されているんだし。

ぐ、ぐほあ！？

あ、あいつは化け物か……。

今、気づいたら朝だった……。

一応、アミスとの夜の成果の結果だけ伝えておこうと思う。

あの薬を飲み、元気澆漑準備万端で挑んだアミスとの夜の決戦であるが、ワシはまた惨敗を喫した。なぜだ！ 最初、アミスは戸惑っていたのだ！ いつもよりすごいワシに！ いつもと違うワシに！

最初は有利に運んでいたのだ！ だが、いつの間にかワシは倒れ、アミスがワシの上に乗っていた！ そして結局、ワシはアミスに勝てることなく、気づいたら寝てしまっていた！

なぜだ！ あの薬を使っても勝てないというのか！？ 歳か！？

それともアミスが化け物すぎるだけなのか！？

ちきしょう！ ワシは負けん！ 負けんぞおおお！

こうして、ワシはさらなる薬の研究を決意するのだった。

第05話 ある日のジュールの考え（後書き）

これは、サイドストーリー的な感覚で見てもらえればいいと思います。

ジュールの心情を描こうと思ってまして。

原作キャラは、当分出ない予定です。

シャルロットことタバサくらいは出てくると思いますが、他は全く接点が今のところないはずです。

あと二、三話四歳編を挟んで、ラウルを五歳にしたいと思います。

感想、誤字・脱字報告など、よろしく願います。

感想は、ひと言でもいただけると励みになります本当に。

ではまた次の話であいませう。

第06話 アミーシャの訓練Ⅱ地獄（前書き）

アミーシャの設定もいろいろあるんだけど、出す機会がない。

そのうち出したいなあ。

第06話 アミーシャの訓練Ⅱ地獄

アミーシャと訓練するようになって結構だった。

前は夜だけだったが、慣れてきたのか昼にも訓練を少しするようになった。本番は夜だけどね。

なんで夜するのかというと、あまり目に頼らず、気配を察知できるようにするためだという。

そういうのってさ、有る程度レベルが上がってからするもんじゃねーの……？

初めての訓練からするって、どんだけスパルタンなんだよ……？

「さ、ラウル様、お昼の訓練をしましょう」

「う…、はい……」

前世では頭脳労働系の人間だったせいかな、体を動かすのはそんなに得意ではない。が、だいぶ動けるようになってきている気がする。

「お昼は型の練習です」

「はい…」

「では、私の真似をしてくださいね。いきますよ」

そうやって、お昼の訓練をこなしていく。

はあ、お昼は一時間から二時間くらいの訓練でまだ簡単だからまだいいけどさ……。

夜は…、基本命の危険は無いとは言え、やっぱり怖いわ…。

しかも、最近俺、アミーシャのいう気配ってやつがだいたい分かってきちゃったりして、どんどん人間から離れていつてるような…。まあ、イーヴアルディの勇者になりたいってんだからこれくらいできなきやあ駄目なんだろうけどさ。四歳でなんとなく気配がわかるようになるんだぜ？ まあ、精神年齢は二十二歳だけどさ。

数か月で気配が分かるようになるって、わかる？ どんだけ地獄な訓練だったか。いやあ、前世でも味わったことのない辛さだったよ。まあ、前世は全力で小学校から受験勉強しかしてなかったんだけどね。

肉体労働とかマジしたことなかったっすからね。

だから辛いなのって……。ホントに地獄だった！ わかるか！？ 本当に地獄だったんだよ！ 全身の穴という穴から血がでるかと思っただよ…。

まあ、実際にそんなことになったら父上様の秘薬で瞬間で治るんですけどね。

実際何回かやったし……。わかる？ これ、本当に何回死んだ方がマシかと思っただか。

でも、こんな訓練も数ヶ月も続けられてる俺はたいしたもんだらう。強制だけど。

自分に超御褒美あげたいぜ！ まあ、訓練の日はアミーシャと寝ておっぱい触りまくりの抜群の御褒美ですけどね！ 最近は疲れて、というかアミーシャに伸されてそれどころじゃあないんだけどね。

「ラウル様、さすがですね。初めてまだ数ヶ月だというのにだいぶ様になってます」

「そ、そう？」

そりゃあ、ミスったらっていうか間違えたら、死ぬほどっていうか

死んだ方がましっていうくらいの折檻を受けるのに死にもの狂いで練習しない方がどうかしてるしね。アハ、ハハ・・・。

「では、お昼の訓練はこれくらいにしておきましょう。夜の分の体力も残しておかないといけませんしね」

「わかった、じゃあ、僕はこれから蔵書室にいくよ。夕食の時間になつたら呼びに来てくれる？」

「はい、わかりましたラウル様」

ふう、疲れたけど、初めての時ほどじゃないな。

それだけ、俺も鍛えられてきたってことかな。でも、四歳からこんなに鍛えてもいいのかな？

身長が伸びなくなったりしないかな？ ま、そんなきゃあ我が家の秘薬に頼るとしますか。

それよりも、今は俺の知的探求心を満たすことにしようか！ うひひひ！ 待っててね、俺の本ちゃんたちいゝ

俺は、小躍りしながら蔵書室に向かっていくのだった。

その小躍りして蔵書室に向かっていくラウルを見たメイドの会話。

「ね、ねえ。ラウル様、最近ジュール様の様に行動が変になってきてない？」

メイド二人が、ひそひそと話している。

「そんなのあたりまえじゃない。だって、そりゃあジュール様のご子息だしねえ。それにアミス様の血も入ってるんだから、ある意味ジュール様以上の素養を秘めているといってもいいわね。」

「そんな…！ あんなに麗しいラウル様が、ジュール様以上のアレになるなんて！」

「それにね、オーヴェルニユ家は変人度と実力が比例しているのよ。」

「言っちゃった…。で、比例？」

「ええ、あのジュール様の御奇行レベルで、トライアングル。先代様も、あれくらいでトライアングルだと言っわ。それ以上の素養を秘めているであろうラウル様であれば、それはもうトライアングルのうえ、スクウェアしかないと思うわ」

「なっ！？ で、でも、ラウル様がジュール様以上になる保証なんてどこにもないんじゃないの！？」

「なにをいつているのよ、さっきのラウル様の行動を見ていなかったの？ あれで、今のジュール様クラスなのよ？」

「た、たしかに」

「それにアミス様の血が加わっているの。だから、ラウル様はオーヴェルニユ家で始まって以来初めてのスクィエアになると思うわ。」

「それは、すごい時期に私たちはここに仕えているわね……」

「ええ。だから、私たちの将来は安泰ね」

「そうね。ラウル様には期待させてもらいましょう」

勝手に変人扱いされて、勝手に期待されているラウル。間違っ
てはいないが。

だが、このメイドの予言は、近い将来、当たることになるのであ
った。

「うひひ、本サイコー！ お！？ まさかデテクトマジックにこ
ういう応用の仕方があったなんて。それは魔法を覚えたらやらなき
やあ駄目だな。うひひひ、たのしみだなあー。お！？ こっちのこ
れも興味深いな！ ……ぶつぶつ」

そして夕食後の会話。

「ラウルよ、アミーシャの訓練はどうだ？」

父は、前ほどではなくなったが少しげっそりしている。なにか、母上対策でも立てたのだろうか。

そして父上の質問に、俺はすぐに答える。

「はい、父上。地獄です」

「は？ 地獄？」

アミーシャが後ろに違和感なく「スッ」っと迫ってくる。
ドスッ「うぐう！？」

アミーシャの手刀がラウルの脇腹をとらえた。

「ど、どうしたラウル！？」

「いえ、あまりにアミーシャとの訓練が楽しいので、早く訓練をしなくなつてしまいました」

うぐああ！ いったえええ！ ちょ！ ナニをするんですかアミーシャ先生！？

「そんな、ラウル様っ」

おいしいいい！ あんた何赤くなつてんだあああ！ これ、無理矢理言わせてる系だからね！？ あんた、力を盾に無理矢理言わせてる系だから！

「ラウル様、そんなに楽しみにしていただけでしたら、今

日からも少しレベルをあげましょうか」

「ほう、ラウル。アミーシャとの訓練はそんなに充実したものになっ
っているのか。」

なつてねええええ！ 何聞いてんだクソ親父イイ！ 地獄だつっ
てんだろーが！ てめえそのうちマジで絞めるからな！

「ではラウル様、今から訓練に向かいましょうか」

「え、そんなアミーシャ、まだ訓練の時間には早いよ・・・」

「いえ、楽しみにしていただけているのですから、私もがんばらね
ばいけないとおもいまして」

「で、でも、食べたすぐに動くのは駄目なんじゃないかな？」

「敵は待つてはくれないのですよ？ たとえ食前、食中であっても
襲ってくるのです。弱音を吐くなど以ての外です。」

「うぐっ・・・」

正論だ。悔しいが、正論過ぎるだけに反論できない。

「さあ、いきましよう。ラウル様」

俺は、物言わぬまま外にひきづられていく。

「な、なあアミーシャ。ラウルは本当に充実した訓練をしているの

だろうか？」

ひきづられていくラウルを見て、何となくいやな汗をかき、アミスに聞いてみる。

「さあ？ どうなんでしょうか。ソレよりもあなた、今夜もよろしくお願いしますね」

アミスはラウルのことよりも、今夜もするジュールとのお楽しみのことしか考えられなかった。

「さあ、いきますよ、ラウル様。今日もいつものように避け続けてくださいね。練習している型でのみ、反撃をしてもいいですよ」

「わかりました、先生！」

俺は、アミーシャのことを先生と言っている。

ものを教えてもらうのだから当然だろうということ、先生と呼ぶことにしたのだ。

それと、先生と呼んだら顔を赤くして照れてくれるから、呼ぶのが楽しくて仕方ないんだなあ、これが。

まあ、こういうマジモードになったら何を言っても通じないんだけどね。

「では、始めます」

瞬間、アミーシャがその場から消えた。

これはいつものことだ。最初は驚いたが、もう驚かない。
だから、俺は焦らずに周囲に気を張る。気配を探るように、前進の
感覚を研ぎ澄ます。

——後ろかつ！

俺は気配らしきものを感じ取り、慌てて横に避ける。すると、瞬間
前まで俺の顔があった場所に拳が通り抜ける。

見えたっ！

俺は拳の先に居るであろうアミーシャに蹴りを放つ。
それをアミーシャは難なく避け、掴む。

ラウルは、避けられるどころか放った足をつかまれ、真上に放り投
げられる。

ブオッ！

「うわっ！」

「甘いですよラウル様。反撃は、確実な隙を見つけてからするべき
です。でないと、こんな風に利用されてしまいます」

いや、普通はアミーシャみたいなスレンダー巨乳にこんな怪力ない
だろうさっ！

アミーシャは腰を落とし、中空にいる僕に攻撃を仕掛けようと構え
ている。

あれ？　なんかデジャブ？　これ、前世で死ぬ寸前に似てないか？

ブオン！　と音を立ててアミーシャの拳が迫ってくる。

俺はなんとか避ける術がないかと思い、必死にこの数ヶ月でやって
いる訓練を思い出す。

だが、この四年間の思い出、前世の主立った思い出を思い出してしま
う。

つてまた走馬燈！？　馬鹿野郎！　死んでたまるかってんだ！　う
おおおらあああ！

俺は、必死に体をひねり、拳を避ける。

俺のすぐ横を、アミーシャの豪速の拳が過ぎていく。

「な！？　これを！？」

よ、避けれた！？　避けれたのか俺！？

なんとか電車のごとく迫る拳を避けられたことを、俺は喜んだ。
だが、避けられたことにアタマがいっぱいになっていたのか、着地
のことなど全く考えていなかった。

ドスッ！　ゲキッ！　「がつ！？」

「まさか、アレを避けられるとは思いませんでした。ですが、その
後がなっていないね。」

アミーシャが欠点を指摘してくるが、俺は避けられたことがうれし
くてほとんど聞いていない。というか、着地をミスってそれどころ

じゃないです。タスケテクダサイ。首が変な方向に・・・

ああでもなんか、前世に決着をつけられたような気分だ。

これを、死ぬ前にできるようになってたら俺は死ななかつたのかも
しれないなあ。でも、電車と拳じゃあ大きさが違うかなあ。でもア
ミーシャの拳はそれくらいの威圧だったんだよなあ。

そんなことを考えながら、俺は今日も意識を手放して聞くのだった。

第06話 アミーシャの訓練Ⅱ地獄（後書き）

どうも、読んでくださってありがとうございます。

感想とか、一言でも下さると大変な励みになります。
よろしく願います。

第07話 完璧執事・エドワードさん(前書き)

遅くなりました。

よろしくお願いします。

第07話 完璧執事・エドワードさん

今日は。

オーヴェルニユ家の執事をさせてもらっています、エドワードです。本名はエドワード・ペリッソン。

ジュール様のお爺様、つまり先々代様の頃から仕えさせていただいております。

私、実は今年で117歳なのであります。私がこれほど長生きになつてしまったのも訳がございまして……。まずは、それから説明せねばならぬのでしょうか。

そう、あれは数十年前、私の父が王家に献上するはず税を横領し、さらに民の税を過剰にとり、領地の国力を著しく低下させた上に私利私欲を貪つた罪により、当主は打ち首、全財産と領地没収の上お家取りつぶしとなりました。

それを知らなかった私は唐突に路頭に迷わされたと思い、ガリア王家を何も知らず恨んでおりました。今思えば、なんと自分のことしか考えていないのかと思います。あの頃の私は若かつたのですね。それで、私はガリア王家に復讐を誓ったのでございます。

それから、めまぐるしく時が過ぎていきました。当時ラインの風メイジであつた私は、何度も死線を潜り抜けるうちにいつの間にかスクウエアになつておりました。

復讐を近い、数年が経つた頃でしょうか。慢心し、今ならば誰にも負けないと思つた私は、単身ガリア王を暗殺しようと城に侵入いたしました。

ええ、無謀だとわかつておりますよ、今であれば。ですが、あの頃の私は二十の前半。それにスクウエアになつて調子に乗つておりましたのでございます。まあ、言うなれば未熟だったのでございます。

そうそう、侵入に成功した私はとうとうガリア王の寝室の前までたどり着くことができたのです。幸い、そこまでの道のりで衛兵などに出くわすことはありませんでした。思えばここで違和感を感じ、逃げ帰っておればオーヴェルニュ家にお仕えすることもなく、唯のガリアの殺し屋として名を馳せていたでしょうな。私をオーヴェルニュ家に導くに至ったこれだけは、自分の無知さに感謝せねばならぬのかもしれませんが。

私は寝室のドアの前で深呼吸をし、覚悟を決めます。そして、意を決し突入したのです。

ですが、そこに待っていたのは当時のガリア王のみならず、その広い部屋には衛兵十数人と、花壇騎士団の手練れが数人でした。私は闘い、というにはあまりにも数が違いすぎましたが、そのあたりは風のスクエエスperlである偏在などを駆使し、必死に応戦しました。ガリア王を殺すために。

ですが、やはりあまりにも地力に差がありすぎ、私は逃げ出しました、体に数々の傷を負いながら。

どこをどう逃げ、どこまで行ったのかもわかりませんが、気づけば追っ手を撒いていました。

そして私は、警備の目をかいくぐりとある屋敷に侵入し、治療しようと部屋を物色をしていました。

ですが、やはり余裕がなかったのか、満身創痍の私は物音などを気にせず探していて、すぐに発見されてしまいました。ジュール様の先々代の御当主様に。

私は抵抗する気力もなく、花壇騎士団に引き渡され、殺されて晒し首になることを覚悟しました。ですが先々代様は、あろう事か私を治療してくださったのです。ですが、私は重傷のオンパレードどころか、何故これだけの傷で生きていられるのかと言われる程の傷でした。

もう、普通では助かる手段などないと言うほどに。

それで、先々代様は私にこう聞いてきました。「生きたいか？ 生

きたいなら、少しでも生き残る可能性のある未完成の水の秘薬を試してやるう。だが、どれほどの後遺症があるのかもわからんし、結局助からんかもしれん。それでもいいというのであれば、この薬を試してやる」

私は、その言葉を聞いて驚きました。未完成の薬を試すのか、と。ですが、どうせ死ぬ我が身です。それが、生き残れるかもしれないのであれば、と。生き残ったのであれば、再び王家に復讐すると誓い、飲むと言いました。

そして結果から言いますと、私はその薬を飲み、生き残りました。ですが、体の自由が利かなくなっていたのです。そう、あの薬を飲み生き残ったのはいいのですが、体の自由がきかなくなっていました。さらに、何も食べなくてもしなない体になりました。

生き残ったのはいいですが、体の動かない食べなくても死ねない身体。これは生きていない。生きてはいるが生きてはいないと思いましたが。ですが、私は気づいたのです。今までの人生で、私が生きていたことがあるのか、と。ただ無為に貴族として生き、路頭に迷い王家に復讐するために生きた私。決して、自分のために活きたことのない私に。

それから、どれくらい経ったでしょうか。数時間？ 数日？ 数ヶ月？ 数年？ 殺されねば死なない身体になった私に、時間という概念はもはや無意味でしかありません。

幸い、考える時間だけは無限にできました。そして、しばらく経ったある日、復讐がただの逆恨みであつたと悟りました。家を取り潰されたことも、父が自分で播いた種であることが理解できました。それから、私は何も考えられず、真っ白になって生きていました。

そんなある日、ふと、自分が杖を握っているのに気づきました。駄目元で、試しに偏在の呪文を唱えてみると、難なく偏在ができました。その瞬間、王家のことなどどうでもよくなり、私をこんな身体にし

たあいつのことが、急に恨めしくなってきました。偏在で、私をこんな身体にしたあいつに復讐してやろうと、偏在に先々代様を尾行させました。そして、隠し部屋に入っていく、その中でなにか、また別の秘薬を研究していました、憎いと思いました。俺をこんな体にした研究をまだ続けているのか、と。殺してやろうと思い、後ろにそつと近づきました。

そして、あることに気づいたのです。驚くことに私に飲ませたあの薬、未完成ではあるが、私を生かすためにはそれしかなく、それが原因で身体が動かなくなっただけをすまなく思い、身体を動かせるように治す薬を一人で開発しているということです。さらに、あの薬の材料、今では手に入らないような、値段をつけられないような材料を使っていたのです。私はそれを見たとき、尾行だのなんだのをしていたのをすつ飛ばして、先々代様の肩を掴み、問いただしていました。何故私をそんな値段をつけられないような材料をふんだんにつかった秘薬で助けたのかと。先々代様から帰ってきたのは簡潔な答えでした。「助けたいと思ったから」と。

その瞬間、私は力が抜け、その場に腰を抜かしてしまいました。そして、この金に疎そうな方の護衛や、財政の管理は私がせねばなるまいとも思い、せめてもの恩返しにこれからの私の全てを掛けてお仕えしようと心に決めたのでした。これが、私の初めて活きた瞬間でした。

それから、追手なども何度かこのあたりに聞き込みにきましたが、一向に見つかからない私にどこか人目のつかないところで息絶えたのだらうとあたりをつけて帰っていききました。それから、私は執事をすることにしました。幸い、礼儀作法などは知っていましたからね。

「――それから約八十年、私は変わらずこの屋敷で、変わらずオーヴェルニュ家に仕えさせていただいております。」

そこで言葉を句切り、深い息を吐き、昔を思い出す様に少し遠くを見つめるような目をする。

そんなエドワードさんに、俺は疑問に思ったことを聞く。

「じゃ、じゃあ、今僕がこうして喋っているエドワードさんとは別に、本物のエドワードさんがこの屋敷のどこかにいるってこと!？」

俺の質問に、一緒に聞いていたアミーシャも必死に首を何度も縦に振っている。

「ええ、私の本物は、この屋敷のどこかにおりますよ。ただ、私もどこにいるのか知りませんけどね。」

私の答えに、ラウル様が「え?」と声をもらす。

「私も、私の本体がどこにいるのか知らないのです。ただ、この屋敷のどこかにいるのは確かです。オーヴェルニュ家の象徴たるこの屋敷が焼かれてもすれば、死体くらいは見つかるでしょうな。いえ、見つからないかもしれませんが。もしよければ、私の本体を探してあげてください。探して、見つけて、話し相手にでもなつてあげて

ください。本体は、ずっと動けず、暇をしているはずですから」

エドワードさんはそう言って、目を瞑る。

そして、目を開けた頃にはいつも通りのエドワードさんに戻っていた。

「それではラウル様、私は仕事に戻ります。」

「え、あ。う、うん」

あまりのエドワードさんの変わりぶりに、僕は狼狽するしかなかった。

「ね、ねえラウル様」

さっきまで呆然として俺を膝の上に乗せていたアミーシャが、俺に話かけてくる。

俺は、後頭部をおっぱいにもふもふしながらそれに答える。

「なに？」

「なんで、エドワードさんの過去話を聞くことになったんですかっけ……」

「確か…、誕生日が何時なのかを聞いたら、急にエドワードさんが遠い目をしだして、それを僕が聞いたしたら、「そうですね、ラウル様には話してもいいかもしれませんね」っていいだして……」

「

「まあ、エドワードさんのことが知れて、良かったじゃないですか」

「そうだね。僕は、アミーシャのことも知りたいけどね」

「ええっ!？」

「なんでアミーシャ先生はこんなに強いのか、とか」

「せ、先生……」

アミーシャが赤くなり、妄想の世界にトリップする。

俺は、こんな日がずっと続けばいいと思った。

平和で、楽しくて、のどかな日々が。

アミーシャのおっぱいに頭を委ね、さらにもたれかかりながら、これからのことに思いを馳せるのだった。

第07話 完璧執事・エドワードさん（後書き）

すみません、昨日更新でしませんでした…。

いいわけをさせてもらうと、体調不良、授業、バイトの三点バーストで…。

いいわけですすみません。

ところ変わって今回は、エドワードさんのこと書いてないなあ、とおもったら、なんか書いてました。エドワードさんが仕えるに至るまでの経緯です。

感想、誤字脱字報告とか、待ってます。
よろしく願います。

第08話 水の秘密部屋（前書き）

すみません！ 期末という慌ただしい時期、日頃のサボりが祟ってレポートやテストが山のようにあるということが判明して現実逃避とかしてたら更新できませんでした！ すみません！

第08話 水の秘密部屋

「よ……読み終わったあああああ!!」

朝の訓練を終え、昼食を食べた後のおやつの時間には少し早いといった時間の昼下がり、俺は蔵書室で雄叫びを上げている。

「うおおおおお、うおわあああああ!!」

雄叫びを上げる。

「ほわあああああ!! ほわっ! ほわっ!! ほわあああ
あああああ!!」

・・・雄叫びを上げ続ける。

「ぶうるあああああ!! ぶおっふあああああ!!」

——パンツ!

俺が雄叫びを上げていると、蔵書室の扉が勢いよく開けられる。

「つかがなされましたか! ラウル様!」

アミーシャだった。アミーシャがなんか切羽詰まったような顔をして勢いよく入ってきた。

「あれ? どうしたのアミーシャ? そんな血相を変えて?」

「それは私の台詞です！ 先ほどから大声をあげられて、どうなされたのですか！？ もしかして何か御病気にでも……」

「ああ、いえ、この蔵書室の本をね？ 全部読み終わったから喜びのあまりちよつとばかり大声を出しちゃったんだよ」

「あ、あれでちよつとばかりですか……？」

アミーシャは力が抜けたように肩をだらけさせ、答える。

「？ そんなに大きい声を出してた？」

自分ではそんなに叫んでいるつもりはなかったのだが、そんなに大声が出ていたんだろうか。

そう思い、アミーシャに聞いてみる。

「ええ、屋敷中に響き渡るほどの大声で、いつものほつ……いえ、まるで何かの御病気でも発症させられたのかと思い、いそいで駆けつけました。」

そんなに大きい声が出てたのか……。喜びを表現しただけなんだけどな……。

「ああ、そうなんだ。ごめんね、騒がせちゃった？」

「いえ、私は大丈夫です。屋敷の殆どの者も、いつものことだと平常通りの作業に戻っております」

いつものこと？ 俺、そんなにいつも奇声あげてたっけ？
それにしても……。ついに、読み終えてしまった……。この、蔵書室

にある本全部。俺、天才？ あは、知ってる♪

いかん、つい中二が発動をば。失礼失礼。

苦節約二年。もうすぐ五歳が迫ろうという今日、ついに全て読み終えてしまった。しかも、内容を殆ど覚えていたときだ。生まれ変わって、脳が超 優秀になっちゃったのかな？

ああでも、これからどうしよう？ この全部読んで、殆ど覚えていたという天才的な俺様ちゃんは、この時間に当っていた昼食後から夕食前までの時間が完全に手持ち豚さん、いや手持ちぶさたになっちゃった。ふ、つくづく思うさ。これは、四歳児の悩みじゃないよな。でも、俺がそれなりに自立して遊んでるのは訳があるんだよ。

そう、俺の母さんことアミスのことだ。夜は、未だに二日に一回というスタンスを守っちゃいるんだが、昼間は自重しなくなりやがった。ああいや、昼間っから盛つてるとかじゃなくてだな、昼間は俺の親父ことジュールにべったりになるようになってちまいやがったんだ。まあ、しゃあなし的な感じで、工事にいくときは渋々、本当に渋々な感じで離れていく。離れていくっていうか離されていく。

もうね、その場面を見ると馬鹿らしくなってくるんだよ。涙目になって、家臣に無理矢理連れて行かれるときに、ずっと「じゅーるー、じゅーるー」って言ってやがんだ。親父は表面上は、っていうか母さんが見えなくなるまでは悲しそうに、それでいて決して追いかけようとはせずに手を振っている。だが、見えなくなった瞬間ガッツポーズ。執務室までの道はスキップだ。

これも勘弁してくれと俺は思うわけだよ。だってだぜ？ おっさんのスキップなんて誰が見たいよ？ めがっさキモいよ？ まあ見なきゃわからないと思うけど、もう思わず後ろから蹴ってやろうかと思っただけだよ。

つと話が逸れた。この、読み終わった時間を何に当てるか、だ。

そうだな、親父に相談しに行くか。

と思い立ち、俺は席を立つ。
すると、そこではアミーシャが恍惚とした顔で俺のことを眺めていた。

「ど、どうしたのアミーシャ・・・？」

不安を覚えながらもアミーシャに声をかけてみる。
すると、我を取り戻したのか、恍惚としていた自分に焦ってこう答えた。

「い、いえ！ 決してラウル様を部屋にお持ち帰りしたいなどとは思っておりませんすはい！」

筒抜けだった。そんなんで大丈夫なんだろうかと思う。

「ハッ！？ いえいえいえ、間違えました忘れてください今のはうちがいますううう！」

顔を真っ赤にして、手をぶんぶん顔の前で振りながら必死に答える。

「いや、大丈夫だよアミーシャ。いつものことだし。」

「い、いつものこと！？ それは心外ですよラウル様！ ラウル様やジュール様ならいざ知らず、私が奇行をしていつものことなどあり得ません！」

自信満々に、怒り心頭といった感じで言われた。ちょっとショックかも知れない。アミーシャは、親父はともかく俺のことまでそういう風に見てたのか・・・。

それはかなり落ち込む話だぜえ・・・。

俺はズーンという効果音が似合うと言うほどに肩を落とし、壁に手をつけてぶつぶつと喋る。

そんな俺をみて慌てたのか、アミーシャが焦った感じで話を続ける。
「ご、ゴホンッ！ えーつとですね、ラウル様。蔵書室の書物を読み終わったってことは、昼食後から夕食前までの時間が空いているということですね？」

「ああ、うん、そうなるね・・・」

俺は今落ち込んでますから話しかけないでというふうに答える。てか、親父と同列とかマジショック・・・。それだけは嫌だった・・・。

「え、ええと！ でしたら、昼間も何か別の訓練でもいたし」

「そうだ！ 用事を思い出した！ 父上のところに行かなくちゃいけないんだった！ そういう用事があったんだったよ思い出したという事で今から父様のところにいってくるよ何かなーたのしみだなーあ、一人で行けるから大丈夫だよアミーシャは自分の仕事に戻ってください、じゃっ！」

俺は脱兎のごとく逃げ出した。

これ以上訓練増えるとかマジ勘弁願いたいですしね。

そんなことになったらマジで死ねる自信が俺にはあります。

ということとで親父の書斎の前に来ました。
なんか、約二年前もこうして蔵書室も許可をもらいにくるために一人
で親父の書斎のドアの前に立ってたな。あれからもうすぐ二年経
つのか。時が経過するのははやいなあ。ってなに四歳で悟りを開こ
うとしてるんだ俺は。
こんなところ（親父の書斎のドアの前）で時間を潰しても意味ないわ。
とりあえずノックして入るか。

——コンコンッ！

ドアをノックする。

二年前とは違い、たどたどしくノックするといった感じはない。

しつかりとノックをする。そりゃあ、あんだだけアミーシャのじごく・

いや、訓練に耐えてるんだ。俺ももうそこの大人の大人にだって負け
る気はしないよ。あ、腕力は無理だぜ？ 戦い方の手段を選ばなけ

れば、初心者には勝てるってことな。アミーシャとかは無理だけど。

「入rinaさい。」

おっと、俺が考え事してるうちに親父から入室の許可が降りたみた
いだ。

俺は、ドアノブを回して中に入る。

「なんだラウルじゃないか。どうしたんだ一体？」

「父上、蔵書室の本を全て読み終わりました」

父上はめがっさ驚いたような顔をして聞いてくる。
だが、俺は冷静な顔で答えを返す。

「何！？ あの部屋にあった書物を全部か！？」

「はい、全部です父上」

「わ、ワシでも全て読んだことがないというのに・・・」

父上は何か考え込むような感じでぶつぶつと俯いて言っている。これはもういつものことだ。父上がいつものことを始めたのだろう。生暖かい目で結論が出るまで見守ってやろう。

以下、父上の脳内会議

「そうか・・・全てか・・・」

「そろそろあそこに連れて行くか・・・？」

「いや、でもまだ早いのでは・・・？」

「だがあそこのを全て読んでしまうほどの才を遊ばせておくのも・・・」

「

「全てが理解できているとは限らんのじゃないか？」

「たしかにその通りだが・・・」

「では聞いてみて、理解できていればあそこに連れて行くというのは？」

「あそこに連れて行くのか？」

「まだ早くないか？」

「いや、早いに越したことはないだろう」

「たしかにその通りだが・・・」

「よし、とりあえずは聞いて、それからだ。わかったな？」

「異議なし」

「異議なし」

「異議なし」

脳内で異議なしという言葉が木霊する。どうやら聞いてみてから、という意見に落ち着いたようだ。っと顔を上げてみると、ラウルが変な目でワシを見つめている。そんなにパパの抱擁を求めているような目をするなよラウルウゝ抱きしめなくなっちゃうじゃないかあゝ。

うをつ！？ 親父が急に笑顔になって抱きつこうとしてきやがった！ キモッ！

俺はアミーシャに鍛えられた回避スキルで親父の攻撃・・・もとい抱擁を躲す。

「どうされたのですか父上？」

「おつと、いろいろ忘れていた。ラウル、蔵書室の本を全て読んだと聞いたが、全て理解できたのか？」

抱擁を躲されて落ち込んでしょーんとしていたが、俺の問いかけに我を取り戻したようだ。

そして、何か確認するように、俺に質問をしてきた。俺はそれにありのままの事実を答える。

「はい、全て暗記し、理解できました。」

その答えもなおも驚きを隠せないようにしていたが、持ち直してこう言ってきた。

「うむ、ラウル。おまえの言葉に偽りがあるようには感じられないな。ということとは、理解できたというのは本当なのだろう。おまえは天才なのかも知れないな」

おほ！ 父上にまで天才と言われるとは！ これは、俺はもはや自他共に認める天才か！？ まあ、とりあえずお礼を言っておこうか。

「ありがとうございます父上」

「うむ。お前にはそろそろ秘薬の製造法など、オーヴェルニユ家の全てを伝えていくべきかも知れないな」

「全て、ですか？」

「うむ、そうだ。手始めに秘薬の研究室である秘密部屋に連れて行くか。そこには、我が家が長い歴史を掛けて集めた、オーヴェルニユの全てが詰まっていると言っても過言ではないものがたくさんある。」

「おお！？ 本もありますか！？」

「ああ、もちろんだとも。」

「では行きましょう！ 今すぐ行きましょう！」

「ははは、そんなに焦るでないラウルよ。秘密部屋は誰にも知られてはいけなからな。慎重に行かねばならないのだ」

その一言を聞き、俺は少しかり冷静になる。秘密部屋、誰にも知られてはいけない。この言葉に俺は心躍り、精神的には二十二歳ながら肉体は子供な俺は、テンションが上がり上がる。

「わかりました父上。ではいつ向かいますか？」

「うむ、今はアミスもないからな。今から行こう」

今から行くのかよ！ まあ、願ったりかなったりだけどさ！ なんでじらしたんだよ？

で、移動してます。でもなんか、普通に歩いてるんだけどこれ、大丈夫なのかな？

歩いてると、メイドさんに挨拶される。

それを受けながらも、普通に歩いて行く。そして、とある部屋の前でとまる。

「ここだ。」

「ここですか父上？ でも、何の変哲もないところですよ？」

「ああ、ラウル。だからこそ効果があるのだよ。さ、入るぞ」

「はい」

そして扉を開け、誰にも見つからないようにサツと中に入る。

だが、部屋は何の変哲もない客間だ。何ら特別な何かがあるような気配もない。

だが、父上が壁にむかって杖を持ち、何か呪文を唱える。

だが、壁に何か変化が起きたような感じはしない。それでも成功なのか、父上は壁を押す。すると、壁が奥にへこみ、その向こう側に地下へ続いているであろう階段が見えた。

「おおお！　これが秘密部屋へ続く道ですか！？」

「ああそうだ。代々オーヴェルニユの当主が守ってきた、水の秘密部屋だ。」

「へえ。それで父上！　入っていいのですか？」

「うむ、では行くか。もちろん入った後も先ほどの呪文を唱え、気づかれないようにしないといけないぞ？　この呪文は、お前が魔法を使えるようになったら教えよう。それまでは、当分はワシと来なければならぬな」

「はい。わかりました父上」

会話をしながら、階段を下りていく。しばらく歩くと、着いたのか空いている場所にでた。

父上がパチンツ！　と指を鳴らすと周囲にあったのであろうマジックアイテムに灯りが灯っていく。

灯りに照らされたそこには、壁に書物や薬品、さらには秘薬を加工・生成するための器具などが並びんでいた。まさに圧巻。俺は、部屋の凄さに圧倒され、しばらく部屋を見回していた。だが、三面の壁はまさにその通りなのだが、入ってきた階段のある壁の横側には、さらにもう一つドアがあった。俺はその扉に疑問を覚え、父上に聞いてみる。

「父上、あそこの扉はなんなのですか？」

「うむ、あそこには代々オーヴェルニユ家の当主が集めてきた貴重な秘薬の材料などが保管してある倉庫になっている。」

だそうだ。まったく、この屋敷の下にこんなすごいもんが保管してあったなんて驚きだ。オーヴェルニュ家ってのは一体何なんだ？俺は一体どういう家に転生したってんだまったく！ 凄すぎんぜ！

「さてラウル。お前にはそろそろ水の秘薬の調査表などの閲覧許可をだそう。ワシがここで研究や調査をしている間、自由にここにある書物を読んでもいいぞ。本格的な調査は魔法が使えるようになってからだがな。」

「わかりました父上。では早速ここにある本を読ませていただきます。うひひ」

俺は父上の話を右から左に聞きながら、壁にある決して多いとはいえないが質の高そうな書物を前に涎を垂らしながら近づいていく。そして、本の世界に没頭していくのだった。

——チン

「ん？」

「ほあっ！？」

音のした方を見ると、エドワードさんが立っていた。

「旦那様。坊ちゃま。そろそろ夕食の時間でございます」

「なんだ、もうそんな時間か？」

もうそんなに時間が経っていたのか……。夢中になっていて気づか

なかったぜ・・・。

「はい。奥様も帰ってこられて、旦那様を捜しておいでです。」

「なに！　ここがアミスにばれるわけにはいかん！　早く上に上がるぞ！」

えー、もうちょっとここにいたいのに・・・。

「坊ちやま。アミーシャも、坊ちやまを探していましたよ」

「え！？　本当ですかエドワードさん！　駄目だ早く出ましょう！」

そして、見つからないように部屋をでて、魔法を掛けて偽装してから夕食の用意してある食堂へ急ぐ。

後から知ったことだが、地下室へは魔法の言葉をこの屋敷の壁のどこでもいいので唱えれば地下室につながる扉が出現するという。で、壁をくぐったらまた偽装。出るときも、出たい壁をイメージすればそこに出口がつかなくなるという。これを聞いたときは魔法は何でもありだなと思った。

そして、オーヴェルニユ代々の当主しか知らなかったことにも納得できた。

ちなみに、エドワードさんが知ってたのは、風のスクウェアは気配を感知するのが得意らしく、それで先々代の時に隠し部屋が存在が見つかっただけらしい。というか、この前エドワードさんの昔話を聞いたときに後をつけたら地下に行くのが見えたからついて行ったとか行ってたな。

先々代がきっかけだったのか、エドワードさんが優秀だったのか。何はともあれ、しばしば時間を忘れてここで研究などに没頭するオーヴェルニユの当主達にとって、エドワードさんの存在はありがた

いものだろう。

——ギイイ

おっと、いろいろ考えているうちに食堂に着いたみたいだ。

「もゝ、ジュルウゝ！ 一体どこにいたのよ？ 探したのに全然見つからないじゃないゝ！」

「すまんすまん、ちよつと散歩に出ていたのだ」

その答えを聞き、疑わしそうに目を細めながら俺を見て、母上の後ろに立っていたアミーシャが聞いてくる。

「……ラウル様ですか？」

「う、うん。僕も、父上と一緒に散歩してたんだ。最近、父上と全然喋ってなかったからね」

「そうですか……」

全然納得いってなさそうに答えるアミーシャ。今日の訓練はいつもより厳しい者になるだろう。そういう覚悟をして、俺は夕食を食べる。

「ねえジュール。最近、森の方で亜人や幻獣が暴れてるらしいの。それで、森に迂闊に入れなくて困ってるって民達が言ってたわ」

「なに？ 亜人に幻獣？ そうか、では私設軍にその森に討伐に行くように命じよう。まあ、実際は討伐ではなくて追い出すくらいが

せいぜいだろうがな。」

「それでも、民が助かることには変わりないわ。ありがとうジュール。民も喜ぶわ」

「なに、アミスがそういう陳情をきいてくれるから、民の暴動などが起こらんだ。むしろ感謝するのはワシの方だ。ありがとう、アミス」

「あなた・・・」

「アミス・・・」

え？ なにいい雰囲気になってんの？ まだ夕食も食べてないのに。俺が今日の訓練が厳しくなるって落ち込んでるときに。てかみせつけんなや。マジむかつくんですけど。親父さあ？ 前は二日に一回は死ぬだの何だのとか言いながら、精力丸っていう媚薬を開発してさらにそれを改良を重ねて強力にしたらあんた楽しんでるだろ？ なあ、絶対楽しんでるだろ？ てか子供の前でそんなに見つめ合ったって！

「旦那様。奥様。そろそろ夕食を召し上がられてはいかがですか？ 坊ちやまもお腹を空かせておられるようですし。」

「え、あ、ああそうね、食べましょう食べましょう」

「そうだな。まずは夕食を食べよう」

そんなやりとりをして、夕食を食べた。

そして夕食後。

「ジュール・・・」

「アミス・・・」

すぐに父上と母上は熱く見つめ合っている。
というか、見つめ合いながら寝室に向かって歩いて行く。もうこの
人達はほつとこう。
うん、遠いところで幸せになってもらおう。

「ラウル様・・・」

「あ、アミーシャ・・・」

こっちも見つめ合っている。片方は冷たい視線を。片方は冷や汗を
垂らしながら。

「さあラウル様、訓練に行きましょう」

「に、逃げちゃ駄目・・・？」

「いいですよ？ 逃げられるものなら。」

アミーシャは不敵に笑いながら答える。

「でも、逃げて捕まったら、その日の訓練はいつもより厳しくなると思いますけど。」

「い、いいです・・・」

「では行きましょうか」

「はい・・・」

俺は空気により重くなる肩もそのままに、外に向かって歩いて行く。

庭に出てきた。いやだなあ。アミーシャ、最近手加減とかしてくれなくなってきたんだもん。

「ではラウル様。今日も必死に避けてくださいね。いつも通り、型でのみ反撃は許可します」

「わかりました、先生・・・」

「では、行きますっ!」

いつも通り、「行きます」というかけ声とともに姿が消えるような俊足で動く。

「っ! 後ろお!」

俺は昼間にいつも習っている型に行動を当てはめて反撃する。

思うんだがこの型、古武術に似てる気がするんだけど。昔テレビで見たことある型にめっちゃめっちゃ似てるんだ。これはより実践向けな感じなんだけどな。

「ふっ!」

それを身を屈めて躲し、俺の足をつかみにくる。

俺はそれをジャンプすることによって躲す。

「あまいつ!」

ジャンプして躲した俺に、下からアッパーするようにして掌底で攻撃してくる。

「くっ!」

アッパーのように鋭い掌底を、俺は腕をクロスして受ける。そして、真上にさらに吹き飛ぶ。

真上に吹き飛んだがバランスを立て直し、反撃をしようと片足を伸ばし、片足を曲げてライダーキックのような様相で落下していく。

「っらあああああ!!」

だが、

「それ、避けられたらどうするんですか？」

と言いながらキックの届かない場所まで後ろにジャンプして避ける。そして落下すればすぐに攻撃できるように姿勢を低くして備える。俺はライダーキックを即座にやめて衝撃を吸収するように着地し、来る攻撃をすぐに避けられるように備える。

「ハアッ！」

俺が着地した瞬間に爆速で突っ込んでくるが、速度だけに直線でわかりやすい攻撃に俺は必死に横に転げて避ける。それから両腕で身体を支え、両足でアミューシャの横腹を蹴ろうとする。

「そらあっ！」

だが、その攻撃も読んでいたのか軽く避けられ、さらに脚を捕まれた。そして、またどこにそんな力があるのかと言わんばかりの馬鹿力で振り回される。

「うわあああああ!!」

「はっ！」

「ぐっ！」

ガクリ。

振り回されて目が回ったところに首筋にチョップを喰らわれ、俺は意識が途切れていくのを感じる。

くそおっ！ 今日はずなりにいけてる気がしたんだけどな・・・。

気を失ったラウルを大事そうに抱え、アミーシャはつぶやく。

「つい二年程前に始めたばかりなのに、もうここまで成長なされるなんて・・・。ラウル様は末恐ろしいですね。」

三歳から、もうすぐ五歳という約二年のこの期間で、ここまで反撃してくるラウル。アミーシャは、まだ子供なラウルを見ながら、まさしく天才ですね。と独りごちるのだった。

そうして、ラウルが蔵書室の本を全て読み尽くした日は、秘密部屋に入れてもらって新しい知的探求心を満たす場所を提供してもらうというだけで、夜の訓練が軽くなるなんてこともなく、いつものように気絶させられて終わっていくのだった。

第08話 水の秘密部屋（後書き）

あとですね、レポートやテストが山のようにあるのが解決したという訳ではないので、夏休みまで更新が遅れるかも知れません……すみません……。

第09話 ラウル、誕生日。（前書き）

どうも、お久しぶりですすみません。

馬車馬のごとくやってたんですが、終わりが見えないので「俺、明日からがんばるから」ってことで現実逃避。
そして書き上がったので投稿しとこうと相成りました。

おれです。切羽詰まると部屋の掃除をしまっ、アレです。

察してください…。

あ、あと、キャラとか若干崩壊してるかも知れませんが、悪い方に。

状態：普通に帰ったら修正するかもしれませんが。

いまは、状態：こんらんなんです…。

第09話 ラウル、誕生日。

左側の、たわわな感触に心踊りながら俺は目を覚ます。

ぽよぽよ

「……」

ふにふに

「あっ……」

「っ……」

さすがにこれ以上はまずいかな…

いやあ、今日はアミーシャより早く目覚めることができてよかったよかった。

何せ今日は俺の誕生日だってんで昨日は軽め（それでも伸された）だったからね！

「おはようございます、アミーシャさん」

「ふあ、ん。え？ あ、おはようございますラウル様」

か、かわうiiiiiiiiii！！

なんともかわいいですアミーシャさん！ その流れるような柿色の長い髪の毛！ そして我が前世の故郷である日本を思い出させるその黒色の瞳！ ときめきまくりнгですたい！

それに巨乳！ Eくらい？ 目算で。サイズとかはよくわからんが、

多分それくらいの大きさですわこれ。んもうね、ダイブしたらぼよんて！ 何これボール！？　　ってくらい弾力があります。アミーシヤが世話係でよかった！

ああ、そうそう話が逸れた。今日、待ちに待った俺の五歳の誕生日なんですよ。はい。

そう！　なぜ待ちに待ったのかというと、五歳になったら父上が杖をくれると！　杖をくれるということは、魔法を練習できるということ！　魔法を練習できるといことは、今まで温めてきた妄想を具現化できるということだ！　どうだうらやましいだろう！　ふははははは！

「ら、ラウル様どうしたのですか？　先ほどから壁を見つめてニヤけて…。まさか、ついに…？」

何がついになんですかアミーシャさん。そんな生温かい目で僕を見ないでください。なんかいたたまれなくなるから。

「いえ、今日のことを考えてたらなんだか嬉しくって」

とりあえずごまかす。そんなにごまかせてる感じしませんか。

「そうですか。さあラウル様、着替えましょう。朝食です。奥様方も待っていますよ」

「うん、そうだね」

さっさと着替えてご飯食べよう。

今日の夜に向けていろいろ準備しないといけないみたいだし。それにしても、明日からのことを考えると心躍るな。前日に、アミ

「シャに伸されてなかったら楽しみで眠れなかったかもしれん。と、どこまでもポジティブに考える。そうでもない」と、アーミーシャの訓練（地獄）には堪えられないから。

・ ・ ・ ・ ・

食堂で朝食を食べ終えたあと、父上が話しかけてきた。

「ラウル。今日は、お前の五歳の誕生日だ。それに伴い、杖をやる」

「はい。ありがとうございます、父上」

まあ、この辺はわかってた。これは確認みたいなもんだろう。

「うむ。それで杖のことだが。」

「？ はい」

「二本ある」

あー、そういえばそんなこと言ってたな。普段用と、戦闘用。うまく使いわけて使っていてこうって話だったはず。

「はい、普段使う用と、戦いするとき使う用ですね」

「うむ。それで戦闘用の杖なのじゃが、アミーシャの要望を適えた感じの杖になった。」

え？ それ初耳なんですけど？ どゆこと？

「はあ？ それはどういうことですか？」

「うむ。アミーシャが、戦闘は自分が教えるから近距離戦もできるように自分の要望通りの杖にしてくれとな」

なんと！ そんなことまで意見できるのですかアミーシャさん！
あんた何者なんだ！？ 俺はあんたのことがやっぱり気になりまく
りだ！ いつか聞こう聞こうと思ってたが、あんた実はすごいんじゃないのか？

「まあそうしたら、杖とは名ばかりの剣になってしまったんだがな」

まあ、そりゃあ近距離戦もできるようになったら剣みたいになる
わな。でも剣って、やっぱ両刃かな？ それともレイピアみたいな
やつ？ まあ、どっちでもアミーシャが教えてくれるんなら大差な
いか。

「それが変わった剣だな」

変わった？　ってことは曲刀系？　さすがにそれは予想外だな。そんなものの戦い方とか俺、想像できないよ。

「なんと、片刃なのじゃ」

片刃の曲刀？　か、形が想像できん！　ど、どんな形なんだ。アミ―シャの要望の杖剣というのは！　気になる！

「まあ、それは明日にでも渡すでしょう。今日は来客の手前、普通の杖の方だけ渡すでしょう」

おいしいおいしいおいしい！　なんだそりゃあ！？　そんだけひつぱつといて渡すの明日あ！？　気になるだろうが！　片刃の曲刀ってどんななんだよおおおお！

「きよ、今日は見せていただけなんですか父上…？」

「うむ、そうだな。先に渡してもいいのだが、やはり普通の杖を渡した後に渡したほうがいいと思ってな。」

「そ、そうですね…」

べつにそんな気にしなくてもいいのに…。でもここで文句言つて臍を曲げられてもなあ。潔く我慢した方がいいのか…。まあ、普通の杖をさきに渡したい親心か…。察しよう…。

それにしても片刃の曲刀…。いったいどんな奴なんだ……。想像できん。

・ ・ ・ ・ ・

それから、母上といろいろ話をしてから、軽めのアミーシャとの朝の型の訓練に入った。

「ラウル様、もうほとんどの型をモノにできてますね。あとはこれを、実践で生かすのみです」

「そう？ でもアミーシャ先生と訓練しているとまったくできてる気がしないよ。だからまだ全然だと思っくんけどな」

「いえいえ、三歳から、約二年でここまでできるというのはすごいですよ。私も、そこまで達するのに五年はかかりましたから」

ご、五年。今のアミーシャを十六から十八くらいだと予測すると、他にもさまざまなやつも納めてるだろうしで逆算してもすごい期間掛かったんじゃないか？ 僕が一歳のときにここに来たらしいから、四年前。十二歳と十四歳の間までずっとこんなのはかりやつてたって計算になるのか。パナいな…。青春の殆どを武術に費やしたのか…。てか、こんだけすごい腕を持ってるんならもっといい働き口あったんじゃないのか？

「ありがとう、アミーシャ先生にそう言ってもらえると心強いよ」

「いえ、本当のことを言っただけなんです」

（先生って先生って先生ってキヤー！　ラウル様可愛らしすぎですうー！）

アミーシャが顔を真っ赤にしてほっぺに両手をあててものすごい速度で顔をぶんぶん振ってる…。

見なかったことにして型の練習を続けよう。それにしてもこれ、ほんとに古武術とかそんな感じの型だなあ。

「はっ！？　ここは！　あ、そうか、朝の訓練・・・」

「ん？　アミーシャ、どうしたの？」

「えっ！？　いえいえいえ、なんでもございませんよ。そうですね、今日はラウル様の誕生日ですし、今日はこのくらいで終わりますしよ
うか」

「え、もう？　誕生日の準備って言っても、僕はほとんどすることないんだけど・・・」

「いえいえラウル様。ラウル様は今日着るお召し物を選ばれたり、昼過ぎから来られるであろう来賓の貴族様への挨拶など、いろいろしなければならぬことがあるんですよ？　することは山ほどあります」

「え、そうなんだ…。父上とかから何も聞いてないんだけど・・・」

「まあ、旦那さまはアレですし。時間が近づいたらエドワードさんが言いに来ると思いますが。」

アレ!? アレってドレ!? そこ気になるよアミーシャ!

「そうだね。エドワードさんに苦勞させないように、先にやっておこうか」

「はい、ラウル様。お供いたします」

「ありがとう、アミーシャ」

・ ・ ・ ・ ・

「んー、これなんてどうかな?」

「いいですねラウル様! ですが! ですがラウル様にはこっちの方が・・」

「ん? どれどれ、ってこれピッタリすぎるよ! しかもこれ泳ぐときに着るようなやつじゃん!」

まるでスク水みたいだった。というかそのものだった。アミーシャは俺をどうしたいんだ……。てかなんでこんなのがあるんだ？ おかしくね？ 時代的に。

「えー、似合うと思ったんですけどー・・・」

おお？ 喋り方変わって…？ でも駄々っ子アミーシャかわいいですね。いけます。このアミーシャでご飯三杯はいけます。てかなんでそんなブリブリしてんだよ。見習えよ俺を。見た目は子供、頭脳は二十三歳オタクのこの天才五歳児を！ お尻ブリブリなんてしてないだろう！

「アミーシャ……。もう少し普通の服を選んでくれないかな……。ほら、僕の誕生日だし、他の貴族の人もあるんでしょ？ みつともない姿は見せられないよ。普通のを選ばう」

「・・・そうですね、わかりました。真面目に選びます。」

おうおう、そうしてくれ。てか真面目じゃなかったのかあんた。

「・・・では早速。これなんてどうでしょう？」

ん？ どれどれ、って

「これ、ブルマ式体操服やないかーい！ー！」

ビシッ！

突っ込んでしまった。思わず。てか真面目に選ぶって言ったやない

かい！ それにこんなんあつたんかこの家！ なんでこんなものがあるんだマジで！ ブルマ夫人はまだいないだろうがよう！

「ら、ラウル様？ ぶるま式体操服とはなんですか？」

「いや、こつちの話・・・ところでアミーシャ。もう少し普通の服はないの？」

「え！？ これ、普通じゃないですか！？」

普通じゃねーよ。お前の感覚どうなってんだよ。シバく・・・ハッ！？ いかんいかん。ダークな俺様が出てくるとこだった。抑えねば。

「もう少し、パーティーに着ていけるような服とか、ない？」

「はあ？ うーん、これは普通のパーティーに着ていけると思ったんですけど……」

どこの仮装パーティーだよ！ そう思うなら、一度着て行ってみればいいさ！ すごい目で見られるだろうけどな！ 周りが普通なら！

「あ、ラウル様！ これなんてどうですか？」

なにこれ。さつきもなんかこんな感じの会話して突っ込まなかった？ あ、こういう漫才的な？ てか俺、突っ込み要員だったっけ・・・？

いやな予感を感じつつも、見る。するとそこには・・・

「……あれ？ 普通だ。」

そこにあっただのは、簡単に言うならばコ。ン君のような感じの服だ。まあ、さっきまでのを見てたら、これでも普通に見えてくる。そして、俺はもう突っ込まない。なぜなら俺は突っ込み要員ではないから。

それよりもウネタ切れかい？ 早いなアミーシャ。そんなんじゃ芸人にはなれんぞ？

「えゝ！？ これ普通ですか！？ 普通に見えるんですか！？」

お前なんでそんな「こいつ引くわー」みたいな目で俺を見てんだよ。しかも「えゝ」ってどこから出たんだよ。女の子なんだからもうちょつとお上品に振舞いなさい！ まあ、身体能力は鬼だけでも。てかこれ言つとくけどまだ普通だからな？ アミーシャのセンスがずれてるだけだから！ 俺がおかしいわけでは決してない。断じてない。…はず。

「ど、どうしたの…？ アミーシャ？」

「い、いえ。私とラウル様は…、ファッションに関しては相容れないと思ひまして。おもにラウル様が悪趣味的な意味で…」

なんでそんな憐れんだ目をしてやがるこのアマ！ 闇討ちすんぞこら！ …まあ、返り討ちだろうけども……。だからせめて言葉だけでもっ…！

「そうだね。僕とアミーシャは相容れないみたいだ。僕が普通すぎて、アミーシャのいる時代まで追いつけないみたい。ごめんね？ アミーシャの、今の時代では奇抜すぎるファッションについていけ

なくてえ〜」

どうだこら！ ザマアーってアミーシャさん！？ 額に青筋を浮かべてらっさる！？ ご、ごめ！ 俺が悪かったすみません！

「そうですね、先の時代を走りすぎる私は、訓練も先の時代を走るので、次からはより厳しくしないといけませんね」

い、いやあーーーーー！ それはらめえーーーーー！

「あ、アミーシャさん、それとこれとは関係ないんじゃないでしょうか…？」

「いえいえ、いえいえいえ、私が先の時代を行っているだけなのでラウル様は必死に私の時代に追いつこうとしてくださいね？ うふふ、うふふふふ」

なにこの子こわい。明日の夜は地獄を覚悟ですか？ でもすでに今までの訓練も地獄なのでは？ これ以上？ それ、俺死ぬんじゃない？ ちょ、マジ勘弁してくださいよ！

「ご、ごめんなさいアミーシャさん。きっと僕のセンスが超絶悪かっただけだから、訓練を厳しくするとかそういうのは…」

「いえいえラウル様、すべてはもう遅いのでございます。手遅れなのでございます。訓練、三倍なのでございます」

ちょ！ 今の三倍とかどうなの！？ やめろよマジで！

「ごめんアミーシャさん！ ぼつ、ぼぼぼ僕が悪かったです！ だ

から三倍は勘弁してください！」

恥も外聞もなくジャンピング土下座をする。師匠と弟子の間柄である俺とアミーシャの前では、貴族と平民なんていう身分の差なんてあつてないようなものだ。

「いえいえいえ、ラウル様。今更でございます。これは、もはや決定事項なのでございます」

「…………ど、どうしても無理なの…?」

「はい。」

「くっ!」

どうしようどうしようどうしよう! 手がない訳じゃない。究極にして最後の、最大の一手が残っているには残ってる…。だが、だがこれは俺にも効く諸刃の剣の一手…。背に腹は代えられないが、どうする…。使うか…。

「ではラウル様。服は先ほどのこれで。明日から覚悟してくださいね」

「あ、アミーシャ。」

「なんですか、ラウル様」

「訓練を三倍にするなら…」

「するなら、なんですか?」

「もう、アミーシャと寝ないよ!?!」

ガガーーーーン!!

アミーシャがこの世の終わりのような顔をする。わかってる。俺も辛いから。でもアミーシャが無茶なこと言うから……。

「ラウル様、ラウル様。本気ですか……。」

「うん……、そうだよ」

「う、うう……」

「三倍は駄目だよ、アミーシャ」

「う、わかりました……。三倍は言い過ぎました」

「そ、そうでしょう!? だからいつも通りに……」

「わかりました。では、五歳の誕生日を迎えたということで本来上げようと思っていた量である、1・5倍でいいです……」

1・5倍には元から上げるのか……。それは、まあ、仕方ないか。

「わかったよアミーシャ。1・5倍でいいです」

「ではそれで……。それでは、先ほどの服を着ましょう。そろそろ他の貴族様が来られるところです」

「わかりました」

・ ・ ・ ・ ・

貴族がいつぱいきた。

名前も覚えられんくらいきた。本気になったら覚えられそうだが、覚える気はない。

なぜなら、男の貴族や人妻に興味はないからだ。

そんな中、一際騒がれている貴族がいた。

まさかオルレアン公がこられるなんて！

お久しぶりですオルレアン公！

一家総出で来られるとは！

そんな声が聞こえてきた。

俺の横で来る貴族に挨拶してた両親がすっ飛んでいったので、俺も

ついて行く。

「オルレアン公！」

「おお！ ジュール殿！ お久しぶりだね」

「はい、お久しぶりでございます。ですが、そのうちこちらからお伺いさせていただこうと思っておりますのに…」

「いや、いいんだよ。妻や、そろそろ娘も外に出してあげないといけないと思ってたからね。そのついでさ」

「いえでも他の貴族の方々の手前…」

「ふむ、それはそうだ。じゃあこうしよう。領地が隣で代々王族専属の水メイジを務めてきたオーヴェルニュの当主の息子に、私の娘を合わせにきた、と。」

「そ、それは一体どういう…？」

「ふむ、私の娘の旦那になるのにふさわしいかどうかを家族総出で見に来た、というところか」

「んなつー！」

「まあ」

「へえ！？」

父上、母上、俺が驚きの声を上げる。

父上、母上まで声を上げると言うことは、そんな話は聞いてなかったってことなのだろう。

周囲の貴族も、大小驚きの表情や声を上げている。
完全にサプライズだったのか。

てか、どういうことだ。

確か、オルレアン公って王族だよな？ その娘ってことはもちろん王族なわけで…。うちは忘れがちだが一応は伯爵家ではあるが…。
でもなんで急に…？

まさかオーヴェルニュの一人息子は天才という話を聞きつけて…んなわけないか。

「まあ、そういうわけだ。将来の息子になるかも知れない子の誕生日を祝いにきた、ということにしておいてくれ」

「は、はあ。わかりました」

「じゃあ行こうか。」

「はい、あなた」

母上と話していたオルレアン公夫人が、オルレアン公の呼びかけに答え、母上との話を切り上げてついて行く。そのオルレアン公夫人の腕に抱かれていたのが、今の話題にあがっていた俺の嫁候補らしい、シャルロット姫なのだろう。確か、まだ二歳くらいのはずだ。おとなしくオルレアン公夫人に抱かれている。見つめていると、俺と目があつた。さすが二歳でも、あるいは二歳故か、普通にかわいかった。

俺のハートを鷲掴みにして握りつぶすつもりかと思つたほどだ。それが候補とはいえ許嫁とは、俺はとんでもない勝ち組になったのではないかと思ってしまう。

まあ、俺なんかが選ばれるわけないだろうけども。

そうして、オルレアン公が家族総出で俺の誕生日パーティーに出席するというサプライズがあったが、それ以外は滞りなく進んだ。そして杖の入った箱を父上からもらい、パーティーも^{たけなわ}闌へとさしかかった頃、シャルロットちゃんと喋る機会ができた。

「こんにちは、僕はラウル・アルウェルニ・デュ・マ・オーヴェルニユ。ラウルって呼んでください」

「……………」

さすがに覚えられなかったか。まあ、いきなりこんな長い自己紹介されてもな。覚えられるわけないよな。

「ほら、シャルロット。あなたも自己紹介なさい」

オルレアン公夫人が優しく諭す。

すると、シャルロットちゃんがおずおずと自己紹介を始める。

「シャルロット・エレヌ・オルレアンです」

おずおずといった感じで喋る。そんな自己紹介に、俺は返事をする。

「シャルロット姫、よろしくお願ひします」

すると、シャルロット姫は恥ずかしかったのか母親のオルレアン公夫人に抱きついて顔を隠してしまう。

そんな姿もかわいいと思ってしまったラウルは、決して間違っ

いないだろう。

「ごめんなさいね、この子、恥ずかしがっちゃって」

「いえ、大丈夫です。お気になさらず」

「ありがとう。今度はうちにきてね。うんとお持て成しするわ」

「はい。ありがとうございます」

そうして、パーティーは終わっていった。

・ ・ ・ ・ ・

パーティーも無事終了し、貴族は帰っていった。

「ふあー、ちかれた。ぬあれ？ 部屋の中でだけか喋ってる？」

俺は、部屋の中で喋っている気配に耳を澄ます。

「それにしても驚いた。まさかオルレアン公が来られるとは」

「そうですね。私も驚いたわ。まさか家族で来るなんて」

「それほどまでして、王位に就きたいのか。王になっても、何も無いというのに」

「今回は、ジュールの勧誘？」

「もちろんそれもあつたろう。オーヴェルニュの秘薬は、役立つものも多いからな。だが、それだけでなく今日来た貴族達も0勧誘しにきたのだろう。裏ではいろいろ動いているらしいからな」

「ジュールは、オルレアン公に着くの？」

「いや、ワシはあくまでガリア貴族。王位争いには関与するつもりはない。オーヴェルニュはガリア国王に尽くすだけじゃ」

「そう、わかったわ。私はどこまでもジュールについて行くわね。」

「ああ、すまないな」

「……………なにか、聞いてはいけないような、難しい話を聞いてしまった気がしたんだが…………」。聞かなかったことにして、アミーシャのところで寝よう。

明日から魔法が使えるのかー楽しみだなー。

今日は夜の訓練もないからなー。

久しぶりに、本当に久しぶりに、ゆつくりとアミーシャのおっぱいを堪能しながら眠れるよ！ うへへへへ。まってねアミーシャ。かわいがってあげるよ。主に胸を。

そう考えながら、アミーシャの部屋へとスキップで行く。

明日からの地獄（アミーシャの訓練）のことは今は忘れて、存分に楽しもうと考えるラウルだった。

第09話 ラウル、誕生日。（後書き）

オルレアン公のキャラがわからん。
腹黒？

とりあえず、いろんな意味ですみません。

第10話 誕生日の次の日（前書き）

最近思いましたが、これ、原作時期には何時突入できるんだろうか…。

原作時期編と過去編を交互にやった方が良かったか…？

だが、今更騒いだところで後の祭り…。これで頑張っていこうと思います。

よろしくお願いします。

第10話 誕生日の次の日

パチリコ――

「……………」

今日も今日とてアミーシャより早く目が覚めた。なぜなら俺は欲望のためなら労力は惜しまない男だから。

当然、アミーシャは隣でかわいらしい寝息を立てて寝ている。超かわいい！

「すう、すう…」

寝ている。となれば、やることは一つだろう。

最近はそのなりに僕が上達したのか、伸されても朝までには起きれる僕だが、それは本当にここ最近のこと。つい数カ月前までの、約二年は、アミーシャが起きて僕がまだ寝ていることが多かった。というかほとんどだった。わかるか、美女が隣で寝てるのに何もできないこの息苦しさ！ というか生殺しレベル！ほんと、どんだけ血の涙を流しかねなかったか！だが、今日は起きている。それすなはち、行動に移すべきだろう。遍く期待に答えるべく。

ふにふに

「……………」

返事がない。リアクションもない。まだいける！

ふにふに

「……」

よし気持ちいい！　だがまだだ！　まだ足りない！
てか、意外と起きないもんなんだね。まあ、僕は嬉しいんだけど。
そうだ、今度はちょっと大胆にいつてみよう。

むにゅ

「あ、ん」

うおっと！　大胆過ぎたか！

慌ててラウルは寝たふりをする。

「……」

「……」

起きない。どうやら、アミーシャはまた寝に入っただけだ。

はあ、こんな変態みたいなことやめてこつ。ここまでやって何だが、僕は変態じゃないし。変態紳士だし。それにばれたらアミーシャに合法的に殺されそうだし。訓練とかで。

うん、さすがにそれはご勘弁いただきたい。マジで。

のそり。と体を起こす。

アミーシャを起こすのも悪いので、俺は一人で部屋の外に出て、顔を洗うに行く。

途中、着替えを取りに行き、再びアミーシャの部屋に戻る。

そして着替え、アミーシャを起こす。

ゆさゆさ

「アミーシャ、朝だよ。そろそろ起きなよ」

「う、ん？」

もう一息か

ゆさゆさ

「アミーシャ、ほら起きて」

ってこれじゃあ、どっちが従者かわからないな。

まあ、アミーシャはメイドじゃなくても十分やっていけると思うけどね。普通に強いし。

「あ、れ？ ラウルさま、おはようございます」

「おはよう、アミーシャ。じゃあ、僕は先に行ってるね。後からゆつくり来てくれたらいいから。じゃ」

そういい、俺は部屋を出て、両親が起きて待っているであろうところに行く。

アミーシャ、朝は弱いのかな。

ああ、待ってて着替えを眺めるのも良かったかも。

そういえば、俺、昨日五歳になったんだった。朝食を食べたら昨日から気になってるアミーシャ監修の杖剣と、杖を使って早速魔法を

使おう。俺の属性は何か？ やっぱ水？ いや、土かも知れないのか。でもそれだと他の属性の可能性も無きにしも非ずなわけ……。

・ ・ ・ ・ ・

「ごちそうさまでした」

朝食を食べ終え、満足気に勝手に口から言葉が出た。やっぱ前世からの慣習はなかなか消えないわ。ブリミルとか崇拜できないわ。俺、無神論者だったし。てか俺が神だったし。中二的な意味で。…ゴメン嘘…。わすれてくれ。あれは忘れたい過去だわ…。

そんなことを考えていると、父上が話しかけてきた。

「ラウル。」

「はい、なんでしょう？ 父上」

「うむ、今からワシの執務室に行かぬか？ 杖を二本、渡そうと思っ
つての」

ああそうか。あれは昨日父上が預かっていたくてたんだったな。

「はい、わかりました。」

「そうか、では行こうか」

そついい、父上は歩き出す。母上も父上の横に並んで肅々と歩いている。俺は、それに後ろから付いていく。

歩いているとき、父上が話しかけてきた。

「ラウル、知っているとは思うが、杖を渡したら早速杖との契約に移ってもらうぞ」

「……は？ 杖と……契約？」

「杖は二本あるからな、通常よりは時間がかかるだろう。なあに、安心しなさい。時間がかかるとは言っても、お前なら通常の1・5倍ほどじゃろうからな」

なにそれ…？ 俺、聞いてないんですけど？

「ははは、お前のことだ。案外一本分の時間で終わらすかもな。期待しているぞ」

……いや、だからなんだよ契約つて。何するんだよ…。

てか母上、あんたも父上の横ではほほなんて笑って合わせてないで、話の補完をしろよ！ 契約って何するんだよ！

「おお、着いたぞ。では入ろうか」

おうふ。杖と契約するにはどうするのかを聞きそびれて着いちまったぜい。

扉を開けて中に入っていく父上と母上。重い足取りながら、俺も一緒に中に入る。

すると、父上の執務机の上に、大きめの細長い箱と大きめの箱と比べると小さめの細長い箱が置いてあった。あれが杖なのだろう。高価そうな箱に入っている。

「ラウルよ。まずはこれが、昨日見せた普段用の杖だ」

そう言い、小さい細長いほうを俺に渡してくる。

それを俺はありがたく受け取る。

「はい、ありがとうございます父上、母上」

「うむ」

「ええ」

蓋を開けてみると、高そうな綺麗な棒つきれが入っていた。こんなんで魔法が使えるのか？と内心で一人ごちるが、そんな内心は顔におくびにも出さない。

「そして、これが昨日言っていた戦闘用の杖剣じゃ」

そう言っつて、そっちも渡してくる。

先ほど渡された杖を母上に持つてもらい、俺はそっちを受け取る。

「ありがとうございます、父上、母上」

「うむ、大切に使えよ」

「そっちは、私と外に出るときに持ちましょうね」

「はい！」

いい返事をしてから、大きく細長い箱の蓋を開けてみる。
するとそこには――

え…？

あれ？

嘘これ、マジで？

片刃の曲刀、ではなく、鞘が見える。そして、その中に納められているであろうそれは、日本人であればほとんどの人間が知っているであろう、日本の伝統工芸品。あの、刀があつた。

え？　なんで？　これ、ここの武器じゃなくね？　おかしいだろ。
時代的に。場所的に。いろいろと。

「うむ、驚くのも無理はないだろう。その様に薄く煌びやかな片刃の剣はワシも見たことがない。アミーシャが持っていた見本を職人に見せても、工法さえも想像つかん行っておったしな」

「綺麗でしょ？　アミーシャが言うには、ニホントーと言うらしいのよ」

母上、それを言うなら日本刀ですよ…。ってなんで日本刀が！？

これはますますアミーシャに聞かねばなるまいよ…。素性とか素性とか素性とか。

「アミーシャが言うには、それは平民が使っているような叩き斬るという概念の剣ではなく、切り裂くという概念を元に製作された剣であるらしい」

「へ、へえ」

「さらに言えば、その剣は東方から伝わってきたらしい」

ロバ・アル・カリイエ

「そ、それは凄いですね…」

「うむ、さすがアミーシャといったところだな」

へ？ 父上、アミーシャの素性とか知ってるの？ ちょっと詳しく教えてくれないですか？

「ち、父上。アミーシャの昔のこと、知っているんですか？」

「むー？ ワシ、何か口を滑らしたかの？ アミス？」

「さすが、と言ったところが駄目だったんじゃないかしら？」

「そうか、そこか。おっほん、ラウル。」

お？ なんか真面目な顔をし出した？ 聞いてみよう。真面目に。

「はい、なんですか父上」

「アミーシャのことだな。ワシ達は、詳しいことは知らん。」

ワシ達、と言うことは、他の人もしらないんだろ。まあ、“詳しくは”な。

「アミーシャのことは、アミーシャ本人に聞いてくれ」

「そうですか、わかりました」

「うむ。では早速杖二本との契約に移ってもらおう」

うんわかった…ってだから、契約ってどうやるんだ？

「では、ラウル。お前の部屋で契約してこい」

「ち、父上。契約って、どうやるんですか？」

「では、行つてきなさい」

「え、父上？ 契約の仕方を…」

「エドワード。」

「はい」

父上がエドワードさんの名前を呼ぶと、どこからかエドワードさんが現れた。

そして、エドワードさんが俺にレビテーションを掛け、俺を浮かせながらどこかに連れて行く。

「ちょ！ 父上！ 杖！ 契約！ どうやるんですか！ ねえ！
ねえってば！ おおーい！」

「頑張ってねラウル」

母上は笑顔で手を振って俺を見送っている。

教えるやー！ ああもういいや。エドワードさんに聞こう。

「ねえ、エドワードさん」

「……………」

あれ！？ 無視！？ なにそれエドワードさんが！？ ちよつ！
エドワードさんに無視されるとかマジでショックなんですけど！？
想定してなかっただけに普通に辛い……。

「あの…、エドワードさん…」

「……………」

もういいかもしれない…。

何とかなる…？ ならねーだろ。契約とか俺マジしらねーよ。ハッ
！？ そうだ！ 俺の二年で蓄えた蔵書室知識！ 知らなくても、
識っていることならある！ 思い出せ俺！

……………ないわ……………なして？ 蔵書室に
ある本でもかかれてないって、契約ってどんなのなんだよ…？

あ、ついた。

ガチャッ。

ポイツ。

ドサッ。

ガチャン。

・・・・・・・・。。

シクシク…。

な、泣いてないやい！　これは！　これは心の汗ですたい…。
グスン。

何か一言くらい掛けてくれないじゃない…。
てか契約ってマジでどうすんだ。

あれか？　ギアスもらう契約…？　いやでもC・C・もV・V・も
いないし…。

あ、斬魄刀みたいに会話！？　そうかも！　いや、そくに違いない
！　それでいこう！

むむむ。

むむむむむむむむ。

ふんぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ。

んぬあ あああああああああああああああ！！！！

「やっで、られるか――!!!!」

ザ・ソウルシャウト。

ド
ス
ド
ス
！

俺はいろいろと限界に達し、叫びながらベッドを、枕を殴る。

「もういいや。呪文は覚えてるしな。とりあえずそれを唱えてみよう。それで判断すればいいか」

杖の方で俺は空中に水を出す呪文を唱える。

ザッ
パ
ア
ン
！

「……………」

部屋が水浸しになった。もちろん俺も。マジカ…。てか発動するとは思わなかったわ…。

「……………これは…、契約成功ってことでいいのか…？　とりあえず魔法は発動したみたいだし…？」

でも俺、何もしてない気がするんですけど。会話とか。いいのか…？

「ま、まあいいや。次だ。次に行こう、うん」

こんどは杖剣の方に持ち換え、先ほどと同じ呪文を唱える。

ザッパァーン！

またもや水浸しになった。もちろん俺も。

「……………」

これは、本当に契約成功ってことで良いのか…？　いやでも、契約らしい契約ってしてないけど…。むむむとかやったただけじゃん！　こんなもんでいいんすかこれ！？　まだ数時間くらいしか経ってないよ！？

「まあ、とりあえず…、父上のとこ行くか」

そついい、俺は部屋の扉を開け、杖を二本持って執務室の方へ歩い

て行く。

コンコン。

俺は執務室の扉をノックし、しばらく待つ。

「いるぞ。入れ」

返事が聞こえたので、扉を開けて中に入る。

「失礼します、父上」

俺が執務室に入ると、父上と一緒に書類を片付けていた母上は驚いた顔をする。

「ラウル。どうしたのだ？ 部屋から出てはいけないとは言っていないが、やはりできる限りは部屋に籠もり、杖との契約に専念するべきでは無いのか？」

「いえ、父上…。魔法、発動したんですけど…」

「・・・、は？」

「呪文を唱えてみたら、魔法が発動したんですけど…」

「ほ、本当か…？ 普通なら契約するのに数ヶ月…。しかも二本…。ならば半年はかからずとも数ヶ月はかかると思っていたんだが…。契約、できたのか…？」

「はい」

「まあ、ラウル。それはすごいわね……」

母上は俺の言ったことをすぐに信じてくれたみたいだが、父上は口をあんぐりと開けて呆然としている。まあそうか。父上がわかりやすく説明してくれたが、普通なら数ヶ月かかるらしい。それを、俺はたぶん、数時間でできたってんだから。

「ハッ！ そうだラウル！ 魔法が発動したと言ったが、どの系統の魔法が発動したのだ！？」

突然立ち直り、大声で聞いてくる父上。びびった…。

とりあえず、発動したのは水の魔法だと父上に報告する。

「試して見たのが水の魔法ですが、無事に水ができました」

すると、驚いたような喜ぶような顔をする父上。その横で母上は少し頬をふくらませている。か、かわいいじゃないですか。いただきました！

いつまでも見ていたいほどかわいい母上のふくれっ面だが、とりあえず宿めところ。

「母上。まだ水の呪文しか唱えてないのでわかりませんよ。土の魔法もつかえるかも知れませんが」

するととりあえず機嫌を取り直したのか、何から教えましょーとか笑顔で呟きながら考え出した。普通に萌えた。そして父上が実際に魔法を見せてくれと言うので、とりあえず両親と外に出た。

「それじゃあいきますよ、父上」

「ああ」

「頑張つてねラウル」

母上の応援を背中に受けながら、短い方の杖で呪文を唱える。

ザッパアーン……

さっきと同じ水の魔法を唱える。そして無事に発動する。ポカーンと口を開け、目をあんぐりと開ける父上。

「まあ」とつぶやき、頬に手を当てる母上。

なんかまずいことしたかな…？ それとも威力が弱すぎたとか…？
でも、本にはあれくらい威力だって書いてあったし…。あ、でもあとこれくらいなら何回もいけるよ？ なんかそんな気がする。
魔力は精神力。日々―アミーシャとの訓練（地獄）で、精神まで鍛えられてたのかね？

「ラウル！ お前は天才だ！ さすがワシ達の息子！ イヤッホゥ！」

イヤッホゥ！ とか叫びながら俺に抱きつこうとする父。
だがしかし！ それを阻む母！ 俺と父の間に入り、父上は母上に抱きつく形になった。
母親の、恐ろしい何かの片鱗を見たきがした。

「うふふ」。これから私たちの魔法の全てを、この子に教えていきましょうね」

「むお！？ アミスか！ そうだな！ その通りだ！ だからラウルに抱きつかせてくれ！ ぬおおおイタイイタイ背骨が圧迫されてがふうううううう！」

おおう。なんとという痛そう…。故意か故意では無いのかはわからないが父上に強く抱きつく母上。そうだな。父上にはどこか遠いところで幸せになってもらおう。うん。

そして、俺は両親から離れ、別系統の魔法も使えるのか試しに行く。

結果としては、初めて唱えて発動したのが水。

数回唱えて発動したのが土。

発動できそうな気配があったのが風。

全く才能が無かったのが火、という感じだった。

母上は土もそれなりに使えそう喜んでくれていた。

父上も早速魔法を教えよう！ と張り切っていた。

エドワードさんは俺に風の系統の資質があまりないことに表情は全く崩れてないが、すこし残念に思っているようだった。

アミーシャはメイジではないのでシヨボーンとによるーんを併せた感じの表情で見てるだけだった。

そして、両親、エドワードさん、アミーシャの訓練シフト会議が、俺の意見も聞かずに始まっていた。

「アミーシャ。ラウルはメイジだ。だから魔法の訓練の方に重きを置くべきだ。」

「いえ、旦那様。私の教えておりますのは魔法を使わずに生きる術です。魔力が尽きた後も生き残れるようにしたものです。これは外せません。時間を減らすなんて以ての外です」

「それならば、風の魔法などはどうだろうか。風は気配に敏感になれる。極めるだけでどこに誰がいるのか察知できます」

「エドワードさん。ラウル様に気配の探知方法はすでに教えております。すでに必要ないかと」

「なら土ね。土でゴーレムとか、錬金とかできるし」

「アミス様。ラウル様には一对多の戦い方、生き残り方、そして簡単なお金の稼ぎ方も教えております。数で押されても負けることは無いですし、最低限生きるのに問題はないと思います」

「アミーシャ…。お前はラウルをどうしたいのだ…」

「そうね…。初めて訓練の趣旨を聞いたけど…。もうメイジじゃ無くても生きていけそうね…」

「………」

本当だよアミーシャ…。君の訓練は地獄すぎだわ…。でも、生き残ることに特化して鍛えてくれてたんだね。まあ、アミーシャは本気で殺気をたきつけてくるからねえ。だいぶん慣れちゃったよ…。

「ですが、私の訓練以外の時間に何をしようとラウル様の自由です。それで、ラウル様に交渉されては？」

「ふむ、それもそうか。そうだな、そうしよう」

「ええ、そうね」

「わかりました」

そして三人は俺の方を向いて言ってきた。

「……で、ラウルー（様）……」

うをー!? まさか俺に振るか!? てかアミーシャ! ちょっと離

れて訓練の時間減らしたらわかってんなだろうな目を止めてくださいマジで！ 怖いから！

てかどうするよ……。魔法もやりたいが、アミーシャの訓練は減らせない。

まあ、昼から夕食までの趣味の時間を魔法に当てたら良いんだけど、俺の趣味が！ 本が！ 読書が無くなるのはイタイ！ だがしかし！ 致し方無いのかこれはっ！ だがしかないいいい！ くうう！

「ひ、昼から夕食までの時間を……。魔法の練習に……。しましゅう……。……」

俺は、辛酸をなめる思いで決断をくだした。

明日から、俺は何を生き甲斐に生きれば良いんだ…。

第10話 誕生日の次の日（後書き）

一週間も掛かってすみません…。

夏バテだわ…。あーっーいー！

あついつて言ったら罰ゲーム！ っていう自分ルールやってたんだけど、三十秒もたなかったんですけど…。

第11話 母上@魔法訓練？（前書き）

夏休みですしね。

ていうか、書きたいように書いてたらすぐにできた！
それでも数時間はかかってますが…。

バトルメイン。しょぼいけど…。

てか、ラウルまだ五歳だったわ。忘れてた。

一際の気合いを込め、放つ攻撃。少しの隙に俺は後ろを振り返る。が、見た瞬間に俺は後ろを見なければ良かったと心底後悔した。

でもなあ、見なくなつて、あれ、出すんだろうなあ。母上は、俺を殺すつもりなのか…？

振り返り見たもの。それは、数十体のゴーレムと、それが放つであろつ先ほどとは比較にならない量の武器群だつた。

「いくわよラウルちゃん！ 頑張つて避けてね！ それつ、投擲^{スロウ}つ！」

避けてねつて！ 俺、まだ碌に魔法使えないんですけど！？ どうやって避けるつて！？

くそう！ 駄目で元々だ！

俺は背中に背負つていた杖剣を引き抜き、一番最初にやつた水の魔法を唱える。

これを、操れば…！

ヒュンツ！ シュンツ！ ビュンツ！ あらゆる武器の風を切る音が聞こえる。

怖い…。ミスれば死ぬかも知れない緊張感。頭ではどう思つていても、焦る気持ちは抑えられない。

怖い！ 早く！ 死ぬ！？ ——落ち着け！ どうせ一度落とした命だ！ それが今になつて死ぬかも知れないだけだ！ 落ち着け俺！

俺は焦る気を押さえ、集中を高めていく。

操れなくても、発生する場所くらいは・・・ッ！

ザッパァーン！

俺の少し前方、その少し上方で発生した水流は上から下に流れ落ちていく。

前方に発生した水を通り抜けなければならない武器群は、上から下に流れる水の重さに負けて次々に地面に逸れていく。

逸れながらも抜けてくる重い武器などもあるため、俺は呪文を唱えた後は必死に後ろに走る。

ガッ！

ドスンッ！

ドスドスン！

案の定、先ほどまで俺が呪文を唱えていた場所に水を抜けた武器群が刺さっていく。

ある程度の安全圏まで走り、追撃がないのを確認してから俺は止まり、後ろを向いて話しかける。

「はあっ、はあっ、母上、ちょっと止めてくださいよ！ 死にますよ！」

「むう」。あれまで避けられるなんて…。しかもあそこで昨日できたばかりの魔法を使うなんて、凄い胆力ね。さすが私たちの子。伊達にアミーシャの訓練を受けてないわね。」

「そうなんだけどねえ。私たちの息子がどのくらい遅しく育ったのか確かめておきたくて」

「そ、そんなに殺そうとしないでくださいよ！」

「刃引きはしてあるわよ？ 当たったら痛いくらいだつて。」

「いやいやいや！ 何言ってるんですか！ 重さで穴あきかねないですよあれは！」

「むう。そんなに言うならやってみればいいじゃない」

「へ．．？ やるって何を．．．」

「一番から四番は残つて私の護衛。五番から三十番まではラウルちゃんを倒すつもりで自立行動！ いけえっ！」

「ちょまつ！
もう無理ですって！
ごめんなさい母上止めてええ
えええ！！」

謝っても母上の五番から三十番までのゴーレムは突撃してくる。迫ってくる土製の二十六体のゴーレム。

数は力とよく言ったものだなあ。

たとえ母上のゴーレムといえども一体や二体であればアミーシャに鍛えられた俺は負ける気はしないが、いかんせんあの数だ。勝てる

気が全くしない。しかもゴーレムだけあり、集団行動というか足並みをそろえることが当然としている。というか、個体差が無いから走る速度も全部一緒。俺から一体だけが突出するなんてことはあり得ない。と言うことは、走って逃げているうちに突出してきた個体から潰していくというのはできそうにない。

どうしたものかな。負ける気はしないが、勝てる気もしない。困ったものだ。逃げながら対策を考えるか。

ヒュンヒュン！

走って逃げていると後ろから矢が飛んできた。俺はそれを難なく避ける。アミーシャの攻撃に比べたらホント、優しいもんだね。

ビュン！

うおっと！ 回り込まれてたのか。俺は前方から現れたゴーレムの剣を避け、剣で攻撃してきたゴーレムを斬ろうとすると、さらにその後ろから剣を持ったゴーレムが斬りかかってきた。俺はそれを避け、ゴーレムの破壊は無理と判断して逃げる。

母上のゴーレムは凄いなあ。大国であるガリアは魔法研究が盛んというか、凄いつて聞くけど母上も何か研究していたりするのだろうか。この自立行動は凄い。まるで自分で判断しているかのように動く。人間を相手にしているみたいだ。

ビュウン！

「ほっ、と」

木の陰から攻撃してきたゴーレムの攻撃を避ける。

うーん、気配が無いなあ。攻撃速度がアミーシャと比べて遅いから何とかなってるけど、これでももう少し早かったら確実にやられてるな。

暫く攻撃を避けたり反撃をしようとしたりと逃げ回っていると、ゴーレムの戦法についていろいろわかってきた。

ゴーレムは、必ず三体以上で行動している。

攻撃してくるヤツ、そのサポート、さらにそのサポートという感じだ。

はつきり言って、今の俺にこいつらを倒すことはできないだろう。

まだ、そこまでの技量が無いと自分で判断できる。判断できるが故に、己の無力さを痛感する。

たった二十六体の波状攻撃ごときで勝てないと判断できてしまう己の技量。まだ足りない……。イーヴァルディの勇者のように、数万を相手取るにはほど遠い。

アミーシャにだいぶ鍛えられてると思ったんだけどなあ。

まだまだかあ。こりゃあ、文句なんて言ってられないなあ。

あれ、待てよ？ 魔法を使ってる母上は、ただのメイジだろ？ ゴーレム四体を守られているとは言え、母上を制圧すればゴーレムは終わりだろう。勝てるんじゃないかこれ？

このままでは負けはないとはいえ、勝ちもない。なら、やってみてもいいんじゃないか？

俺は周りの敵認定のゴーレムや母上の死角になる木に隠れ、上る。
そして呪文を唱える。先ほどの水の魔法を。

ゴーレムがこちらにくる。木の後ろにいているか、そちらに注意が向いているようだ。

ひとまずは作戦成功。

そして、これから本当の勝負だ。

俺は魔力を込めに込め、先ほどの水の魔法を唱える。

ドザッパァーン！

「なっ！？ またあ！？」

近くにいたゴーレムは水の勢いに負け、こける。中には流されているものもいる。

そして、遠くにいるゴーレムでも足止めくらいにはなるだろう。

俺は木の上を飛び移りながら移動する。

そして母上の近くに降り様に一体のゴーレムを切り伏せる。母上は気づいてなかったようで驚いている。

護衛の、残りのゴーレムはすかさず母上を守るものと反撃、そのサポートと行動をとる。

一連の行動を見ていると、死の恐怖や仲間をやられた戸惑いもない分、並みの兵士よりも優れているといえるかも知れない。それに術者の魔力切れにならない限り体力切れもない。

よくよく考えるとんでもないな……。

だが、母上を制圧したら俺の勝ちだ！ 向こうのゴーレムがこっちに来るまでに母上を制圧する！

母上を守るヤツがいる分、実質二体。いける！

一体が反撃に上から下に剣を振り下ろす。

それを俺は半身になって避け、ゴーレムの足を挫いて転ばせ剣で刺す。

一連の行動は一瞬だ。サポートに入る暇さえないだろう。

「そんなっ！　あなたも行って！」

母上が護衛にしていたゴーレムをも俺に差し向ける。

母上、それは下策ですよ。

先ほど倒したゴーレムの持っていた剣を奪い、護衛のゴーレムに投げる。避ければ母上に当たる。そういうコースだ。避けるわけにも行かないだろう。刃引きしてあるって言うてたし、もし当たっても大丈夫だろう。…たぶん。

護衛のゴーレムがそれを防いでいる間に、サポートのゴーレムを潰しにかかる。左下から逆袈裟に斬ると見せかけ、止める。相手は逆袈裟を防ぐつもりでいたようで、剣を合わせて弾こうと下に片手で剣を持ってきた。剣を持っている方の手を捻って剣を落とさせ、さらにそのまま背負い投げをする。アミーシャに教えてもらった技だ。

何も殺さなくてもいい。無力化すればいいんだ。

そして捻って落とさせた剣を拾い、残ったゴーレムに突っ込む。周囲のゴーレムもだいたい戻ってきているが、一足間に合わないだろう。

俺はゴーレムに向かって走りながらゴーレムの頭めがけて拾った剣を回転させるように投げる。

ゴーレムそれを剣を上に入れて防ぐが、下がから空きだ。

駆け寄った俺はゴーレムの胴を一線し、切り落とす。

そして母上に駆け寄って剣を突きつけ、決め台詞を吐く。

「チェックメイトです。母上」

一連の攻防を近くで見ていた母上は、ただただ驚いている。そして俺の台詞を聞いて我に返ったのか、返事をする。

「そうねえ。まさか、ここまでとは思わなかったわぁ・・・」

「ありがとうございます、母上」

母上の言葉に、俺は極上の笑顔を向けながら返事をする。

「ふう。ちょっと休憩にしましょう」

「わかりました」

木陰に座り、周囲を見回す。

森の近くの広場まで来ていたんだが、フィールドが完全に森に移行している。

俺が二十六体を撒くために逃げ回ったからだろう。

ふう、ちかれた…。

「それにしてもラウルちゃん凄いわねえ。ママが負けるなんて、エドワードさん以来よお」

エドワードさん、どんだけなんだよ…。この母上に勝つて…。絶対にエドワードさんだけは敵に回さないでおこう…。

「それにしてもママ油断しちゃってたわあ」

「油断？」

俺は疑問に思い、質問する。

「ええ、まさかあの陣を抜けてくるなんてねえ。ママ、治水工事とか以外にも軍を率いて亜人の討伐のかもしれないのよ？ それをあんな簡単に抜けるなんて…。自信なくすわあ……。」

簡単じゃネエよ。どんだけ死にそうになったか…。

「それに、護衛のゴーレムを出した後にすぐにまたゴーレムを作っていたれば…。つい、ラウルちゃんの闘い方に見とれちゃったわ」

まだ出せたのか…。たしかに、出されてただまだ勝負はわからなかったな…。完全に数で押されたら勝ち目なんて絶対に無かったし。

「さてラウルちゃん。あなたには、私の使ってたこの魔法を教えるわねえ」

へ？ ゴーレムを作る魔法？ でもそのくらいなら、もう本で呪文だけ知ってるんですけど。

「母上、普通のゴーレムを作る魔法とは違うんですか？」

「まあ、違わなくは無いけど、あれは私が長年掛けて研究してきた魔法でねえ。普通のゴーレムよりも使い勝手は良いのよ。指示も個体ごとに多彩に出せるし」

ああ、確かに剣とか槍とか弓とか使ってましたね。護衛と攻撃側分けたら、奇襲隊を作ったりか。
なるほど。それは便利だ。覚えたら、一対多といった状況でも選択の幅が広げられるな。

「是非教えてください母上！」

俺は土下座して母上に教えを請う。

親子といえどこれはものを教えてもらう礼儀だろう。

「ええ、アミーシャくらい厳しくするから、きりきり着いてらっしゃいねえ」

うへえ……アミーシャ級……？ 早くも心が折れそうです……。

そして、その日は母上にその魔法の概念や呪文などを教わり、夕食を食べ、アミーシャと訓練してまた伸されて終わった。

本を読みたい……。読書がしたい……。本成分が足りないひい……。。

てか俺、一応まだ五歳なんだぜ……？

第11話 母上@魔法訓練？（後書き）

いつになったら原作キャラ出せるのか。。

シャルロットくらいは…。

ジヨゼットとかイザベラとか忘れてた…。

どう絡ませよう？

あるいは無視して接点なしで行くか…。

意見、アイデア、感想・誤字脱字報告などございましたらよろしく
お願いします。

第12話 父上@魔法訓練からの一日（前書き）

遅れてすみません。

家族に不幸があつて実家に帰つてたりなんだりで遅れました…。

なかなか原作行けないですね…。

重要項目以外は一気に飛ばそうか…。

それとも、幼少期編をこのまま続けるべき？

ご意見があればよろしく願います。

第12話 父上@魔法訓練からの一日

「ヒビ…、父上、こうですか？」

「フビ…、ラウルよ、お前はスジがいいな…」

「ヒビヒビ…、ありがとうございます」

「フビヒビ…、さすがワシの息子だ」

「ヒビヒビヒビ…」

「フビヒビヒビ…」

俺と父上は地下の隠し部屋ことオーヴェルニユの研究室で、決して怪しくない…そう、決して怪しくない薬の調合を

していた。

「ヒビ…ハッ！？ お、俺は一体今まで何を…！」

我を忘れていた時点で十分怪しいと思う。

「フビヒ、ラウルよ、どうした？ さあ、さらなる調合の高みへ征こうではないか」

「いや、父上…。ちょっと？ どうしたんですか？」

「フヒヒヒ、ラウル。さあ、これを持って。そしてさらにそれにこれを混ぜて…」

「なんと！ そんな調合も……。……ヒヒヒ、それは興味深い…」

「フヒヒヒヒヒ…」

「ヒヒヒヒヒヒ…」

一度は戻り掛けた我にラウルであったが、完全に深淵に潜っている父上呼び戻され、さらに深淵へ潜っていく。

さすがは親子といったところだろうか。この二人は、まごう事なき親子だろう。

というか、こんなに気持ち悪いのが親子以外で何人もいてはたまらないだろう。

「フヒヒヒ…」

「ヒヒヒ……」

今、俺は父上に薬の調合を教えてもらっていた。

父上はトライアングルクラスであり、得意なのは薬の調合。

水の魔法は、回復くらいしかできないらしい。と言うか水って回復と調合以外あんのか？ いかんせん地味だからわ

からん。

そして父上には得意な薬の調合を教えてもらっていた。回復の魔法はまた別の機会に教えてくれるようだ。

オーヴェルニュ当主は代々秘薬製造のエキスパートであるらしい。
だから、俺も習っている訳だ。そして俺にも適正

があるのか薬を調合しているときにたびたび記憶をなくす。

ん？ そういえば、父上が回復や金稼ぎの後衛担当。

母上が数で圧倒する土のトライアングルで前衛担当。

エドワードさんは風のスクウェアで、おそらく前衛担当だろう。

後方での憂いを無くす父上、前衛でもはや軍隊という規模のゴール
ムを作り出す母上、風のスクウェアのエドワード

さんは遊撃か？

うむ。バランスがとれているなあ。エドワードさんは最強と名高い
風系統。しかもスクウェアだ。これで強くないわ

けがない。うん。ホントニエドワードサンニハサカラワナイデオコ
ウ。

「ヒヒヒ……、それよりもこれとこれを・・・、ヒヒヒ……」

いろいろ考えていたラウルであるが、秘薬製造というオーヴェルニ
ユの血の宿業にだんだんと潜っていた。

「旦那様、ラウル様。御夕食の時間でございます」

「フヒ…。……………なんだ、もうそんな時間か…。よし。ラウル、行くぞ」

「ヒヒヒ…。これにアレを混ぜて、さらに……………」

「おい、ラウル？」

「旦那様、ラウル様はまだ戻ってこれていないようです。私が戻しますので、さきに行っておいてください。」

「ヒヒヒ…。アレにこれを混ぜてああすればどうなるんだろうか…ヒヒヒ……………」

「ぬう…キム…。ゴホン。ま、任せたぞ、エドワード」

「はい。お任せ下さい。」

父上とエドワードさんは短い会話を交わし、父上は階段を登っていった。

それから俺は、エドワードさんに戻された、らしい。

どうやって戻されたのか覚えていないし、思い出したくないしと身体が言っている。

どういう訳か、身体が思い出すのを拒絶した。

この拒否は何かと考えることさえ精神が拒否する。

何があったのだろうか…。

そして、エドワードさんに逆らわないでおこうというのが、俺の深いところに刻み込まれている…。
本当に、何があったのだろうか…。

そして夕食を食べる。

いつも通り、母上は父上にべったり、アミーシャがつきつきりで俺に給仕してくれる。

「ねえくん、ジュールう」

「ハハハ、アミス、ハハハ…」

母上は父上に甘えまくる。父上は満更でもないようだ。たぶん。

そしてアミーシャは夜の訓練に支障をきたさないためだろう俺にしっかりと給仕をしてくれる。

俺は給仕してくれる食べ物もしっかりと食べる。

「さあラウル様、次はこれを」

「あ、うん。わかったから、そんなに口に擦じりこむようにしないで…」

「さあ、さあさあ！」

「もごもがッ！」

死ぬわっ！！　ちよ、やめ…

そして端っこですべてのことにわれ関せずの姿勢で直立不動の執事・

エドワードさん。

うん。無駄のない食事風景だ。

どういう意味で無駄が無いのかはわからないが。

そして夕食後。

いつもの如くアミーシャとの一訓練（地獄）の始まりだ。

足がガクガクとしているがこれはアレだ。武者震いというヤツだ。そうに違いない…、と自分に言い聞かせる。そう

しないと全力で逃げてしまいそうだから。しかも逃げてつかまったら普通に訓練する数倍キツイ。そう、お花畑が見

えてしまうくらいに。

いや、割と頻繁に見てるんだけど…。

「さあラウル様。訓練を始めましょう」

ここは、訓練や魔法の特訓するには定番になった森の近くの広場だ。

「は、はい。お願いします。アミーシャ先生」

「…っ、では、来てください」

若干顔を赤らめながら言うアミーシャ。ン萌えたあああああ！！

萌えもえ…、燃えて来たぜえええええええええ！！！！

アミーシャに勝ち、屈服させてやるああ！　そして！　そしてええ

えええ!!

お・し・た・お・す!!

え? いやだつてその方がなんか御褒美っぽくね? やる気でない
すか? てか、女性より弱い男つて俺が嫌だし。

せめて守りたい存在よりは強くありたい。まあ、ややこしいのはア
ミーシャに勝つてから考えるってことで……とり

あえず。

「逝きます!」

「はい!」

血走った目をしたラウルが、目とは裏腹にかなり鋭い動きでアミ
ーシャに接近する。

俺は、アミーシャとの訓練は基本的に魔法は使わないようにしてい
る。習つてまだ日が浅いので、そこまで自信が持

てない訳だ。

アミーシャに魔法を使つても良いと言われてはいる。が、俺はそこ
までして良いものか悩んでいる。俺は男で、アミ

ーシャは女だ。

圧倒的に実力に差があるのだとしても、やはり形振りは構いたい。
無いプライドを精一杯捻り絞った、俺の意志だ。いつまで保つか疑
問だが…。

考えているうちにアミーシャの近くに近づく。
アミーシャの足下に潜り込み、そこから攻撃しようとするが、足下
なだけあってやはりというか当然というか、蹴ら

れた。

避けられるように注意していたつもりなのだが、アミーシャの蹴り
は今の俺の反応を超える速度だった。

そしてそれから早かった。

容赦なくカウンターという形で顔面に直撃するアミーシャの蹴り。
俺は対処できずにモロにダメージを受け、吹き飛ぶ。

が、いつまでもこの程度で終わる俺ではない。

そう、いつもアミーシャにいじめられ…いや　じごく…いや、訓練
してもらっているおかげで俺の耐久制度がめきめ

きと上がり、あの一撃を喰らってもまだ耐えられるようになった。

どんどんチート化が進む俺である。

そんなわけで、一回転し、手から地面を掴むようにしてズザザザザ
ザーと四つん這いになりながら後方に吹き飛ばさ

れ、落下の衝撃だけでも殺す形で着地した俺。

いつもならこれで

若干、これを耐えられた自分に戦慄を覚えた。俺、パネエー！
だが、自分に酔う暇無くアミーシャが俺に近づいて来る。

「フッ！　ハッ！」

下段蹴りからその勢いを利用した裏拳。

「すわっ！」

俺はそれをバツ！　っと上に飛び上がって避ける。

「ッセイ！」

アミーシャはそれを予想していたかの如く、さらにアミーシャが両足を合わせて上にいる俺を蹴ってくる。

それを手を交差させて受け、衝撃を後方に受け流し俺はさらに上に吹き飛ばされる。

「ぬわっ！」

これはいつかの再現！？　ちょっと待てよ！
その通りなら、この後は…

アミーシャが腰を低く、足を曲げ、いつでも飛び上がれる体勢でいた。

そして飛び、急激に俺に近づいてくる。そして俺に近づくと拳を突き出してくる。

「くっ！」

俺の把握できない速度で繰り出される拳。

俺はカンを頼りに顔を横にずらす。

すると、避ける前まで俺の顔が合った場所に拳が通り過ぎていた。
通り過ぎた瞬間、ゴオオッ！　という音がしたのは恐怖による幻聴

だろうか。

あつぶねー…。

てかアレ当たってあつてたら頭吹き飛んでんじゃね…？

アミーシャがほんの一瞬だが驚いた顔をする。

だが、次の瞬間にはいつもの無表情に戻り、左の拳を突き出していった。

ドスッ！つという音がした。

音がしたと思ったら、俺の腹にいつの間にかその拳が突き刺さっていた。

痛みは来ない。

だが、動けない。いや、身体が動かない。

そう思っていると、ズンッ！ という俺の身体にアミーシャの拳がぶつかる衝撃が来た。

その衝撃が来て、俺は果てしない痛みに襲われた。

俺の意志とは関係なく身体から、肺から酸素が逃げていく。息がしたいのに、息が出て行く。

身体を動かそうと思っても、俺の意志とは関係なく硬直し動かない。意識が遠くなる。だが、離れていく意識を意思をもって無理やり引き留めようとする。

そして、殴られた衝撃で身体が浮き上がっていく。

だが、浮き上がり俺がアミーシャから離れていくのを許さないかのように、先ほど俺の横を通過してそのままだった

右手が、俺の服を掴む。そして下の地面に向かって思いつきりぶん投げられる。

落ちていく自分。何か対策を取ろうとするが、硬直がまだ治らない。俺は何の抵抗もできずに俺は地面に激突する。

ゴガアシャツ！

「ガ、アツ！！」

殴られ、すでに空気を強制排出されていた肺を、さらに地面に叩きつけられ絞られる。

そして全身を走る激痛。

思わず必死に引き留めていた意識を吹き飛ばされそうになる。

そして視界の中に、上から落ちてくるアミーシャが見えた。

それを見たたん、身体が動かないだの肺に空気が無いだの恥も外聞も関係なく、俺は転がるようにして移動する。

アミーシャは俺が落ちた場所に着地し、そのわずか数メートル横で無様に這いつくばる俺を見下ろしている。そして、

静かに口を開く。

「驚きました。まだ気絶してないなんて。」

アミーシャが喋りかけてきているようだが、返事をしようにも今はやっと戻りかけてきた呼吸を必死に行っている。

返事をする余裕なんてまるで無い俺。

というか意識が無い想定で居たのにアレを当てるつもりだったのか・
・。

「まあ、まだ気絶してないのは凄いですが、それだけですな」

俺は必死に呼吸をする。

目だけはアミーシャから離さないようにし、徐々に反撃する力を回復させていく。

「では、次で今日は終了ですか。いつもよりよく保ったことを喜ぶべきなのでしょうか。それとも、いつもより余

計な苦しみを与えてしまったことを後悔するべきですか？」

わずかながら四肢に力が入るようになった。

呼吸は荒いままで辛いままだが、俺は反撃の隙を伺う。

アミーシャが静かな足取りで俺に近づいてくる。

「それでは、お休みなさい。ラウル様」

足を上げ、俺の頭を踏もうと高く上げる。

アミーシャがいつも履いているブーツが見え、さらにその先が見えそうになる。

「ゼエッ！ アミーシャ、ゼエッ！ ……パンツ、見えるよ…ッ！」

「へえっ！？」

慌ててスカートを押さえるアミーシャ。

その隙を俺が見逃すはずもなく、俺はアミーシャの足を掴んで引っぱり、転ばそうとするが。

俺が掴んだのは確かに、アミーシャの足だった。

正確には、何でメイドなのにこんな履いているんだという、オーヴェルニユのメイドでもアミーシャだけが履いて

いるブーツ。

そして引き寄せたのは、アミーシャのブーツのみ。

そして俺の頭上に、アミーシャがいる。足を取り損ねたようだ。

ああ、もうこれは無理か・・・。

「惜しかったですね…。 ツセイ！」

ゴガゴツ！

頭が地面に打ち付けられグワングワンする。頭の中が揺さぶられシエイクされるようで、死ぬほど痛い。猛烈に痛い

。

俺は、ブーツを脱いだアミーシャの足に顔面を蹴られ、意識を手放していく。

これは役得なのか？ それとも、せめてブーツで蹴られなかったことを喜ぶべき？

こんなことを考えられる余裕があることに若干の驚きを抱きつつ、今度こと本当に意識が離れていく。

「ふうつ。さて、旦那様に薬を貰って、飲ませてから寝ましょう。お休みなさい、ラウル様」

おやすみ、アミーシャ――

そう言いたかったのだが、口からその言葉が出ることなく完全に意識は俺から放れていった。

こうして、ラウル的一天が過ぎていく。

アミーシャのブーツは奪っても意味が無い、という事実を記憶に刻みながら。

本日の負傷。

顔面を蹴られたことによる打撲。

胴体を殴られたことによる内臓、骨の損傷。

下方に投げられ打ち付けられたことによる全身打撲。

さらに最後に頭を踏みつけられたのか蹴られたのかの負傷。

これは、五歳が受ける負傷ではない気がします本当に……。

第13話 6歳。初外出。初友達。（前書き）

遅れてすみません…。

実家に帰ったりしてました…。

最近、マジで暑いですね。みなさん、熱中症とかにならないように気をつけてください。最近は室内でも掛かるらしいですから。

第13話 6歳。初外出。初友達。

五歳の誕生日を終え、そして新たな地獄を迎えてから、あつという間に一年が経った。

無論、死の淵を彷徨いに彷徨ったというか、毎日彷徨っている事は言うまでもない。

川の畔にいる死神さんとも知り合いになるというか、毎日笑顔で話し合う中になりましたよ。

毎日来るのに渡らないってなんだよー。あははー、父上の薬が優秀なんですよー。とか。

なんで毎日ここにきてんだよー。俺のメイドがヤンチャでー。とか。結構話が合っちゃったりしちゃいました。

んで、ロープをとって顔を見せてもらったら超 かわいかった女の子であるのは言うまでもないだら

う。

もちろん全身が骸骨の死に神もいるが、最近自分たちのような存在もいるらしい。

地獄も天界も、最近はイメージが大事なんだとか。じゃないと他のとこに取られちゃうらしい。

他のとこで取られるってなんやねん、と思ったが、深く踏み込まないようにした。

まあ、いろんな事があつたが、そんなことはどうでも良い些細なことです。

そつ、重要なのは昨日の会話だ。

その日もいつも通り父上と秘薬の調合をし、だんだんと自分でオーヴェルニユの深淵から出てくれる

ようになったりして、エドワードさんに迷惑を掛けずに出てくれるようになってからいつも通りみん

なで夕食を食べていたが、そんなときに急に父上が話しかけてきた。

「そうだラウル。明日、オルレアン公の屋敷に行こうか」

何を急に言い出すんだこのオッサン。

「え？ 何を言うんですか父上？ 明日も訓練がありますよ……？」

「うむ、明日は休みにして行こうか」

「え！？ 本当にいいのですか！？」

万感の期待を込めてアミーシャを見る。

アミーシャは眉間にしわを寄せて父上を睨んでいた。

……………見なかったことにした。

それに気づくことなく父上の話は続く。危機管理がなってませんよ父上…。

「オルレアン公に子供がいるのは知っているだろう。その子が三歳を迎えてな。そして一度会った事があるということで、お前に遊び

相手役という白羽の矢が立った訳だ」

あー、いたなそういえば。自己紹介くらいしかしてないけれども。

「それに、お前ももう六歳だ。そろそろ、屋敷の外も見ておかねばなるまい」

そこで俺は気づいた…。

そう、俺はもう六歳になった。なのに俺はこの屋敷と森の近くの広場以外に出たことがない事に…。

なんというニート…。確かに昔はいかに働かずに生きるかと考えてたけれども…。

うわぁ……。ダメじゃないか俺…。

食事を取りながら落ち込む俺。

そつえば俺が今までどこにも出かけたことがなかった事に、父上以外が気づいてなかったの如く驚

いている。

え、なに？

そんなに俺って関心持たれてなかつた…？

悲しくなってきた。

目から心の涎が出てくるくらいに。

アミーシャが慌てて言う。

「そそそそうですね！ 明日くらいは休みにして、外に遊びにいか

れてはいかがですかラウル様！？

「

「そそそそうよ！ ジュールも行くみたいだし、みんなで行くのもいいかもしれないわ！」

「そ、そうですね。たまには出掛けられるのもいいかもしれませんな」

アミーシャに便乗し、母上、エドワードさんも言ってきた。
てかエドワードさんの動揺してるところとか珍しいな。

「よ、よしラウル。では明日はワシとアミスとお前とアミーシャで行こうではないか。エドワード、

屋敷の警備は任せたぞ」

「ハッ、もちろんでございます」

その日の夜の訓練は、なぜかちょっぴりアミーシャが優しかった気がした。

そして次の日。

朝、さすがに一日なにもしないというのは気が引けるので、アミーシャを起こして軽く訓練して、そ

れから朝食を食べてからエドワードさんに見送られながら馬車に乗って出た。

父上と母上が俺の前の席に座り、俺の隣にアミーシャという具合だ。他愛ない話をしながら進む。

前に座る父上と薬の調合とその可能性について話してたら母上とアミーシャに引かれた。

そんなに気持ち悪かったか？

それ以外にもアミーシャと効率的に人体に影響を与える攻撃方法について話し合っていると母上が興

味津々で聞いていた。

父上はなぜか冷や汗をかいていた。

母上とも効率的にゴーレムを生み出すコツや、操るにはどうすれば一番早い動作で動くのかとか話し

合っていた。

さらに途中でピクニック的な感じで草原で昼食をつたりとしていた。その昼食の席でこんなことが起こった。

用意された昼食を食べ終わってから少しのんびりしていると、アミ
ーシャが話しかけてきた。

「きれいですね」

「そうだねー。屋敷じゃこんなに広い草原見たことなかったよ」

「そうですねー。でも、こんなに広ければ訓練ができますねー。」

「ない。それはない」

俺は感情をなくしたかのように無表情で、さらに単色の目をして機械的に答えた。

「ふふつ、冗談ですよ。今日はもう何もありません。休みは必要です。」

そういえば、なんだかんだで俺、訓練とか休んだことないや。重傷とか重態でも父上印の秘薬で瞬間回復だし…。

あ、やべ、なんか気分が…。ダークなテンションになっちまったぜ…。

景色をみて紛らわそう。

すると、母上が父上を引きずってどこかに連れて行くつもりでいた。

「ま、待てアミーシャ！ そろそろ出発しようではないか！ 早くオルレアン公の屋敷に行かねば！」

「ちょっとくらい大丈夫よ！ さあ、こんな広い草原で誰も私たち

を見ていないわ！ この大自然で私たちは獣のように裸になって交わりあいましょう！」

そんな会話をしてどこかに父上を引きずろうとする母上。

俺は思わず杖を抜き放ち、魔法を唱えていた。

「頭を冷やせえー！ー！」

ざっぱあゝん！

「きゃー！ー！」

「ぬおぶはあっ！」

濡れ鼠にしてやった。

そんなこんなでいろいろ話しているとオルレアン公の屋敷に着いたようだ。

うーん、屋敷はでかいけど、こんなにでかくてどうするんだろうか？ と思った。

それから周囲の景色。めっちゃめっちゃきれいだった。見渡す限りの草原、森、遠くにそびえる山々、湖

などなど。

筆舌に尽くしがたいとは正にこのことなのだと感心してしまった。

そんな俺を楽しそうにみる両親とアミーシャ。

すると屋敷から執事が出てきた。

ペルスランさんというらしい。いかにも執事というような格好だ。だが、家のエドワードさんには負けるだろう。なんたってあの人は

完璧執事だから！

「いらつしゃいませ。オーヴェルニュ家御一行様」

「うむ。オルレアン公のところに案内してもらえるかな？」

「承知いたしました」

そう言つて歩いていくペルスランさん。んー、そんなに強くはなさそうだな。

俺でもすぐに無力化できそうだ。
つと何を考えてるんだ俺は…。別に戦いに来たわけじゃないんだからそんな分析はいらんだろう。

俺は不穏な考えを振り払いながら両親たちに着いていく。
ちなみにアミーシャは馬車の護衛と言つて残つたが、もしものためにばれない様に周囲の索敵に出た。

「旦那様、オーヴェルニュ家の方々がお見えでございます」

「おお！ そうか！ 通してくれ！」

そしてすぐに通してもらえる俺たち。

まあ、場所が執務室ではなくて一階の庭につながるカフェテラスのようなところで家族サービスしてそこに隠すものも何もないだろうからな。

「本日はお招きいただきありがとうございます。オルレアン公」

父上が頭を下げる。

それに続いて母上も下げたので俺も頭を下げておく。

「いやあなに！ 気にすること話さ！ 君とはいろいろと話がしたかったし、シャルロットの同年代

の遊び相手も欲しかったからね。ちょうど良かったのさ」

「は。ありがとうございます」

「さあ、俺たちは俺達で話そう。ラウル君、シャルロットと遊んであげてくれるかい？」

「はい。わかりました」

「妻も一緒に居るだろうから、オーヴェルニュ伯夫人も一緒に行つてあげてくれるかな」

「わかりましたわ」

「じゃあ、僕たちは僕の執務室で話そう」

「……わかりました。ラウル、失礼のないようにな」

「わかってます父上」

父上と挨拶を交わし、庭へ向かう。

そこでは、人妻とは思えないほど美人の女性と、小さい青髪の女の子がいた。

おそらくあれがオルレアン公夫人と娘のシャルロットちゃんだろう。オルレアン公夫人は去年見た姿と全然変わっていない。シャルロットちゃんは去年見たよりも若干成長してるかな？ といった具合だ。

図としては、小さい青髪の女の子が蝶か何かを追いかけてきやつきやと走り回っていて、それを美しい女性が見守っているといった感じ。

うん、絵になるなあ。すごい良い。見てるだけで和むわ。

というか、シャルロットちゃんは去年とだいぶ変わっているように思う。主に性格面が。

去年は母に隠れて人見知り感が否めない感じだったが、今回は元気に走り回っている。

まだこつちに気づいてないだけかも知れないけど。

人が多いところが苦手なだけかも知れないけど。

……後者なら問題だな……。王族として。

さて、どうやって声を掛けていこうか。

ここは母上からオルレアン公夫人に話しかけてもらって、それに便乗して俺も話しかけるかな。

それが自然に感じる。というか問題起こしたくない。

まあいい。さあ母上！話しかけてあげてください！

期待して後ろを振り向くが、そこには母上はいなかった。

俺は急いで母上を捜す。

すると、すでにオルレアン公夫人と話していた。

そりゃないぜおつかさん…。

何か、次の策を考えねばならなくなったラウル。

必死に考え、策をひねり出そうとする。

あ！そうだ！さつき、何かを追いかけてたよな？それを捕ま

えてあげたら会話の糸口にならな

いかな？

思い立ったが吉日。

さっそくシャルロットちゃんがどこにいるのか探す。

するとすぐ近くでシャルロットちゃんがまだ何かを追いかけていた。

よしっ、いける！

俺は駆けだした。姿勢を低く、上半身を前のめりに。気配を消し、蛇行して近づく。そして、シャル

ロットちゃんが追いかけていた“何か”を俺はあっという間に捕らえ、潰さないように握り込む。

そしてそれをシャルロットちゃんに差し出す。

「はい、これ。あげるよ」

できるだけ優しい声で、努めて笑顔になるように努力し、なるべく威嚇しないように気をつけながら

握り拳をシャルロットちゃんの前に差し出す。

「ふえ…、うう。…………ふええ……ん！」

が、シャルロットちゃんは急に涙目になったかと思うと声を上げて泣き出し、今度はオルレアン公夫

人のところへ泣きながら走っていった。

何が悪かったのだろうか？　せつかく取ってあげたのに…。

そう思い、手のひらを開けて捕らえた“何か”を見る。

なんだ。蝶か。

それはこの地方でよく見かけられると図鑑に書いてあった蝶だった。見た目も図鑑に載っていたので

判別にそう苦労はしなかった。

その蝶を手を開けて逃がしてやる。

フラフラと飛んでいき、次第に見えなくなる。

遠くに行くのを見守ってから、手を払う。

そして、泣いて逃げていったシャルロットちゃんの方を見る。

すると、オルレアン公夫人の後ろに隠れながら涙目でこちらを見るシャルロットちゃんと目が合う。

だが、すぐにシャルロットちゃんは恥ずかしがってかオルレアン公夫人の陰に隠れてしまう。

さて、どうしたものか…。

果たして俺は、あの子と仲良くなれるのか…？

不安だ…。

それからいろいろあった。

というか、俺がいろんなことをした。

アミーシャの訓練で培った身体能力で曲芸まがいの事を。

それを見ていたシャルロットちゃんだけでなく、オルレアン公夫人、そして母上まで驚いてくれた。

てか母上は知ってるじゃん。しょっちゅう（俺が）死にそうになりながら訓練をしてるんだから。

んで、他にも前世でちょちよいと知っていたマジックを披露。

親指のアレとか。

んで、シャルロットちゃんの気持ちを驚 掴んだところで、ちょいと話しかけたら友達になれた。

めがっさ食いついてくれた。

女の子の友達なんて今までいた試しがなかったから、ちょいと新鮮であります。

俺、緊張しっぱなしっす。

んで、定番の花の冠作ったり追いかけてたことかしてたらいつの間にか夕日が見えてた。

……あそこで本気で逃げて隠れたのがまずかったのかな…。

あれから見つけてもらえずに気づいたら時間が過ぎていました。

シャルロットちゃんが泣いて彼女の両親に泣きついていて、行方不明かと捜索隊を作ろうとしていた

が俺の両親が心配ないと何とか引き留めていた。

あのときは焦ったぜ…。

んで、俺がひよっこり戻るとオルレアン公と夫人がびっくりし、シャルロットちゃんが安心したのか

泣き出した。

オルレアン公夫妻がシャルロットちゃんをあやしてた。

そんなこんながあつて屋敷を後にし、今日は帰ることになった。宿泊することを勧められたが、様々な理由（母上がぐずったり、アミーシャの背後からの威圧の恐怖

）により今回は帰ることになった。

そして、帰りの馬車内で。

「ラウルちゃん、今日はどうだった？」

母上が唐突に話しかけてきた。俺はそれに素直な感想を返す。

「はい、初めて外に出て、初めて友達ができたので楽しかったです」

「そう、それはよかったわあ」

母上は顔をほころばせ、うれしそうにする。

その顔は、子供に友達ができて喜ぶ普通の母親のように優しい笑顔だった。まあ普通に俺の母上なん

ですが。

普通にきれいで、それでいて可愛くて、不覚にもちよつと萌えてしまった。

それをごまかすために、俺は父上に話しかける。

「そういえば、父上はオルレアン公と何を話しておられたのですか？」

「ぬ！？ む、まあ、最近どうだとか、ここのワインがうまいのだという普通の世間話だな」

「そ、それよりもラウルちゃん！ シャルロット姫とは何をして遊んでいたの？」

「あ、はい。花を冠のようにして遊んだり、追いかけてこをしていました。追いかけてると思う」

て隠れたら、見つけてもらえなくて焦りましたよ」

「ああ、だからあのときはシャルロット姫だけ帰ってきたのね？」

もう、ラウルったらおっちょこち

よいなんだから」

「あはは、申し訳ありません母上」

「ははははは」

「おほほほほ」

「あはははは」

そうして、馬車で移動する時間は過ぎていった。

ちなみにアミーシャは暗いので危険だと言うことで周囲の哨戒にでている。

夜目はかなり利くようなので、奇襲とかはされないだろう。アミーシャはむしろする側だろう。

それに、アミーシャの強さは俺が一番知っている。心配はいらないだろう。

そして屋敷に着いた。

夜の遅い時間だったが、アミーシャが訓練をしよう的なことを言うてきた。

今日は休みって言うてたのに……。

もちろん逆らえることなく、やりましたよ訓練……。

当然、いつもの如くアミーシャに伸されて終わりましたけどね。

ああ、でも俺、今日が初めての外出だったんだなあ。気づかなかった……。本に夢中だったからか？

それに、こっちに生まれてから初めて友達ができた。こんなにうれしいことはない。

次はいつ遊べるかなあ、シャルロットちゃん。楽しみだなあ。

あ、そうだ。他のところにも行ってみたなあ。せっかくこういうとこに生まれたんだから、いろいろ

見て回るのも良いかもしれない。

やりたいことが増えた。まあ、時間はまだまだあるんだ。ゆっくりやっていこう。

こうして、ラウルの過ごす日々は過ぎて行く。
楽しみながら。そして何より、強くなりながら。

第14話 それは月に一回の癒し。（前書き）

あーっーいー。

原作に行つてからの事を考えてたけど、あれ…原作のことを覚えていない…。

そういえば、最後に読んだの数年前だったわ…。

読み返して行こうと思います。

最近、マブラヴの新作を買いました。まさかの分割商法にバルドスカイを思い出しました。

まあ、許せるクオリティでしたけども…。

あと、それとマジこいもやってます。

なるほど、二次創作をしたくなる面白さだ。

やってみようと思ったが、まずこつちを終わらせる。という神の啓示があつたのでこつちに心血を注いでいきたいと思います。

よろしくお願いします。

第14話 それは月に一回の癒し。

まずは状況説明をしよう。

今は、あのオルレアン公の家に遊びに行くという出来事から、半年以上が経った。

帰った後相談して、はじめは数ヶ月に一度父上がオルレアン公に用があるついでに遊びに行くという話のはずだったのだが、シャルロットちゃんが毎日のように駄々をこねるという内容の手紙が届いてきた。

父上は手紙を見てため息をつき、俺に一ヶ月に一回遊びに行くように言い、その旨を伝える手紙をオルレアン公に返した。

それから、毎月遊びに行くようになった。だいぶシャルロットちゃんとも打ち解けられた気がするからうれしい限りだ。ちなみに今はオルレアン公邸行きの馬車の中だったりする。アミーシャに膝枕してもらっている。

そして、毎月行くようになってから何故かアミーシャが不機嫌になって死神ちゃんと会う機会が増えちゃったりなんちゃったり。てか、だんだんと死神ちゃんとの親密度が上がってるんですけど…。

そういえば、何回か遊びに行っているうちに、オルレアン公邸のコック長・ドナルドさんの息子の銀髪のイケメン少年、トマ君とも友達になった。シャルロットちゃんが紹介してくれた。

見た瞬間、イケメン弾ける！ と唱えそうになった。そんな俺は決して俺は悪くないだろう。

彼はマジックに並々ならぬ興味があるようで、興味津々になって俺に聞いてきた。

俺もそんなに知っているわけではないが、知っている限りの事を教えてあげた。超が付くほど喜んでくれたので、まあ教えた甲斐があったと言うことだろう。

イケメンに借りを作っておくのも悪くない。

そうそう、マジックを教えるに当たってたが、トランプを製作したあるところにはあるみたいだが、まだそんなに知られていないみたいだ。

そんなこんなで最近はいいたい三人で遊んでいる。

俺が習っている魔法を見せたり、トマ君に教えたマジックの出来具合を見せてもらったり、三人で追いかっこしたり。

最近はとても良い息抜きになっている。

アミーシャが怖いのか、エドワードさんが容赦ないとか、母上が手加減してくれないとか、父上と研究をしている間は我を忘れてしまつとか、そんなものは些細なことだと思わせてくれる。

ガラガラ…

ゆっくりと馬車が止まる。

おっと、アミーシャに膝枕してもらって考え事してたら着いたみたいだ。

馬車から降り、オルレアン公と夫人、使用人の方々に挨拶をしてから、シャルロットちゃんのところへ行く。

「やあ、今日は。シャルロットちゃん、元気にしてた？」

「ラウルお兄さま！ こんにちは！ さあ追いかけてこみましょう！ 今日には負けないんだから！」

挨拶もそこそこに追いかけてこの申し込み。

そう、毎回の如くやる追いかけて。

俺が逃げて、シャルロットちゃんが俺を追いかける。

初めてやったときに完全に撒いてしまい、それが悔しかったようで、毎回のようになつた。実はあれで相当悔しかったようだ。負けず嫌いななかねえ？

内容はゲーム形式にして、俺を完全に見失ったら負け。できるだけ見失わないようにし、見失ってもすぐに見つけるようにする。見失つて三十分以上経過したら完全に見失った判定で俺の勝ち。

俺が勝つたら参加者のおやつを総取りだ。

まあ、俺が負けたらシャルロットちゃんをお願いを何でも一つ聞いてあげるといふ何とも理不尽なレートなんだけれども…。

シャルロットちゃんのチームにトマ君も加わって、二人で俺を追いかける。それを俺はある程度手加減をして逃げる。

俺も負けず嫌いだから絶対に捕まえてやることはしない。捕まるとしたら、絶対に俺より実力が上になつたときだ。

負ける。ダメ。絶対。

負けたと報告したときのアミーシャを想像したら負ける選択肢があるわけありません。

「わかった、やろうか。今日もトマ君呼ぶ？ あ、ルールはいつも通り僕を見失ったら負けね」

「呼ぶ！ 今日こそ何がなんでも捕まえてやるんだから！」

それから、トマ君を呼んで追いかけてこを始める。

「シャルロットさま、もうやめましょうよ。ラウルさまは捕まりませんよ。」

「なに言ってるの！ 今日こそは捕まえてわたしの言うこと聞かせるんだから！」

「お願いってなんなんですか？」

「へっ！？ そ、そんなのないしよに決まってるじゃない！ そんなことより早く探すわよ！」

「も、無理ですよ」

「じゃあ行くよ、はい！」

ビュッ！

しゅばばばばば・・・

「あっちよ！ いくわよ！」

「無理ですって」

「ハハハ。捕まえてごらーん」

俺、逃走中……………

しゅばばばば…

「どこ！？ どこに行ったのお兄さま！」

「もう、だから言ったじゃないですか！ ああ今日も僕のおやつが！」

俺を見失ったようだ。じゃあここから当分動かなくても良いかな。

シャルロット一行、ラウルを見失う。

「もう！ 見失っちゃったじゃない！ 早く探すわよ！」

「無理ですって。みづかりっこ無いですよ、シャルロットさま」

「もうっ！ 探すまえから諦めないでよ！」

シャルロット一行搜索中

だがしかし、時は無情にも過ぎ去っていく。三十分経過。

よし。三十分くらいか。また俺の勝ち。罪悪感があるけど、おやついただきます。

ガサガサッ

「ばっ！俺の勝ちだね」

俺は藪からニョキッとでる。

「きやうわあああ！もう！また負けたあ！」

「おやついただきます。Donaldさんのおやつは絶品だからね」

「うう。わたしのおやつ…」

「これって、僕のも取られるんですよね？」

「もちろんだよ。参加したでしょ？」

「で、でもシャルロットさまを止めようと思いましたよ！？」

「ああ、たしかに。まあ、さすがに毎回無しつてのもかわいそうだから分けてあげるよ」

なんだかんだで毎回分けてるんだけどね。

「ほんとに！？　ありがとうございますラウルさま！」

「うう…。わたしは…？」

うるうるとした目でさらには上目遣いでラウルを見つめる。

ぬっはあ！　そんな涙目上目遣いという高等スキルをどこで覚えた
ああ！

俺は人知れず今日一番のダメージを受けた。

「も、もちろん分けてあげるよ。安心してよ」

「わあ！　ラウルお兄さまありがとう！　大好き！」

満面の笑顔で俺に抱きついてくる。思わず人生をゴールしそうになったぜ…。

そしておやつを食べる。

「ん〜、おいっしい〜！　いつもラウルお兄さまが来る日はドナルド、いつも以上に気合いを入れて作るからいつもよりおいしいのお〜」

「そうですねえ。僕も、毎月この日の父さんのおやつを食べるのは好きなんですけどね…。でも毎月とられるし…。ハア……。」

「ちょ！　そんなに落ち込むなよ！　ほら、もっとあげるから！」

「ありがとうございますラウルさま…。」

「むう！　ずるいずるい！　わたしもお！」

「はいはい、シャルロットちゃんにも、はい。」

「ありがとう」

ああ、かわいい。やつぱ小さい子は見てるだけで和むよね。人類の宝だわ。

それにしても、ん、たまには負けてあげた方が良いのかな？　でも、負けるの嫌だしなあ。

大人にならなきゃあ駄目なんだろうけど、俺まだ子供だし。肉体がだから負けてあげません！

大人気なかだしませんよ、ふふふ。

そう考えながらアミーシャという恐怖を思い出さないようにする。心なしかからだガタガタ震えだした気がしたが、これはおやつがおいしいからである。そうなのである。

俺があまりのおやつのおいしさにガクブル震えていると、シャルロットちゃんが何かを思い出したかのように話し出す。

「あ！　そういえば、今日はイザベラお姉さまが来るんですって」

イザベラ？　誰だそれ？　てかマジで今思い出した的な言い方だな…。

「イザベラお姉さま？」

「あれ、ご存じないですかラウルさま？ オルレアン公さまのお兄さま、ジョゼフさまの一人娘です」

「へえ。じゃあ、シャルロットちゃんとは従姉妹か」

「知らなかった…。なんでだ？ 王族情報だろ…？ なんで俺が知らないんだ…」

「えへへ」

なんか照れくさそうに笑うシャルロットちゃん。やっぱ和むわあ。

「イザベラさまは、たしかラウルさまと同じ年だったと思いますよ」

「お？ じゃあ六歳か。どんな人なんだろうなあ」

ああ、だからか。俺と同時期に生まれたなら両親も俺に掛かりつきりで忙しかっただろうし。それにジョゼフさんもオルレアン公と比べると影も薄いからなあ。俺が知らないのも無理はないっさ。

「さあ？ 僕もお会いしたことありませんからわかりません」

「え？ そうなの？ じゃあシャルロットちゃん、イザベラちゃんってどんな子なの？」

「え？ お姉さま？ んー、んーとねー、いじわるだけどやさしいの！」

どんなんだよ…。

あれが、三歳に詳しい人となりを感じちゃいけないって事か…。
まあ、会えばわかるか。

おやつを食べて、ランプを使ったりしてマジックの見せ合いや神
経衰弱、大富豪（地域により大貧民）などをしていると、オルレア
ン公と夫人、そして堂々とした小さい女の子が一緒に来た。

シャルロットちゃんはその女の子を見て、「あ！ イザベラお姉さ
ま！」と言っていたのでおそらくあの子がイザベラちゃんだろう。
うん、堂々としている。六歳とは思えない…。

さすが王族と言ったところか。胸を反らして堂々していると威厳
たっぷりな気がする。小さいから全然無いけど。

「ラウル君、この子はイザベラ姫だ。私の兄の一人娘さ。よろしく
してあげてくれ。じゃあ、シャルロット、ラウル君、頼んだよ。僕
たちは向こうに行っているよ。何かあったらきなさい」

「はい、わかりました」

俺の返答に笑顔で向こうに行く二人。子供同士の方が打ち解け易い
だろうと空気を読んでくれたのだろうか。できるな…。

「こんにちは！ イザベラお姉さま！」

「……」

シャルロットちゃんの挨拶を無視し、機嫌悪そうにドカツと開いている椅子、俺とシャルロットちゃんの間で腰を下ろす。

「？ どうしたの、イザベラお姉さま？ どこか痛いのか？」

「フンッ！ 別になんともないよ！」

おおう。なんとという高飛車姫…。てかシャルロットちゃん気づいてないのかよ…。

「そう？ あっ イザベラお姉さま！ ラウルお兄さまがトランプつていうのを持ってきてくれてね、それでそれで」
「トランプ？」

「へ？」

「なんだい、トランプって？」

お？ 不機嫌高飛車姫がトランプに興味を示したようです。

「あのね！ トランプっていうのはね！ えーっと、ごじゅう…なんだっけ、ラウルお兄さま？」

説明しようと思ったらしいが断念して俺に聞いてきたようだ。
俺はイザベラちゃんの方を向き、トランプの説明をする。

「カジノとかで使われてるんだけどね、これは使い勝手が良くて、他のにもいろいろ遊びに使えるんだ」

そついいながらトランプを並べていく。

「えーっと、四種類のマークがあつて、それが十三枚ずつで五十二枚、さらにジョーカーが二枚。これは場合によつて一枚抜くことがあつて、だいたい五十三枚で何人かでゲームするんだよ」

「へえ。それで、どんな遊びがあるんだい？」

なんという食いつき具合。心なしかイザベラちゃん、身を乗り出してますよ。

「んー、直接やった方がいいかな。ルールも、やりながら教えた方がわかりやすいだろうし」

というやりとりをし、イザベラちゃん、トマ君、シャルロットちゃんと俺の四人でとりあえずば抜きをする。

「マークは関係なくて、数字だけをそろえたらいいんだね？」

「そうそう。同じ数字が二枚そろったら真ん中においてね」

「わかった」

「ふー」

「これと、これ」

みんなが続々と真ん中に二枚そろったカードをおいていく。
だいたいみんなが出そろったところで声を掛ける。

「じゃあ、今日はイザベラちゃんから行こうか。僕のカード、一枚をどれでもいいから引いて」

「わかった」

素直に引いていく。そんな姿は年並みの子供のようで、とても可愛かった。

「あ、そろった」

「じゃあそれを真ん中のとくにだして」

ペラッとそろった二枚を真ん中に置くシャルロットちゃん。

「で、これを交互に繰り返していつて、ジョーカーが最後まで残ってた人の負けていうルール。だいたいわかった？」

「なんだ、やってみたら簡単だね」

「よし、じゃあ普通にやってみよう」

結果、三戦中三戦ともシャルロットちゃんが最下位。

だって、カード引かれるとき顔にでてるもんさあ。そりゃあ無理だよ…。

そんなシャルロットちゃんを見てイザベラちゃんがなんか困惑してるよ。なるほど、良心の呵責か。優しいってのは本当みたいだね。

それから、トランプで他のいろんな遊びをした。ダウトや大富豪（地域により大貧民）、子供に優しい系のルールの遊びを中心に。

そして、外がオレンジ色になっていた。もうすっかり夕方のようなのだ。

そろそろ帰らないとなあ、と考えているとオルレアン公夫妻がやってきた。

「ラウル君、名残惜しいがそろそろ帰らなければならぬのではないのかね？ 君のメイドさんも迎えに来ているよ」

確かに、オルレアン公夫妻の後ろにアミーシャが肅々と立っていた。ここだけ見ると良いメイドさんというかできるメイドさんなんだけど、帰ってからの訓練を思うとなあ…。

「わかりました。今日もお邪魔しました。」

「ラウルお兄さま、帰っちゃうの…？」

「うん、また来月に来るよ」

「うう…、絶対、ぜったいだよぉ？」

うぐわぁ…、だから涙目上目遣いは反則だとあれほど…ッ！

などと考えていると、今度はイザベラちゃんが話しかけてきた。心なし寂しそうな顔をしてくれてそんな感覚がするが、気のせいだろう。

「なんだ、あんた帰るのかい」

「そうなんだよイザベラちゃん。またいつか遊ぼうね」

「イ、イザベラちゃん!？」

「え、あれ？ ダメだった？」

「い、いや、ダメって程じゃないけどさ…」

他にもなんかもご言ってるけど、聞き取れないのでイザベラちゃんが来てから空気を読んで空気になってたトマ君へ挨拶する。

「じゃあトマ君、また来月。マジックをさらに極めといてね」

「はい。ラウルさま、また来月に」

トマ君も名残惜しそうにしてくれている。うれしいなあ。でも、帰らなきゃあなんのですよ僕は。

「じゃあみんな、またね」

「うう、ぜつたい、ぜつたいきてよお」

もはや泣き出してしまっているシャルロットちゃんに手を振って退出し、みんなの見送りもそこにアミーシャと馬車に乗り込み、出発する。

ああ、帰ったら訓練か…。最近じゃあ朝に鍛錬している体術に加え、他にも習っている武器の使用も許可してくれたとはいえ、アミーシヤも武器を使うようになったから手に負えないよ…。

古武術や剣術は良いけどさあ…。気を使って身体能力強化とか、槍術、棒や鉄扇、弓術に手裏剣、他にもありとあらゆる武器・暗記各種の練習、さらには火薬などを使用する火術！これはどうなの？もう普通に、完全に忍者街道まっしぐらじゃん！煙幕とかこの前作っちゃったよ俺！

それに軍学とかの知識も半端ないし…。

ああ、そういえばアミーシャに正体を聞こうと思ってたけど、今は二人つきりだし、聞き時かもしれないな。

御者さんいるけど、聞こえないだろうし。
では早速。

「ねえアミーシャさん」

「あ、はい。なんですかラウル様？」

「アミーシャさんは…」

なんて聞けば良いんだ…。いきなり何者って聞いたたら不自然すぎるだろ！なんか不自然じゃないように聞かなければ…。

あ、そくだ歳を聞こう。そこからアミーシャさんの素性を聞いていけばいいか。

よし、ではそれで。

「アミーシャさんは、何歳なの？」

「えっ……」

しまったああー！！！！

なにを女性に歳を聞いてやがんだ俺わああああ！！！！ 六歳だからって許されるもんでもないだろうぐああああ！！

俺は一人悶絶していたが、アミーシャさんはゆっくりと口を開き、話し出す。

「私の、年齢ですか……。そうですね。人間の暦で数えるなら、私は今183歳になるのでしょうか」

「え？ 人間に置き換えると？ どゆこと？」

不自然な返答に、俺は思わず素で聞き返してしまう。

「ああ、そうでしたね。ラウル様はご存じありませんでしたね」

「え？ なにが？ 何のこと？」

「私、人間じゃ無いんですよ」

「あ、やっぱり？」

「……え？ あれ、驚かないんですか？」

「あー、まあ、だいたい予想はしてたって言うか。そこは、ね……」

あんな強さでしかもメイド服であんな動き。人間だったら逆に驚きだわ…。

「そうですか…」

「…うん、で、人間じゃ無かったら何なの？ さすがにそこまではわからなくて…」

「え、あ、えっと、一応吸血鬼なんですけど、ハーフでしょ…」

「吸血鬼のハーフ？」

「あ、はい。母が吸血鬼で、父が人間です。ラウル様にお教えしてるのも父から教わった技術なんですよ」

「あ、そうなんだ。じゃあもしかして父君は忍者だったり？」

「へ？　なんでわかったんですか！？」

「え…」

「ニンージャってわかるんですか！？」

あちゃー。思わず前世知識を使っしまいました…。だってアミーシャの動きとかトリッキーな暗殺系の技ばかりだからもしかしたらって自然に口からでちゃったわ…。

てか忍者って手裏剣とかばっかだと思ってたら槍とかいろいろやってたんだね。それに変装とか軍学とか凄いし…。

「えーっと…。そ、ソレよりアミーシャの事をもっと知りたいな！」

「え…、ああ、そうですね…。吸血鬼ハーフなんて気味が悪いですもんね…」

「い、いや、そういう事じゃなくて！ 吸血鬼だったら、血がいるでしょ？ それなら僕の血をあげるし、そのへんとかどうなのかなー、って」

この世界の吸血鬼は相手の血を致死量飲まないとグル化できないっていうのは昔に書物で見たから、ちょっとくらい血を上げるのはやぶさかではないんだよね。

「へっ…（ポツ）」

「え…？」

「い、いえいえいえ！ それには及びません！ 私はハーフなので、血は吸えますが別に必ず要するという訳ではありませんし、明るいところも好きではないだけで出れないというわけでもありませんし！」

「あ、そうなの？」

血を吸わせるプレイとかやってみたかったのに…。まあ、吸えはするみたいだし、いつかそういうことをする機会もあるだろう。それを俺は気長に待つとしよう。

「は、ははははい！ ですのでご心配には及びませんですはい！」

「わかったよ。血を吸いたくなったらいつでも言ってね、アミーシヤ」

「は、はい!」

「よし、それじゃあ帰ったらまた訓練、よろしくお願いします」

「わかってます。か、覚悟していて下さい。いつもの三倍で行きます」

「うえ!？ なんで!？」

「なんでもです!」

「お！ 横暴だああ!」

顔が赤くなっているアミーシャ。指摘しないでおこうと思い、話題をそらしたラウル。思わぬ藪蛇となってしまった。

三倍と言つのはおそらく照れ隠しだろうが、もう手遅れだ。こうなったら本当に三倍やるしかないだろう。

ちょっとした事からアミーシャの正体を知ったラウル。

それは捕らえようによつては重い事実であるはずなのにあっさりと流してしまったラウル。

案外、大物なのかも知れない。

第14話 それは月に一回の癒し。(後書き)

今回の文章の書き方とか内容とかどうだったでしょうか？

ご意見・ご感想があれば是非お願いします。

ご要望も随時受け付けております！

第15話 出発するけど幸先不安…。（前書き）

うぬう…。

もっと早く更新したいけどこの熱気が我の力を奪うふう…。

冬は大丈夫だと思う！ だってPCとかPS3とか暖房器具を付けまくるからね！

ああ、いいかげん原作を読み返さにゃあなりんせん…。どこにしまったっけなあ…。発掘してきやす。

第15話 出発するけど幸先不安…

「ほらラウル。」

昼食後、いきなり父上が袋を渡してきた。

「父上、何ですかこれは？」

「うむ。それはこの前お前が調合した魔法薬を売ってできた金だ。これからは、お前が調合で作った薬を売った金が、お前のものになる」

え？ これからはなに？ てか俺、お金とかもらった記憶もなければ、使った記憶もないんだけど…。あれ、何だろうこの徹底した二トっぷり…。なんて訓練された二トなんだ俺はっ…！
とはいえとりあえずお金をもらったお礼を言っておこう。

「あ、ありがとうございます」

「うむ。もちろん材料費や諸経費などは抜いてあるから、それは純然たるお前の魔法の結果だ。誇りなさい」

「はい。父上」

今度は、オーヴェルニユの魔法薬調合師として誇りを持ってお礼を言う。

「ううう…。会話に入れないわ、アミーシャあ…」

「こればかりは仕方ありません…。ここでは旦那様とラウル様だけの、水メイジの世界です…」

「うう、全くね…。仕方ないけど、我慢するわあ…」

「そうですね……」

俺と父上が会話する横で、母上とアミーシャがそんなことを言っていたが、父上と水メイジとしての絆を確かめ合っていた俺は全く気付かなかった。

「ところで、だ。ラウルよ」

「なんですか？ 父上？」

「そろそろ、この屋敷とオルレアン公の屋敷以外にも視野を広げていかぬか…？」

「な、ん…ですと…？」

「いやだから、そろそろお前も七つになるんだし、街とかも見に行ってみてはと言うことだ」

そうだった…。外出できたことにだけ満足して、俺はそれ以外に全く目を向けていなかった…。というか、訓練厳しすぎでしょ皆さあ…。

特に最近ではエドワードさんとか、騎士には必須ですとか言ってレイピアの扱いを教えてくれるのはいいんですが、一瞬避けるの遅れれば即串刺しエンドという攻撃を連射するのは止めていただきたいです…。

風の魔法とか覚えらんないってのに容赦ないし……。エア・ハンマー
だけしか使えないって！ 風系統は他はどうやってもコモンかそよ
風ふかせるくらいまでだって！ エア・カッターもできません！
てか、エア・ハンマーなんですけどね、やばいくらいロマンを感じ
たんですけど……。だってあれ！ ゴル。イオン・ハンマーじゃん！
俺の大好きな勇者王じゃん！ これを見た瞬間、鍛えるしかない
と思ったね！ だから、適正 だった風系統の魔法でもエア・ハン
マーだけは必死で練習してできるようになったぜ！
ってなにを脱線しているんだ俺は……。
そうだ今は二ト脱出の話なんだよ！ でも、アミーシャとか許可
出してくれるのかな？

「え、ええ。いけるのであればいききたいですけど……」

「え？」

「……え？」

「あれ、外に出たくないとか、そういうのじゃないの？」

「……僕、そんなことを今まで一度でも言いましたか、父上？」

「いや、聞いてはいないが全く外に出たがらないからてつきりそう
なのかと……」

「いやいや！ 外に出れないのは皆の訓練が厳しすぎるからでしょ
う！？」

「そ、そう……？ ワシ、そんなに厳しかった……？」

「いえ、父上との水の薬の調合は厳しいと言っよりもむしろ楽しいという感覚があるのですが、如何せん記憶がありません。だから父上はおいておきます。僕が言いたいのはむしろあっちの大人げない三人です。」

そういつて、俺は母上、アミーシャとエドワードさんがいる方向をジト目で見ろ。

すると、三人はサッと目を反らす。

「ま、まあ…、三人もラウルに強くなってもらいたいからこそ、こういう事をしているのだ。なにも好きこのんでやっているわけではないのだ。ゆるしてやってはどうかの？」

「そうよぉー！ 私はラウルちゃんに強くなってもらいたいから、心を鬼にして泣く泣く厳しく当たってるのよぉ？ なにも好きこのんでなんて…」

アミーシャとエドワードさんがうんうんという感じで首を縦に動かしている。

「では母上。この前訓練をしていただいたとき必死に逃げ惑う僕に「あははっ、たっのしいー！」と言って笑いながら武器を錬成し、投擲してきたのは何故ですか？」

「へえ！？」

いきなりの俺のカミングアウトに母上はこれ以上ないほどにうろたえた。

そしてそこにすかさずアミーシャが非難の言葉を続ける。

「お、奥様っ！ そんなことをなさってたんですか！？」

「だ、だってラウルちゃんに攻撃があんまりにも当たらないからあ…」

「だからって…、それはいけませんよ…」

「そういうアミーシャだって、最近のフィニッシュはいつも僕を踏んづけて終わってない？ 別に責めるつもりは無いんだけどね、あまりにもそれが多すぎると僕よりも逆にアミーシャが心配になってくるよ」

いやまじで。俺はもう慣れてるからいいけど、アミーシャ、なんか変な性癖に目覚めなかなと…。期待はしないこともないけど、それ以上に心配になってきますよね。

「えー？ あ、アレは…、そう！ ラウル様が最近うまく躲いだすので、どうしても速い足での攻撃になってしまつのです！」

「いやあ、別に責めてる訳じゃあ無いんだけどね？ ホントだよ？」

「アミーシャ、坊ちゃまを足蹴にしているとは何事ですか。詳しく訳を聞かせなさい」

「エ、エドワードさん…」

「エドワードさん。ホント、別に責めてる訳じゃないからいいんだけどね？ うん。それよりもエドワードさんもさ、僕には風系統の素質は無いって言ってるのに執拗に練習させるのはなんなのさ。てか身体で覚えると良いですとかいって風魔法を俺にぶっ放すのは

「どうなのさ？」

「エ、エドワード！ そんなことしてたのお！？」

「で、ですがエア・ハンマーを使えるのですから他の魔法も使えるはずですよ！」

「エア・ハンマーだけは根性で頑張ったって言ったじゃん！ もう限界って言ったじゃん！」

俺の魂からの叫びを涙目で訴える。エア・ハンマーだけは俺のすべてをかけて習得しに行ったぜ。だけど、逆に風系統はこれで限界なんですよエドワードさん…。ごめんね…。

「そんなのやってみなくてはわからないではないですか！」

「の、のう…。話を聞いていると、だんだんラウルが不憫に思えてきたのじゃが…」

「「「うぐっ！」「」」

父上が、今までの話を聞いていてついに堪えきれなくなったのか意見を言ってくる。

それに三人が同時に息を飲む。父上は何にも責められることではないから、皆反論ができないでいるみたいだ。

「そこでどうじゃろうか？ ラウルに荷物を届けてもらうついでに、息抜きと外出してもらおうというのは？」

その父上の発言に、今度は三人のみならず俺も息を飲む。

そして俺が、父上に聞く。

「い、いいのですか、父上？」

「うむ。ラウルさえよければ、じゃが」

「ぼ、僕は訓練を付けてくれている四人が良ければ全然良いですけど…」

そっついながら父上以外の三人を見る。

「「「……………問題、ありません」「」「」

ですよー。ここで文句なんて言おうもんならマジバッシングものだろうし。

「ではラウルよ。西部の、リッションと言う街の貴族にワシが後で渡す水の秘薬を届けてくれ。そんなに急がんみたいじゃから、馬でのんびりで行ってけると良い。護衛は、アミーシャに任せようか。アミーシャ、良いかの？」

「え、あつ！ はい！ 問題ありません！」

「よし、では早速明日にでも出発してもらおうかの。良い機会じゃ。ラウル、いろいろ見て回ってくると良い」

「はい、父上。ありがとうございます」

「うむ。では早速準備をしてきなさい」

「はいっ！」

俺は自然に身体が弾むのを抑えられなかった。明日から、いろいろ見て回れる。それは想像するだけで、とても心踊ることだった。

「いい天気だな。出発には最適の天気ではないか」

「そうねえ。これは、しばらくは雨降らないわねえ」

次の日、俺はいつもの服にマントをし、いかにも貴族然として屋敷の門のところに来ていた。そして見送りに来てくれていた三人（父上、母上、エドワードさん）と話していた。

あとはアミーシャが来るのを待つて、馬小屋につないである馬に乗って出発するだけだ。食料もお金も全部アミーシャが準備してくれるみたいだし。

あー、楽しみだなー。西部ってどんなところなんだろうか？ 今から楽しみだなあ。それに、荷物を届けるってことは、だ。それすなわち一日中馬の上ってことだよね？ ってことは訓練がないという

わけなんじゃあ…！

「お待たせしました。ラウル様」

ポジティブに物事を考えていると、アミーシャがやってきた。

旅をするというのに服装はいつものメイド服だった。旅をなめているのだろうか。そして、その他の持ち物は………背負えるくらい麻袋ひとつだった…。

なんでやねん…。

なんで麻袋ひとつやねん…。

ふお！？ 思わず前世のつつ込みを！？ とりあえず訳を聞かねば。

「ねえ、アミーシャ。なんで麻袋だけなの？」

「はい、これで十分だからでございます。」

なんでやねんっ！ スビシッ！

馬は！？ 食料は！？ ……はっ！？ そうか、あの中にお金が入っていて、今日宿をとる村でいろいろ買うつてことか！ なるほど、それならば納得できたぞ！ 袋の中身さえ聞いとけば安心だ！

「アミーシャ、その袋の中には何が入ってるの？」

これで、答えがお金だとかなら安心して出発できるな。

「はい、届ける荷物と最低限の食料、そして武器でございます」

………安全な旅路を送れないと覚悟しました。はい。これが、僕の

最初で最後の外出になるかもしれません…。

「ラウル様。ガリア西部へは、森を突っ切った方が早いです。ですので、森をまっすぐに抜けます」

え…？ その森、亜人とかがけっこう住みついてるんじゃないかなかったっけか？ お母様が頻繁に討伐に向かっているところって、その森だよね、確か？

「でもそこって、亜人とかでるんじゃないあ？」

「ええ。それがなにか？」

おれ、アミーシャを見誤ってたわ…。そうでした。彼女は忍者の娘で、当然のごとく父親から忍術を免許皆伝級に手ほどきされ、教え込まれていたんだった…。

「それでは行きましょう。旦那様、奥様、エドワードさん、行ってまいります」

「…ラウル、生きて帰ってこいよ…」

「頑張ります…」

「お土産、よろしくね」

「善処します…」

「どうかご無事で…」

「ありがとう、エドワードさん……」

みんなとも別れを告げ、そして改めて告げる。

「うぐう……。それじゃあ、逝ってきます……」

門のところまで見送りに来てくれた三人にあいさつをし、己の考えの甘さと絶望に打ちひしがれながら、アミーシャと並んで歩く俺。もうどうにでもしてくれ……。

第15話 出発するけど幸先不安…。（後書き）

今回は短かったですねえ…。
すみません…。

感想・批判・意見など、どしどし受け付けてますので、よろしくお
願いします…。

第16話 アミィシャと行く時点のこととは予測済み…（前書き）

暑いなにこれ地球が太陽に突っ込んでるのか？

この暑さはもはや拷問級じゃないか。

第16話 アミーシャと行く時点でこつなことは予測済み…

「ううう…」

森の中をトボトボと歩みを進める俺。

出発してから、昼間に村に着いたまではいいんだが、村で碌な買い物もせずすぐに村を発った。

買い物なんて何にもしてないんじゃないか…？

村でアミーシャがちよつと用があるからと単独行動をしている間、俺は村長の家でのんびりとさせてもらっていた。

というかアミーシャと行動したかったんだけど…。まあそれはそれとして割り切り、村長と会話していた。内容は村に来た時、一番最初に見た汚物のこと。道に平然と散乱する汚物たち。

俺は村長に汚物などが道に散乱しているのはよくないという話と、汚物の有効活用法などをアミーシャが迎えに来るまで村長にずっと聞かせていた。

そして、アミーシャが迎えに来て、一気に森に入りずつと歩き続けてから早数時間。空は木々であまり見えないが、たまに垣間見える空模様は既に夕暮れ。

素人的に言わせてもらってもそろそろ野宿とかを考えたほうがいいのかではないだろうかと思っと思っています本当に。

「どうしたのですか、ラウル様？」

「いや、そろそろ暗くなるけど、どうするのかなんて」

「そうですね、ラウル様はどうなさりたいですか？」

「え、いやそりゃあ、早く休めるところを探して野宿の準備に入っ
たほうがいいんじゃないかと思うけど…」

「ふむ、悪くない考えです。まあ及第点でしょう。では今日はこの
辺で野宿にしましょうか。待っていてください。夕食を調達してま
いります」

これは俺が意見を言わなければ夜通し歩き続けていた強行軍ルート
ですかもしかして…？ 言って心底よかったと思いました。という
か調達…？

「え…、調達って…？ 食糧なら鞆にあるんじゃないか？」

「ラウル様、これはいざという時のためのものです。食糧を調達で
きる環境にいる場合は極力自分で確保するべきです。サバイバルの
基本ですよ、まったく…」

あきれた感じでいうアミーシャ。というかサバイバルしてるなんて
初めて聞いたんですけど…。俺の計画は？ 父上の気遣いは…？
荷物を届けるついでの旅行じゃなかったの…？ 悠々自適に村や領地
や街を見て回るんじゃないかったの…？

「あ、うん…。ごめん。それじゃあ僕もキノコとか採ってくるよ。
それなりに知ってるつもりだし」

「ラウル様、それは駄目です。初心者が森で一人で探索なんて危険
にもほどがあります。それほどやる気があるのでしたら私と一緒に

回りましょう。サバイバルのノウハウも叩き込んでさしあげます」

藪蛇を踏みました…。俺はこの旅で死ぬ気がします…。

「ぐは…。よろしく、お願いします…」

「はい、わかりました。それでは行きましょうか」

「うん…」

「ラウル様、ここには亜人もいるので注意してくださいね」

「あ、うん。というか僕、亜人とか見たことないんだけど…？」

「普通の亜人はすぐにわかります。容姿からして普通の人間と異質ですから。見分けがつきにくいのは、私の様なヴァンパイアか、エルフくらいのものでしょうか」

「へー、そうなんだ」

「あ、ラウル様、その乾いた木とかを集めておいてください。後で使いますので」

「うい、了解です」

俺はせっせと乾いた木を集めにかかる。ついでに俺の脳内で過去に

読んだ植物事典の中から食べられそうな野草、キノコなどを選別し、集めていく。

そういえば野菜とかとっても煮込む用の鍋とかアミーシャのあの鞆の中に入っているんだろうか？ 水は俺が出すからいいとしても、鍋は…錬金したことないぞ…？ そういえば今まで錬金してきたのつて、ゴーレムとか武器ばっかだわ…。我ながら殺伐としてるなあ…。母上が戦闘向き過ぎるからか…？

てか、今日は肉はとれないかな。俺がいて役立たずだろうし。うわ、言つて悲しくなってきた…。

「ラウル様、戻りましょうか。ウサギが獲れましたし」

「うえっ！？ いつの間に!？」

マジかよ…。

「いえ、今ですよ。ちょうど走ってるのを見つけたので、気配を消して捕まえてきました」

「そうなんだ…」

アミーシャはとことんデタラメなスペックをしていそうだ…。そう認識を新たにする俺だった。

「ところでさ、包丁とかはいいとしてさ、他の調理器具とかは鞆の中に入ってたりますの?」

「いえ、それはラウル様に鍊金していただくかと」

「あ、やっぱり…？ でも俺、鍋とか鍊金したことないよ？」

「あら、ちょうどよかったですね。練習できるではないですか」

「そうですね……………」

俺に修行がない日は来るのだろうか…。

戻ってから何度も失敗を繰り返し、やっと満足のいくお玉やら鍋やらを作る事ができた。その間にアミーシャは火をおこし、ウサギを捌いたりいろいろしていた。

「それでは煮詰めていきましょうか。お肉はいくつかに切っており
ますので、ラウル様に鍊金していただいた串に刺して各自いただきます
しょう」

「わかった。それじゃあ野菜入れるよ」

野菜を一気に沸騰する鍋の中にぶち込み、煮込む。

煮込んでる間に肉を串に刺して焚火の近くに刺していく。

むろん、いくらご飯が楽しみだからって周囲の気配を探ることは怠
らない。最近アミーシャに気配探知と気殺は免許皆伝級だと言わ
れたのでこれには自信がある。

でも、他の武術やいろいろはまだまだって言われたから、そっち

に重点をおいてこれから鍛えていかなくちやな。

「ところでアミーシャは、サバイバルとかよくしたの？」

「ふえ？ えっと、昔はよくしてましたが、オーヴェルニユの屋敷で働かせてもらえるようになってからはないですね」

「そうなんだ。そういえば、なんでオーヴェルニユの屋敷で働くようになったんだっけ？」

「ん〜。それはまたの機会に落ち着いたところでも話しましょう。今はサバイバルに専念です。」

「“荷物を届けることに” 専念だよね…？ サバイバルはその道で仕方ない事なんだよね…？」

「そうでしたね。そうでした。その通りです」

アミーシャの間違いを正すも右から左に流されてしまう。コイツ、聞いてやがらねえ！

チキシヨウ！ 覚えてヤガレ！！

そうこう話してる間に夕食が食べ終わっていた。

「さてラウル様。明日も朝から歩くんですから、早く眠っておきましよう。寝てる間も気殺及び周囲への気配探知を切らさないようにして下さいね。切れたら攻撃します」

ちょー！？ アミーシャは鬼か！？ ああ、血を吸う鬼か…。

「が、頑張ります……」

「木の上で眠りましょう。バランスをとる練習にもなります」

「…はい……」

それから、木の上に登って気配を殺し、周囲に気を配りながら眠った。途中何回か落ちそうになったしアミーシャからナイフっぽいのがいろいろ飛んできた。一、二発、避けなかったら当たってた攻撃があつたから安心して眠れなかった…。

というか、これをガリア西部のリッションという街に着くまで続くのか…？

俺、マジで着くまで生きてられないんじゃないか…？ あれこれ、父上が息抜きについて手配してくれたのに、何だろこの気が休まらない感じ…。父上の唯一のミステイクは護衛にと言つてアミーシャを付けたことだろう…。

でも、父上は戦闘能力がないから一緒に行くとしてもさらに護衛が要るから意味ないし、母上やエドワードさんならアミーシャみたいになるんだから、どっちみちあまり変わらないだろう…。

結局、この運命を受け入れるしかないのか…。

ああ、ますます忍者に近づいていく気がするわ…。俺、貴族なのになあ…。ダンスとか食事のマナーとか義務的な事もやってるけど、貴族らしいことっていったら俺の五歳の誕生日くらいしかしてないんじゃない？ あれだわ。シャルロットちゃんのとこに遊びに行くのは癒しであつて貴族の仕事とかそういうのじゃないからな…。

たまに俺本当に貴族の子供なのか疑わしくなってくるわ…。

街に着くまで生きていられる事を願い、アミーシャに攻撃されない

ように言われたことをなんとかこなしながら眠る。

そして今日も、一日が過ぎていく――

第16話 アミーシャと行く時点でこっぴなるとは予測済み…（後書き）

次にはリッションに着きたいぜ。
と言つか着きます。最初に。

それではまた次回に〜。

第17話 初めての・・・。（前書き）

すみませんお待たせしましたああああ！！！！

二トに忙しくて・・・。

これからはサイクルができたんで定期更新していききたいと思います
ですはい。

まだ見捨てないでいただけるのでしたら、これからもよろしく願
いします。

心を新たに書き始めて行きたいと思います。

第17話 初めての・・・。

「んー、そうですね。このままのペースで行けば、今日の夕方にはリッションに着くと思いますよ。」

「え、ホントに？ そんな近くまで来てたんだ。」

聞いていてなんだが、こんなに早く着くとは思わなかった。

出発してから一週間（ちなみに、この世界で一週間は八日ある）。もうそんな近くまで来てたんだね。というかもう一週間経ったのか・・・。なんか、もつと経っている気がするな・・・。

というかアミーシャの油断したら飛んでくる攻撃の数々に警戒して全く気を抜けなかったから気が付かなかったけど、もうそんなに近くまで来てたんですね・・・。

「どうします？ 急げば昼には着けると思いますがけど。」

「い、いや。夕方に着くので良いです・・・。」

「そうですか？ では引き続き、油断せずに行きましょう」

「そうだね」

というか、常時早歩きなのにこれ以上早くしてもはや走りじゃない！ それを昼に着くまで走り続けるって・・・死ぬわ！！ アミーシャは、自分が普通ではない事に気付くべきです！ というか夕方から昼ってどんな速度で走るつもりなんだよ！！

あれから数時間。ずっと同じペースで歩き続けている。いや、早歩き続けている。俺は結構汗をかいてるが、アミーシャは汗一つかかず涼しい顔している・・。本当に人間か疑いたくなったが、アミーシャはヴァンパイアハーフだった事に気付く。
そんな詮無いことを考えながら歩いているが、ある違和感に気付く。

「・・・ん？ 気配がする・・・？」

「え？・・・あら、本当ですね。私より先に気付かれるなんて、本当に気配探知は免許皆伝ですね」

「あはは、ありがとう」

だんだん人間離れしてる気がしてあんまり嬉しくないけどね・・。

「気配は・・・、二つだね。走って・・・いや、追いかけてる？」

穏やかじゃないなあ」

「わかるんですか・・・？ 本当、凄いですね・・・。それでラウル様、どうなされますか？」

「んー。街までの案内を頼めるかも知れないから、とりあえず行ってみようか」

こんな道無き獣道を延々と歩き続けるなんてもうマジ勘弁だからね。最後まで楽したいよ。

「わかりました、では行きましょう。走りますよ、きっちりついてきて下さいね。」

そう言って、俺の返事を待たずに走り出すアミーシャ。

「ちょー！ 待ってよアミーシャ！」

あっという間に木に飛び乗って視覚から消えるアミーシャ。俺が気配探知に優れてなきゃあ見失ってるぞ・・・。そう思いつつも木に飛び乗って急いでアミーシャを追いかける。

全力でアミーシャに追いつき気配のところに急ぐ。だんだんと近づくにつれて気配の事が克明に分かってくる。気配の一つは人間。

大きさ、移動速度から、子供それも女の子だろうと判断する。そしてもう一つの気配は亜人。種別はそんなに素早くなく大きさも成人の人間よりは大きいがさほど大きくないところからオーク鬼ではないかとあたりをつける。

次にアミーシャと対応について相談する。アミーシャが逃げている女の子の方を助け、俺がオーク鬼を攪乱して時間を稼ぐということに落ち着いた。

アミーシャが逆の方がいいんじゃないかと言ってきたが、やはり女性に守られる男は情けないと下手にプライドを発揮してしまい俺がおとり役を引き受けることになった。

「追い詰められてますね。先に行って助けます。後はお願いしていいですか？」

「うん、お願い。すぐに追いつくよ」

「お願いします。では！」

バビュン！ という効果音が似合いそうな超加速をして急ぐアミーシャ。俺が全速力なのにも関わらずあっという間に見えなくなる。ほんと、自信なくすよ……。

「グオオオオオオ！」

「きゃあああ！！ いやあ！ 誰か！ 誰か助けてええ！！」

走ってここまで逃げ続けていたけど、もう限界……。だんだんと足に力が入らなくなってきたし、後ろの亜人との距離も徐々に近づいてきている。

なんとか街まで逃げ切れればと思ってたけど、朝から結構森の深いところまで来てしまっていたから街まではまだまだ遠い。走っている間に撒けるかもとも思ってたけど速度はあっちの方が速い。なんとか狭いところかを選んでここまで逃げてきたけど無理……。間の悪いことに空けた場所に出てしまった。さらに止めとばかりに躓いてこけてしまう。

もう助からないのだと、まだ十年も生きていない私でも分かってしまう。

「グオオオオオオオオオオオオ！！」

私の目の前で棍棒を振りかぶる亜人。叫びには散々追いかけてさせやがってという怒りの色が見てとれる。私は叫び声を上げることもできず、ただただ最後の瞬間になるであろう一時を見続ける。

最後の瞬間とは意外と落ち着いてるのね……。そんなことを考えながら振り下ろされる棍棒を見る。

でも、私に最後の瞬間は訪れなかった。ふわっという感覚がしたと思い気づいたら棍棒の範囲外にいつの間にかいた。

それから私はすごいものを見た。

「――、行けッ！ 『水兵^{リトル}』！！」

目の前に現れた男の子の叫び声と同時に次々と空中から現れる水のゴーレム。それらは皆、氷の剣や槍を携えていて。とても煌びやかで。なのに怖くて……。とにかくすごいとしか言いようがないものだっただ。

「大丈夫ですか？　あとはラウル様に任せれば大丈夫ですよ。安心してください」

「え……。あ……。」

その時私は初めて、私を優しく抱きかかえていてくれる存在に気がついた。

柿色の髪の毛の女の人。とても優しく抱きかかえてくれていて、全く抱かれているという感覚がしない。

「？　どうかしましたか？」

「あ……。あ！　い、いえ！　大丈夫です！」

「そうですか、それは良かったです……。つつ」

「ど、どうかしたんですか！？」

「何かあったのアーミーシャ！？」

私が大きな声を上げると前方で水のゴーレムと一緒に亜人を牽制していた男の子が大きな声で叫びながらこちらを向いてきた。するとこちらを向いた男の子の顔が驚きに変わり、次に怒りの顔に変わる。

「だ、大丈夫ですラウル様！　ですから敵に集中して下さい・・・！」

「わかった・・・。コイツに生まれてきたことを後悔させるよ・・・。」

私とそう年の変わらなさそうな男の子は心底冷え切った声で呟き、前に向き直り呟くような小さな声で呪文の詠唱に入る。声が小さくて詠唱の内容がわからない。水のゴーレムを使うことからおそらく水系統の呪文ではないかと思うんだけど・・・。

「――、『水』よ！」

その叫びとともに彼の持つ杖を兼用させているであろう片方しかない包丁のような剣を上に向け、振り下ろす。すると上からまるで雨のように水がオーク鬼に滴り落ちる。

・・・すごい！　あれだけの水を一瞬で生み出せるなんて！　クラスは間違いなくトライアングル以上！　いえ、もしかしたらスクウェアなのかも知れない。

「・・・お前はアミーシャを傷つけた。生まれてきたことを後悔させる。というか超絶な苦痛を与えながら殺す！」

そう宣言すると再び杖剣を上に向け、振り下ろしながら声を発する。

「『水』よ！」

男の子が水に指示を出したかと思うと、亜人にかかった水が氷り始める。

それによって亜人の動きが拘束される。かつ周囲が低温になることによって亜人の動きが鈍くなり、抵抗も少なくなる。

「寒いかな？ 痛いかな？ だがそれだけじゃあ済まさない。アミーシヤの受けた傷の万倍返しだ・・・とその前に。アミーシヤ、その子にこっち見ないようにしてくれない？」

「えあ・・・。はい、わかりました。」

「よし、じゃあ。『水』よ！」

私は女の人に目を覆われ、起こっていることは見えない。でも、男の子の叫び声のすぐ後からパキパキという音が聞こえる事からまた水を氷にしているのだろうと考える。

「さあて、お前の血は何色だ？」

パキパキツ――

「グ、グオオオオオオオ――！！！」

亜人の一際大きな叫び声が聞こえたかと思うと、途端に声が途切れる。抱きかかえてくれている女性に耳まで塞がれたのかと思うけど、女性の「うわあ・・・」という声が聞こえたのでそうではないと思う。

「ドカスガ！ 俺より弱い分際でアミーシヤに傷をつけるとか百年早いんだよ！ アミーシヤに傷をつけて良いのは俺だけなんだよッ！ わかったか！ ハアツ！ ハアツ！」

「ラ、ラウル様・・・」

私は抱擁を抜け出してそつと上を見る。柿色の綺麗な女性はポツと顔から耳までを真っ赤にしている。

それから男の子と亜人戦つてた方を見る。

一瞬で惚気な空気は吹き飛んで、私はただただその惨状を顔を青くする。

先ほどまで男の子と亜人が戦つていた場所で一人たたずむ男の子。そして――下から氷柱のようなもので串刺しにされ頭まで抜け、さらに体のいたるところは内側から生えた氷柱に貫かれている、亜人のオブジェとも言つべきものがあつた。

俺は怒りを発散し終え、はたと我に返る。そこで最初に目にしたもの。それは、臍気ながら自分がやつたと確信が持てる、氷柱で串刺しにされたオーク鬼の死体。初めて見たその豚面のオーク鬼は顔を痛みからかもとから皺くちゃだつた顔をさらに皺くちゃにさせて絶命している。

冷静になると、俺は初めて人間大の生き物を殺したことになると思ひ至る。しかも、亜種とはいえ人と名付けられた生物。それは人間に害しかもたらさないとはいえ、食べる以外でした初めての殺生。それは狩りではなくただの殺しで、人を殺した俺はただの殺人者・・。と、そこまで思考が行き着いた途端に急に吐き気がこみ上げてきた。

慌てて俺は茂みの陰に走り、胃から逆流してくるものを我慢もせずにありつたけ吐き出す。

「ラウル様！」

アミーシャが傷ついた身体を押して俺の方に近づいて来てくれようとするが、俺はそれを手で制する。怪我をしているんだから安静にしておけという意味表示だ。

ありったけを吐き終えある程度落ち着くと、魔法で水を出して口をゆすぐ。胃液の味を水で洗い流してアミーシャを治療せねばと考えつきアミーシャに近づく。

「ラウル様・・・」

「大丈夫だよ、アミーシャ。さ、治療するね？」

「あ。はい、お願いします・・・」

アミーシャに許可を取ると俺はアミーシャの背中 of 傷に治療の呪文を唱える。こういう時はつくづく俺が水のメイジで良かったと実感するよ。そういうえば薬は持って来てなかったのかな？ まあ割れ物だし、危険な事はする予定が無かったとなれば持つてくる必要性もないかな。嵩張るし。

幸い、アミーシャの傷は右肩から背中にかけての掠り傷程度だった。それほど深くはなかったけど、そのまま治療をせずにいると四日は動かせない程の怪我。

ほんと、つくづく俺が治療のできるメイジでよかったよ。

治療を終えアミーシャに休んでもらっている間に、俺は氷を水に戻してオーク鬼を埋める。そしてその場所を離れ、安心できる所に着いてから少し休んで、アミーシャは破れたメイド服を着替えに茂みに入っていく。

本当はすぐに着替えに行かせてもよかったんだけど、アミーシャが俺の精神疲労や非戦闘員がいることから、バラけるにしても安全な場所を確保してからの方がいいとの意見が出て、俺はそれを採用し、今に至る。

俺は木の根元に腰を下ろし、初めて殺害した命に対して考える。その間、女の子はずっと気まずそうに舌を向いたり俺の方をチラチラと見たりしてきた。声を掛けてあげてもよかったんだけど、今の俺にはそんな余裕はなかったただ殺したという事実を受け止めようとする。

しばらくするとガサガサと茂みをかき分けてアミーシャが帰ってきた。その手には山菜から薬草など、多種多様な草が抱えられていた。その中にウサギなどの肉がないのは、単純に俺に気を使ってくれたのだろう。確かに、今は肉を食べられる気がしない。

「ラウル様。お昼ごはんにしましょうか。お鍋と水を出してもらえますか？」

「・・・うん」

アミーシャに頼まれ鍋を錬金し、その中に水を出す。正直、野菜といえどもまったく食欲が無いわけなんだけど・・・。

でも何かを腹に入れておかなければいざという時に動けない。ここは常日頃からアミーシャに叩き込まれてきた“食べられるときに食べ”という洗脳と言えるまでに教え込まれた教訓がものをいい、俺に食べる気を無理やり起こさせる。

「えっと、あなたのお名前は何というのか聞いてもいいですか？」

「ふえ！ は、はい！ わら、私の名前はリユリユといいます！」

「リユリユさん、ですか。私はアミーシャといいます。そしてこちらがラウル様です。よろしくお願いしますね」

「・・・よろしく」

「は、はい！ よろしくお願いします！！」

先ほどから何をこの子は緊張しているのだろうか。俺か？ 俺の今の雰囲気か？ でもそんなこと言っただけで俺今めっちゃめっちゃブルンなんですけど・・・。さっきのこと思い出すだけで吐き気がまたぶり返して来そうなんだけど・・・。もう吐くものなんて無いのに。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。私たちはあなたを取って食ったりはしません」

「あ・・・、いえ。そういうわけでは・・・」

アミーシャは会話しながらもテキパキと鍋の準備を進める。そこから辺の石で囲いを作り、鍋を吊るせるようなものを作り、薪を集め火打ち石で火を熾し、草などを水をかけて洗う。

そんな手際のいいアミーシャの手元を眺めながら思い悩んだ表情をしていたリユリユという女の子は、意を決したように話し出す。

「あの！ あなたたちはどこに、何をしに行こうとされているのですか！？」

その女の子の意を決したような質問に俺はいささか拍子抜けするでもよく考えれば一般人の女の子に暗い考えなんて出て来ないだろうし、これからも亜人などが出る可能性があるのならば聞いておきたい質問でもある。

その女の子の質問に、アミーシャは優しく微笑みながら答える。

「私たちは、リッシヨンという街に荷物を届けにいくところなんです」

「リッシヨン、ですか？ 私の家がある街ですね。よかったあゝ。あの、よろしければなんですけど・・・」

「私たちもリッシヨンまでの安全な道を知りたいと思っていたんです。案内してもらえますか？」

「あ！ はい！ 喜んで！」

「それでは、薬草などを煮込んで少し調味料を入ただけですけど、お鍋をいただきましょうか。ラウル様、器とスプーンを出していただけますか」

「・・・うん」

昼食を食べ終わり、リッシヨンまでの道を歩く。

俺が気づかないうちにリユリユという女の子も一緒に行くことが

決まっていたようだ。その子の歩く速度に合わせて俺たちも歩く。この道で今までの俺たちの歩いてきた速度でいけばおやつのは着くのだが、女の子が疲れないように歩いているとやっぱり夕方頃にリッシオンに着く計算になる。まあ、考える時間がほしいから俺はそれで一向に構わないんだけど。

「へえー。オーヴェルニユの方から来られたんですか。あそこは、オルレアン様の領地の隣ですよね？」

「そうですよ。オーヴェルニユの次期当主様も近いというのでよく遊びに行かれていますようです」

アミーシャは俺たちの身分を隠して会話している。まあ、最近のきな臭いご時世だし、身分を隠して行くのは仕方ないだろうね。旅の途中で命を狙われるなんてたまったもんじゃないし。

「では王族の方とお知り合いなんですか！？」

「い、いえ！ 私ではなくオーヴェルニユ家の方ですよ。私たちはオーヴェルニユ傘下のしがたない貴族の次期当主とそのメイドにすぎません」

「へえー。そうなんですかあ。すごいですね」

「そういえば、あなたは何故あれほど森の深いところに？」

「あ、あはは……。えっと、私実は食べるのが大好きでしてですね・・。」

「？ はい」

「えっと、珍しい食材がないかと探してたらいつの間にか・・・」

話を聞いているうちにアミーシャの放つ雰囲気がだんだん温和から暗澹としたもの変わっていく。

俺は巻き添えを食らっては堪らないとさらに距離を離して歩く。

「少し、あちらでお話しましょうか？ 命の大切さ、森の危険さについて軽く教えてあげますよ」

「ふえ！？ え！？ なんですか！？ あー！ あ——」

ずるずると引きずられ、姿が見えなくなっただと思っただけで聞いてきていた女の子の声も不自然に途切れた。

・・・俺は見なかったことにして、リッションへ向かって歩を進めることにする。

「ここが・・・、リッションか・・・」

夕方、オレンジ色の光が世界を支配していると言わんばかりの夕焼け時に、俺たちはリッションに着いた。

「はい。ここが私の住む街・リッションです」

「やっと着いたのか・・・」

「私との一週間はそれほど退屈な旅でしたか？」

「一週間ぶりなのに、長く人工のものを見ていなかった気がする・・・」

「無視ですか、ラウル様？」

横からアミーシャの棘のある発言が聞こえるけど、着いた感動で聞こえないということにして感動に浸る。

「ああ、素晴らしきかな人の文明・・・」

「聞こえないみたいですので行きましょうか。」

「え、いいんですか？ 放っておいて」

「問題ありません。どうせ後からついてきます」

「ならいいんですけど・・・」

心配そうな顔をしてたびたび俺の方を振り返るリユリユちゃん。

だけどそれも俺は見えないことにして、俺はリッシヨンの街並みを眺める。

夕焼けに照らされるその街並みは、久しぶりに見る人工物ということもあつてかとても素晴らしいものに思えた。

つと、浸つてる場合じゃない。アミーシャは気配を消してて分かりずらいから、リユリユちゃんと分かれる前に合流してこれからの方針を決めなくちゃ。

一週間の旅をやつと終えたラウル。当初はのびのび息抜きでリッシヨンまで行くはずだったのにも関わらず、アミーシャが護衛に着くということから平和な旅の予定が一変、地獄の旅路へと変わった。だがそれを耐え抜いた達成感。それと初めてまともに見る街並み。それらの感動からラウルのテンションが上がり気味で、街に着いて宿をとるということは、軽くしていたとはいえ旅の途中はおざなりになっていたいつもの訓練を再開することに他ならないとは、ラウルはまだ気づいていない。

第17話 初めての・・・。（後書き）

気付いたらラウル、最近二重人格っぽくなってきたかも・・・

というかつまぐ纏められない……。精進あるべきでございますね……。

第18話 出会いと別れ（前書き）

タイトルはこんなんだけど、別にシリアスって訳ではありませんッス。

あー、早く成長させたいなー。

第18話 出会いと別れ

「う．．．う、うわばみっ！！？」

ガバリッ！

「はあ、はあ。な、なんかとても嫌な夢を見た気がする．．．。」

テンシヨンは朝から最悪だ。なぜなら。

はあ、そうだよ．．。俺、昨日殺したんだよな．．．。なんであんなことしちゃったかな．．。

うつぷす。思い出すとまた吐き気ぐあ．．．。アミーシャを見て癒されよう。

あー、そうだよな。英雄になるって事は、歴史に残る殺人者になるって事だよな。これくらいで一々吐いてちゃダメだってわかってるさ．．。でも、ほんの十年くらい前までは違う世界で殺しとは無縁の平和ボケした国で育ったんだ。いきなりでもないけど、殺せと言われてそう簡単に殺せるほど俺の心は強くないんだよ．．．。

うう、昨日の夜はアミーシャが訓練してくれたからマイナス思考の袋小路に入らなくてすんだけど．．．。ああ、辛いなあ。軟弱な俺には耐え難き試練ですよホント．．．。

「ん、んう．．。」

ほわあああ！ アミーシャ、超かわいいiiii！ 久しぶりにアミーシャの寝顔見たよ。まるで天使の如きかわいさですね！ もうたまらんわこれは！！

襲いたいですがそれは俺がアミーシャに勝つたらということでお
一つ。

「ん・・ふあ、あ。らふる様、おふあようございましゅ・・・」

うん、朝弱い設定はまだ生きてるんですね。旅では朝弱いとか無く常に戦闘態勢だったけど、ベッドで寝て安心したのか普通に安眠してましたわ。

「うん。おはよう、アミーシャ」

「今日は朝ご飯を食べたら荷物を届けて、その後は街を見て回って、明日に普通に馬に乗って森を迂回して帰る、で良いんだよね？」

「ふあい・・・」

俺は昨日アミーシャと決めたことを確認する。これをしとかないと届け終わったらすぐに森に入られそうで怖かったからね。

「じゃあ下で料理を注文して待ってるよ。ゆっくりで良いから着替えたら来てね」

「ふあい・・・」

それから俺は宿の一階を改装して造つてある食堂に降り、適当に自分とアミーシャの分の昼食を注文する。俺とアミーシャは常在戦場の構えなので食べられるときに食べられるだけ食べる。

だから必然、注文する料理の量は多くなる。店員や周囲の客はみんな若干引いていた。そりやそうだよ。俺でも前までは引いてた側だし。食べるようになって初めて理解できるこの量ってか。

それで、成長期の俺はともかくアミーシャのスタイルが崩れないのは不思議でたまらない。

てかアミーシャ遅いな。まさか二度寝か・・・？ もし二度寝だったら・・・、どうしてくれようか？

結果から言おう。アミーシャは二度寝をしていた。それはもう気持ちよさそうに。全く純真無垢に、悪びれもせず・・・。俺？ もちろん起こしたよ。でも流石はアミーシャ、起こすために頬を抓ろうとするとグーパンチが飛んでくる悪夢。優しく揺すって起こさせていただきました。この恨みは忘れません。

「あー、おいしかったですね、朝ご飯。降りてすぐ出てくるなんて、なんて気が効くんでしょうか。オーヴェルニユで雇いたいぐらいです」

「・・・・・・」

そりゃあ、僕が注文してからアミーシャを起こしに行ったからだよ。と喉まで出かかったがグツと堪えて無言を通しながら、朝食の時に給仕の女の子に聞いた荷物の届け先である貴族の屋敷に向けて歩く。

ああ、さつさと済ませて早く明日から帰りがてらにいろんな町を見て回りたいよ……。

そう思いを馳せながら、上機嫌なアミーシャと共に例の貴族のもとに向けてのそのそと一歩ずつ着実に歩いていく。

そして、貴族の屋敷に問題なく着く。

「いやー、まさか頼んでからこれほど早く届くとは思ってもせず……何のお持て成しもできずに申し訳ない……」

「いえ、僕達は御依頼の品を届けに來ただけですのでお構いなく……」

俺は荷物の届け先の貴族と社交辞令的挨拶を交わす。

「今お金を用意させますので、今しばらくお待ちいただけますか？」

「ええ、構いませんよ」

「それでは、少々お待ちください……。リユリユ、お客様方の相手をしています」

「はい、お父様」

貴族と入れ違いに、昨日遭った女の子が入ってくる。

そして父親らしき貴族が扉を閉めるやいなや、ぱあっと顔を輝かせアミーシャ抱きつかんばかりの勢いで話し出す。

「アミーシャさんたちが荷物を届ける所って私の家だったんですね！　また会えるなんてとっても嬉しいです！」

「ええ、私もまたあなたと会えるなんて、とてもうれしいです」

アミーシャは横で昨日遭ったのリュリュちゃんと再開を喜び合い、楽しそうに会話している。

俺も入りたいが、昨日俺はほとんどリュリュちゃんと会話していないことに気づく。

「一体何を届けに来たんですか？」

「えーっと、それは依頼主様のプライバシーに係わることなので回答を控えさせていただきます」

「そうですかー。ところでアミーシャさん――」

答えられないという返答にリュリュちゃんは気にした風もなく返事をし、すぐに別の話題に行く。

彼女は俺と同じ八歳らしい。これが八歳児の行動というもののなのかと勉強をさせてもらおうと思う。今さらだろうけど。

「——アミーシャさん、お料理できるんですか!？」

「ええ、簡単なものですが……。ラウル様もお出来になられると思いますよ? 何といっても本の虫ですから。ですよ、ラウル様」

アミーシャ、それ褒めてんの……?

「まあ、できなくはないと思うよ? レシピは全部覚えてるし……」

アミーシャの褒めているのか貶しているのかわからない言動をスルーし、振られた会話の内容に何事もないかのように返事をする。そしてラウルはこの件についても、いつか必ず復讐すると心に誓う。

「すごい! ラウルさんお料理できるんですか!？」

「いやまあ、したことはないんだけどね……」

「魔法も使えるのにお料理もできるって、ラウルさんってすごいんですねー!」

「ごめ……魔法の話はしないで……。うつぶす……」

魔法という単語から自動的に昨日のことを思いだしそうになってしまう、とても気分が悪くなる。

「ラ、ラウル様っ！ では厨房を借りて、お料理を作ってみてくれませんか？ 私、ラウル様の作るお料理を食べてみたいです！」

「あ、いいですねー！ 私も食べてみたいので是非！ お父様に許可をもらってきます！」

「えあ、いやちよつとま・・・」

俺の了解もなにもなく、答える余裕のない俺の返事を待たずに彼女の父に許可を求めるべく走って部屋を出ていく。てか料理したことないって言ったじゃん・・・。

まあ料理なんて所詮は化学反応だから、レシピさえ覚えていればなんとでもなるだろうけどさ・・・。

またまた結果から言おう。

リユリユちゃんが彼女の父から厨房とそこにあるものは好きに使っていいと許可をもらい、俺は早速腕を奮って料理を作った。前世でも台所にさえ立ったことがないので心配したがそれはそれ。生まれ変わって何かとハイスペックになった俺の体を信じて料理を作ろうとした。

そして・・・、見事に爆発した。

あっはっは。料理が爆発するものなんて初めて知ったよ。知ってた？ 料理って爆発するもんなんだぜ！？ あっはっはっは・・・

！

「すみませんでした・・・」

俺は全力で土下座した。

「い、いえ・・・。私も、ラウルさんの話も聞かずに行ってしまったから、私にも責任はあります・・・」

「私も、ラウル様に期待しすぎたようです・・・。すみませんでした・・・」

三つ巴で厨房で謝りあう図。その隣でシェフはどうやってたら食材と調味料を鍋に入れただけで爆発に至るのかを熱心に俺の調理内容を反芻しながら考えている。

「とりあえず、かたづけましょうか・・・」

「そ、そうですね」

「はい・・・」

アミーシャの言葉に俺とリュリユちゃんは返事をし、かたづけに乗り出す。

俺は杖をとり、汚れに汚れた厨房を、水を出して無事な食材や調味料などを濡れないように調節しながら洗う。

リュリユちゃんやアミーシャは俺が洗った場所に無事な食器や調味料などを整理していく。

そんなこんなで整理しているとあつとう間に掃除兼かたづけが終

わった。やっぱ魔法って便利ですね。

それから応接室に戻り他愛ない話を三人でし、依頼主からお金をもらい、すっかり仲良くなったリユリユちゃんとの別れを惜しみながらも帰路につく。いやー、リユリユちゃんいい子だね。食材大好きだからって貴族の子供が自ら危険地帯に乗り込むとか。ゆくゆくは大物になりそうだね。楽しみだ。

「ラウル様、明日から帰路につくわけですが、どこか寄りたい街などはありませんか？」

「いや、街のこととかよくわからないから、アミー・シャに任せるよ。アミー・シャのオススメの街とか回って帰ろう」

「わかりました」

「二週間掛けて、街を見ながら、帰ろうね？ 道なき道とか、森とか、川とかは行かないからね」

「・・・わかってます！」

「それじゃあ今日はこの街を見物して回ろう。もう夕方だけど、それはそれで味のある街並みだからね」

「ええ、わかりました。それでは参りましょうか」

「うんっ！」

俺はアミー・シャと手を繋ぎ、歩き出す。さてと、父上達にお土産とかも買って帰りたいし、どんなのがあるか見て回ろうか。良いの

があつたら迷わず買いだね、うん。

そうして、俺とアミーシャはオレンジ色に染まる街の中をるんらんつきつきと楽しそうに歩き出すのだった。

第19話 新らしい出会い（前書き）

まずは、遅くなって申し訳ありません・・・。

文化祭などがあつてまともに書けませんでした・・・。
いいわけデスはいすいません・・・。

待つていただけていたならありがとうございます。そしてたのしんでいただけたら幸いです・・・。

第19話 新しい出会い

「ラウル様、お昼はあの街でいただきましょうか」

「うん、そうだね。」

お昼の材料を森から取ってくるとか言わなくて良かった……。昨日の今日だし、取りに行つてそのまま森の中を進もうと言わないと断言できないところが怖いよね、アミーシャは。

「ラウル様？　どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ。さて、どんなメニューがあるのかなー」

「食べたらずぐに出発しますから、食べ過ぎないで下さいね」

「・・・え？」

「は？」

「・・・今、なんて？」

「は？　と」

「いやいやいや、その前だよー！」

なんという古典的なお茶目をしてくれるんだこのメイドは。

「ですから、食べたらずぐに出発しますから、食べ過ぎないでくださいね、と」

「いや、なんでさ?」

「……………」

両者の間には決して短くはない沈黙が訪れる。それを断ち切ったのはアミーシャだ。

「あの、ラウル様……。質問の意味がよく理解できないのですが……?」

「いや、すぐ出発とか止めてさ、じっくりと街並みとかを見ていこうよ? ほら、あの街並みとかさ、一オーヴェルニュ（僕ん家）の近くになかったものじゃん?」

「いえ、森でしたら屋敷の裏手に生い茂っておりますが?」

森しか見えてないのかこの肉体派戦闘系メイドは……。

「いやいやなんでやねん。なんで森やねん。人工物で、せめて人工物でいこうやアミーシャさんよオ? さすがの僕ちゃんも突っ込んだじゃったよ? 久しぶりにに使ったよなんでやねんとか?」

「はあ? すみません?」

「じゃあ街並み見ていこうよアミーシャ。芸術は心の余裕から生まれるんだよ?」

「・・・? 森で動物たちの縄張りとかを調べた方がよっぽど役に立つ気がしますけど・・・」

この娘は手遅れか・・・! なぜ話が森方面にしか持って行けないのだ!?

それから、いつやっぱり森に行こうとか言い出すか分からないので早々に街の入り口まで移動。こういう時は馬での移動は楽だね。本当にあつという間に移動できたよ。乗ってるのは疲れるし尻も痛くなるけど、それさえ慣れるか我慢かすればこの時代では上位に入る高速移動手段だわさ。

「失礼、身元を証明するものをお持ちか?」

「ん?」

門しか見えてなかったから急に話しかけられたのはびっくりした・・・。新しい街並みを愛でれる喜びとかアミーシャに対する警戒と焦りとかでちよつと気配探知がおろそかになってたみたいだ・・・。気を着けないと・・・。

「はい。私が持っております。これを」

そういつてアミーシャは懷から高価そうな紐で結ばれた、これまた高価そうな羊皮紙取り出し門番らしき人に渡す。

へえー。そんなのがあったのか。まあ、服装なんて金次第でどうとでもなるしな。

「む。これは確かに本物だな。しかし何故オーヴェルニユの縁者が自分の領地から離れたこんな街に、しかも逆の方角から来られたのですか？」

当然の疑問といったような感じの事を門番は聞いてくる。それをアミーシャが平然としたそぶりで答えを返す。

「ええ、行きは違うルートを使いまして。リッションに荷物を届けた帰りなんです」

「なるほどそうでしたか。これは失礼を。どうぞお通り下さい。」

「いつもは検問をしていなかったように思うんですけど、何かあったのですか？」

「ああいえ、最近流民がえらく増えましてな。これ以上の流入を防ぐために身分のしっかりしているもの以外は極力入れないようにしているのです」

「なるほど、そうでしたか。それでは、私どもは先を急ぎますので失礼いたします。さ、ラウル様参りましょう」

「えあ、うん」

完全に空気だった俺。てかアミーシャさん、俺以外の前では全然普通に完璧な感じじゃん。いったいどういう事なんだ？ 相手選ん

でやってんのか？ それはダメだってーちゃんが言ってたのにー。

それから俺たちは手頃な店を見つけて料理を食べ、腹ごなしの散歩と称して街をアミーシャに急かされながら回り、そろそろ出発しようかという頃にある出会いがあった。

「あらよつと」

ヒョイッ

俺は背後で振り下ろされた木の棒をすんでのところで躲す。

「なんで襲われてんの俺？」

「ラウル様、何かしたんですか？」

アミーシャは少し離れたところから俺を白い目で見てくる。

「なんでさ！ 俺ずっとアミーシャと一緒にだったじゃん！？ てかまさか本当にやるとは思わなかったよ？」

アミーシャに抗議の声を上げながら棒を振り下ろしてきた小柄な気配に目を向ける。

「金目の物を置いていけ！」

棒で殴りつけてきた気配は俺の何歳か下であろう子供だった。まあ気配とかで分かってたけどさ。てか欲望がストレートだな・・・。

そんなんじゃないや交渉なんてできないよ？ 本当の目的は後で出さないとさ。

「お金？ まあ持つてないこともないけどさ、君にあげる理由がないよ」

「うるさい！ 早く出さないとひどいぞ！？」

なにがだよ……。つーかあれだな、ヒステリー起こしてる子供との会話ほど疲れることはないね。話が通じないんだもん。

「君にひどいことされる理由がないと思うんだけど？」

「うるさい！ 早く出さないとひどいぞ！？」

「ちょっと待つてよ、話をしよう」

「うるさい！ 早く出さないとひどいぞ！？」

「……………」

「早く出さないとひどいぞ！？」

ひたすら同じ事を言い続ける子供。さすがの俺もめんどくさくなってきたわ。

「アミーシャ。」

「はい坊ちゃん」

トンッ。

俺の声と同時にアミーシャは行動を起こした。一瞬で少年の後ろに回り込み、マンガのように綺麗に首筋に手刀を入れる。それと同時に少年は何が起こったのか分からないという風な顔をしながら倒れる。

まあ、素人じゃアミーシャの動きは捕らえられないだろうしね。さて、この子供をどうしようか。

「よいしょ」

バシャーア！

「ご、ゴボボウ、うわああああ！！」

「やあおはよう。僕と会話する気になったかな？」

「お、お前ら！ メイジだったのか！」

「いえ、私はメイジではありませんよ？」

「嘘を吐け！ メイジで無くてあんな動きができるもんか！ お前！ 風のメイジだろ！」

「いやいや、訓練の賜？」

「そうですね。弛まぬ訓練があれだけの動きを可能にします。坊ちやまも見習ってくださいね」

「いや、あれは無理っしょ・・・」

俺とアミーシャ、そして襲ってきた少年は今、人気のない屋内に居る。アミーシャが少年を気絶させてから俺が場所を探して運び込んで縛った。

まあ、なんで襲われたのかって目的が分からなきゃあ怖いしね。お金って言葉が嘘で、狙いは俺じゃなくてオーヴェルニュ家だったら、いろいろ背後関係とか問いたださなきゃならないし。

「さて少年。話をしよう。」

「うつ。ここは、どこだよ・・・？」

「周囲には全く人気のない家屋。それで？　俺たちを襲ってきた目的は？」

「う・・・、縄を外せよ・・・」

「嫌だよ。逃げられたりまた襲われたら面倒だし」

「・・・、お前ら何もんだよ」

「ただの貴族の子供と、そのメイドさ」

「嘘だろ。そんなのがあんな動きできるはずないし」

「嘘じゃないさ。ま、ちょっと普通じゃ無いかも知れないけど」

「そうですね。ちょっとだけ、周りとは育つ環境が違いますね」

「でさ、俺たちの事じゃなくてさ。君の事を教えてよ。」

「・・・・・・・・・・。」

「んー、困ったなー。教えてくれないと体に聞かないといけなくなっちゃうよ？ 具体的には鞭とかで。」

「うつ・・。え、エドユミー。エドユミー・ド・ネルウイ」

逃げられないと観念したのかはたまたは怖気づいたのか、少年もといエドユミー君は素直に名前を覚えてくれた。てかあれ？ 苗字あるじゃん。決して綺麗とは言えない身なりだけど、この子貴族だったのか・・？ ま、それもこれも話をしていけばわかることか。

「ほうほう。それが名前か。で、エドユミー君。君の目的はなんだつたのかな？」

「姉さんが・・・」

「ん？ お姉さんいるの？ で、お姉さんがどうしたんだい？」

まさか人質に取られてるとか？ それじゃあ助けるのを手伝ってあげないといけないかな？ ってことはとりあえずはこの街で一泊できるってことか！ イエス！ 手伝うぜ少年！ この芸術的街並みを一日延長で見られるとあらばそんなこと朝飯前さ！

「姉さんがすごい熱出して倒れて・・・。医者と呼ばうにも金が無

いし、もし何か悪い病気に罹っているのだとしても治療のために魔法薬を買うお金がいるし・・・」

「だから、たまたまそこらを歩いてた碌に護衛もつけてない貴族の子供を狙った、ということですか？」

少年のつぶやきが小さくなっていき、最後のほうは聞き取れなくなっていくが、アミーシャがそれを引き継いで答える。

エドユミーは下を向きながら首を縦に振る。一応反省はしてるみたいだな。

「というか、僕達じゃなかったらお互いに危なかったね。もし普通の貴族の子供なら親が黙ってないだろうしさ」

そう言っただけでしばらく様子を見ようとしたが、いまさら罪悪感にかけられたのかはわからないが泣き出したので俺は慌てて縄を解きつつフォローする。

「えっと、ほら！ 君、運がよかったよ。なんたつて僕は水のメイジだしね！ ここで会ったのも何かの縁だし、君の姉さんの治療をしてあげよう！ お金も、同年代の貴族の子供とあつては逆に分け与えるのもやぶさかではないよ」

「え・・・？」

「ほらほら！ 早く君の姉さんのところに案内してくれよ。いいよね、アミーシャ？」

「・・・ハア。ここでダメと言ったら私一人だけが悪者じゃないですか。いいですよ。ついでにここに一泊していきましょう」

「イエス！」

「何か言いましたか？」

「え！？ あ、いや、あまりの嬉しさに心の声が出ただけだよ！？」

「……………。帰ったら覚えておいてくださいね…………。」

「なんでさ！？」

「……」。この家に今は勝手に住んでる。」

「え……。まじかよ……。よく子供二人だけでこんなところに住めるな……。幽霊とか普通に居そうじゃん」

エドユミを慰めてから、俺達三人は彼の姉がいるという現居住地に来た。そして二人が住むというそこは、なんと幽霊も裸足で逃げ出しそうなほどの貫録を秘めた幽霊屋敷さながらの廃屋だった。しかも貴族の家だったようで、それなりにでかい。

「父さまや母さまが出てきてくれるなら全然いいよ。ほら、ここが入口。正面は危なくて通れないんだ」

そう言っで連れられたのは屋敷の裏手の、ちょうど隠れたところにある穴の空いた壁。エドユミはそこになんの警戒もなくヒョイツと効果音が付きそうなほど軽快に入っていく。俺とアミーシャもそれに倣って入って行くが、俺よりも身長の高いアミーシャは通るのにも一苦労しているようだ。

「あ、そこ気をつけてね。罨張ってるから」

ピンツ ビュオオツ！

「早くいええええッ！！」

ズガコツ！

石を大量に括りつけられた、半ばで折れている槍がロープの遠心力やら重力やらでぐんぐん加速しながら落ちてきたのを、俺は寸でのところで避ける。

俺じゃなかったら死んでたな。うん。

「ほら、避けられるとかやつぱり普通じゃないじゃん」

「それを実践で確認するか・・・？ 俺じゃなかったら死んでたぞ・・・」

「失礼な！ 私でも避けられます！」

頼むから話をややこしくしないでくださいアミーシャさん・・・。

「あははっ、まあいいじゃん？ 無事なんだし。ほら、こっちこっ

ち。姉さんは二階の寝室で寝てるんだ」

「お前なあ……。」

そう言いつつも、やっと笑ったエドユミーにホッとする俺であった。

「あ、そういえば言い忘れてたんだけどさ」

ボタンッ！

「姉さん！ ただいま！ 水のメイジ連れてきたよ！ これでもう大丈夫だね！」

うつわー……。そういえば、俺まだ人を治療したことないって言い忘れてたよ……。まさかこんな肝心なことを言い忘れるとか、いったいどんなおちゃめだよ……。

「ゴホッ！ お帰りなさい、エンドユ……。それより私は寝てれば治るって言ったじゃない……。メイジに来てもらうお金なんて無いんだかゴホッゴホッ！」

「お金のことなら大丈夫！ 治療費はいらないってさ！」

「そ、そんな変わり者の貴族いるわけじゃないの……。父さん達が殺されたとき、周りの貴族はどんなことしたのか忘れたの？」

「あいや待たれいそこなお嬢さん。変わり者たあ随分な言いようじやあねえか。」

「ラウルさま、どうなされたんですか？」

「・・・、ごほん。えっと、お嬢さん。治療費が要らないというのにも当然ながら訳があるんだよ」

「・・・なんですか？」

「それはね、僕がまだ治療をしたことがないってことさ」

「え？」

お嬢さんが疑問の声をあげるのとはほぼ同時に、エドュミーは怒鳴る。

「お前！ 騙したのか！」

「それは人聞きが悪いぜエンドユ。治療はできるとは言ったが、治したことがあるとは言っていないじゃないか」

詭弁だけどね。あああ。こんな屁理屈好きじゃないんだけどな。

「エンドユって言うな！ それは家族しか言っちゃだめなんだ！」

「まあ待て待て。治療はしたことないが、する方法も手順も知っている。本で読んだからな。で、ほとんど失敗する危険性のない治療ではあるが何分初めてだ。実践で見えてくることもあるだろう。も

しかしたら手こずるかもしれないしね。それで、治療費は要らないという訳さ。わかったか？」

「難しくてわからん！ 騙したってことか！？」

こいつ、実はバカなんじゃないか？

「・・・お姉さんよりも先にお前の治療をしたほうがいいのかもしれないな・・・」

「なんだとー!!」

「エンドユ！ いいから。どうせ医者を呼ぶお金もないんだから・・・」

「でも姉さん・・・」

「いいのよ。ゴホツゴホツ！ あの、お願いできますか？」

「僕で良ければ。聡明なお嬢さん。僕はラウルです。あなたは？」

「なんで名前を聞く必要があるんだよ!？」

「バカかエンドユミー。治療するにあたって一番大事なのは信頼関係だ。それにはまず名前を知ることから始まるんだよ」

「くっ・・・！ また難しいことを・・・」

え？ これ難しかったか・・・？

「そうですね……。わかりました。私はセレーネです。セレーネ・ド・ネルウィ。」

「OKセレーネ。言い名前じゃないか。じゃあ早速診療に移ろうか。アミーシャはエドユミーを連れて出といてくれる？」

「はい、わかりました」

「なんでだよ！ 姉さんに変なことをするつもりじゃないだろうな！」

「プライバシーだよ、エドユミー。たとえ親族といえど隠さねばならないこともあるということさ」

「また難しいことを！」

え？ だから難しかったか・・・？

「それではラウルさま、私はエドユミーさんを連れて出ていきますね」

「あ、うん。お願い」

空気を読んでくれる娘、アミーシャさんです。さすが歳の功は伊達じゃないや。

「ラウルさま、忘れませんかね・・・？」

「何が！！？」

俺口に出してた！？ エドユミーを連れて出ていくアミーシャに

ものすごい殺気を当てられる俺。冷汗がダラダラとものすごい勢いで出てるのがわかる。

ボタン――

扉が閉まり、この部屋には完全に俺とセレーネちゃんだけになる。

「さて、と」

「えっと、何するんですか？」

「えっとね、まずは熱を……って熱う！？　すごい熱だねまた……」

「はい……。日を追うごとに上がっていくんです……」

「そりゃあ、こんな環境じゃあねえ……」

そう言いながら俺は周囲を見渡す。埃の溜まった部屋。窓は割れていないが、ボロボロのカーテンを見ればここがどれだけ放置されてきたのかわかる。さらには腐った木。これならいつ床が抜けたりしてもおかしくない。

「まあとりあえず魔法をかけときゃあ治るだろうさ。傷から病気まで魔法は万能治癒だからね。まあ不治の病とかはさすがに治せないけど、そんなこと滅多に無いしね。ああそれと、終わったらちよつと話をしようよ。君達がここで暮さなきゃならなかったこととか、これからのこととかさ」

「え。あ、はい……」

「じゃあ行くよ」

俺は一言呟くように言ってから意識を集中させていく。治療系の魔法は水のゴーレムよりは使用頻度が多くないせいかなそれほど得意というわけでもない。練度を上げなければいけないのは分かっているのだが、まずは守る術を持たなければ治療も何も無いだろうと言うことで戦闘系の方にどうしても重きを置いてしまう。

そう考えつつもそつなく魔法を掛けるラウル。練度はあまり高くないと言ってもそれはラウルの他の水魔法に比べて、のこと。明らかにそこらの普通のメイジよりも練度もスピードも効果も上である。

「——つと。はい、終わったよ。普通は水の秘薬とかも併用して使わなくちゃなんだけどね。だから普通より結構強めに掛けてみました。どう？」

「・・・え、あ、はい。全然楽です。というよりもこれ、普段よりも楽かも！　すごいっ！　私もう跳び上がったって大丈夫ですよ！？」

そういいながらジャンプしまくるセレーネ。セレーネも心配だけど、それ以上に床が抜けないか心配だったりする。

「ちょ！　待つて待つて！　治ったと言っても病み上がりなんだからさ！　それに床、床！」

ませたように見えているといってもやはり中身は年相応なのだろう。周囲を気にせずぴょんぴょんと跳びはねる。そしてセレーネが飛び跳ねて着地する毎に床がミシミシと悲鳴を上げているのに気付

かないんだろうか。土の魔法もできないこともないけど、水の魔法よりもさらに練度は落ちるぞ？

あのあとアミーシャとエドユミーを呼んで、なんとか跳ねるのを止めさせて話を聞くことができた。

その話を大まかに話すと、数年前までガリアとゲルマニアの国境に領地を持っていたネルウィ伯爵家。だがゲルマニア側の貴族の陰謀により両親を謀殺された。領地を接するガリア側の貴族に助けを求めたが、子供の戯れ言と相手にしてもらえず自らの保身に走る貴族共。そして領地を追われ、各地を流れるうちにこのガリアの内陸にある街に流れ着き、住み着いたという。そしてこれまでの貴族生活から一変した浮浪者生活。今まではゲルマニア貴族やガリア貴族などに対する恨みなどでなんとか保って来れたが、張り詰めた糸はいつか切れるように気を張っていたのが切れてしまい、病床に伏してしまったという訳らしい。

「うん、なるほど。それは災難だったね」

「なにがだよ！」

「周囲の環境が、さ。ゲルマニア側もそうだし、ガリア側も悪かった。そして暗殺の危険性を排除しきれなかった両親も、意識が足りなかったんだね」

「父様と母様のことを愚弄しないで！」

「してないさ。反省点を言っただけだよ。ちゃんと警戒していれば防げたはずだよ。現に君の父さん達の前の代までは防げてたんだから」

「何だと!」

「エンドユ!」

「ッ!!・・・姉さん?」

「そうね。今までの暗殺のままなら防げてたと思うわ。母様達が殺される前までは防げてたんだもの。」

セレーネは静かに、整然と言葉を紡いでいく。まるで感情がないかのように。

「でも、あれはいつもと違ったわ。服装からやり方まで・・・私が見たことある今までの暗殺者の身なりではなかったの。私は、私たちはあれに復讐するの。両親の仇ですもの。殺すまで死ねないわ」

「・・・」

エドユミーは口を閉じ、握り拳を爪が白くなるまできつく握る。アミーシャは俺たちの会話を一步引いたところから聞いていて、口を挟むつもりはないようだ。口を挟むつもりが無いと言うことは、俺に判断を一任してくれたと勝手に解釈することにする。

ということ、俺は俺の案を言う。

「じゃあさ、家に来なよ。アミーシャに術を習えばいい。それに家にいる執事は風のスクウェアだし、セレーネの役に立つはずだよ。」

火は・・・誰もいないけどさ、書物である程度はどうとでもなるしね」

「「「え?」「」」

俺の言葉に、俺以外が驚く。一番最初に我に返って質問してきたのはアミーシャだ。

「ラウル様・・・。家に来るとは、オーヴェルニユの養子にするということですか・・・?」

「うん。駄目?」

「駄目って・・・、駄目に決まってるじゃないですか! オーヴェルニユをそんじょそこの家柄と同じにしないで下さい!! 歴史はガリア王家の次に古いと言われている家系ですよ!??」

「マジデ!!? それ超凄くない!??」

「凄いです! そんな家柄に養子とかできるわけ無いじゃないですか!」

「うあ・・・、まじでか・・・」

「そうです! せめてオーヴェルニユ領の首都であるゲルゴウイアで困うくらいにして下さい!」

「ふえ!?! 困う!?!」

「? 姉さま、困うって?」

「子供は知らなくて良い！ それよりアミーシャ、困うつていくら何でもあんまりなんじゃ・・・？」

「なんだむぐつ！」

エドユミーはアミーシャに口を防がれる。俺の後ろからいつの間に移動したんだ・・・？

「困うと言っても形式的に、です。貴族はそういうのにうるさいですから。それに、何もせずに世話だけしているとバレると怪しまれますし」

んー。確かにそうだ。でも、九歳で愛人は・・・。早すぎないか・・・？

「アミーシャ、僕にはまだ早いんじゃないかな・・・？」

「まあ、そうかも知れませんが、オーヴェルニュの次期当主の人体実験用ともなれば言い訳は立つはずです。評判は落ちるでしょうが、代々のオーヴェルニュは変人当主で知られていますから今更でしょう」

「ちょ、ちよつとまってアミーシャ。変人当主？ 何それどういうこと？ 俺初耳なんだけど？」

「ジュール様を見れば分かるでしょう。調合のこととなると我を忘れて変な笑いを上げだすんですから。そして、その血は連綿に脈絡とラウル様にも受け継がれていますし」

「え！？ 俺変な笑いかしたこと無いよ！？」

「そういつているのは本人だけです。周りは全員知ってますよ」

「んなばかな！ 俺は変な笑いなんてしたことない！」

「あ、あのー・・・」

俺はアミーシャと言い争っている横から申し訳なさそうに割って入って来る声に本来の目的を思い出す。

「えあ、ごめん忘れてた。そうだった。まずはセレーネとエドユミの今後の方針だったね」

「むぐぐぐむぐー！！」

アミーシャに口を塞がれたままのエドユミが何か抗議のようなことを言っている気がするが、どうせエドユミなので聞き流す。

そして、もしゲルゴウエアに困うと名目で住ませた場合の事を考える。

一つ。毎月生活費を渡さなければいけない。これはまあ別に問題ない。魔法薬を売ったりすればいいわけだし。

二つ。定期的に様子を見に行かなければならない。完全放置だとはやり妙に思われる。・・・あれ？ 様子を見に行かなければならない？ 定期的に？ それって僕でもまだ近くにあるのに数回しか行ったことがないゲルゴウエアに定期的に行けるって事か！ ってことは超絶歴史の古そうな建物を定期的に見れると言うことか！ 決定したな。

「セレーネ。僕は概ねアミーシャの意見を採用するつもりだけどど

うかな？」

「え……。あ。い、いいんですか……。？」

上目遣いで、顔を赤らめつつも聞いてくるセレーネ。かわいすぎ
らと思ったのは俺だけか？　こんなの、断れるはず無いじゃないか。

「僕は問題ないさ。大事なのは、君らが良いのか嫌なのか、ってこ
とだからさ。それに、友達も欲しかったしね。街にも行けるし」

「へ？」

「いや、こつちのことだよ」

危ない危ない。アミーシャにまた目をつけられるところだった。

俺はそう思いながらアミーシャのほうをそつと見る。

ジロリと睨まれた。

聞かれてましたねこれはい。分かりました覚悟しときます。帰っ
たら訓練数倍ですねはい文句？　いえいえありませんとも。

「され、そうと決まればこんな衛生環境が悪いところで住む必要な
んでありませんし、まずあなた達の方も宿を取りましょう。それか
らあなた達の身体を洗って、これから当分着る服を買いに行きまし
よう。その身なりは目立ちますし」

「な、なにもそこまでしていただかなくても……。！！」

セレーネが偉く恐縮している。そんなに恐縮することかな？　ここで会ったのも何かの縁だし、旅は道ずれ世は情けって言うじゃないえ？

「お金なら僕がもう稼いでるから問題ないよ。平民の平均生活水準くらいを二人分程度なら全然楽勝さ。まあ、いつかは身体で払ってもらっけどね」

「か！　身体！？」

「むぐー！　むぐぐぐー！」

「ちゃんと働いて返してもらっさ。利子無し出世払いでいいよ」

「え・・・、働い、て・・・？」

「そうだよー。それに利子無しなんて、かなり良心的でしょー？」

「そ、うですよ。私なんて別に・・・」

「ん？」

「うぐぐ、んぐぐぐぐ」

「ええ、それは今に始まったことではありませんし。さて、ラウル様が方針をお決めになったのなら行きましょうか。まずは宿、そして風呂に入って、服ですね」

「あ、うん。じゃあ行こうか。これからよろしく。セレーネ、エドゥミー。」

「よ、よろしく願いします・・・」

と、下を向いて答えるセレーネ。か、可愛すぎる・・・。なんでも
買い与えてしまいたくなるような、そういうものを引き出させるよ
うな可愛さだ。

「よろしく」

それに比べてエドユミの無愛想さつたらないね。そのうちアミ
ーシャに礼儀作法をたたき込んでもらおう。

アミーシャと俺、そこに二人を追加した俺達の帰路は、行きより
も確実に安全に且つ確実にゆっくりになることを予想して受け入れ
た俺に隙はなかった。

それと、今後のことなどを考えながら、俺たちは幽霊屋敷のよう
な家を出るのだった。

第20話 姉弟への対応（前書き）

すみません……。また遅くなってしまいました……。

定期的に更新できてる人って本当に凄いですね。

でもまあ連載を途中で止めたりはしませんのでその辺は安心して下さい。

止めるのは最低でもこれを完結させてからです！

第20話 姉弟への対応

「やっと、やっと着きました……」

アミーシャが精神的に疲れた様子でため息を漏らす。

「なんだ、もう着いちゃったのかあ」

俺は落胆した感じでため息を漏らす。

「長かった……。ほんっとーに、長かったです……」

「なんでさ。たったの二週間じゃないか」

両方がため息を漏らしているが、その意味するところは全く違う。

「最初の行程は一週間で行けたのに、帰りに倍になんて考えられま
せん……」

「景色を見て回るんだからそのくらいは当然だよ。むしろ短かった
くらいじゃない？」

「あはは……。まあ、確かに少し見たり無い感じはしますね……。」「

俺とアミーシャの会話にセレーネが入って来た。

「セレーネは俺の味方なんだねー。さすが、芸術を解する人は違うよ」

「なんですかそれ。まるで私が芸術を理解していないみたいじゃないですか」

「え、理解できるの!？」

俺がアミーシャの発言に驚くと、アミーシャが頬を膨らませて文句を言う。やっぱり可愛いなアミーシャ・・・。

「失礼な！ 伊達に寿命は長くありません！ 芸術くらい解ります！」

「え!？ 師匠、芸術も解るんですか!？」

アミーシャの芸術が解するという発言に、初めてエドユミーは反応を示す。

そういえば、なんでエドユミーがアミーシャを師匠と呼んでいるのかというと・・・まあ、これは聞くも涙、語るも涙な話が合つてとつても長くなるので割愛。機会があれば語ろうと思う。

「な！ エドユミー、あなたまで……！ いいですか！ 芸術とはそもそも鑑賞者の見方次第で変わる物なのです！ ですから、私とラウル様の感ずるところの芸術が多少趣を変えたところで仕方がないことなのです！」

「でもアミーシャの良いと思うのは動物の行動とかじゃん。それっ

て芸術なの？」

「ラウル様。そも芸術とはそれを目的に造っていなかったとしても、鑑賞者が良いと思えばそれが芸術になるのです。ですから、動物の生態なども広義的な意味では立派な芸術の一種なのです！」

声を高らかに言うアミーシャ。言ってることもわからないでもないけど……。というか、なんか合ってるような気がしてきた……。

「さ、さすがです師匠！」

そして洗脳されているエドユミー。

「ま。それはとりあえず置いてだよ。これからの二人の処遇を、決まってるとはいえ実行する前に父上と母上に言っておかなきゃだよね」

俺は会話を本題に移す。セレーネとエドユミーも今後の自分達のことなので真剣だ。

「そうですね。こればかりは秘密にして後で奥様達にばれたら事ですし」

「問題はどのタイミングで切り出すかだよね」

父上達の反応を想定しながら会話の切り出し方の案をアミーシャと二人で話しあう。

俺の両親を知らない二人は完全に蚊帳の外だ。

「あ、これなんてどうでしょう？」

「いや、ちょっと待ってよアミーシャ。そんなしたら俺が危ないよ」

あーでもないこーでもない・・・

・・・

・・・

・・・

・

「あ、あの。いつそ秘密にしておくとか？」

そこに、沈黙に堪えきれなくなったセレーネが意見を言ってくる。完全に蚊帳の外のエドユミーは頭にハテナマークが飛び交っている。さすがに普通の五歳では致し方無いだろう。

「セレーネ。もしそれをしてばれたらね。母からは数百のゴーレムに肉薄されるし、父からは常に毒を盛られる危険を考慮しなければならんだよ・・・」

「え・・・？」

「ああ。言い忘れてましたが、ラウル様のお父様の二つ名は朝霧、お母様は土壌です。」

「え、それって・・・」

セレーネがまさかというような顔をする。

というか、父上と母上はそんな二つ名してたのか。初めて聞いた。

「まさか！ あの！？」

うおっ！ びつくりした・・・！ なんだよエドユミィ？ なんか知ってんのか？

「朝霧と言えば無味無臭の毒薬は元よりあらゆる秘薬を作れる生ける伝説の水メイジというあの！ そして土壌はトライアングルなのにも関わらずスクウエアよりも恐ろしいとされている・・・。」

「ちょ、エドユミィ？ いつからお前はそんな解説キャラに・・・？ バカキャラのはずなのに」

「なんだと！」

「い、いえラウルさん、この話は有名ですよ？ 少なくとも、亜人の怖い話と並び称されるくらいに。」

「え？ 俺の両親てそんな有名だったの？」

「あはは・・・まあ、決定的な意味ではないですけど・・・。」

「し、師匠！ 本当なのですか！？ こいつのご両親があの方たちだというのは！？」

エドユミィの問いに、アミーシャは簡潔に答える。

「嘘言ってるんですか」

「騙す」

それに俺は間髪いれずに言う。

「ハア・・・、騙してどうするんですか」

さすがアミーシャ。俺がアミーシャの答えを予測して言うことをさらに予測していたとは！ このメイド・・・、できる！

「で、結局のところどうするのかまだ決まってないよね。どうしようっ..」

「もう正直に話されてはいかがでしょう？ お二人とも悪い人ではないのですから無碍にはされないでしょうし」

「・・・やっぱり、それしかないかな・・・？」

「いいじゃないですか。怒られるのはラウル様だけなんですし」

「なんでさ!？」

屋敷に着くまでそんな得体のない話をし、結局は隠し事をしても無駄ということで正直に話すことになった。

「ほあー。お前、本当にオーヴェルニユの一人息子だったのな！」

客間に通され、両親が来るのを大人しく座って待っている時に始

終そわそわしていたエドユミーが堪え切れないうような様子で話しかけてきた。

「ってか信じてなかったんかい。」

「ラウルさんのご両親って、どんな方達なんですか？」

やはりセレーネも堪えられなくなったのか聞いてくる。

「やさしい人たちだよ。母様は少し加減を知らないところがあるけど」

セレーネに俺の両親の話をしていると、ガチャリ。と重厚な音を立てて扉が開く。

「おお、ラウル！ 良く帰ってきたな！」

部屋に入ってくるなり父上が俺に抱きつかんばかりの勢いで寄ってくるが、俺はそれを冷静に受け流す。

「はい父様。只今帰りました」

「ラウルちゃん、お帰りなさい」

「ただいま帰りました。母上」

俺は両親と何気ない帰宅の挨拶をする。その横で、ネルウィ姉弟が茫然と立ちすくんでいる。

「おや、ラウル。この子らは？」

立ちすくんでいる二人にやっと気付き、父上が聞いてくる。その質問に俺は答えようとするが、それより早くアミーシャが答える。

「ラウル様の愛人とその弟です」

「「なあっ!？」」

「まあっ」

唐突なアミーシャの発言に俺と父上が驚愕の声を上げ、母上は嬉しそくに口元を抑える。

「らら、ラウル!」

「ちちち違いますよ父様! まだ手は出してません!」

「あら、愛人というのは否定しないのね」

「母様! 話をややこしくしないで下さい!」

アミーシャの発言により、俺は両親からの質問攻めされる。
ちよ、マジ勘弁して下さいよ・・・。

・
・
・
・
・

「はあ。話を纏めると、偶然寄った街でたまたま会ったこの姉弟に感情移入してしまい養いたいと。そういうことだな？」

「はい、父様・・・」

「あら残念。愛人は理由付けだったの？」

「なにが残念なんですか母様・・・」

「私は、ラウルちゃんに愛人ができてもいいと思ってるわよ？」

「は、母様！ 僕はまだ七歳ですよ！？」

「なんならアミーシャも一緒に困っちゃいなさいな」

「母様！？」「奥様！？」

なんでそういう話になるんだよ！？ てか七歳のガキに何言ってるんだこの母親は！？

「むうう。君、たしかセレーネと言ったね」

俺が母上の質問に動揺している傍らで、父上がセレーネに話しかけていた。

「え？ あ、はい。そうですね・・・」

「君に一つ言っておかねばならないことがある。心して聞きなさい」

「え？ あ、はい」

父上の真剣そうな口ぶりに、セレーネも姿勢を正し、聞き入る体勢にする。

「そう、私はこれさえ守ってくれば何の文句も無いのだよ」

そして一呼吸置いてから真剣に、言い放つ。

「ラウルは、やらんぞ」

．．．．．

固唾をのんで聞いていた俺たちは一瞬何を言ったのか理解できなかった。

「あらあら。ラウルちゃんは、あげる側ではなくてもらう側ではないの？」

そこに、母上がさらに斜め上をいく発言を言った。

この両親は、もう駄目かも知れない．．．。切実にそう思ってしまった．．．。

それでなんだかんだと言い争い、結局のところネルウィ姉弟の住むところは距離的問題から首都のゲルゴウエアではなく、近頃母上

主導の元で開発計画が進む屋敷近くのクレルモン＝フェランに住むことになった。

姉弟が住む家は母上が直々に家を建ててくれた。お金は容赦なく取られた。いやま、俺も薬作って売ってるから別にいいんだけどさ。それと生活費も置いてきた。今まで無一文生活をしていた姉弟は「多すぎる」と言っただけで受け取ろうとしなかったが、そこはそこ。やはりオーヴェルニュとのつながりを持つ人間、それも次期当主の暫定愛人ともなれば相応の生活をしてもらわなければならないだろう。

「ということで、それなりの身なりとかして生活してね。暫くしたらまた来るからさ」

「あ、はい。ありがとうございました！ ほら、エンドユも！」

頭を深々と下げ、それをエドユミーにもさせようとする。

「・・・あ、りがとうございます・・・」

「あいよー。じゃあまた」

「は、はいっ！」

「二度と来んなー！」

エドユミーの皮肉の言葉を後ろから聞きながら、建設中の街の入り口に向けて歩く。

さて、帰ったらまず溜まっていた俺の考えた魔法薬を調合しようかね。脂肪燃焼薬に脂肪増加薬、千里眼剤から身体透過剤までいろいろある！ うふいふいふいふい。たあんのしくなってきたああああ

あああ!!!

第20話 姉弟への対応（後書き）

感想を一言でもいただけるといろいろ上がります。

俺も生きて良いんだね。うん、頑張るっ！ って気分になりますの
でよろしくお願いします。

第21話 歯車は動きだす（前書き）

大変お待たせしました！

課題が現実逃避できる余地もなく詰まってまして・・・。

現在やっと現実逃避できるだけの課題消化率となりましたので投稿させていただきます。

待っててくれた方は大変お待たせしましたすみません！

定期更新がどののと言っていたかかつての自分を殴りたいです。

というか定期更新したいー！

マジ定期更新できてる作者さんはすごいと思う。

第21話 齒車は動きだす

んー。脂肪燃焼薬は調合が甘いなアー。あれじゃあ実験段階とかの工程にはまだまだ進めないな。考えてる時はいけると思ったんだけどなー。やつぱり考えるのと実際にやるのじゃあ全然違うや。脂肪増加薬はカロリーを脂肪に行きやすいようにするだけだからすぐなんだけどな・・。千里眼剤は大層な名前が付いてるけど実のところ目がすごく良くなるだけだし。物質を透けて向こう側とか無理だしね。でも飲んだだけですぐに効果が出るようにするのは難しいなー。えーっと、まずは調合比率を――

「ラウル様、着きましたよ」

声がかけられる。しまった。また我を忘れて没頭していたみたいだ。んー、どうにもこの癖は直さないとだめだなー。

「わかった。今降りるよ」

そう言っただけで馬車から降りる。すると前から蒼い何かがある。スピードでタックルしてきた。

「ゴフッ！　ぐ・・っ。シャル・・・。俺は逃げたりしないから、今度からはもう少し平和的にお願いできないかな・・・」

「だって！　だつてずっとラウルにいさまとあえてなかったのよ！
？　シャルさみしくて・・・」

そう言い、目に波々と涙を浮かべる。

ちよ！　ま、アミーシャ！！

アミーシャに助けを求めようと居るであろう方向を見るが、そこ
にはすでに居ず、遠くに馬車の後姿だけが確認できた。

「そんな程度でいちいち泣いてんじゃないよ！　まったく、だらし
ないったらないね！」

そこに状況を変える鶴の一声。

これは数か月に一度来るイザベラ嬢の声！　今回はその月か！
ありがたい！

「ぐすつ。泣いてないもん・・・」

「嘘お言いでないよ。そんなに涙をためてさ。ほら、拭いてやるか
らこっちきな」

そう言つて近くに寄せ、ハンカチで涙を拭いてあげるイザベラ。
そんな二人の姿に不覚にもラウルはキュンとしてしまう。

「ほら！　あんたもぐずぐずしてないで行くよ！　まずこの子の両
親に挨拶しないといけないからね！」

「ああ、はいはい。今行くよ」

イザベラに連れられてシャルルさん達への挨拶をすませ、とりあえずいつも集まるところに行く。

「で、今回は何すんのさ」

イザベラがものすごく大きい態度で聞いてくる。

「にいさまのおはながききたい！」

「またかい！ 私はどうかで体をうごかしたい気分だよ」

間髪いれずに答えたシャルロットの答えに、イザベラはいつもそればかりじゃないかと意を唱える。

この二人を待っててもいつまでたっても決まらなさそうだったので、いつも俺たちを一步離れた所から着いてきているトーマスに話を振ってみる。

「んー、トマは？」

「えー！？ いえ、なんでもいいですよ？」

さすがに平民が貴族に意見するのはどうかと思ったりしたのだから。空気を讀んだ曖昧な返事が返ってきた。

はあ……。なんかもうめんどくさいから二人の折衷案でもだすか。

「んー、確か、この近くってなんかでっかい湖なかった？」

「ラグドリアン湖ですか？」

俺の考えにトマ君が気づいてくれたのかいないのか、すぐに湖の名前を覚えてくれる。

「あーそうそう。そこでゆっくりするってのはどうかな？」

「……………」

二人は俺を見ながら沈黙する。

どうしたんだ？　なんかアクションくれないと俺は不安で仕方がないんだが……。

「ラウルにいさま！　それいい！！」

「はあ、それで手を打ってやろうかね」

「じゃあ、さっそく父様に昼食を作ってくれるよう言ってきます」

俺の意見に三人は賛成してくれる。そしてトマはさっそく準備に取り掛かってくれる。

「さあ、僕たちも準備しようか。なにか持っていくものない？」

「んーっとねー、んーっとねー！　タバサにー、絵本にー……」

「そんなに持つて行つてどうするつてのさ。私は本を三冊程でいいよ。ラウル、用意しな」

マジすか……。てかどんな本がいいんだ？ 俺、雑食だから本の趣味を聞かれてもわからんぜ？

「で、でっけええええええ！」

向こう岸が見えないラグドリアン湖に向かって、俺は叫んでいた。

「うるっさいね！　もう少し静かにできないのかい！」

怒鳴るイザベラ。だが、ラウルにはそれすら全く聞こえずに感動していた。

「ねートマ。あの木のかげにもつおきましょ！」

「私も手伝いますよ。あそこですか？」

「あ、すいません、アミーシャさん」

俺が叫ぶ傍ら、イザベラは俺に文句を言ってくるが、アミーシャ、シャルロット、トマは腰を据えるところを決めて荷物を置きにかかっている。

というか徒歩で二時間で来れるとこだったのかここ。全然知らなかった・・・。

近いのにいいとこだね。これから毎回来ようかしら。

「よい、っしょ。まずはお昼ご飯を食べましょうか」

「うん！ もうおなかぺこぺこー！」

「僕がだしますよ」

テキパキと用意していくトマ。

「本当、ラウル様と同じ年とは思えませんか」

「え？ なにか？」

ラグドリアン湖に夢中で全く聞いてなかった・・・。

「いいえ、ラウル様は僕にできないことができますから」

ん？ 俺？

「ねえねえ！ もう食べても良いの！？」

「ええ。空腹は敵ですからね。早速いただきますよう」

それからブリミルへの感謝を四人が言って、俺も適当に言って食べ始める。

アミーシャは優秀だなあ……。よく信仰をしてない神なんぞ崇

められるよ。その辺も見習わなきゃな。

「おいしー!!」

「おお！ さすがドナルドさんだなー」

「わるかないね」

口々に昼食に対して賞賛を上げながら食べる。

「ねえねえ！ おひるをたべおわったらなにする？」

昼食を食べながらもつ昼食後の事を聞いてくるシャルロット。

「隠れんぼ」

そんなシャルロットの発言に間髪入れず答える俺。

「・・・・・・・・」

顔を驚きに歪めながら俺を見、それから額に冷や汗を浮かべながらシャルロットを見るイザベラとトマ。

今までやった隠れんぼでラウルが一度として見つかってあげなかったのが原因であろう。

「いいですね、やりましょうか」

そこに、俺の聞きなれたよく通る声が響く。
だが、それにイザベラは反対意見を述べる。

「ちょ！ あんたわかってていつてんのかい！ こいつが本気になつたらかくれ通せることもできないし、探しても見つかりっこないんだ！ やるだけ時間の無駄じゃないか！」

そのイザベラの言葉にトマも頷くことで陰ながら同意している。

「そうですね、ならこいつのはどうでしょう」

それから一拍置き、息を吸って発表する。

「鬼が隠れる」

その一言の意味を、俺たちは反芻する。

鬼が隠れるとは即ち鬼一人が隠れ、鬼以外で鬼を探しにかかるということ。

なるほど。これなら俺は鬼から隠れる一人ではなく、人間達から隠れる鬼、ということになる。と、そこまで考えたところでさらにイザベラが意見を言う。

「ちょっと待ちなよ。これじゃあ何にも解決してないじゃないか。こいつがいつもみつからないから、私らはこれを反対だっ言ってるだよ」

「大丈夫です。今回は私がいます」

「は？ それはいったいどういうことだい」

「何を隠そう、ラウル様の動きの基礎を築き上げたのはこの私だからです」

「んなつ!!」

「……?」

一人だけ驚くイザベラ。トマとシャルロットは首を傾げてはてなマークを出している。

話が理解できているイザベラがさらに質問を重ねる。

「それというとなにかい? あんたは、こいつと同じくらい動けるってのかい?」

「ええ、まだラウル様には負けません」

イザベラはじつとアミーシャの目を見る。アミーシャもイザベラを見返す。それが数秒続く。

「……いいだろう、やってやろうじゃないか」

「ありがとうございます」

「ただ、もし勝って何もなしってのはいただけないねえ。なにかもらわないと」

俺に向かってそう言ってくるイザベラ。

なにあの挑戦的な顔。まあ、負けないから何を吹っかけられても平気だけど。

「いいよ、なんでも言っこと聞くよ。で、もし俺が勝ったら?」

「結婚してやるよ。」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

ちよつと待つて……。今、何かとんでもないことを何でもないかのように言わなかつた……。？ 結婚？ それつて確かあれだよ。男と女のあれだよ。俺の両親のようなあれだよ。

「それと、もし私らが勝っても結婚してもらおう」

どうしろってのさ!？ 勝っても負けても結婚って!!

「シャルロットが」

「つて、ええええええええええ！」「

お前ちゃんかい！！　　という突っ込みがイザベラに向けて放たれる。

「お、おやつなどにしませんか？」

と、アミーシャが別の案を出す。シャルロットは俺との結婚という妄想に入ってしまった、下を向いているが俺とトマは全力で首を縦に振っている。

「・・・ちっ。なんだい、意気地のないやつだね。もういいよ。それで」

イザベラがふてくされた風に言う横で、アミーシャが疲れたように言う。

アミーシャを疲れさせるとかなかなかだぞ・・・！

「では、今日のおやつをかけるということでもいいですね？」

「・・・ああ」

「それでは、昼食も食べ終わりましたし始めましょうか。三十分後に探しに行きますので、それまでに隠れてください」

「了解、それじゃあ」

そう言つて森に足を踏み入れ、気配を消して存在を限りなく薄くする。

「あれ？ にいさま？」

「すごい・・・。まさか私が完全に見失つてしまうなんて・・・」

アミーシャでさえラウルの気配を見失つてしまう気殺。素人でありさらには子供であるシャルロット達には見つけられるはずもないだろう。

一時間後。

「さつてと、みんな森に入ったし、ちょっと湖で泳いでみるか！」

アミーシャ達がラウルを探しに森に入る気配を確認してから、見

つからないように湖に畔に出てきたのだ。

そしてラウルは服をパンツ一枚残して脱ぐ。

「ひゃっほあう！」

飛び込む際の定型句を述べつつ湖に飛び込むラウル。だがラウルは一つ、根本的であり且つ最も重要なことを失念していた。

ラウルは前世でも今世でも、水泳というものをしたこと無かった。

「がばべばごぼっ！」

そして案の定、飛び込んですぐに溺れるラウルの声が聞こえてきた。

「べべばうべば！」

あまりのことに気配を消すのを忘れて必死になっていた。

普段のラウルであれば冷静に対処した問題であるだろうが、興奮していたラウルは冷静に対処するということが完全に頭から抜けていたようだ。

「皆さん！　こっちです！　気配がこちらから！」

ラウルの気配を察知したアミーシャが他の三人を呼びつつ戻ってくる。

「ラウル様！　何をしておられるのですかー！」

「べべばうべば！　ばばば……」

体力も息もまだまだ続く自信があつたラウルを、何かが下に引つ張り沈んでいく。

「にいさましずんじやったよ!？」

「誰か泳げるヤツはいないのかい!？」

「泳げませんけど僕が行きます!」

「二次遭難するだけです! 私も泳げませんし・・・何か手段を考えましょう!」

地上ではラウルを助け出す作戦を考えているが、沈むラウルはそれどころではなかった。

「がばべばべ!」

ラウルは沈みながら、ここで死ぬかも知れない。と思った。

足掻く気力もなくなり、足掻くことを止めて水面を眺める。水中から眺める人生最後になるかもしれない景色はこの上なく綺麗で、ここで死ぬのもいいかもしれないと感じたその時、ラウルの周囲の水が渦巻き、何か声のようなものが聞こえてきた。

『我の一部かと思い回収してみれば何のことはない。単なるものか?』
んだこの声? 俺は最期の景色を楽しんでんだからじゃまずんないよ・・・。

『それにしても我が一部と単なるものを間違えるとは』

あ？ てかお前は誰だ？　なんで水中でこんなにはっきり声が聞こえるんだよ？

『これほど我と高い親和性を持つ単なるものは初めてだ』

おいおい、人の話聞いてんのか？

『このまま我の一部にしてしまうのも良いが』

一部にする？　ざっけんな。俺が、お前を俺の一部にしてやる。

『ふむ。単なるものらしい言い方だ』

だから早く出しやがれ。　さすがにもう死にそうだ。

『よかるう。ではまた来い』

あー、トラウマにならなきゃあな・・・。

そんな会話かどうかさえ疑問視できる問答を終え、水面に浮上する。

水面に出てまず息をし、岸に向かって犬掻きの要領で沈まないように泳ぐ。

あれだわ。水泳選手とかマジすごいと思う。今日ほどシンクロナ

イズドスイミングとかの選手をすごいと思った日はないね。この辺には泳ぐようなところがないから全然水泳なんて眼中になかったわ・・・。

「ラウル様！」

「にいさま！」

岸にたどり着くとアミーシャとシャルロットが真っ先に駆け寄ってきてくれた。トマとイザベラも心配そうにしてくれてる。ありがたいことこの上ない。

俺は地面に体を預け、地面があることと呼吸ができることに感謝した。

「ラウル様！　大丈夫ですか！？」

「んあ、まあ大丈夫。泳いだことないのを忘れてたよ」

「まったく・・・、何をやっているんですかもう！」

アミーシャが心配そうに体を拭いてくれる。その横から、シャルロットが話しかけてきた。

「にいさま！」

「大丈夫だよシャル・・・もうちょっとしたら立てるから」

「にいさまみつけ！」

「・・・え？」

てつきり心配してくれていると思っていた俺は思わず聞き返してしまっ。

そういえば、湖に飛び込む前に何かしていた覚えがあるな・・・。

「かくれんぼだよにいさま！ はじめてにいさまをみつけちゃった
ん」

「ああそういえば。ラウル、あんたのおやつは私たちがきっちり分けて食べてやるからね」

まじっすかイザベラさん・・・。

「今日はちよつとした遠出なだけあつて父上も力を入れてくださいましたからね。楽しみです」

トーマス、お前まで！？

「ちよ、これは無効で・・・」

「溺れたあんたが悪いんじゃないのさ」

いやまあそうだけどさ・・・。

「ラウル様、今回は諦めてください。私の分は・・・」

「もしかして分けてくれんの！？」

「絶対に分けませんけどね」

アミーシャのその一言が俺以外の琴線に触れたのかアハハと笑いだす面々。

アミーシャと、一緒になって笑う三人の笑顔をみて俺は、今日くらは負けてあげてもいいかもしれないと思った。

「やっぱり無効にしてもらったとくんだった・・・」

「いまさら遅いよ」

「おそいよ」

イザベラとシャルロットが言うてる中、俺は後悔と自責の念で一杯になっていた。

「だってめっちゃめっちゃおいしそうなんだぜ？ 誰かちょっとくらいくれてもいいじゃんか・・・」

「ラウルさまはいつも貰っているじゃないですか」

「そうですよ。我慢を覚えてください。絶対に分けませんから」

んなダメ押ししなくても・・・。

俺は今までこんなにひどいことを三人にしていたのかと思うと申し訳ない気持ちで一杯になる。でも後悔はしない俺はつくづく図太い神経の持ち主だと自分で思う。

そんな会話をしてみんなが俺の分のおやつまで食べ終わったころ、オルレアン公が馬に乗って現れた。その顔はどこか焦っているように、どこか期待に胸を躍らせているようでもある。

「シャルロット！　こんなところにいたのか！」

「お父さま？」

「ラウル君、すまないが今日はもう帰ってきてくれないか？　これから忙しくなるのでね」

「ええ、それは構いませんが何かあつたんですか？」

額に汗を浮かべるオルレアン公が俺の質問に対し、言葉を選ぶようにゆっくり答える。

「今さっきガリア王の容体が急変したと連絡があつてね。今からリユティスに行かなければならないんだよ」

「本当ですか！　それは大変ですね、わかりました。僕はオルレアン公邸に三人を送り届ければ帰ります。オルレアン公は一刻も早くガリア王のもとに向かつてあげてください」

「そうかい？　すまないねラウル君、よろしく頼むよ！」

そう言つてオルレアン公はリユティスの方角に向かって馬を走らせ、瞬く間に姿が見えなくなる。

「……あーっと、というわけだからもう帰ろうか。アミーシャ、戻って馬を取ってきてくれない？」

「畏まりました」

言うが早いか声が聞こえた次の瞬間にはアミーシャの姿が見えなくなる。

「な！？・・・ラウル、あのメイドは一体何者なんだい？」

「え？ 俺のメイドだけど」

「・・・はあ。あんたに聞いた私がバカだったよ」

ん？ 何が言いたかったんだイザベラ嬢は？

それから、ものの四十分ほどでアミーシャは馬を二頭連れて戻ってきた。イザベラとトマが目を見開いて戻ってきたアミーシャを見ていたのは面白かった。シャルロットは素直に驚いてから、手品みたーいと言んでいた。

それから三人をオルレアン公邸に無事送り届け、俺とアミーシャは馬車に乗って帰路に就く。

「ガリア王は大丈夫だろうか」

「どうかしたんですか？」

馬車の中で、俺の独り言に対し返事を返してくれるアミーシャ。

「いや、ここでガリア王が死んだら次は誰が王位を継ぐのかな、と」

「そうですね。評判でいけばオルレアン公ですが、弟ですからね」

「その辺をどうするのか、気になるところだね」

「そうですね。ところでラウル様。溺れた後遺症などはないですよ
ね？」

「なんだ？ 心配してくれてんのか？」

「まあ、全然大丈夫だけど」

「帰ったら、新たに水の上を走る訓練をしようかと思うんですが」

「・・・は？」

何言つてんだこの娘は？ 水の上を走る？ できるわけないじゃない
すか。

「で、できるわけないんじゃない？」

「いえ、水に沈み前に足を出してその足が沈む前にさらに足を出す。
こうすれば実質水を走れることになるのではないかと」

「いやいやいや、アミーシャさんや。それは机上の空論、つまりは
実現不可能なことなのですよ？」

「それはちよつと・・・無理があるんじゃないやあ・・・？」

「そんなもの！ やってみたいとわからないじゃないですか！」

「ええー・・・」

俺の反論が気合の一言で一切通用しない肉体言語系メイド・アミ
ーシャの暴論に対し、俺の声は尻すぼみになっていく。

「帰ったら覚悟しておいてくださいね！」

「・・・」

最期には、反論を諦めた俺が静かに馬車の隅で三角座りしていた・
。。。

第21話 歯車は動きだす（後書き）

感想・意見・指摘など頂けると嬉しいです。

こことかこうした方がよくない？ とかいう意見も随時募集しておりますのでよろしく願います！

それでは、定期更新を目指し、今回はこの辺で終わらせていただきます。うかと思います。

第22話 転機（前書き）

更新遅れてすみませんでした…。

なんか気付いたらこんなに時間が経ってました…。

家でネットサーフィンしてた記憶しか無いのに……………。

まあ、そんなこんなで久しぶりにうぶしようと思います。

これからも、（時間は開くかも知れませんが）更新は続けていくつもりですので、なにとぞ長い目でよろしく願います。

第22話 転機

あれから、ラウルを取り巻く周囲は目覚ましく変化した。時間の流れが速まったと言っても良いかもしれない。

とにかく彼の周囲の状況はガラリと変化した。そしてその状況を必死に把握しようとしているうちに気づけば時間が流れていた。

あれから起こった事件で一番大きいのはやはりガリア王が死んだことだろう。

そしてオルレアン公が次期王に選ばれると思われていたが、先代ガリア王の遺言によりジョゼフ公が次期王に選ばれた。

これによって反乱など何がしかの反対運動が起こるかもしれないと懸念もされたが、オルレアン公はジョゼフの王位継承を祝福したために表向きは特にクーデターなども起こることなく、無事にジョゼフが次期ガリア国王に即位するということでガリア王継承問題は片付いた。

だがオルレアン公は王位を諦めたということではなく、ジョゼフ派などの貴族をオルレアン派に塗り替えるべくオルレアン公と、その派閥に所属する貴族の暗躍は始った。

オーヴェルニュ現当主、ジュール・アルウエルニ・デュ・マ・オーヴェルニュはオルレアン公に最初に声をかけられた。だが、オーヴェルニュ当主は考えることもなく断った。あくまでオーヴェルニ

ユ家はガリア王国に属する貴族であり、どこかの派閥に属することはないという旨を伝えたそうだ。

オルレアン公はその答えを聞き、気にすることは無いと言って笑顔で去って行ったが、ラウルの見る限りでは腹に何か黒いものを抱えているように見えた。

もちろん、オーヴェルニュ当主が断ったことからオルレアン公の屋敷には遊びに行くことは無くなり、自然とシャルロットに会える機会は減った。

もともとラウルを屋敷に呼んでいたのも、オーヴェルニュ当主と会って説得するという裏があつたためだろう。会う必要がなくなれば呼ぶ必要もなくなる。それにより、ラウルがオルレアン公の屋敷に呼ばれることは無くなった。

それからラウルが旅行がしたいと言っても、現在はどこも無所属な日と見貴族を派閥に取り込もうと必死なオルレアン派とそれを阻止しようとするジョゼフ派の熾烈な争いが、決して表に出ることはなく水面下で行われている状態ということで行かせてもらえない。

そんな理由からラウルはアミーシャに訓練をつけてもらうか、秘密部屋で魔法薬を作るしかないという、なんとも寂しい、もはや二トとしか言いようがないようなかつての生活をしていた。

そんな、寂しい生活から約二年半の時が過ぎた。

ラウルは九歳、約せば十歳になり、シャルロットはちょうど七歳になっているだろう。

そしてラウルは、今日は屋敷の近くの森でアミーシャと訓練することになっていた。

「アミーシャさあ？ 僕、アミーシャとの訓練を始めてもうすぐ八

年になるじゃん？　ほんつと、そろそろ勝ててもいいと思うんだよね」

「奇遇ですねラウル様。私も、訓練を初めて百二十年になります」

ラウルの言葉に皮肉で返すアミーシャだが、ラウルはさして気にしているという風もなく話を続ける。

「ま、まあ、何はともあれ全力で当たるだけだよ。それじゃアミーシャ、今日はアミーシャが先に森に入る番だったよね？」

「ええ。では先に入って準備をしていますので、いつものように三百数えたら勝負開始ということできると嬉しいです」

「うん。それと今回は昼間だけど魔法も使っていないんだよね？」

「当然です。使わずに私に勝てるとでも？」

「だよね。じゃあ、遠慮なくいかせてもらっよ」

「望むところです。では」

そう言って森に入っていくアミーシャを見届けてから、ラウルは今回はどういう戦法で行こうかと考える。

「——三百。よしっ！ 水兵（トリトンッ）！」

三百を数え終わり、トリトンを七体出してから気配を消して森に入る。

「っ！ 一体やられた……いや、畏か」

さっそく自分の魔力の放出が切れる感覚を感じ、その途切れ方から状況を割り出す。

「（魔法を出すときは気配を消したままってできないからこれ以上数は増やせないし、なんとかあと六体でアミーシャを倒さないとい……）」

ラウルは気配を完全に消しているアミーシャを探しながら、ゆっくりと移動する。

始まってからどれだけ経っただろうか。最初に七体いたトリトンだが、今は三体にまで減っている。ラウル自身は無傷ではあるが、長時間気を張っているせいで精神的な消耗が激しい。

「はあ、はあ。俺もまだまだだな……。全然見つけれない……」

そう言いながらもラウルは、気配を消してアミーシャを探し続けている。

そして、森の少し開けた場所にどうかという時、どこからともなくアミーシャの声が聞こえた。

「そうですね。私もラウル様がこちらに来るまで全く気配を感じられませんでした。やはり隠遁だけは流石としか言いようがありませんね」

その言葉が途切れた瞬間、周囲から端を削って先が尖った棒と、クナイが無数に飛んで来た。

「クソッ！——」

ラウルは咄嗟に水の壁を作り、周囲を防御する。

「上がガラ空きですよ！！」

その声と同時にラウルの頭上に陰が落ちる。
だが、それを予期していたかのようにラウルはほくそ笑む。

「空けておいたんだよ！」

周囲に展開した水の壁から、幾本かの水の鞭を出して頭の上のヒラヒラしたメイド服を薙ぎ払う。

そして水の鞭に薙ぎ払われた物体は少し離れた地面を転がり、木にぶつかって止まる。

「やったかッ！」

その物体を確認しようと水の壁を解き、近づく。

だが、それはメイド服の中に木を詰め込んだものだった。そして、ラウルはそれに気づき、再度水の壁を展開しようとするが遅かった。

「今回は惜しかったですね。ですが、戦場では生きるか死ぬかです――」

その声は地面から聞こえた。

木の葉の下に潜り込み、罾を張り巡らせてチャンスを伺っていたアミーシャが、次の瞬間にはラウルの背後に立ち、頭を強打する体勢に入っていた。

「――惜しいなどという言葉は存在しません」

ゴッ！ という音が聞こえ、ラウルは全身に力が入らなくなり、目の前が真っ暗になるような意識が遠くなっていく感覚に襲われる。

「う、あ……」

身体が自由が効かず、だんだんと地面が近づいてくる景色を、ラウルはまるでスロー再生を見ているかのような感覚で見る。

「ですが、流石に今回は肝を冷やしました。ラウル様のトリトンの習熟度がもう少し高く、手足のように操れていたのなら、勝負は解らなかったかもしれません」

地面に倒れても尚続くアミーシャの反省会を、俺は遠くなる意識を必死に引つ張り戻そうとしながら聴く。

「並の相手にはアレで十分でしょうが、手練れですと少々懸念が残ります。これから鍛えていきましょう。ですから、いまはゆっくりと休んで下さい。お疲れ様でした」

「あ………、お………」

アミーシャの言葉を最後まで聴き、返事を返そうとしたところで限界が来たのか、ラウルは意識を完全に手放した。

「ふう、あれで倒せて良かったです……。森の中で、ラウル様以外誰も見ていないからと言っても流石に裸のままで戦うのは恥ずかしいですからね……。さて、それでは服を着てから夕食の食材でも探しに行きましょうか。ラウル様は目を覚まさないでしょうから木の上にも寝かせておきましょうか」

そう言うてからいそいそとメイド服の中から木を出すアミーシャ。妙齡の、柿色の長髪のとびきり美人で胸の大きい女性が裸で作業する姿はなんともしュールで目を引く光景ではあったが、完全に気絶しているラウルは見る事ができなかったのだった。

「とんでもない損をした気分ですッ!!」

いきなり何かを叫びながらガバリッ! と飛び起きるラウル。木に凭れかけられ、布団代わりに木の葉をふんだんに掛けられて寝かされていたようで、起き上がった衝撃で大量の木の葉が舞い散る。

「もっつ! 荒らさないで下さい!」

前方で火を起こして何かの肉を焼いているアミーシャが、肉の方向に散っていく木の葉を全てを叩き落としながら声を上げる。

木の葉を打ち落としているアミーシャの声色に変化がなければ、それを見るラウルにも驚きの感情などは見られず、平然とした態度で言葉を返す。

「あ、ごめんアミーシャ。なんつかめちゃくちや損をしたというか、男としてありえないことをしてしまったように感じてさ……」

「はあ？ よくわかりませんが、お肉が焼けますのでまずは夕食を食べましょう。お皿と水を出していただけますか？」

「あ、うん……」

全く相手にされないラウルは素直に返事をしてから木片から皿とコップを錬金し、コップに水を注ぐ。

「塩しか持ってきてなかったのいつもの味ですが、帰ったら夕食がありますからこれで我慢してくださいね」

「いやいや、僕はこれが一番好きだよ？ この大味感がたまらないよ。いたふあきます」

いただきます、を言い終わる前にすでにかぶりついているラウル。ラウルが食べるのを確認してから、アミーシャも肉を頼張る。

「あー、やっぱりおいしいなあー。屋敷での食事もおいしいんだけど、この大雑把な男料理感がまたたまらなくて……」

「……………」（コクコク）

食べながらも話しを続けるラウル。それとは対称的に、アミーシヤはコクコクと頷くだけで食事中に声を発する気配がない。

どうやらラウルは食事時にも喋る派、アミーシヤは喋らない派のようだ。

「夕食までに帰ればいいんだよね？　じゃあちよつと森を散策して帰ろうよ。魔法薬の材料とか探したいし」

「……………」（コクコク）

それからラウルは話し続け、食事が終わると火を起こした形跡などを隠滅してから魔法薬の材料となる草などを探しながら帰路に付いた。

そして一通り秘薬の材料を集め、森から出たとき最初に目にしたのは屋敷のある方向から上がる火の手だった。

「燃え、てる？　あつちつて家の方角だよね、あれ？　もしかして燃えてるのつて屋敷…………？」

「ラウル様…………、落ち着いてください。家には奥様に旦那様、それにエドワードさんが居られるのですよ？」

「でもさ、もし誰かから襲撃でもされたとしたら…………」

「一体誰が襲撃するというのは？ 他人から恨みを買っようなことはしておられないはずですし、並の盗賊であれば奥様がエドワードさんで十分ですし」

「いや……、今のオーヴェルニユには襲撃の可能性は実際数えきれないくらいあるよ……。オルレアン派の誘いを蹴ったし、ジョゼフ派も未だにオーヴェルニユをオルレアン派だと思ってるだろうし。王宮貴族もオーヴェルニユを恐れてるしね……」

屋敷の方向が燃えているというだけで、ラウルの頭から嫌な可能性ばかりが湧いて出てくる。それをアミーシャが否定していくが、その根拠さえもラウルは嫌な可能性で潰していく。

「…………、とりあえずラウル様は隠れていて下さい。様子を見てきます。一時間で戻ってこれなかった場合はラウル様一人で逃げてください……」

「そんなっ！ 僕も行くよ！」

「いいえ、もしラウル様の仰る可能性が実現していた場合ですと多勢に無勢ですので」

「僕にはトリトンが！」

「手足のように操れないのに戦場で役に立つと思っているのですか？」

食い下がるラウルを、今度はアミーシャが冷静に諭す。

「でも！」

「事態が確認できればすぐに戻ってきます」

尚も食い下がろうとするのを止め、戻ってくるというアミーシャ。その目を見つめ、本気であると確信してからラウルは食い下がるのをやめた。

「わかった。一時間だけだからね……。それ以降は僕の自由にさせてもらうよ」

「ラウル様っ！」

「これが最低条件。それが嫌なら戻ってきてよ」

「……わかりました。必ず戻ってくるので待っていてくださいね」
「……………うん」

条件を飲ませ、ラウルは固く握った拳をアミーシャに悟られないようにしながら送り出す。

実際、アミーシャが戻ってくるのに一時間は掛からなかった。

「エドワードさんが戦っていました！同時に、国には敵わないから逃げろ、と風で私だけに聞こえるようにも……………」

「父様と、母様は……………」

「……………」

「……そう、か……………」

ラウルは、今すぐ屋敷を襲った人間を殺したいという抑えきれない衝動に駆られた。だが、それは表に出ることはなくラウルの体内で燦る。

今、出して無計画に暴れたとしても敵わないのはわかりきっているから。

それなら確実に復讐できる力を得てから犯人を見つけ出し、生まれてきたことを後悔するような苦痛を与えてから殺す。

そうラウルは誓い、火に包まれ焼け落ちていく屋敷を心に刻みながらアミーシャに声を掛ける。

「逃げようか、アミーシャ。これ以上ここにいても何も無いし」

「……………はい……」

ラウルの言葉に絞り出すような返事をし、再び森に入るために目をその方向に向ける。

「ラウル様……!」

森の方に目を向けると、後ろで剣を振り上げる人間の姿が見えた。そしてラウルを庇うように抱え、敵に背中を向ける。

ラウルは何が起こっているのか理解できずアミーシャの為すがままにされていたが、アミーシャから響く何か堅い物が柔らかい物を

切り裂く音に、瞬時に全てを理解する。

「ッ！！ 油断した！ アミーシャ伏せて！！」

ラウルの言葉を聞きアミーシャは痛む身体に鞭を打って伏せる。
次の瞬間、アミーシャの頭上を何かがバビュンッ！ という凄
音を立てながら通り過ぎた。

「ガベッ！！」

通り過ぎる音を聞いてすぐ、ラウルともアミーシャのものとも違
う声したが、それはもう声を発することはなかった。

「アミーシャ！ 大丈夫！？ これ飲んで！」

アミーシャを斬りつけた人間の絶命を確認してからすぐにアミー
シャに近づき、自分で持っていた秘薬をアミーシャに飲ませようと
する。

「す、みません…… ラウルさま…… 油断、しました……」

「何言っただよ！ 今はそれどころじゃないだろ！？ これ、秘
薬だから早く飲んで！」

ラウルは必死に秘薬をアミーシャに飲ませようとするが、アミー
シャはそれに首を横に振りながら答える。

「吸血鬼には、効きません……」

「アミーシャ、ハーフじゃん！！」

「それでもです……。ですから、それはお金に困ったとき売って下さい。少しは逃げるお金の足しになるはずですよ」

「俺も秘薬作れるから！　こんなのあってもなくても一緒だから早く飲んで！」

「ですがガボツ！？」

背中から血が出続けているというのに何時までもあーだこーだと駄々をこねるアミーシャに、ついに痺れをきらしたラウルがアミーシャの口に向けて瓶を突っ込む。

「ガボバツ！　オボベー！！　ゴババ……………」

アミーシャが何かを言おうとしているが、ラウルはそれすらも無視して飲ませ続ける。

やがて瓶が空になり、アミーシャが飲み干したのを確認してから瓶を口から離す。

「な、何をするんですかッ！！」

「本当は口移しでやりたかったんだけど、最初に口にした人にしか秘薬は効果が出ないからね」

「なっ、なななななな」

「間接接触での摂取は効果ないんだよ。あ、やっぱり効かないなんて嘘なんじゃん」

アミーシャがうつたえてる間に傷がみるみる治癒していく。

「アミーシャ、こいつ見たこと無いか？ 確か昔エドワードに教えてもらった裏で有名な暗殺者の一人にそっくりなんだけど」

「そうですね。それで間違いないと思います。ですが問題は何故こんなに有名な暗殺者が私たちを狙うのかということですね」

「そんなの、金で雇われたからじゃないの？ ほら、エドワードがこいつは金さえ払えば誰でも殺すって言ってたし」

アミーシャはその言葉にそうですね……と返しながら言葉を続ける。

「それにしても腐っけていても殺し屋。私たちが動揺していたとはいえ、まさか背後まで近づかれるとは」

アミーシャが言葉を言い終えるか終えないかの瞬間、ラウルとアミーシャは互いに背中を庇い合う形で臨戦態勢を取る。

「……囲まれてるね……」

「十二、いえ四ですか。それにここから見える顔を見るに何故こうも裏の有名どころばかり……」

「そりゃあ、それぞれが欲しい物を国の力を使ってくれてやるとか言われたんじゃない？」

二人がそれぞれ声を潜めて話していると、顔が見えている裏の有名な一人が話しをし出した。

「今、軍を呼んだ。もうすぐ貴族連中が来る。それまでにお前らを殺せば、報酬は思うがままだとさ」

「やられ役のようなご丁寧な説明をどうも。冥土の土産ってやつですか？」

「ああ、俺は冥土の土産を大盤振る舞いする。メイドのように気が利くことから冥土のオーガと呼ばれている」

勝手に狙う理由から自己紹介まで、三を聞けば十三まで教えてくれる実に都合の良い敵が居て良かった。

これで、屋敷を襲った連中が少なくとも国の中でもの軍を動かせるだけの権力を持っている事が解った。これである程度誰が襲わせたのか絞れるだろう。

「どうも冥土の土産をありがとう。それとこれは俺の冥土の土産として言っとくけど、あんた達は俺には勝てないよ」

「ほおう。この状況でそんなことを言えるのか。なんとも大物なのか馬鹿なのか」

「ははっ、こりゃあいい。軽口を言い合える奴なんて今まで会ったこと無かったからな。新鮮だ。それに免じて、できるだけ即死させてあげるとするよ」

「……殺す！ ツ！？」

ラウルの一言に、周りにいる人間から殺気が容赦なく迸り、ぶつけられる。

今にも飛びかかってきそうな程な殺気なのに誰も飛びかかろうとしない。いや、飛びかかれぬ。

「やっと気付いた？ そう、あんた達はもう袋のネズミだ。追い詰めたのはあんた達だと思った？ 残念、ネズミはあんた達だったみたいだ」

ラウルは口を動かしながら、杖剣を持った手を上に上げる。魔法はもう発動しているので、後はさらに魔力を加えて効果を拡げるだけだ。

「敵の長話を悠長に聞いてやるほど、俺は優しくない」

その言葉と同時に杖剣は振り下ろされる。

魔法が敵の足下から効果範囲を拡げ、一瞬で全身が氷漬けにされる。

振り下ろされる前に自ら足を切断し逃げるという行動を起こす者もいたが、殆どの人間が逃げることもできず氷のオブジェになる。

「アミーシャこれ、ある意味豪華だよな」

「そうですね。裏の有名人が殆ど居るんですから」

アミーシャはラウルの軽口に同意する。

魔法発動中に俺が襲われないか周囲を警戒してくれていたみたいだ。

「さて、こんなことで時間を取られるわけにも行かない。逃げた奴はほっといてさっさと逃げようか。気配は覚えたから、狙いに来たら殺せばいいし」

そう言い、森に走るが、アミーシャはついて来ない。

「どうしたのアミーシャ？ 集団の気配が近づいて来てるから速く逃げよう」

「……別行動を取りましょう。私たちの顔を見た暗殺者は生かしておけません。殺してから逃げます」

「じゃあ俺も……」

「いえ、ラウル様は逃げて下さい。二手に分かれた方が追っ手の数を減らせるかもしれませんし」

別行動を提案するアミーシャにラウルは食い下がるが、アミーシャは一向に折れそうな気配がない。

「ほとぼりが冷めたら、絶対にラウル様を捜します。ですから、なんとしても生き延びて下さい……」

「アミーシャ……」

「ラウル様を見つけるまで、私も絶対に死にませんから」

アミーシャの気迫に気圧され、何が正しいのか、どういう事をすることが一番生存率が上がるのかということが考えられずに思考を鈍らせる。

「では、また会いましょう」

そう言い、ラウルの返事を聞く前に跳び去るアミーシャ。それを目で追いながら、今何をするべきなのかということを必死に考える。

「軍を相手にする……のは論外。今は逃げて力を蓄える」

頭の中を高速回転させてなんとか考え直してもやはり最初の意見にたどり着く。

そしてそれを実行させるためにラウルは森に消える。

ひとまずは国外に逃げるために。
そして、必ず屋敷に戻るために。

第23話 死に様（前書き）

テンション故の急ごしらえ！

まあ、いつもそうですが……。。

今回は感想が多くてテンションが高かったのと、レポートから逃げる現実逃避、そして久しぶりに筆が乗ったので今回、こんなに早く投稿させていただきます。

楽しんでいただければ幸いです。

第23話 死に様

ラウル達が森に出かけている時、屋敷に居るオーヴェルニユ夫妻に來客が来ていた。

「来るときは前もって連絡が欲しかったですな。千五百の軍隊で急に來られても困ります」

ジュールは迷惑だという意志を隠そうともせず素直に表情と言葉に表す。

「いやはや、申し訳ない。我々の追っていた反乱分子が此方に逃げたという報告を受けたまでは良かったのですが、追いかけている内に逆に輜重隊に奇襲を受けてしましまして……」

ジュールの言葉に、表向きは済まなさそうにしているように見える、隊長と思われるメイジらしきアッシュブロンドの男が答える。

「まあ来てしまったものは仕方ありません。今メイド達に食料を買いに行かせていますから、それまで休まれていて下さい」

「ありがとうございます……。買い出しに掛かった金は後日届けさせます故……」

「いや、金は結構です。困ったときはお互い様ですからな」

千五百人分の食料の金と言えば決して安くはないはずだが、ジュールはそれを不要と剛胆な事を平然と言つてのける。

「それでは兵を休ませさせていただきます。明日には発ちますので、どうか一晩だけご容赦下さい……」

「ええ、何か用があればエドワードに言いつけて下さい。できる限りの事はさせていただきますよ」

「ありがとうございます」

始終平身低頭で会話する男だが、目は表情と一致しているようには見えなかったし、名乗ることもしなかった。礼儀を弁えているように見えて全く弁えていない男に、ジュールは男が出て行った方向を見ながら心底疲れたようなため息をつきながら傍らに控えるアミスに声を掛ける。

「ふう………アミス、あの男のことをどう思った？」

ほんの少ししか会っていないはずなのに数時間分の気力を消耗したジュールに対し、アミスはしれっとした態度で答える。

「殺気が隠し切れてなかったわねえ。亜人でももつと上手く隠すわよあ？ 反乱分子と言うより、私たちに用があるのかもしれないわねえ」

「やはり、アミスもそう思うか……。王と王弟、そして宮廷雀達か

ら疎まれているのだろうか。何らかの動きがあってもおかしくはない……。ふう、ラウル達が出ていて良かった。メイド達にも暇を出したし、今この屋敷にいるのは私とアミス、そしてエドワードだけだよ。だが、十分だろうか？」

アミスに対し、挑戦するようなほくそ笑みを浮かべながら話す。そのジュールの表情に対し、アミスは挑戦を真っ向から受けるような自信ありげな表情を返しながら返す。

「あらあ？ 誰に物を言っているのぉ？ 私とエドワード、そしてジュールがいるのよ？ ふふ、十分すぎるほどよぉ」

「ははは、そうだな。私たち三人居れば怖いもの無しだな」

二人が笑顔で会話している。端から見ている分には仲の良い夫婦の会話だが、会話の内容を聞けば何を言っているのかと恐ろしくなる。

なにせ、たった三人で千五百と対等以上に渡り合ってみせると言うのだから。

「失礼します、ジュール殿」

「ああ、よく来てくれた。少し聞きたいことがあってね」

食料を買いに行かせたメイド達が戻ってくることなく商会により食料が配達され、エドワードが兵士達に振る舞っていたとき、軍隊の隊長格達七人がジュールに呼び出されていた。

「単刀直入に聞こう。反乱分子と君たちは言っていたが、具体的にはそれはどういった組織なのだ？」

「……………」

ジュールの質問に隊長格の男達は一瞬、余計なことを聞くな、という表情や気まずそうな表情になる。

「すみません、ジュール殿……。なにぶんそれは機密事項故、無関係の人間にお教えすることはできないのです……………」

そんな中、最初にジュールに挨拶に来たアッシュブロンドの男が代表して言葉を返す。

「そうか、まあよい。だがどういう組織かは言えずとも規模くらいは言えるだろう。私も襲われる可能性がある以上、無関係とはいかんからな。それくらいは知っておきたい」

「いえ、私たちも全力を持って討ち滅ぼします故、そのご心配には及びませんかと」

さらにジュールの質問に自分たちが必ず勝つと断言する。

自分たちが輜重隊に奇襲を受けたことや、千五百で追っているのに未だ補足できていないことを完全に無かったこととして会話しているようだ。

「……………なんの情報も渡さないつもりか」

「情報を渡すまでもなく、私たちが近日中に討滅すると言っているのです」

この言葉を最後に、二人はにらみ合いを続ける。

暫くにらみ合いが続いていたとき、ジュール達の会話を傍らで静かに聞き続けていたアミスが口を開く。

「貴方、もう良いじゃありませんかあ。なにも言わないというのであれば、一刻も早く私たちの領地から出ていただくだけでしょ？」

そのアミスの一言に、アッシュブロンドの男達の側が騒然となる。

「な！？ 明日までは待つていただけるのでは！？ それに反乱分子はこの領地に居るのですぞ！？ あなた方の領民が襲われては……！」

「……ふむ、私たちに自衛力が無いとでも？ 軍こそ各都市に分散させているが、それが到着するまで私たちが持ち堪えられないとでも思ってるのか？」

「ぐう……、し、しかし……」

ジュールの自信に溢れた言葉に、男は言葉をなくす。

「強者にはエドワードが。群にはアミスが相対する。この布陣であれば勝つことはできないが負けることはないよ」

ジュールは自信満々に宣言する。だが、そこにジュールの名前が

無いことに男は疑問を感じ、それを素直に投げかける。

「あ、あなたはどうするのです……!」

「ふ……、そんなもの…… 後方支援に決まっているだろう!」

自信を持って言うてのけるジュール。

地味さ故に男達はポカンとしているが、後方支援が無ければいかにアミスとエドワードといえど数日と持たない。それほどに重要な役回りだ。

「ふ……くふふ、クハッ、クウアー……ハッハ! そうですか、三人で持ち堪えるねえ。言ってくれるではありませんか。クハハ、では、私たちで試して見ますか?」

男は殺気を隠すのを止め、殺気をそのまま夫婦に向ける。

殺気向けられたと認識すると同時にアミスは杖を抜き、詠唱に入る。そして、殺気を感じた事がないジュールは何かヤバイ雰囲気を感じ、少し遅れてアミスの後ろにいそいそと隠れる。

「――、^{ゴレム}土兵!」

アミスは一瞬で詠唱を完成させ、屋敷の建材などを錬金して数十体の^{ゴレム}土兵を作り出す。

「くっ! やってくれる! お前達! 応戦しろ!」

アッシュブロンドの男はすぐさま最早事態が取り返しが付かないところまで来てしまったことを感じ、風の魔法を使い全ての兵に自分の声を届ける。

「一階はその執事の足止めだ！ 指揮はフネラルが執れ！ 良いか！ 執事は足止めだけで良い！ こっちが片づいたら行く！」

男は中空に向けて一通り叫び、それを終わるとオーヴェルニユ夫婦に向き直り、本性を隠すのを止めたのか凶悪な笑みを浮かべる。

「クハハ、どうも。お初にお目に掛かる。カカ・ド・ビスです。以後お見知りおきを。まあ、もう会うことはないでしょうが……」

ここに来て初めて名乗った男、カカ・ド・ビスと名乗る男。その男が、凶悪な笑みを浮かべたかと思えばすぐに詠唱を始め、風の刃を作りだし部屋の中で鎌鼬ゴレムを放つ。

その攻撃にアミスは土兵を周囲に寄せ、夫婦を守るように立たせる。

「風か、私とは相性が悪いな……。アミス、何とか風を止めさせられないか？ 私の毒が届かん」

「私もどうにかしたいのだけれど、一体だけ向かわせても削られて到底辿り着けないわあ。きつとトライアングル以上ね……」

夫婦は防御に徹し、室内で鎌鼬の嵐を放ち続けるカカ・ド・ビス達の隙を伺う。

「デイイ！ 火で焼き殺せ！ 速く殺してあの執事を殺しに行くぞ！ 千五百でもどれだけ持つか解らん！」

「ハッ！ ——」

デイイと呼ばれた男は詠唱を始め、大きい火の玉を作り出す。

「むう、でかいな……。あいつもトライアングル以上か」

火の玉の大きさを見てジュールは額に冷や汗を浮かべながら分析する。

「焼き殺す！ いけええ！」

デイイが渾身の力を込めた火球を放つ。アミスはさらにゴーレムを錬成し、火球に備えて周囲以上に当たるであろう場所の層を厚くする。

ドジュウウウウウ！！ というゴーレムが熱で溶け、蒸発する音がする。

「風で威力が上がっているのか！ ——」

夫婦の予測以上に破壊されたゴーレムが多いことにジュールは水を錬成し、火球に向けて放つ。

ジュールの水が火球とぶつかり、蒸発した白い蒸気が辺り一帯に立ちこめる。

「くっ！ 何してやがる！ お前達もやれ！」

さらに控えていた男達に攻撃を指示し、自分とデイイの周囲には竜巻を発生させ、水蒸気を寄せ付けないようにし、視野を確保する。竜巻を発生させ、周囲の様子を見ていた力力だが、攻撃をするように指示した貴族達が急に苦しみだしたのを確認する。

「ぐ、が！？ が、がはあ！」

「があああああ！」

「ぐわあああああああ！！！」

苦しみだし、血を吐き出しのたうち回りだしたと思えば、貴族達
は動かなくなる。

「しまった！ 毒霧か！」

「水と名の付くことならオーヴェルニュに隙はないよ。水蒸気なん
てものを作る隙を与えるなんて、君たちも馬鹿だね。毒霧を作れと
言っているようなものじゃないか」

カカの叫びと同時にどこからともなくジュールの声が聞こえる。

「アミスの魔法で階下に逃げなくて良かった。発生させた毒霧は僕
でも除去に数日かかるからね。被害は少ない方が良い」

その言葉を言い終える頃には、部屋の毒霧はほぼ消えて無くなっ
てた。カカの風でかき回され、周囲の壁や床などに付着したのだろ
う。

「さて、アミス。とどめと行こうか」

「ええ。——」

アミスが精神を集中させ、カカの発生させている竜巻の周りにゴ
ーレムを出現させる。

カカ達の周囲がゴーレムに埋め尽くされ、風で削るもそれ以上に
ゴーレムが錬金され、カカ達を守る竜巻の壁の範囲が徐々に狭くな

る。

「くっ！ このままでは……。できれば、私の手で葬りたかったのだがな……。やれ」

その次の瞬間、アミスの胸には背中から刺された複数の短剣が深々と刺さっており、前に貫通していた。

アミスは全く殺気も気配も感じなかった攻撃を受け、内蔵が傷つけられたのか呼吸をする度に口から血を流している。

「う、ぐ……っ！」

いままで生きてきた上で感じたことのない種類の苦痛に、アミスの顔は歪む。

そして、ジュールが無事なのかと確認しようと先ほどまでジュールの居た方向を見る。

だが、アミスは見たことを後悔する。

「え……あ……、ジュー、ル？」

ジュールは床に膝をついている。その足下には、人間の致死量を遙かに超える量の血が池のようにできていた。

アミスは血の付いた震える手を必死にのばし、ジュールの肩に手を置き、揺らす。

ジュールは倒れた。

その拍子に、何かがごろん、と音を立ててカカ達の方に転がる。

カカは、その転がったものの上に足を置き、口を開く。

「できれば、このような者達など使いたくは無かったのだが。同じ貴族のよしみで、せめて貴族の手で殺してやろうと思っていたのだが。メイジ殺しなど使わせよって……」

カ力は、苦渋を舐めるような顔をし、虫の息であるアミスに語りかける。

「せめて、とどめは私たちがしてやる。ディイ」

「はっ！——」

ディイは素早く詠唱し、アミスに火を放つ。

喜悦とも哀愁ともとれる表情を浮かべ、火に焼かれていくアミスを見ているカ力の佇む姿が、アミスが最後に見た景色であった。

「くそっ」

「カ力様……」

カ力はアミスが完全に事切れるのを確認してから、足蹴にしていたものを蹴飛ばす。

それは、ジュールの生首であった。

「狂っている……。俺も、あいつらも……」

カ力は、かつて世話になったジュールの生首を見ながら、絞り出すようにしゃべり出した。

「何故だ？ 貴族派とて、少なからずこの方に世話になったはずで

はないのか？」

もう見栄を張る必要もなくなったのか、先ほどの高圧的な態度が無くなっている。

「何故！ 何故王宮貴族達の総意に沿わなかったのですか！ 貴方であれば、王宮貴族派の筆頭にもなれたというのに……！」

ジュールの生首を見下ろし、今にも泣きそうな表情を浮かべながら言葉を続ける。

「できれば殺したくはなかった……。貴方の薬で一命を取り留めたというのに、その命で貴方達を殺すことになるとは……」

紡ぐ言葉は後悔。ただのモノに成り果てたジュールの生首に向かって、言い訳まがいの言葉をただひたすら言い続ける。

「だが、仕方なかった……。王宮貴族派から借りている金を返せないかわりに、あなた達を殺しに来るしか……。だからだ……。恩人を殺すしかないのだ……。正常で居られるはずがない……。狂わずには居られない……。ですが、ジュール殿……。私は、あなた達の死を無駄にはしない……。その命を糧に、私は上り詰める……」

もはやただの言い訳にしか聞こえなくなった言葉を、カ力は続けた。それを、ディイはただひたすらに黙して聞き続けていた。

「…………ディイ。屋敷を燃やし、執事を殺しに行くぞ。――、フネラル。状況はどうなっている」

『カ力様！ 今！ 超巨大な竜巻を風メイジ総出で威力を削いでい

ます！ 兵が五百はやられました！ 援軍を！ 我らではもう保ちません！』

そのフネラルの報告を聞き、デイイは驚愕する。

「馬鹿な！ たった一人で千五百を相手に！？」

「……。やはり、足止めを軍して正解だったな。単騎であれにはそう勝てん。数で当たって足止めが関の山か」

カ力は予想道理といった表情で言っただけ。だが、額には玉のような汗を浮かべていた。

「デイイ、行くぞ。……フネラル！ 今から私が指揮を執る。全軍！ 今から私の言う通りに動け！！」

屋敷から出るために歩きながら、外にいる残り千の軍に向かって指示を飛ばす。

カ力は、その能力を発揮する場所さえちゃんと用意されていれば、きっと歴史に名を残しただろう。それほどまでに、カ力の執る指揮は的確であった。

エドワードが外で兵士達に給仕をしていると、急に兵士達が武器を持って此方に殺気を向け出した。

「はて、何か気に入らない味付けでもしたでしょうか」

すでに囲まれているというのに全く危機感を抱いた様子はなく、平然と周囲を見渡す。

「貴方に恨みはありません。ですが、反乱の芽は小さいうちに摘ませていただく！ いけ！」

リーダー格らしき男が声を上げ、周囲の兵士達に指示をしてすぐさま後方に下がる。

「ふむ、平民の兵士に突撃させ、貴族は後方支援。利に適っています。ですが、下がるのはその程度でいいのですか？ ——」

エドワードが杖を抜いて詠唱を始めたかと思うと、魔法が完成し、竜巻が発生していた。

「ふむ、私に対してのみ、詰めが甘かったようですね」

部隊長クラスの詠唱中の貴族が竜巻に巻き込まれて宙に舞っている。竜巻になにかの刃が混ざっていたのか、竜巻の遠心力に負けて時折肉体の破片がちぎれて飛んでくる。

「クソッ！ 離れる！！ 貴族は離れて竜巻を削ぐ魔法を！ 兵は固まって飛ばされないようにしろ！！ ——」

フネラルはその場で行える最良な指示をしながら、自身も少しでも竜巻の威力を削ぐべく詠唱を開始する。

「くそ！ 兵が固まっけていても容赦なく巻き上げられていく！ このままでは隊列が維持できず瓦解してしまう……！ メイジ全員で削ぎに掛かっているというのに向に威力が下がる気配がないだど！ 化物めえ！！」

それほど速くはないが移動する竜巻に悪態をつきながらも逆回転の竜巻を放つ手は緩めないフネラル。

「土のメイジ！ ゴーレムであの竜巻は破れないのか！？」

「無理です！ どれほど大きいゴーレムでも竜巻に触れただけで削り飛ばされます！」

「クソオオオオオ！！ どうしろというのだ！！！」

フネラルの悲痛な叫びも、人を喰らいすぎて薄紅色に染まった竜巻が持つて行く。

竜巻から逃げながら何とか威力を削ぐための魔法を繰り返し続けたとき、上官である力力から風の魔法で指示が来る。

『フネラル。状況はどうなっている！』

待ちわびた上官からの声に、フネラルは大声で言葉を返す。

「力力様！ 今！ 超巨大な竜巻を風メイジ総出で威力を削いでいます！ 兵が五百はやられました！ 援軍を！ 我らではもう保ちません！」

『馬鹿な！ たった一人で千五百を相手に！？』

自分の報告のすぐ後に、カカ以外の声も混ざる。

この声は上官のカカの腰巾着であるデイイの声だろう。彼も上官であることには変わりないのだが、あの常にカカの側を離れない姿勢が気に入らない。

『……。やはり、足止めを軍して正解だったな。単騎であれにはそう勝てん。数で当たって足止めが関の山か』

カカの何も予想外な事など起こっていないと言わんばかりな冷静な言葉に、フネラルは我が上官ながら寒気が起こった。今相手にしている災害級の竜巻も相手にしたくはないが、それと同じかそれ以上にカカも敵に回したくはないと、フネラルは思った。

『デイイ、行くぞ。……フネラル！ 今から私が指揮を執る。全軍！ 今から私の言う通りに動け！！』

カカの何とも頼もしい言葉にフネラルは鳥肌が立ち、上官のカカスマ性に心酔する。

「ハッ！」

その気持ちを言葉で表すように、フネラルは竜巻に追われていることなど忘れて馬上で最上の敬礼を中空に向かってする。

「そんなことを……」

フネラルは合流したカカの指示に完全に思考の裏を突かれた気分になり、改めてカカに忠誠を誓う。

カカの作戦はこうだ。

相手の竜巻は下から上に向かう上昇気流。

今まではそれを相殺しようとして逆回転の下降気流の竜巻をぶつけていたが、それをあえて同じ上昇気流の竜巻を風のメイジ総出でぶつけるというのだ。

五十人に一人の割合でこの部隊に編入されているビス家家臣の貴族。そのうちすでに十四人が毒や竜巻で死んでいると言っても、まだ約半数の十六人は残っている。

その中で風メイジは単純計算で四人。さらにドットでも風魔法を使えるメイジを入れれば八人が強弱はあれど風を起こせることになる。

フネラルはこのとき、自分が風のメイジであることを両親とその先祖に感謝した。

「ですがカカ様、同じ回転の風をぶつけたとして、一体あの竜巻はどうなると言うのですか？」

貴族の一人が疑問をそのままカカにぶつける。

それをカカは冷静に、わかりやすく周囲の貴族達に説明していく。

「上昇気流を纏め合わせる事によって、強力な下降気流を発生させる。今、あの竜巻の上には小規模であるが雲が形成されている」

その言葉を聞き、貴族は一斉に逃げながらも竜巻の上空に目を向ける。

そこには、確かに薄い紅色をした雲が小規模ながら形成されていた。薄い紅色は、空に漂うまでにすり潰された犠牲者たちの肉片だろう。それが核になり、上空に雲を発生させている。

「あれが進めば、強力な下降気流が打ち下ろしてくる。一度見ただけだが、そういう構造だったはずだ。それを人為的に起こす。まあ、あの化物が居なければできない諸行ではあるだろうがな。わかつたら風魔法が使えるものは詠唱に移れ。火でも上昇気流が起こせるのならやれ！ 残りで土の魔法が使える者は穴を掘り、塹壕を作れ！ 細く長く、できるだけ兵士達も入れるようにだ。土魔法でなくても塹壕が作れるのであれば作れ！ 以上！ 行くぞ！！——」

貴族集団は走るのを止め、各々自分のできることに全力を注ぐ。
ある者は竜巻を生み出し、ある者は塹壕を掘り、ある者達は必死で逃げ惑う。

「……？ 逃げるのを止めた？ 諦めたのか？ 早く旦那様方を助けに行かねばならぬと言うのにこれでは……」

今までと異なる敵側の行動に意味を考えながら、あの仕えるべき夫婦は無事なのかと考えてしまう。

それが、エドワードの油断に繋がった。

「同じ回転をぶつけてきた？ …… なっ、これは！！ しまった！！」

エドワードが竜巻を発生させるのを止める。
だが、もう遅かった。唸りをあげながら上方にできた積乱雲の中

から、薄紅色の水分の固まりと思われるものが落ちてくる。
それに引きずられるように、雲の中から風が落ちてくる。

「まさか！ これを知っている人間が居るとわー！！」

エドワードは思い出した。

上昇気流の上に積み重なるような雲ができ、それにさらに上昇気流を加えると、雲の中から地上から吸い上げられた水分が落ちてくるといふことを。

エドワードが竜巻を発生させるのを止め、自己防御型の風の楯を上方に向けて展開する。

周囲を見渡すと、竜巻を合わせると同時に塹壕を作っていて、周囲の連中はそれに入っているようだ。

「（やられた……！ 私でさえ数十年前に一度見たきり……。それを知っている人間がいるとわ……！！）」

エドワードは油断したことを後悔するが、今更それは通じない。
自分の慢心を悔いる前に、まずは生き残ること考える。

エドワードが全力で風の楯を作っていると、上から強烈な下降気流が楯にぶつかる。

その強烈なダウンバーストにエドワードですら片膝を着く程だ。
並のメイジでは堪えることすら適わないだろう。

「ぐつく、ふんんうつつうつつー！！」

額に青筋が浮かび、全身の筋肉が膨張する。唇は噛みしめすぎて

血が出、エドワードの下の地面はあまりの圧力に陥没する。

周囲の、塹壕に隠れられなかった兵士が地上に落ちた気流が水平に広がる勢いに引きずられ飛んでいく。

塹壕に運良く隠れられた兵士はメイジに感謝しながらも、心底自分が隠れられて良かったと安堵する。

ダウンバーストが過ぎ去り、薄紅色に染まった地面に登りながら、力達は強力な竜巻を発生させていた化物が死んでいることを祈る。だが、その祈りはすぐに裏切られることになる。

塹壕から這い出た人間達は刮目する。

自然災害に真っ向から耐えられる人間が居ることを。

エドワードは執事服が所々ちぎれ飛び、前のボタンも幾つか飛んでいた。全身の至る所から血を流しつつも、片膝を着き、上をにらみつけていた。

這い出た人間に気付いたのかエドワードは立ち上がり、そちらに向く。

そしてそれと同時に気付く。慣れ親しんだ、仕えるべき夫婦の息遣いが感じられないことに。

最初は自分を疑った。疲れて能力が落ちたのではないか、と。だが違った。

集中して探しても、やはり集団の初めて感じる息遣いしか感じない。常日ごろ慣れ親しんでいる息遣いが、エドワードの周囲からなくなっている。

エドワードは全てを察する。自分が足止めされていたことに。

そして、その間にふたりはすでに殺されていたことに。

それを理解したと同時に、エドワードは自分の全てを出しつくし

て目の前の集団を打ち滅ぼすと決めた。

自然と表情が硬くなるのを感じる。客観的に見れば鬼のような表情になっているだろう。エドワードは、これほどの怒りを感じたのはあの頃以来だと懐かしんだ。そして、目の前の集団を殺すための行動を始める。

それをみた塹壕に隠れた人間の一人が、無意識のように口を開く。

「化物だ……。人間じゃねえ……。か、勝てるわけねえぜあんなの……………」

おそらく、塹壕に隠れていた人間は誰もがそう思っただろう。

だが、逃げ出そうとする人間は一人もいなかった。

カ力のカリスマ性もそうだろうが、おそらく一番の理由は下降気流の中心に居て尚生きている執事服の化物に、とてつもない殺気をぶつけられながら睨まれているからだだろう。

兵士達は本能で理解した。逃げられない、と。

兵士達は本能に従い、各々剣を、槍を、弓を手に握った。

カ力は本能をなんとか力尽くで抑え、逃げたいという欲求を支配する。

そして、生き残った数百にまで減った兵士と貴族に号令する。

「散れ！ 散開して各自小隊を作り攻撃！ 波状攻撃だ！ 詠唱と休む暇を与えるな！！」

その言葉に生き残った人間は一斉に動く。本能のままに。死なな

いために。

エドワードもそれを迎え撃つために動く。目の前の敵を全て殺すために。

それから、どれだけの時間が過ぎただろうか。

周囲は暗くなっていた。

気付けば手の打ち様がないまでに燃えていた屋敷の光と、天上に輝く二つの月、それと火のメイジが時折放つ火の魔法が明りとなり、一対数百の戦場を照らす。

エドワードは全身に切り傷、火傷などを負っている。

戦場で疲れを顔に出さず闘っていると、そこに慣れ親しんだ同僚のメイドの息遣いが混じるのを感じた。

「（……アミーシャか……）」

風の魔法で語りかけると、息遣いに変化が起きるのを感じる。

かつて、息遣いの变化で魔法の使えないアミーシャと会話するために決めた息遣いに。

「（ラウル様は無事か……）」

無事、という簡潔な息遣い。だが、それがなによりもうれしく感

じる。

「（そうか。では、ラウル様を連れて逃げる。旦那様も奥様も殺された。私が時間稼ぎをするから、お前たちだけでも生きてくれ）」

感情的に行動してしまいそうになるのを理性で抑えつけるアミィシャの動揺を、エドワードは手に取るように感じる。

「（ラウル様だけでも、生かさせてくれ……。希望を残してくれ……。……）」

決心がついたのか息遣いが離れていくのを感じ、自分より年上の妖魔であろうと人の心は持っているのだな、と感心し、覚悟を決めて今まで以上に集団を相手にすることに気合を入れる。

「さあ！ 私はまだ闘える！ 千五百でもまだ私を殺せないのか！」

残り百数十にまで減った敵に対して挑戦的な言葉を続ける。
だが、その言葉の直後、エドワードの背中から鈍痛が響く。

「ぐ、ぬうつうつー！」

後方を見ると、今までのどの姿とも違う人間がエドワードの背中から、正確に急所を短剣で刺していた。

「甘いわぁああああー！」

鎌鼬を繰り出し、刺した人間を細切れにする。

だが、次の瞬間にはまた違う姿の人間がエドワードの急所を刺す。

それを再び鎌鼬で細切れにする。

それを何度か繰り返し、エドワードはついに片膝を抉れたり捲れ返ったりしている地面の上に付く。

「はあ、はあっ……。メイジ殺しまで居るとは、な……」

エドワードは肩で息をし、メイジ殺しまで雇う敵の本気を感じる。

「金は王宮貴族派から出たのでな。できる限りをさせてもらった」

気付けばすぐ前まで近づいてきていたリーダー格らしき男に、顔を向ける。

「まさか、千五百が百にまで減らされるとは思わなかった……。流石オーヴェルニュ、奇襲でなければどうなっていたことが……」

男が目の前で何か言っている。

だが、何を言っているのか聞き取れない。それに、目も擦れてきてどつという顔をしているのかもわからない。

「とどめだ。すぐに死んでくれよ。――」

カカが詠唱をはじめ。

そして、エドワードの体は三十分割され、兵たちによってそれぞれ離れた別の場所に一つづつ埋められた。

「損害、千四百ですか……。破産寸前のビス家の借金を無しに、そして多額の報酬があるとはいえこれは痛いですね……」

止めをし、埋めに行かれる肉塊を眺めているカカにディイが話しかける。

「なあディイ、オーヴェルニユの血筋は二人だけだったか……」

カカは話しかけてきたディイに聞く。

「え……っと、確か息子が……ッ!!」

ディイが何かに気付く。

「なあディイ。息子、殺したか？」

その言葉を聞き、ディイが兵士に探すように指示しようとした時、雇っていたメイジ殺しのメイジから風で言葉が送られてくる。

『オーヴェルニユの速いメイドと、息子らしきものを見つけた。殺すから報酬を用意しとけ』

そう言っただけ魔法が途切れた。カカは魔法が来た方向を確認しぐさま残りの兵たちに号令をかける。

「まだ終わっていない！ 最後の仕上げだ！ 禍根を絶ちにくぞ
!!」

そして向かった先にあったのは、裏の世界で名の知れたメイジ殺し達の凍りついたオブジェと、それ以外の誰かの血痕だった。

「……………ディイ。メイジ殺しの死体を焼くか埋めるかしておけ」

「そ、搜索はよろしいのですか力力様……………」

「できるのか？ 死にたいのなら行け。止めん。メイジ殺しを殺すくらいだ、森に入られたらもう手に負えんだろ。屋敷で全員殺したことにする。あの惨状だ、誰も解らんだろ……………」

そう言つて、屋敷の方向に向かう力力。

そしてディイも、追撃を諦めてメイジ殺しの死体をまず氷の円錐から出すために、詠唱を始める。

兵士たちは氷を溶かされて出てきたメイジ殺しの死体を埋めるために、近くに穴を掘り始めた。

このとき力力は選択を誤った。

オーヴェルニユの息子を殺し損ねるといふ禍根を残したことは、後の力力の運命を大きく変える事になるのだが、このときの力力はまだ何も知らない。

第23話 死に様（後書き）

このままラウル逃亡篇行くべきか、ラウル成長篇やりながら間話でラウル逃亡篇をちょこちょこ入れていくべきか……。

悩む……。意見などがあればよろしくお願いします。

第24話 逃亡（前書き）

すみません。

平身低頭五体倒置するしかぼくにはできません。

成長篇をアップしたのですが、やっぱり逃亡篇にさせていただきます……！

今後はこのようなことが無いように一層精進しますので、どうかご容赦ください。

今回はすみませんでした……。。

第24話 逃亡

「はあっ、はあっ、はあっ」

どれくらい走っただろうか。ひたすら無我夢中で森を走り続けたから時間の感覚がわからない。

もうトリステインの国境は越えただろうか。もともとトリステイン側の領地に住んでいたためにそれほど遠いというこも無いだろう。それよりもアミーシャは無事なのか……。

ラウルは走りながらもそれらの事に記憶をめぐらす。

「くそっ！ 殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！」

怨嗟の声をあげながら、ラウルは森の中ほどで立ち止まり、水の魔法を使つて周囲の木に八つ当たりする。

「うああああああ！！ 父さん！ 母さん！ エドワード！ アミーシャ！」

大切な家族の名前を叫びながら、周囲の地形を変えるほどに暴れる。木は水できれいに切断され、倒れる。土が盛り上がり、弾ける。風の塊が横薙ぎに振られ、木が数十本折れる。

「うっ、あ、ああ、ああああ」

一通り暴れ終わり、地面に膝と両手を着きながら涙を流すラウル。そこには、もっと自分が強ければ、という自責が手にとるようにわかった。

しばらくしてさすがのラウルも疲れたのか、安全そうな場所に腰をおろし、小さいながらも寝息を立て始めた。その寝姿は、いつ誰が来ても即対応できるように自然な姿勢をとっていた。

数時間ほど寝た後目覚めると、キョロキョロと周囲を見回して食料になりそうなものを探しだした。

さすがに一昼夜以上も走り通して消耗しきったところに魔法の連発は堪えたのだろう。胃を慰めるように腹の部分をさすっている。

「……………」

木の実を見つけてはその場で食べ、次の食べられる物を探しに歩く。そんなことを十六回ほど繰り返し返した時、ラウルは前方に洞窟をみつけた。

何かが住んでいそうな気配があり、事実洞窟からは何十体もの生物の気配を感じる。

ラウルはしばらく見つめていたが、何かを決心したのかその洞窟の方向に向かって歩き出す。

洞窟に近づく途中でラウルは背中の杖剣を抜く。

気配と殺気を巧く隠しながら近づくが、ある程度近づいたところ

で前方に武器を持ったゴブリンが数体現れた。巣である洞窟を防衛のために監視していたのだろう。近づくラウルを敵として認識したのか、手に手に武器を携えて威嚇している。

「……お前らには、復讐の礎になって貰う」

そう呟いてからのラウルの行動は速かった。

身を低くし、地を這うように八体に庇われるように一番奥にいたリーダー格のゴブリンに近づき、その油断している顔の目の前に現れ、杖剣を右から左へと横薙ぎに振るう。

「ゲッ、ガ！」

醜い声と共にリーダー格のゴブリンの首から上が滑り落ち、ぼとり、という音が地面から響く。

「ギイ！」

「ヴォオッ！」

ラウルはリーダー格を始末したことで油断すること無く、同じく這うようにして周囲のゴブリンに近づき、次々と斬り伏せて行く。すぐに近づける範囲の敵を始末し終え、すぐに近づけるところにゴブリンがいなくなったラウルは近づく時間さえも惜しいという風に周囲を睨みつけ、近くのゴブリンを斬り殺しているときから詠唱を続けていた水の魔法を発動させ、遠くにいるゴブリン達を一斉に逆向きに生える氷柱で氷漬けにし、ゴブリンの氷のオブジェを作った。

「九体……。所詮は亜人か。この程度だとなんの足しにもならない

じゃないか……」

ゴブリンの返り血を浴びることも無くゴブリンの血の海の中にたずんでいたが、洞窟方から気配が近づいて来ているのがわかった。気配が近づき、ドスドスという足音が明確に聞き取れるようになるまでにラウルは迎撃の準備を整える。

準備と言っても、水を操って杭状の氷をいくつも作りだして地面に刺すということだけだった。

ラウルは手の届く範囲に何十本もの氷の杭を刺し、準備万端と身構えて足音が視認できるようになるのを待つ。

「——ッ！ エアッ！ ハンムアアアアア！」

風系統で唯一使える魔法を唱え、それを杖剣に纏わせ、構えた杭の頭を打って撃ちだす。

杭の鋭利な先端が的確に洞窟から出てきているゴブリンの頭、心臓等にあたり、数を減らす。

「るっああああああああ！」

休むことなく杭を打ち続け、怯むことなく迫ってくるゴブリンの群れを自分に近づかせることなく全滅させる。

手の届く範囲に出していた数十本の氷の杭は、数えるほどしか残っていないかった。

「……まだ、気配が残ってる………」

そう呟き、入口を見やる。

そこには、まだ赤ん坊のゴブリンを抱いた、おそらく母親であるゴブリン達が何体も固まってこちらの様子を見ていた。

動く気配も、襲ってくる気配もない。

ただただじっと、殺気を漲らせた目でラウルを睨みつけるのみだ。

「……………言い訳はしない。あの世でせいぜい恨んでくれ」

感情が入った呟き。その感情がどういう意味を持っているのか分からないが、ラウルはそう呟くと次の瞬間には全く感情の入っていない音調で呪文の詠唱を始めた。

呟いていた時と全く目の色が違う。今にも泣きだしそうだった目が、全く感情の色が無くなっている。

詠唱を完成させ、大量の水を操って生き残りのゴブリンを洞窟の奥深くへ押しやる。

死んだことを気配が消えることで確認して、ラウルは水を操るのを止めて初めて気を緩める。

行き当たりばったりで出会ったゴブリンの集落をただただ感情的に、そして機械的にわずか十分足らずで壊滅させた。

そのことに後悔するでも悲哀にくれるでもなく、ラウルはただ茫然とゴブリンの血で塗れた地面に佇む。

それから暫く経ち、日が真上に頂いたくらいで、ラウルはゴブリンを全滅させてから初めて動き出す。

また、腹をさすっていた。

そんなことを数日間続けていた。食事を探し、ゴブリン、オーク鬼といった人に害をもたらす亜人を探し。そして疲れたら昼夜は問

わずにいつでも動けるようにして数時間眠る。

そんなとき、何が祟ったのか分からないが、ラウルは急激に意識が薄れていく感覚に襲われた。

抵抗できないほどに強いそれは、強制的にラウルの意識を薄れさせていく。

もしかしたら気力に限界が来たのかもしれない。それが、食生活が祟ったのかもしれない。

とにかく、ラウルは急激に薄れていく意識に為すすべもなく倒れ伏した。

目を覚ました時には、木造の家の温かい布団の中で寝ていた。服は脱がされ、身体を綺麗に拭かれた上で、誰のものかわからない使い古された木綿の服を着せられていた。

頭には濡れたタオルを乗せられていて、傍らに水をいれた桶があった。

「……………ああ、そうか……………」

ラウルはやっと、自分の置かれている状況を理解する。

そう言えば、記憶が途切れる寸前に自分は倒れた。原因は分からないが、憶測で言うところ過労あたりだろうか。

とにかく、倒れた。

それを誰が、なんの目的でかはわからないが運んで看病してくれたのだろう。

そう、ラウルは推測する。

「……っ、あたま、痛い……」

普通の音量の声が出ない。

声帯が衰えているのだろうか。最近はやべって無かったからな、とラウルは自己を簡潔に分析する。

もし誰かに回収されることなくあのまま放置されていたら、と恐怖する。血の臭いを散々纏わせた自分が。亜人を殺し続けた自分が……。とつくに堕ちてしまっている自分が……。

思考を止めるように、ラウルは痛む頭を無理やり何度か振る。激痛に眩暈と吐き気まで催し、考えることを無理やり中断させられる。

「つつつ、あー、腹減ったな……」

頭痛はある。体も気だるい。何もやる気が起きない。だが、腹だけは空いている。

その欲求に従い、誰の家かもわからない家で何か貰おうと起き上がろうとする。

「……あづっ！」

今までの比ではない頭痛に襲われ、危うく意識を手放しそうになる。

だがそれをなんとか堪え、立ち上がろうとする。そのとき、ドアが開いて小さな、この世界では珍しい黒髪を短く切りそろえた女の子が入ってくる。

「あれ……？ はっ！ お母さん！ あの人、目が覚めたみたいよ！」

座って立ち上がろうとしているラウルを確認した女の子が、慌て

て親に報告に行く。

その報告を聞いた親が慌ててラウルの寝ている部屋に入ってきた。

「大丈夫なの？ 痛いところは？」

優しく問いかけてくるその言葉に懐かしさを覚え、気付けばラウルの目から一筋の水が伝っていた。

「っあ……」

それに気付いたラウルは涙を拭くが、とどまることなく涙は溢れてくる。

「大丈夫？ どこか痛いのか？」

優しく問いかけてくる、同じくらいの年齢の女の子。

その言葉に、ラウルは余計我慢することができなくなり、涙を流した。

そのラウルの嗚咽からは、ついこの間まで平和に毎日を過ごすことができた両親と、家族同然の人達の名前が聞こえてきた。

数時間後。ラウルはダイニングらしき場所で椅子に座らされ、机に置かれた温かい、いろいろな具が入ったスープのようなものを飲んでいる。家族が多いのか、大きめの机に、椅子がいくつも並んでいる。

「落ち着いた？」

歳をとってそれほど多くはないが少しづつ皺が目立ってきてはいるが、なおも綺麗と表現できるその女性は、先程の黒髪の少女の母親のようだ。黒髪で、その顔立ちはその少女によく似ていた。

あの少女が大人になれば、きっとこの女性のように美人なるだろう。そう、容易に想像できた。

「……はい」

スプーンに入っていた具をスプーンで一つ掬い、口に運びながら答える。

「そう。あ、倒れてたあなたは、この子が見つけて連れ帰ってきてくれたのよ」

そういつて、女性は後ろに隠れてこちらの様子をうかがっていた少女を前に押し出す。

「うあ。え、えっと……」

いきなり前に出され、どうすればいいのか分からない少女。

そんな少女。そんな少女の緊張をほぐすため、ラウルはまず自分の自己紹介をする。

「えっ、と、ラウル・アルウェルニ……いえ、ラウルです」

自分のフルネームを名乗ろうとしたラウルであったが、もうオーヴェルニユに意味はないと思い、名乗りを途中でやめる。

「あ。シ、シエスタです……。」

ラウルの自己紹介に釣られ、黒髪の素朴な少女も自己紹介を返す。

「あ、あなた、貴族なの？」

少女が単刀直入に聞いてくる。

ラウルは一瞬動揺するが、隠すことでもないと最低限の事実だけを告げる。

「違うよ。没落したから、もう貴族じゃないんだ」

「へー」

わかつているのかいないのか、少女はそれを聞いた後すぐまた違う質問を始めた。

あらかたの質問に答えた後、ラウルが具の入ったスープ、タルプの村の名物である『ヨシエナヴェ』をおかわりさせてもらった。

久しぶりにまともな料理を食べ、満足したラウルはシエスタの家族にまだ病み上がりなんだから、ととの寝ていた場所で寝かされた。

そこにシエスタが看病として付き、病み上がりのラウルが無茶をしないように監視していた。

少女の目をかいくぐるのは簡単であったが、興味深々にラウルの事を聞いてくる少女に気を良くし、つい様々な役に立ちそうで役に立たない無駄知識を話した。

役に立ちそうで役に立たない無駄な知識の話で時間が潰れ、気付けば夜になっていた。

「ふあ、ふ。疲れた……。少し、寝させて貰ってもいいかな」

「え、でももうすぐご飯……」

「うん、君のお母さんには僕はいらないって言ってたって伝えてくれるかな」

シエスタを説得する。

できるだけ人と顔を合わさないようにしたい。もう会ってしまつたシエスタとその母親は別だが、それ以外はできるだけ会わないほうが得策だろう。

『ご飯できたわよー』

考え事をしているとき、ダイニングの方から彼女の母親のそんな声が聞こえた。

シエスタが元氣よく返事し、両親や兄弟達の声がするダイニングの方へ走っていく。

「……お世話に、なりました」

寝かされていたベッドの傍らに置いてあつた、きれいに繕われている自分の服とマントに着替え、それと一緒に置かれていた日本刀によく似た杖剣を背負い、普通の杖を袖に収める。そして窓から物音もなく出る。

土から紙を錬金し、水を墨汁のように黒く染めて操り、字を書く。『お世話になりました。これは魔法薬です。役立ててください。』と。

そのメッセージの書いた紙とともに魔法薬の瓶を数本、懷から取り出してベッドの上に置き、森に向かって歩き出す。

その時、森から獣の咆哮が響いた。

その方向を見ると、木を押し倒しながらオーク鬼が十体、迫ってきていた。

村は阿鼻叫喚に包まれた。

オーク鬼が森からでて人を襲うなど、ほとんど無い。それだけに村人はこの村がその被害に遭うなど微塵も考えていなかったのだろう。声に驚いて外を確認し、焦った村人たちは家族と大切なもの、高価なものを手に草原に向かって駆け出している。

シエスタの家族も例外ではなかった。ラウルを探したようだが、見つからなかったのだろう。探そうとするシエスタの手を引き、息子たちを抱えシエスタの家族も草原に駆け出す。

ラウルは動かなかった。

動かず、気配を隠さずにむしろ強調し、オーク鬼に殺気だけを飛ばしていた。

オーク鬼がラウルに気付いた。

オーク鬼は殺気を飛ばすラウルを嘲笑するような声で鳴きながら、すべてがその周囲に集まる。

「ふきい！ んぎいっ！ ぶぐいいいいいいッ！」

仲間に指示を飛ばすように一体がひと際大きな声で吠えると、豚面のオーク鬼たちは一斉に顔を歪めて吠えながら、ラウルに持っていた木の棒を振り落とした。

村人はその瞬間を見ていた。村の中心の広場にオーク鬼が集まり、何やら吠えている。一人、また一人が疑問に思ってそちらをみる。よく目を凝らすと、その輪の中心には子供がいた。逃げ遅れたのか、とも思ったが見慣れないその服装、まっ白な髪の子供はよく見れば村の子供ではない。一体誰だ、と思いながらその方向を見続ける。

オーク鬼が一層大きく吠えたかと思うと、その中心に一斉に棒を

振り下ろす。

ドオン！ という大きな音に、村人達は目をそらした。恐る恐るその振り下ろした中心、ミンチになった子供がいるであろう方向を見る。

そこには、割れて盛り上がった土しかなかった。

村人達の理解が追いつかない。何が起こったのかと茫然とその方向を見ていると、一体のオーク鬼の首から上がずれた。

こちらまで聞こえてくるぼとり、という生々しい音に村人たちは寒気を覚えた。

それが連続し、十体のうちの四体が首と胴体が別れを告げて倒れる。

それを茫然と眺める村人たち。まるで決まっていたことかのように自然に起こったそれに、寒気とともになんとも言えない感覚に襲われた。その感覚を文字にするなら、こうだろう。――この村には守護神がいる、と。

「ぴぎいいいいいい！」

一層大きい戦慄きが聞こえてそちらを見ると、残りの六体のオーク鬼が足元から氷漬けになっていく。

身の丈二メートルもあるうと思われるそれであるが、じわじわと凍りついていきながら断末魔の声を上げる。

氷が首まで達したところでオーク鬼達は絶命し、声をあげなくなった。それでも氷は止まらず、完全にオーク鬼たちを氷漬けにしたところで氷は止まる。

残ったのは、静粛だった。

しばらく、村人達は息を吞んでその光景を見つめていたが、やがて一人の若い村人がその氷漬けに近づく。

他の氷漬けと首と胴体が離れたオーク鬼が完全に死んでいるのを確認すると、若い村人は他の村人に対して声をあげる。

「おーい、死んでるぞ！ 全部死んでる！」

その声に安心したのか、他の村人やシエスタの家族も村に歩き出す。

一時は村も滅ぼされ、家族の死も覚悟した。だが、それが何の被害もなく収められたことに何があったのかわからないまま、村人は自分の家に向かって歩き出す。

被害は無かった。

家も、人も。しいて被害があったと言えば、村の広場にオーク鬼の死体が十体ほど転がったことだろうか。

その後、シエスタとその家族は村中を駆け回ってまだ病み上がりのラウルを探したが、それはいつまで経っても見つかることはなかった。

それから、タルブの村では白い童子が自分たちを守ってくれた、という噂がまことしやかに囁かれた。

第25話 転機

また森に入り、今度は食事と休養に気をつけて生活して一カ月が経った。

もはや場所もわからない。

一度街に行つて情報などを仕入れようかとも思ったが、今は人に会いたくない。

もしム力つくほどにつまらない人間に会えば、ついつい殺してしまいそうで怖いから。

「……………そろそろ、ドラゴン行くか……………」

亜人を殺すことには慣れた。慣れてしまった。

もう人の形をしたものを殺すことにためらわない。そういう確信があつた。

慣れはできた。ついでに武者修行もしていたのが、それも亜人では実力不足となっていた。

次はワイバーンや火竜、風竜あたりを狩つて武者修行でもしようか、と考えていた。

復讐のために強くなければならない。それには、場数を踏まなければならぬ。それがラウルの結論だつた。

そして場数を踏むために、過労や栄養失調などで死ぬわけにはいかない。という訳で最低限であるが、それらには気を付けているラ

ウルである。

「火竜火山……はガリア方面だし近づきたくないから、とりあえずこの辺の竜系の巣を襲撃しよう、うん」

決めるが早いか、ラウルは目を瞑って精神を集中して気配を探り始める。

「竜、竜……あれ？　そういえば竜の気配ってどういつふうなんだ？」

そういえば竜種は見たことがない。書物などで姿形などは分かっているが他の事は全くわからない。

「ひとまず、一番強そうな気配を探ればいいか……」

目を閉じ、精神を集中させて感覚を延ばす。

「……………ん？」

気配に違和感を感じる。

久しぶりに特徴的な気配を感じる。ラウルがこれは人間のものと気付くのにそう時間はかからなかった。

「こんな森の奥地にわざわざ？　死にたいのか……？」

俺は思ったことを口に出す。この流浪の生活をするうちに独り言を言う回数が目に見えて増えた。もとから喋るのが嫌いではなかっただけに尚更だろう。やはり人恋しいということだろうか。

「二人で来て逢引きか？ …… まあいいや。俺には関係ない。竜々と」

再び目を閉じて竜っぽそうな気配を探ることに没頭する。

「お？ これはデカい」

気配を感じた。それもだいぶ大きいものだ。気配よりも存在感が。

「たぶんこれだ。まあはずれでも狩るけ、どつ！」

言い終わると同時にラウルはその気配に向けて跳躍する。

木の枝に跳んで上り、さらに他の木向かって跳ぶ。その姿はさながらサルのものであった。

森をその気配に向けて一直線に進み、少し坂になっている場所を上った所に開いていたその穴に、竜がいた。

「お、ビンゴ！ てか竜は季節ごとに移動する習慣でもあるのか？」

それとも逸れているのか一匹しか竜がいない。そして特徴からその竜種はワイバーンであると予測される。

「まあ最初にしては無難な相手か。いきなり火竜とか来られても困るしな」

そう言いながら俺は音もなく穴を降りてワイバーンに少しづつ近づいていく。気を完全に殺しているので気付かれることはないだろう。

近づきながら背中から剣を抜き放ち、杖剣を構える。ワイバーンの首元の、杖剣が竜に届くところに近づく。だが、それから先ができない。後は斬るだけでいい。杖剣を振り下ろすだけでいいのだが、緊張しているのか動くことができない。体中に噴き出すような汗をかいている。

この俺が。亜人を殺し続けたこの俺が今更動けない？

笑わせるな。もう後ろには戻れないところまで俺は来てる。来てしまっているんだ。今更怖かったので動けませんでした、で澄む問題じゃねえんだよ。ふざけてんじゃねえぞ！ 動け！ 動け！ ああああ！

「うおおあああああ！」

気配を開放しながら裂帛の叫びとともに杖剣に気を纏わせながらワイバーンを斬る。

「ちいええすとおおおおおおお！」

だが、声が大きすぎて気付かれたのか振り下ろした斬撃はワイバーンに当たることなく空振りする。

「ギョルアアアアア！」

ひい怖い！ 汗が止まらない！ 逃げたい！ 跪いて許しを請いたい死にたい逃げたい無かったことにしたい昨日に戻りたい！

ラウルは吠えられている一瞬の間にそこまで考えた。

そしてワイバーンがその爪を振り上げたところで正氣に戻り、辛うじてその圧倒的な大きさ、筋力、硬さから来るただの爪を振り下ろすだけの攻撃とも言えないような動作を杖剣で受ける。

ラウルの体にワイバーンの体重の一部が押し掛かる。

「ぐぎ、うお、お……」

なんとか耐えたが、このまま圧され続けると耐えられる気がしねえ……！

グギギ……！ と杖剣と爪でつばぜり合いしていたが、さすがに十歳の体では限界があったのか徐々に圧され始める。

ラウルは決心し、杖剣をワイバーンの爪の根元まで流し、爪と爪の間の皮膚を斬りつける。

だが、斬りつけたことで爪を支えることができなくなったのかワイバーンの爪がラウルに迫る。

ラウルは左に転がり、ワイバーンの右側へとなんとか避ける。

その代償に、杖剣が三分の一辺りから折れる。

うわぁつぶねええええ！ 殺す気か！ …… 殺す気でしたね忘れてました。てか俺の剣折れたじゃんかちきしょうこつなりや自棄^{ヤケ}だやってやる！ ってかやるしかねえぶつ殺す！

「どうるああああああ！」

ワイバーンの懷に飛び込み、気を纏わせた三分の一ほど刃が残った杖剣で足を斬る。

「ギュギヤアアアア！」

叫び声を上げるワイバーン。
その姿をみてラウルはこう思った。なんだ俺、イケるじゃん、と。
立ち直り、普段通りに近づけばなんととも凶に乗りやすいラウルで
ある。

「――、氷の杭とっ！」

離れてから呪文を詠唱し、俺は折れた刀でも魔法が使えたと安心
しながらひととき大きな氷の杭を出し、それを空中で固定しながら
続けて次の魔法の詠唱に入る。

「――、エアアア！ ハンッ！ ムアアアアアアア！」

空中に固定された氷の杭の頭を、魔力を詰めに詰めたエアハンマ
ーで叩く。

打ちつけた衝撃で頭の方が砕け散りながらも、半ばから先端の部
分が轟音を上げながら撃ちだされた。

だが、その当たれば必殺の攻撃をワイバーンしゃがんで背中を少
し削られながらも避けて、氷の杭は空を切りながらその先にあった
岸壁に音を立てながら突き刺さる。

「ギュシャアアアア！」

負け惜しみのように一鳴きし、飛び去っていくワイバーン。
俺は必殺技っぽい攻撃を避けられたことにショックを隠せず、半
ば呆然としていた。

「……………うっそやん」

なんで当たらなかつたんだろうか。刀が折れたからだろうか……。野生のカンが命の危機を察したのだろうか……。

「はっ！ ドラゴン、いやワイバーン！」

思考の渦から帰還し、ワイバーンの気配を探る。

あのエアハンマーゴルディを避けたとは言え相手は手負い。いや足負い。足の傷は骨に達するまで斬ったはずだ。

そんな痛みと闘いながら遠くまで飛べるわけもないだろう。近くで一度小休止に降りるはずだ。そこを狙う。

そう決めたラウルはワイバーンの気配を追って走る。

木々が複雑に入り組んだ森のなかにも関わらず、その速さは人間のものではなく馬と肩を並べるかそれをも抜く勢いだ。

走る速さが尋常ではないせいか、ワイバーンとの距離は見る見るうちに縮まっていく。五体満足のワイバーンでは追いつきすらできないはずだが、いきなりの奇襲と背中や足に負った傷でそれほど速度が出ないようだ。もしかしたら背中の翼を動かす筋肉をいくらか傷つけたのかも知れない

どんどんと追いつくにつれて、ラウルはワイバーンの近くに一組の珍しい気配があることに気付いた。

「ってマジか！」

ワイバーンが降りたか落ちたのかわからないが急降下した先には、ラウルが先ほど森で感知した珍しい気配、一組の人の気配があった。

「ちきしょうが！」

一層足に力を込め、速度を上げる。

そして木の枝を踏み台にして一気に木の上まで跳び上り、目下のワイバーンに向けて呪文を放つ。

「——死ねおやああああ！」

即興で出せるだけ氷柱を繰り出し、ワイバーンに向けて放つ。

その氷柱は重力の力も相まって速度をみるみる上げていき、今にも一組の人間を食べそうになっていたワイバーンにドスドスと突き刺さっていく。

その大きく開けた鰐のような口を氷柱を刺して閉じ、さらに翼膜に穴を開けて飛べないようにする。そうして打ち出した氷柱をいくつかコントロールして動きを封じたのはいいが、他の撃ちだしていた氷柱がワイバーンの胴体や頭、首に刺さり絶命させていた。

「ほっほ、今度こそは駄目かと思っただんじやがの」

「オ、オールド・オスマン……。私は死を覚悟しましたぞ……」

ワイバーンの口の先、一組の老人が冷や汗を拭いながらも会話をしていた。

「まさか二度もワイバーンに襲われて生き残るとはの……」

「それにしてもいったい何が……。この氷のジャベリンは一体？」

ラウルに気付かず会話を続ける老人の近くのワイバーンの体の上

に、跳びあがっていたラウルはドズ、と沈むような音をさせながら着地する。

「いたた……。流石に地面よりはマシとは言ってもやっぱり痛いな……」

ラウルはお尻をさすりながら死んだワイバーンの上から降りる。

「……………」

「……………」

ラウルを見つめる四つの目にラウルは気まずそうに答える。

「なにさ……………」

額に汗を浮かべ、老人に向かって口を開く。

「お前さん、今空から降ってきたのかね？」

ひときわ老獪な、白い髪と髭を伸ばした老人が疑問に思ったであろうことを聞いてくる。

俺は答えるべきかどうか悩んだが、簡潔に答えておくことにした。

「……………うん」

「お前さんが、このワイバーンを退治したのかね？」

「……………うん」

隠しても今更どうなるものでもないので正直に答える。

「お前さん、名は？」

「ラウル」

「ふむ、メイジじゃろ？ 下の名は持っていないのかの？」

「……………没落した」

必死に、なんとかその単語だけを口からひねり出す。

下手をすればまた疲れきるまで暴れてしまいそうになる衝動を抑えながら。

「ふむ…………」

白い髪と髭を伸ばした老人が拙いことを聞いたか、という顔をしてお気まずそうに黙ると、次は白髪ではあるが髪も髭も短く整えられた、先ほどの老人よりも幾分か若そうな老人が口を開く。

「では、どこに住んでいるのだね？」

このジジイは立ち入ったことを聞いてきやがった。

今度は答えるか走って巻くか本気で悩んだが、その聞いてきた老人の顔は真剣で、興味本位で聞いているのではないとわかるので答えることにした。

「森。」

「森？」

「木の実とか魚とか食べて。野宿。」

「だが少年。この森の奥地には亜人が生息していると聞くぞ？ 大丈夫なのか？」

「じゃあなんでそんな危険な森を散歩してたんだよ、とも思っが、それは口に出さずあくまでも簡潔に質問に答える。」

「殺してる」

「なに？」

「亜人は、会えば殺してる」

俺の返答に、老人二人は絶句する。なにか不自然な事言ったかな？

「殺す、とはどうやってじゃ？」

また、長い白髪と髭の老人が聞いてきた。この老人も真剣な表情だ。

「見ただろ？ これ殺るとこ」

三分の一まで折れた杖剣でワイバーンの方を指しながら答える。老人二人は顔を見合わせ、なにか目で会話している。

「よしっ！ 私の勝ちですな。こほん、ラウル君」

若い方の爺さんが俺の名前を呼ぶ。その前の勝ちつてなに？

「はあ？」

「君、私の家に招待させて貰えないかね。命を助けてもらった礼をしたいのだよ」

「え？」

いきなりの事に俺の頭が真っ白になる。

お礼になにするって？ 家に招待？ そんなんでどうすんだよ？ でも久しぶりにまともな飯を食いたいな。でももし行ったらガリアに突き出されるってことはあったり——……

「家に着いたら、コックに腕に縋りをかけて食事を作らせよう」

「行きましょう」

即決だった。迷うことはなかった。

「ワシが招待したかったんじゃが……。残念だの。ついでだしワシもお呼ばれしちゃおう」

そう言いながらも、オールド・オスマンは若い老人にグッ！ と親指を立ててサムズアップしていた。

第26話 転展（前書き）

主人公の年齢を度忘れしまくる……。そついうところを見つけたら
やんわりと教えてあげて下さい……。ラウルの年齢は今十歳だよ、
と。まあ正しくは九歳十カ月くらいな設定ですが。

第26話 転展

「ようこそ、ここが私の屋敷だ。ゆつくりしていつてくれたまえ」

お呼ばれることを即決してすぐに森を歩き始め、一時間ほど歩いて森を出たところに馬車が待っていてそれに乗って揺られること三時間。

若い方の爺さんの屋敷と思われるところに着いた。

「……………」

俺は久しぶりに見る無駄に大きい屋敷に、感慨とも懐かしさとも言えるものを感じていた。

思えば屋敷を出て数カ月。数日だけどこかの平民の村に居た気がするが、それ以外は全て森で過ごしていたので、貴族の屋敷というものをお忘れかけていた。

「どうしたんだね、ラウル君？ おおっと、そう言えばまだ名乗ってなかったね、私の名前はジュールネ・ド・スリュダーだ。トリステインの貴族で伯爵だ。よろしく」

「……………よろしく」

「それで、この方はトリステイン魔法学院の学院長、オールド・オスマンだ」

「よろしくの、ラウル君や」

オールド・オスマンを指しながらいうジュールネ。紹介のあとにオスマンもラウルに対して笑顔で首肯する。

「……………よろしく」

屋敷を眺め続けていて、全て上の空で返事をするラウル。話を聞いているかさえ定かではなく。

「さてラウル君。君はその真っ赤でボロボロな服を着て今まですごしていたのかね？ そうだな、まずは風呂だ。我が家のメイド達に入れてもらおうか」

その表情は憐れみか憐憫かに変えてながら、屋敷内からメイドを召喚するジュールネさん。

まあ確かに一カ月以上は風呂にも入ってないし水浴びもしてないけどさ。そこまで引くことなくですか二人とも……？

屋敷からどれもこれもレベルが高く可愛いメイド達が六人ほど出てきて、ジュールネさんに何を吹きこまれたかは知らないが俺をみてきやーきやーと黄色い声を上げながら取り巻いて両脇からガツシリと抱えられ、ジュールネさんの言いつけ通りに俺を洗うために風呂場へと連れて行くとする。

「どれ、ワシも」

便乗してオールド・オスマンも着いていこうとするが、その肩にガシツという音を奏でながらジュールネさんの手がホールドされる。

「先生は私と話しがあるでしょう」

「フォッフォ、冗談じゃよ」

名残惜しそうな顔を隠すことなくメイド軍団を見ながら、オールド・オスマンはジュールネと話しをするために一足先に食堂に行くのだった。

「さて、彼の件ですが……」

食堂に着き、コック長に夕食の注文をしたかと思うと、単刀直入にジュールネは切り出す。

オールド・オスマンも冗談を挟むなどという事は無く、自らの長く伸びた髭を触りながら真剣に答える。

「うむ、あの年ですでにトライアングル、もしかしたらスクウェアに届いているかも知れんのう」

思い出すのはワイバーンを殺した時の映像。無数の氷槍。アイスジャベリン。それぞれの大きさも然ることながらもその数、操作能力、魔力、どれをとっても二人の知るメイジのそれを凌駕しており。魔法だけでなくその身体能力も、二人の知る常識を軽く上回る動きをしていた。二人はラウルの才能に深く考え込む。

「——ってそういうことではなくて！ 確かにあの才能は凄いですがああもう話しを逸らさないで聞いてください！」

「フォッフォ、冗談じゃよ。まったく君は昔から変わらんのう」

「いつの話しをしているんですか、今は彼の処遇についてですよ」

嘆息とともに、本来の話題へと方向転換するジュールネ。その真剣そうな表情にオスマンもこれ以上茶化すということはせずに真剣に考える。

「ふむ。彼はトリステインの人間ではないな。おそらくはあの森の向こう側……ガリアの人間じゃろうて。それにしてもガリア国王危篤のこの折、一体何故この辺りをあんな姿でうろついていたのか、想像はつくがな」

「政争……ですか。それで負け、あるいは貶められて両親は殺され、一人だけ逃げてきたということでしょうか」

ラウルのこれまでの経緯を簡単に予測する二人。それは年の功か、的確にラウルの現状を居抜いていた。

「新王派か王弟派か。そこはどうでもいいとして、彼をどうするつもりじゃ？」

ガリア国王が代替わりしたのは聞いていた。それが高潔など評判高く、全くと言って悪い噂を聞かない綺麗すぎるオルレアン公ではなく、それよりも評判ではさらに下回る兄のジョゼフに王位を譲られた。おそらくはそれが今回の政争の理由だろう。

「先生、知っているでしょう？ 私が、息子夫婦と孫を疫病で亡くしているのは」

「そりゃあ無論じゃが……っ！ まさか」

「そのまさかです。あの實力、あのまま野に帰すのはあまりに惜しい。それにトリステインのためにならない。それでしたら、跡取り

の居ない私が引き取り、彼にトリステインの利になつてもらえばいいではありませんか」

オスマンは目を見開いてジュールネを、かつての教え子を見る。

「現実を直視しますと、不敬に当たるかも知れませんがトリステインに未来は有りません。国王も病床に伏し、いつ御隠れになるかも分らぬ状況。己の利を貪ることしか頭のない宮廷雀。そしてゲルマニアの台頭。状況は我々にとって極めて不利です」

一息に言い切り、深呼吸をするジュールネ。そこに、黙って聞いていたオスマンが口を開く。

「確かに不利じゃろうて……。じゃが、一人の力ではできることに限りがあるじゃろうて。それに、これでもし内乱なんて事になつたら目も当てられん……」

「内乱にはさせません。私が、先生がいるじゃありませんか。それに、このまま行くとアンリエッタ王女殿下には味方が一人もいないことになる……。それはあまりに不憫じゃありませんか？」

「む、むう……。じゃが……」

ジュールネの発言が、飛躍しすぎている事に、オスマンは頭を抱える。だがその発言がなまじ間違っていないことも事実で。

「何度も繰り返しますが先生、あの子の實力は一級です。あれをトリステインの為に使わないのは極めて惜しいのです。それに恩も忘れそうにないいい子だ。我々が誠心誠意で接すれば仇で返されることも無いでしょうし」

「う、む……」

「このまま行つて崩壊が目に見えているのなら、私は国と国王様方の為に賭けに出たいと思います。私の一世一代の賭けに、共に賭けてはくれませんか、先生……」

かつての教え子が、自分の顔をまっすぐに見据える。時の流れとは早いもので、ついこの前までは教鞭をとって教えていた教え子が、今では意見をしてくるまでに成長した。しかも確たる論を、意思を持って。

そんな成長を嬉しいような、自分はすぐさま賛成してやれなかったことに悲しい様な気持ちになり、オスマンはその白く長い髭を触りながら目を閉じる。そして意思を固め、そつと目を開けて答える。

「そうじゃの。可能性に賭けてみるのも悪くはない。ワシも老いたものじゃ。まだまだ若いつもりでおったのにの」

「先生……」

「ワシも全力でサポートさせて貰おう。ワシにできる事があれば言ってくれ。そうじゃの、まずはあの子を君の養子にする件か」

決めるが早いかオスマンはすぐに自分にできる事を探し出す。

「ワシがちょちょい、と昔の教え子に言えばその件は問題ないじゃる。そうじゃの、彼の経歴は、お前の昔囲っていた愛人の孫、とでもすればよいじゃる。最近見つけ、メイジの資質を持っていたので引き取った、ということにでもしておこう」

拙速を尊ぶのが長生きのコツだとも言いたげな処理の速さだっ

た。ジュールネが口を挿む暇も無く、やらなければいけない手回し等裏方の仕事は次々とオスマンの手によって解決されていく。

「ジュールネ君。あの子の為を思うなら、君は裏の事はしない方がいいかもしれないのう。おそらくそういうことにあ殊更敏感になっているじやろうしの。そういうのはワシに言えば全て何とかしよう」

「あ、ありがとうございます」

「うむ、では詳しいことはまた後々詰めるとして、ワシは風呂に……」

「お待ちを。もうすぐ上がると思いますから今更行っても意味は無いかと。それよりもチェスをしましょう」

真剣な表情を崩すことなく席を立ち、扉から出ようとするオスマン。ジュールネはオスマンのその態度に騙されることなく、普段と同じように手なれた様子で方を掴んで椅子に座らせ、体面に座ってチェス盤を取り出してコマを並べ始めるジュールネ。その様子にオスマンは諦めの表情を浮かべ、落胆した気分を隠すことなく同じくチェス盤にコマを並べ始めた。

「い、いやあああああ！ らあめええ、もうらめなのぉ！」

風呂場に、艶やかな嬌声が響く。

「無駄です。観念して脱いでください！」

「い、いやあああああ」

二人のメイドさんに脇から抱えられ、その豊満な胸が肘に当たるのを堪能していたら風呂場に書いていて、かつ問答無用に服を脱がせようとするメイドさん達に、ラウルは悲鳴を上げていた。

「げへへ坊ちゃん、痛くない。いやきつと気持ち良いから。お姉さんに騙されたと思って脱がされてみな」

メイドの一人が荒い息と言葉遣いでラウルに迫る。ラウルは風呂場の手前に設けられている脱衣所で身体を這わせて逃げようとするが、角に着いてしまってもう逃げるところがない。

「うえへへへ。もう逃げらんねえ坊ちゃん……観念しなあ！」

「ガーネット、落ち着きなさい。今のあなたは浪漫もへったくれも無いわ」

「あ、ごめーん、エナ。この子があんまりにも可愛い声で鳴いてくれるもんだからつい……」

荒い息を吐きながら近づいてきていた、ガーネットと呼ばれたメイドさんを窘めるエナと呼ばれたメイドさん。

ガーネットと呼ばれたメイドは下ろせば肩まであるだろうその赤みがかった茶色の髪を頭の左右で束ね、ツインテイルにしている。髪の毛は若干の癖っ毛なのか、ところどころあらぬ方向に跳ねているのが見受けられる。歳のころは十代前半から十四かそこらくらいで、快活そうなおその見た目裏切ることなく白と黒で作られたメイド服を振り乱してラウルを追い詰めるために動き回っていた。

「あはは。だって、メイド長から歳の近い私達の方が馴染めるだって言われたから……。馴染みやすいようにしようかなって……」

「だからってまるで暴漢のように追い詰めることも無いでしょうに……」

そう言っただけ溜息をつくのは、暗く輝くサラサラしたシルバードロンドを肩まで伸ばしたこちらも見目麗しいメイドさん。ガーネットの様に快活そうな雰囲気は無く、落ち着いているように見える。十代から大人の階段をのぼりはじめたようでスタイルもよく、白と黒で作られたメイド服から程よく主張するその胸はラウルの目を引いた。

「でもさ。こんな真つ赤とか泥とかで汚れた服着てるんだよ？ 髪だってばさばさでくすんで元の色もわからないくらいだしさ」

ガーネットとはラウルの服や頭を指さしながら、汚いのは我慢できないの！ と地団太を踏む。

「まあ、そうね……。汚いのはよくないわ。そう。淑女らしく脱がして、貞淑に洗ってさしあげましょう？」

手を前で合わせて身体を横に向けてはいるが、ラウルの事が気になるのかたびたび横を向く二ナ。ラウルを見る目が先程のガーネットよりも手に終えなくなっていることや、ラウルを見る度によだれを垂らしていることは気付かないふりをした方がいいのか本気でなやんでしまう。

「さあ坊ちゃま。観念して脱いでくださいね。メイド長たちは旦那

様達のお世話に回っているからここにはあなたと私達の三人だけよ」

「ひっ」

「ぼっちゃきやうっ！」

身体をこちらに向け、前に進もうとした二ナがメイド服の裾を踏んでラウルの方へ倒れる。ラウルは倒れるその身体を床とに間に滑り込ませて受け止める。

「いたた……くない。あれ？」

滑り込んで受けとめていたラウルをみて声を上げる二ナ。お約束と言うか何というか、起き上がり、仰向けになった二ナの程よく主張する胸にはラウルの右手が吸い込まれて離れないかのように吸いついており、さらに二ナは股の間で左腕を挿むように座っていた。

「うわぁ……二ナ、大胆だね……」

その状況を見て赤面しながら、両手を口に添えてそう呟くガーネツト。その言葉を聞いて何が大胆なのか疑問に思ったのか胴体の方を向き、自分の置かれている状況を確認する。

目を見開いて状況を確認すると、ボツ！ と音がしかねないほどに二ナの顔が一瞬で赤くなり、立ち上がる。

「いつつ……あれ、えっと……」

滑り込んだ事によって頭を打ったのか左手で擦りながら起き上げる。眼を開き、二ナとガーネツトが顔を赤くしてラウルを凝視していることに何か粗末なものをポロリしてしまっているかもッ！ と急いで下半身の状況を確認し、安全を確認して息を吐いてそれ以外に二

人の顔が赤くなるような状況を考える。

ポロリ……はなかったから、あとはなんだ？ ポロリしてしまっただ？ でも俺は見えていないからそんな赤面して固まるほどでもないだろうし。あ、俺が余りに汚いのに庇って俺に触ってしまったからなんか赤面して固まってる？ 俺は病原菌かッ！ 一人ツツコミをしながらも何があつたのか分からないこの状況をどう打開するかを考える。

「…………風呂、入りませう」

打開できる様な事が全く思いつかなかったのととりあえず当初の予定であつた風呂を提案してみるラウル。

その言葉に苦笑しながらもガーネットが答え、二ナは赤面し続けながらも顔をぶんぶんと上下に振る。

ラウルが音も無く一瞬で服を脱ぎ、下半身最重要機密部位をタオルを巻いて隠す。え、あれ、えっ？ と二人が今の一瞬で何があつたのか理解できていない間に先に入ってますね、と言って浴室に入る。毎回風呂の度にやったアミーシャとの死闘を思い返しつつ湯が張つてある湯船の近くにあつた木製の桶でお湯を汲み、とりあえず頭から身体に掛ける。

「うぁーっ！ 気持ちイイー」

その声を出したすぐあとに、濡れないようにメイド服をたくし上げた二ナとガーネットはが入ってきた。ラウルもここまでくれば腹をくくり、どかり、と浴室の椅子に腰を下ろす。

「お願いします」

腹をくくつたその発言に、ラウルの十歳にも関わらず鍛えられた

たくましい身体に見入るのもそこそこの行動にはいる。

「お、お背中をお流しします」

二ナが赤面したまま、背中に湯を掛けて石鹸をつけたタオルで擦りだす。

「あ、じゃあ私は髪を……」

二ナの行動を見ていたガーネットも、自分にできることをしようと石鹸を手に着け、ラウルの濡れた髪を優しくわしゃわしゃと洗い出す。

「っあー、さっぱりしたあー！」

その後、嬉し恥ずかしハプニングなどは一つも無く数か月ぶりの風呂を堪能し、用意されていた貴族然とした高級感ただよう白いシヤツと黒いズボン、そしてメイジの証たるマントをその身に纏う。

「し、白い髪……汚れているだけじゃなかったんだ……」

ガーネットがラウルのサラサラの白い髪に見惚れつつ茫然と言い、二ナも首肯する。

「それに……メイジさま……」

メイジが付けるマントを纏うのを見て、まさかこんな汚れた少年

がメイジだとは思っていなかった二ナが呟く。ガーネットはそれを首肯で答える。

「ん？ どうしたの、二人とも？」

身体がさつぱりし、真新しい服に袖を通した事で上機嫌なのか笑顔を浮かべながらラウルは二人に聞く。

「あ、い、いえっ！ 先程は失礼しましたお坊ちゃま」

二ナが平身低頭、まさに九十度の角度で頭を下げる。ガーネットもそれに続き、頭を下げる。

ラウルはマントにスリットに杖を。懷に適した長さにした鞘におさめた忍刀を収めつつ答える。

「いや、気持ち良かったからいいよ。ああそれと、名前を教えるもらってもいいかな？ お、僕はラウルです」

「あ、二ナです」

「ガーネット……」

とラウルの名乗りに釣られて名乗る。

「二ナと、ガーネット。短い間かも知れないけど、これからよろしく。ジュルネさん達のところに案内してくれる？」

歳の近いメイドさん二人と挨拶を交わし、ジュルネの待つ食堂への案内をたのむ。二人は短くはい、と返事してから動き出す。その後ろを、ラウルは静かに、でも機嫌の良い雰囲気は隠さずについ

ていった。

メイド二人に屋敷内を案内されながらも食堂に通される。

そして食堂に入り、ラウルは感動の声を上げる。それは大きすぎず、だからといって狭いという印象も与えない部屋。食事をするためだけではなく家族との団欒も想定して作られている部屋に通され、ラウルは言葉を失う。

「おお……」

まさに理想の食堂。食堂だというのに食堂としての機能以外にも使えるということとを薄々と、目障りにならない程度に主張しているそれに、ラウルはポカン、ち口をだらしなく開けてただただ感嘆の声を漏らすしかなかった。

「どうだい、気に入ってくれたかな。なんならこの屋敷には好きなだけ居てくれてかまわないんだよ。なんだったら養子としてだって――」

「ごほん、ミスタ・スリユダー君。ラウル君は食事を所望のようだったように思うのだが？」

何か言おうとしていたジュールネさんをオールド・オスマンが窺^{たしな}める。

ジュールネにしかわからないように、急いては事を仕損じる、とア

アイコンタクトを送る。

「おお、そうでしたそうでした。コック長、用意を。」

「はい、ジュール様」

オスマンのアイコンタクトを受け取ったのか頷きながら、ジュールはコック長に促し、料理を持ってこさせる。

ラウルはコック長とメイドさん達が料理を次々と運んでくる量を見て目を見開く。その量はとても三人でも食べきれないだろうというほどで、大きくはないが狭くもない食堂の、理想の大きさを計算されつくしたであろうその机に、いっぱいになるまで運ばれ続けた。

「さあ、存分に食べてくれラウル君。君は他でもない命の恩人なんだ。遠慮することはないよ」

「はい！ いただきます！」

目の前に所狭しと並べられるその美味しそうな料理を目の前にしながらも、ラウルはジュールに元氣よく返事をし、一応転生して十年も経つのに未だに抜けない癖であるいただきます、を言って手近な料理から貪りつく。

ラウルの料理を食べる速度と勢いに、ジュールとオスマンの二人は言葉を失う。その獣のように貪りつく速度もそうだが、何よりも、かなりの量を食べているというのにその勢いが全く衰える気配がないことに。

確かに、今回はラウルの胃袋を掴むという作戦もあり、食材、調味料などはさすがと言うべきか一級品と呼べるほどに良い物を使っている。腕も悪く無い。むしろこのトリステインでも一流の部類に入るだろうそのコックの腕は王宮の専属コックにすら引けを取らない

くらいだろう。

わかる。美味しいのは確かにわかるのだが、と二人は顔を見合わせるが、如何せんこれは食べすぎだろう……。机に所狭しと料理を並べられ、コックたちが追加の食材を急いで作って随時空いた皿と出来立ての料理を交換していつてくれているのだが、それよりも速い速度でラウルは卓上の料理を胃袋に納めて行く。料理の追加速度よりも早く食べるラウルにより、机の上はだんだんと寂しくなっていく。

「ら、ラウル君……。そんなに勢いよく食べても大丈夫かね？ 少しは休憩した方が……」

さすがに、明らかに身体の体積よりも食べたれる料理の方が多いのが心配になり、ジュールネはラウルに声を掛ける。

「あべべーぶつぶ。ほんらにほひひーりょーりはひはひぶひつす」

おそらくは大丈夫です。こんなに美味しい料理は久しぶりです。と言っているという予測はできるが、口を挿む気にすらならないほどに美味しそうに食べるその顔を見ると、食べ終わるのを待とうと思わせる。少なくとも、ジュールネとオスマンにそう思わせるだけの説得力がその顔にはあった。

ラウルは手を休めることなく食べ続け、もう仕込んでいた食材も底を付き、残りは机にある少しだけとなった頃。ジュールネが意を決したかのような表情でラウルにあることを言った。

「ラウル君、家の養子にならんかね」

「「ぶつ」「」

その言葉に二人が噴き出す。

「げほっ、おほっ。じゅ、ジュールネ君！」

オスマンは急いては事を仕損じると言う言葉の通り、ゆっくりとラウルを懐柔していつてから否と言わせずに養子にしようと思っていた。それは数カ月間の期間を必要とする計画で、それではジュールネは遅いと思っていた。

「えほっ、こほっ、なにを……」

ラウルはいきなりな発言にどう返していいかわからずに動揺し、咳き込む。

「ラウル君。私は冗談を言っているつもりはないよ。一度、本気で考えてくれんかね？」

そう言うジュールネの顔は真剣で、茶化す余地などどこにもなかった。

そのあとの食事は、食べるには食べたが味が分からずに、半ば義務のような感じで詰め込んだ。一言も発さずに、ただ黙々と。

食事を食べ終わると、執事長に案内されラウルは自室へと通された。

「ようしって、あの養子だよな？」

案内された部屋のベッドで寝転びながら、ラウルは先程の会話の内容を反芻していた。

養子にならないか、と言われたこと。それにあたり、自分と自分の家名は存分に利用しても構わないということ。その条件として、トリステインの利になれとまでは言わないがアンリエッタ王女殿下の味方になってあげてほしいという事を提示された。

養子。貴族の養子。もし養子になるとするなら、俺はジュールさんの平民との間にできた落とし胤ということになるらしい。そして養子にするにあたって問題となるのが直系の子の問題だ。だが、その問題は話題に出すまでも無く解決された。ジュールさんの息子夫婦と孫は、数年前に流行りの疫病で死んでしまったらしい。これによつて現在はスリユダー家の跡取りが居なくなつてしまつている状態であり、このままだとジュールネ亡きあとはこのスリユダー家は取り潰されることになつてしまう。それは余りに不憫である。よつて出自の知れない俺のような人間であつても実力があるのならば、と養子にすることに決めたらしい。まあ、それはやぶさかではない。ジュールネさんの実力は未知数ではあるが、家名を存分に使つてもいいというのは正直言つてかなり魅力的だ。何をするにしても、平民の身分と貴族の身分ではできることには雲泥の差がある。それに、復讐するのであれば貴族である方が断然やりやすい。態々平民の身分である手この手を使いながら反乱を企てて先導するよりも、パーティーなどで静かに近づいて殺す方が労も少ないだろう。

養子になるのはまあ問題ない。オーヴェルニユには思い入れがあるが固執するほどではなく、復讐の為ならば捨てる事が出来る。だが、提示された条件が読めない。トリステインの利にならなくても良いからアンリエッタの味方になれ。

この条件の意味するところは、たとえトリステイン王国を裏切ることになろうともアンリエッタ王女殿下の味方でいてほしいということだろう。まず疑問なのが、トリステインの利とアンリエッタの意思が食い違ふことがあるのか、ということだ。王の意思は即ち、国の意思に直結する。ということは、極論するならば例え国に被害を被つたとしてもアンリエッタのしたいことをしてやれ、というこ

とになるだろう。

今現在の王は病床に伏し、御隠れになる寸前だと聞いた。もし王が死んだとして、次に王位が継がれるのが王妃。その次に王の一人娘である王女殿下だ。王女に王位が継がれるまでに、常識的に考えて少なく見積もったとしてもあと十年以上は有るだろう。それまでにはさすがに俺と同じ年の頃の王女の自分の為に国を動かすよりも国の為に自分の意思を捻じ曲げるだろう。……そう信じたい。

そこまで考え、今まで考えたことを整理する。

養子になるのは構わない。それによって自分に不利になることは無い。

アンリエッタ王女殿下の味方になること。これも問題ない。これから養子になれば会う機会もあるだろう。その時に王の考え方、王たる資格の事を教え込めば国の利に反して私事に走るという愚行もしなくなっただけだろう。幸い、ガリアにいたころ聞いた評判では、国民の人気は頗る高いらしいし。

考えがまとまり、結論が出る。

「養子に、なるか……」

返事は明日の朝食の時に聞かせてくれと言われているので、今から焦って伝えに行くことも無いだろう。今日はこの久しぶりに高級感漂うこのふかふかなベッドで寝させてもらおうしよう。

そう決め、ベッドにもぐりこんで寝る体制に入る。入ったと時を同じくし、コンコンツと部屋がノックされるのに気付く。油断していた様で、部屋の外に人がいるのに気付けなかった。慌てて気配を探るに人数は二人。特徴から察するにおそらくは風呂に入れてくれた二人、ニナとガーネットだろう。扉の前の二人に殺気や敵意といったものは無く、どこことなく嬉しそうにしている。

どうぞ、といって部屋に招き入れ、用向きをきく。

「どうしたの？　こんな時間に」

その質問に、暗く煌めくシルバーブロンドが美しいニナは持っていた綺麗にたたまれた服を差し出しながら答える。

「あ、あの、お着替えを……」

今にも消え入りそうな声だ。それを補足するかのように、ガーネットが続けて話す。

「眠られるのでしたら、こちらの服に着替えて寝るように伝えろつて。メイド長がジュールさんから言われたんだって」

快活で、おてんばそうな赤みがかった茶髪を揺らしながらいうガーネット。その視線はベッドに向いていて、気の済むまでそこでトランポリンの様に跳ねまわりたい、という意味がビビシと伝って来た。

「あ、わかった。置いといてよ。一人で着替えられるから」

ガーネットの視線には気付かないふりをし、ニナに返事を返す。だが、ニナは動こうとはせず、代わりに口を動かす。

「い、いえ……。召使いがいる貴族さまはご自分で着替えないと聞きました。ですので、私達が着替えさせていただきます……」

顔を赤らめ、おずおずといった雰囲気で絞り出すニナ。もしそれが俺じゃなかったり、俺の自制心がスクウェアアクラスじゃなかったらおいしくいただかれているだろうと確信が持てるほど可愛い。

その赤面する顔をみて思わず俺も顔を赤らめ。

「なんでラウルさままで赤くなってるのよ。もう子供は寝る時間ですよ。私が着替えさせたげる」

そう言つてガーネットがラウルに迫り、それに不穏な気配を感じたラウルガーネットを避ける。

「なんで避けるのさ」

「なんでそんな息を荒らげて迫ってくるのさ」

「そんなことないよっ、はあっ、はあっ」

「そんなことあるから避けたんだよ！」

きえええええ！　　っという奇声と共に跳びラウルに襲いかかるツイン^{ガーネット}テイルの変態。それに追隨するかのように、気配なく音も無く忍顔負けの隠行術で忍びよる二ナ。

そんな二人の攻めをかわしながらラウルは逃げる。

「ら、らめえええええ！　一人で、一人でできるからあああああ
！」

そんなやり取りをしながら、養子になると決めた夜はゆっくりと布団で寝ることも出来ずに更けて行くのだった。

第26話 転展（後書き）

感想などいただけましたら北郷の元気になります。がんばろう、って気になります。よろしくお願いします。

第27話 二ナ視点（前書き）

ふうわあ
ああああああ！！

超難産でございましたああああああ！！！！

もうやらない！ 別視点なんてもうやらない！ しかもいつにもましてな低クオリティー！ 死にたいっ！

第27話 二ナ視点

二ナこと私は、八さいの頃にこのスリユダー家で奉公を始めてからもう六年になる。

この屋敷にはスリユダー様という雇い主の貴族のお年寄りしか居らず、年上のベテランのメイドさん達の話しを聞くに暫く前に息子夫婦と孫を疫病で亡くされたらしい。

だからといって私達の仕事内容が変わる訳もなく、今日も屋敷中を二人一組で掃除して回っていた。私のパートナーはここへ奉公に来て二年目になるガーネットだ。十四歳の私よりも二つ下で、十二歳。私よりも活発で、おてんばな彼女にはツイテンテイルがよく似合っている。

「ねえねえ、今日はジュルネ様何処にいったの？」

客室の掃除をしながら世間話を始めるガーネット。口からは無駄な話が出てくるけれど、手の方はこの二年の集大成かただ慣れただけなのか、いつものように寸分の狂いもなく手が動いている。

この屋敷で奉公をしているとスリユダー様の意向か、食材などは届けてもらえるし、その食材を届けてくれたどうしても必要な物で、かつ欲しい物を届けてくれた商人が帰るまでに言えばまたすぐに届けてくれるので、街に出ることなんてほとんどない。しかも必要なものは大抵届くし、料金はあまり大きくない限りスリユダー様が出てくれる。だから話題性のあるものが乏しくて、話すことと言えば大抵は誰々が故郷に彼氏を残してきているとか遠距離恋愛の話と

かしかない。

雇い主であるジュール様が散歩にオスマン様に誘われて外出することすら、話題に飢えている私達にとっては格好の話しの種で。

「さあ？ 今朝、今日は近頃亜人被害がめつきり無くなったと噂の森に森林浴しに出かけてくるって言われてたのを聞いたけど、それよりも詳しいことは分からないわ」

「もうっ、ちゃっかり行き場所とか知ってるんじゃないの！」

なにがちやつかりなのかわからないけれど、何故か攻められた。ツインテイルをふりふりと揺らしながら『怒っています』とアピールするガーネット。私には何をそれほどに怒っているのか分からないのだけれど。

「あ！ そう言えば今日のお夕食はステーキだったわ！ あうゝ今から楽しみいゝ」

確かに今日の夕食は牛のステーキだった。スリユダー様は食べきれないのに、そこは最低限の貴族の見栄だとかでいつ誰が来て泊まってもいつても即応できるように十人前分以上は食事を作る。

でもほとんどの場合は誰かが来るということは無く、ジュール様はその余った食事を使用人達の夕食へと分け与えて下さる。私も今日の夕食の事を考えていると涎が垂れてきてしまい、ガーネットにばれなうように慌てて裾で拭う。

「きちんと仕事できていなかったら夕食を抜かれてしまうから、きちんと掃除しましょうね」

「わ、わかってるわよう。ずっと楽しみにしてたのに、今日の夕食

が抜かれるなんてたまったもんじゃないんだもの」

夕食の事を考えていて口から涎を垂らしていたガーネットを窘め、私達は再び客室の掃除に専念する。

今、この屋敷で奉公している私達メイドは、メイド長をはじめとして合計二六人。いつもこの人数で大きいお屋敷を手入れしています。年齢は、メイド長が四十代未婚で婚活中。他の一般メイドはだいたい十代から二十代後半がほとんどで、たまに三十代の方とかもいらっしやいます。その方も婚活をメイド長に師事しているそうです。婚活ってなんでしょう？　ちなみに、ガーネットが最年少で、私が二番目。それからかなり空いて二三歳から三十代が殆どです。

執事さんは執事長さんだけで、執事長さんもいれたら二七人になります。何故、一人なのに執事長さんと呼ばれているのかは分かりません。私が来るよりもずっとまえからそう呼ばれていたらしいです。執事長さんは、よくわからないけれどジュール様の難しい書類の事とかをしているので掃除したりはしません。何故それほど仕事に熱心なのかと聞いた事がある人の話しますと、執事長さんは昔奥様を亡くされて、自暴自棄になっていたところをジュール様に助けていただいたそうです。それからジュール様に一生を捧げると誓い、再婚など考えてもいないらしいです。それでも、メイド長は執事長への求愛行動を怠らないんだそうです。

炊事室、キッチンですが、キッチンにもコック長さんをはじめとして合計で三人の方が働いています。でもコックさん達は仕入れを確認する時以外は基本的に炊事室を出ないので、ほとんど会うことは有りません。キッチンの掃除はあの人たちがやりますし。

なので、この広い屋敷の掃除は私達メイド二六人でしなければならぬのでとても大変です。でも辞めたいなんて思ったことは有りません。掃除は疲れるけど楽しいですし、変な事をされることもありません。お給料も他と比べたら断然いいらしいですし、何よりお食事が美味しいです。

ジュルネ様も良い方ですし。不自由は有りません。もうずっと働いていたいくらいです。

夕方には、お屋敷の掃除は大体終わります。お屋敷の外を掃除していた人達も、夕方くらいになるとそろそろと帰ってきます。オスマン様に誘われて散歩に出かけられているジュルネ様も、だいたいいつもこのくらいの時間に帰ってこられます。私達は中央玄関の付近で、汚れがないか、それまでの間徹底的に探します。玄関は家の顔。汚れていてはいけないからです。

玄関の汚れをチェックしていると、馬車の音が聞こえてきました。メイド長と執事長が全員の服装を乱れていないか確かめます。確認を終えると、いよいよ玄関へのお迎えです。

お迎えを終えて、ジュルネ様達のお食事を終えれば私達の一日の仕事はほとんど終わります。あとはメイド長と執事長へジュルネ様からのちよつとした用、コックさん達の明日の仕込みくらいでしょう。

夕食を終えられたら今日一日も終わりです。さつさと寝て、また明日仕事が続いている状態です。そう思っていたのですが、その日は少し違いました。ジュルネ様とオスマン様が、私よりも、もしかしたらガーネットよりも小さいかも知れない子供を連れて帰ってきたのです。

ジュルネ様がメイド長と執事長さんに何かを話し、それを聞いたメイド長は私とガーネットを呼んでその用事を言います。それは、この小さな子供をお風呂に入れてやって、というものでした。まあそれくらいなら、と私達は頷き、子供を風呂場に連れて行きます。

「い、いやああああああ！ らあめええ、もうらめなのぉ！」

浴場にジュルネ様達が連れ帰った少年を連れて来たのですが、お風呂に入るのを嫌がって逃げ回ってしまいます。少年の髪はボサボサで、埃や泥で元の色がわからないほどに汚れています。服ももとは上等なシルクで作られた白色のものなのでしょうけれど、泥や埃、あとこれは返り血なんでしょうか？ 白が赤く染まってしまっています。傷は見当たらないですから、それほど浴びた、ということなのでしょう……。なにがあつたのかとても気になります。それとズボンも元は黒地だったんでしょうけれど、ところどころ破れて生足が見えとてもやらし……。いえ、とても苦勞してきたというのが見てとれます。それに泥や埃で茶色や灰色に変わっていて、天然の迷彩色になっています。

暫くは私とガーネットで追いかけてまわしていたのですけれど、私はいい加減にお風呂に入れなければ怒られると思い、つい声を荒らげてしまいました。

「無駄です。観念して脱いでください！」

「い、いやああああああ」

少年は明らかな拒絶の音を上げて逃げ回ります。ああ、その声もまた……。いえ、そうです。若干立場が逆な気もしますが、まあ問題ないですよ。

それをガーネットが追いかけてまわしてついに角に追い詰めて下品な声を上げているのですが、実はそれが逆効果だったようです。とい

うか、ガーネットの追い詰め方と台詞はまるで変態暴漢のようで…
…、冷静に聞かなくても危ないと感じるものでした。そう、こっ
う少年を追い詰めるにしてもっと手があるでしょう。そう、もっ
とロマンのある……。そう思った時には、私は声を出してガーネッ
トを注意してしまっていました。

「ガーネット、落ち着きなさい。今のあなたは浪漫もへったくれも
無いわ」

あらいやだ。こんな発言は私のものではありません！ そう弁明
しようとしたのですが、うまくできない間にガーネットが言葉を発
します。

「あ、ごめーん、エナ。この子があんまりにも可愛い声で鳴いてく
れるもんだからつい……」

息を切らしながら言うガーネット。まあ、それはみとめます。あ
の声はよかったですものね。だからといって、という感じですが。

「あはは。だって、メイド長から歳の近い私達の方が馴染めるだろ
って言われたから……。馴染みやすいようにしようかなって……」

「だからってまるで暴漢のように追い詰めることも無いでしょうに
……」

明らかに、馴染みやすくという言葉の意味を取り違えています…
…。思わず、私の口から溜息が出てしまった。

「でもさ。こんな真つ赤とか泥とかで汚れた服着てるんだよ？ 髪
だってばさばさでくすんで元の色もわからないくらいだしさ」

そういいながら我慢できないの！ と地団太を踏むガーネット。
確かにその通りだ。屋敷の掃除を続けている私達からすれば、この汚れはまさに我慢できない物です。ですので、

「まあ、そうね……。汚いのはよくないわ。そう。淑女らしく脱がして、貞淑に洗ってさしあげましょう？」

あくまでも淑女らしく、です。その過程で男の子の裸が見えてしまっても、仕方がないですよ。腕を組んで横を向いてはいますが、思わずちらちらと男の子の身体を見てしまいます。

「さあ坊ちゃま。観念して脱いでください。メイド長たちは旦那様達のお世話に

回っているからここにはあなたと私達の三人だけよ」

私は男の子に向き直り、逃げ場をなくすように立ちふさがります。

「ひっ」

ああっ！ 駄目ですよ！ そんな良い声で鳴かれたら、我慢できなくなってしまうす！

私はもう堪えられなくなり、男の子に向けて一步を踏み出す。チエスで言うところのチェックメイトの為の最後の一手を、自分が動くことで為そうとする。

「ぼっちゃきやうっ！」

ですが、その一步を踏み出そうとした途端、私は自分の服の裾をふんで転んでしまいました。

私は倒れてから、声を上げて起き上がろうとします。

「いたた……くない。あれ？」

そこで違和感に気付いた私ですが、何が起きたのかがいまいちわかりません。状況把握をしようとしています。そこにガーネットの声が聞こえてきます。

「うわあ……二ナ、大胆だね……」

真っ赤になって、両手で口を押さえているガーネット。その視線の方向は、私の座っている床の方向に向けられていて、私も思わずその方向を見ます。

その状況に、私は思わずガーネットのように顔を真っ赤にしてしまいました。

それから慌てて立ち上がり、男の子の方がどこまで状況を把握していたのかドキドキしながら見守ります。

「いつつ……あれ、えつと……」

男の子は何故私達が赤面しているのか理解できていないようです。そのうち、慌てて下を向いて何かを確認したりしていました。最終的に落ち込むことで落ち着いたようです。なんで落ち込んでいるんでしょうか？ まあその姿もそそりますが。

「…………風呂、はいりませう」

落ち着きつつもそう言い、急に抵抗しなくなる男の子。まあ、私達にとっては好都合なのですが、先程の状況を思うと気まずいです…。ですから、私達は首を縦に振ることで同意の意を表します。

それを確認した男の子は服を脱ぎにかかります。シャツのボタンをはずし終えたと思った次の瞬間には、腰にタオルを巻いていただけになっていました。着替えた……んですか？　と思うほど、今の行動は素早かったです。男の子の横には脱ぎ捨てられた服があります。そこには杖や剣のようなものも置いてあり、この子がメイジであるということがわかります。

それから見えそうで見えない事が何度かありながらも男の子の全身を洗い終え、もとの男の子の容姿に私達は言葉を失います。十歳にしては鍛えられていた身体にも驚きましたが、さらに目を引くのはその白い髪です。そして、その白い髪に見とれている間に服を着てしまっていた男の子は、メイジのみが着ることを許されたマントを纏う。それにより、私はその子が本当にメイジだったのか、と思わず口からでてしまう。

その言葉に、ガーネットも首肯で答える。

「ん？　どうしたの、二人とも？」

貴族が貴族らしい服を着たことでその雰囲気が出たのか、その言葉一つをとっても貴族らしい、という感想が出てくる。

「あ、い、いえっ！　先程は失礼しましたお坊ちゃま」

私は先程まで働いた無礼に顔を青くし、上半身を地面と平行にせんばかりの勢いで頭を下げる。そんな私に続いて、ガーネットも私と同じように頭を下げる。

「いや、気持ち良かったからいいよ。ああそれと、名前を教えてもらってもいいかな？　お、僕はラウルです」

先程までの事はまるでなかったかのように話してくれるラウル様、

と名乗られたお坊ちやま。そして、平民にまで気を掛けてくれるその気づかいに感心してしまいます。

それから、ラウル様を食堂まで案内して送り届け、今日の仕事はこれで終わりかと思ったところで、メイド長に再び呼び出された。

「御苦労さま。あとはあのお坊ちやまが寝るところの用意をして貰っていいかしら？」

メイド長は二ナとガーネットを呼び出し、さらに仕事を言い渡す。

「えーっ！ やつとステーキが食べられると思ったのにいいー」

メイド長の言葉を聞いた次の瞬間には、ガーネットの口から愚痴が飛び出て来た。

メイド長はそれを一瞥してガーネットに愚痴を止めさせ、「宜しくお願いね」と二ナに言ってから食堂のジュール様元へ給仕をしながら戻っていった。

「うう、メイド長のおばさん……」

「やめなさい、あとでお仕置きされるわよ」

二ナのメイド長に対する愚痴を咄めますが、あれは絶対にメイド長に聞こえています。かわいそうに、ガーネットは今日はステーキ無しかも知れません。

「それよりも、速くやることをやって夕食をいただきますよう」

「うう、すぐに終わらせるもん……」

涙目で訴えるガーネットのその瞳には、決して揺るぐことのない、未だ嘗て見たことがないほどの決意の目が見えていた。

私達はメイド長に指示された部屋に行き、部屋の中を軽く整えます。この部屋はメイドさんの中でもベテランの人が掃除をするエリアなので、汚れ一つ見当たりません。ですので、軽く確認をしてから、ラウル様が着るであろうメイド長から渡された寝具一式をベッドの近くのテーブルの上に置きます。

「ねえ、この部屋って誰の部屋なの？ 妙に子供っぽいというかそんな感じするんだけど」

「えつと、メイド長から聞いた話には無くなられたお孫さまの部屋だったとか」

「ええ！？ ちょっと！ そんな部屋をあの子の部屋にするの！？ いいの！？」

「さあ？ でも、このままこの子供になるのだったら、不思議じゃないと思うけど」

あのラウル様が特別なこの部屋をあてがわれたということは、おそらく養子になる可能性は高い。私はそう結論付ける。

「あの子メイジだけど、だからってそれだけでこの子にするものなの？」

「そんなの私に聞かないでよ。でも、ジュール様はお子様は亡くなられているし、親戚も疎遠だからラウル様が養子になるのも無い話ではないわね」

そんな他愛もない話しをしながら、私達は仕事を終え、再び食堂にいるであろうメイド長に報告に行く。

「うにゃあああああああああああ！」

食堂からメイド長を呼び出してもらい、食堂の外で報告し、そしてメイド長の信じたくない話を聞き、ガーネットは悲鳴を上げて地面に手と膝をつく。私は、ガーネットの気持ちもわからなくは無い状態で、ガーネットがしていなかったら私もしていたかも知れないほどにショックを受けている。

「メ、メイドちょううつうつうつ、ほ、本当なのお……？」

最後の確認と言わんばかりに、顔から溢れ出る涙を拭おうともせずに顔を上げてメイド長に確認を取るガーネット。

「ええ、ゴメンなさい。今日の貴族様用のメニューは、あのお坊ちやまが、全部食べてしまったの……」

「ですが、二十人前は有ったはずでは……」

「そう、その二十人前を全部、あの子が食べたの……」

私は眩暈を覚えました……。まさか、二十人前の料理を全てあの子が食べるなんて……。

私はくらくらする額を掌で抑え、一步後ずさりします。

ガーネットは下を向き、その床についている手で床を叩いています。

「ごめんなさね、私もさすがに予想できなかったわ……。まさかあの子があんなに食べるなんて……。それに、いまも残っている食材を使って料理を作っている最中なのよ……。今日、一週間分の食材が届いてなかったらどうなっていたか……」

メイド長は頭がいたのか眉間にしわを寄せながら頭を押さえます。

「食堂の方々の食事が終わったら呼ぶから、休憩していても良いわよ」

「え、呼ぶって、まだ何か仕事があるんですか？」

「ええ、これからあなた達はその子の専属になってもらいます」

「「え……」」

私とガーネットの声が重なる。信じられない言葉を聞いたような気がして、自分の耳を思わず疑ってしまふ。

「一番歳が近いのはあなた達だし、その方が親しみやすいでしょうから」

「「……………」」

もう抗う気力も無くし、二人して頂垂れる。メイド長はそんな私達を気に留める風もなく話を続ける。

「近々専属らしく、部屋をあの子の近くに移します。すぐに移動できるように荷物をまとめときなさいね」

そう言つて背を向けて去っていくメイド長。私達はその背を見ることもなく、下を向いていた。

いつでも移動できるようにと言われ、もらった休憩時間で荷物をまとめます。私とガーネットは相部屋で、二人とも荷物は少ないので用意はすぐに終わりました。

「ラウル様、養子になるのかな？」

「専属がつくぐらいだし、なるんじゃないの？」

ベッドに座つて上を向きながら私達は会話をします。

「部屋、どこになるんだろ？」

「この離れに建っている使用人の部屋よりかは、豪華になるんじゃないかしら？」

「それホント？」

これからどうなるのか、という話をしていると、部屋がノックされる。

「メイド長が呼んでるわよ、二ナ、ガーネット」

「ありがとうございます、アーコさん。すぐにいきます」

ニナがそう答え、ガーネットもアーコさんにお礼を言ってベッドから起き上がる。

ガーネットと一緒にメイド長のところへ行く。

「ニナ、ガーネット、待つてたよ。はいこれ、ラウル様の着替え。ここの養子になるかも知れないから、粗相のないようにね。というか、手をつけてもらっときなさい」

「なっ……」

「ふえ？」

メイド長の言葉に、私はつつい頬を赤くしてしまいます。ガーネットは本当に意味がわかっていないようで首をかしげていますが。「部屋の向かいの空き部屋はあんた達の部屋にしていそうよ。これからそこで寝起きしなさい」

「あーい」

「わかりました……」

ラウル様の部屋へ向かう道すがら、ガーネットは私に話しかけてきた。

「ねえ二ナ。今日のステーキ、食べ損なっちゃったね」

「そうね」

「これ、許すべきじゃないよね？」

ガーネットが下を向き、何かをかみしめるような震える語調で言う。

「仕方ないんじゃない？」

正直私はあの子のことで頭がいっぱい。それはもう一週間も前から楽しみにしていたステーキのことなんてどうでもよくなるくらいに。

「仕方ないわよ！ あいつ、私のステーキを全部食べちゃうなんて！」

「ガーネット、その辺にしときなさい。もし貴族様に聞かれたら殺されてしまうわ。というかあなたのステーキって訳じゃないでしょ？」

「ううう、そうだけど……それくらい悔しいってことよ！」

「はいはい、そうね。悔しかったわね。そのうち何かいいことあるわよ」

いつまでも恨み辛みを言い続けるガーネットに、いい加減真剣に取り合うのも面倒になってきたので適当に返事を返す。

「いいこと？ 私何かいいことあるの？」

適当に返した返事に食いつくガーネット。この子の頭の中はお花畑に違いがないと思う。

「いいことは、いいことよ。そんなの私にもわからないわ。あ、ほら話をしていたら着いたわよ」

「んふっ、いいこといいことーなんだろー。なんだか楽しくなってきたわー」

先ほどまで食べ物の恨みで憤慨していたとは思えないほどの楽しそうな笑顔。それをみて私はこの子の頭の中はお花畑だと確信し、ラウル様がおられる部屋をノックする。

少し慌てるような音がして、招きいれられる。

「どうしたの？ こんな時間に」

先程風呂で着替えた服装からマントと杖、忍刀を外した格好でベツドに寝そべっている。

そんなラウル様の寝姿にときめいたわけではないのだけれど、顔を見るとなぜだか頬が紅潮してしまう。

「あ、あの、お着替えを……」

かろうじてなんとかそれだけをひねり出す。

「眠られるのでしたら、こちらの服に着替えて寝るように伝えろつて。メイド長がジュルネさんから言われたんだって」

ガーネットがそんな私を見かねてか補足してくれる。こんな時の物怖じしないガーネットは素直にありがたいと思う。

「あ、わかった。置いといてよ。一人で着替えられるから」

ガーネットをちらちらと見ながらそう言う。

「い、いえ……。召使いがいる貴族さまはご自分で着替えないと聞きました。ですので、私達が着替えさせていただきます……」

正直、まともに顔を見れなかったのものでそれで蟻い難いと思い、そのまま話を続ける。それでも、私の顔が赤くなるのは止まらないけれど。

「なんでラウルさままで赤くなってるのよ。もう子供は寝る時間ですよ。私が着替えさせたいだけ」

そんな私を気遣ってくれたのか、早く寝たいからなのか、ガーネットがラウル様を着替えさせようと迫る。

「なんで避けるのさ」

それを避けられ、ジトつとした眼を向けながらラウル様を見るガーネット。

それから、服を脱がそうとする攻撃とそれを防ごうとする防御を行いながらも会話を続ける。

「なんでそんな息を荒らげて迫ってくるのさ」

ガーネットの連続する攻撃を避け続けるラウル様がまったく息が上がっていないのに対し、攻撃を続けるガーネットは確かに息が上がっている。

「そんなことないよっ、はあっ、はあっ」

「そんなことあるから避けたんだよ！」

そんなガーネットを見かね、私は先程からの助け船の借りを返すためにラウル様を陰から羽交い絞めようとする。

私の行動に気付いたのか、ガーネットはラウル様の気を引くために「きよえええ！」と奇声を上げながら跳びかかります。それに隠れるように私は気付かれないように息を殺して迫り、捕まえようとする。

そんな私たちの攻撃を避けながら、ラウル様を大きく声を上げる。

「ら、らめえええええ！ 一人で、一人でできるからああああああ
！」

そうして、ラウル様専属となった私たちの初日は過ぎていくのでした。

第28話 準備（前書き）

前回のような過ちは二度と繰り返さないというか今までの自分の読み返すと安定のしてなさがヤヴァイ。

できるだけ安定した文章を書けるように頑張りたいです。

見捨てないでいただけるのであれば、これからも精進していきま
すのでどうかよろしく願います。

皆様の忌憚のない意見をお待ちしております。改善点などがあれば御指摘願います。

第28話 準備

ジュールネさんに拾われ、養子になってから二カ月目の朝。今日、朝一で二ナから差出人がアミーシャの手紙が渡された。

レーネに宛てて書いた手紙で、まさかアミーシャの名前で帰ってくるとは思っても居なかったラウルは驚きつつもその手紙を慎重に開ける。

その内容は要約するに、自分は無事、ということに集約していた。ほかはラウルを気遣う文章で大半が埋め尽くされていた。そんな手紙の内容に、ラウルは嬉しくもあり、アミーシャらしいとも思った。アミーシャはレーネ、エンドユのところを身を寄せて二人を指導すると書いてあった。そこは流石アミーシャということで、ラウルの気持ちを真つ先に汲んで動いていた。その手紙の返信にラウルはさらに斥候、偵察などの細作、つまりはスパイを育成するように書いた。長期に渡って必要になると思われるため、できるだけ若いのを教育し、スパイに仕立て上げるようにも、と。

お金は毎月不必要と思われる量を送っていたので足りるだろうが、近いうちに様子見を兼ねてお金も持っていこうと考えた。

そのために、ラウルは手元にある計画書をジュールネのところへ提出しに行くところだった。

ジュールネの執務室のドアの前に立ち、ノックする。するとすぐに返事が返ってきて入室が許可される。

返事を確かめてからラウルは入室し、ジュールネに挨拶をする。

「おはようございます、ジュールネさん」

「おはよう、ラウル。こんな朝から何か用事かね？」

朝、朝食の前にジュールネと顔を合わせるのは珍しい。大抵は朝食の時に一緒に挨拶も交わす。それが、朝食の前に訪ねてくるということは何かあるのだらう、と予想してのジュールネの言葉だった。

「ええはい、ちょっと欲しい物がありまして。それを建設するにあつての費用と用途などを持ってきたのですが……」

そういつて差し出す二十枚以上の紙で構成された計画書。その資料の最終的にかかる金額は四千エキューは下らない、と書いてあった。それに目を通し、ジュールネは冷や汗を浮かべる。

「よ、四千エキュー……。最高の家と庭付きの森が買える金額だぞ……」

額に汗を浮かばせながらラウルを見る。その目には説明をしてくれ、という意味が見てとれたため、ラウルは説明するために口を開く。

「ジュールネさんが御存じの通り、僕は水のメイジです。水のメイジの本文は何か解りますか？」

ラウルはジュールネに問いかけ、その質問にさも当然といった風にジュールネも答える。

「魔法薬の調合、ではないのかね？」

「ええ、その通りです。そして、僕はもう何年も前から調合をして

います」

その言葉にジュールネは驚く。まだ十歳そこそこの子供がすでに調合している事に。

「そして調合するのに、この辺りではその材料になる薬草などが少ないのです」

それはオーヴェルニュでも言えたこと。アミーシャの修行などで森に行く機会が多かったので気にはならなかったのだが、やはり家があった周囲では薬草などが採れなかった。生物の身体の一部が必要になる場合もあったのだが、それは蔵にあるか取り寄せしていた。こればかりは仕方ないと諦められるが、薬草系はせめてどうにかしたいというのが、ラウルの考えだった。

「むうう」

ジュールネはラウルの言葉を聞き、深く唸って考える。

「勿論、建てるのに掛かった費用は土地代も含めて、魔法薬の売り上げで利子をつけてお返しします。ですから、今はお金を貸してくれませんか……」

懇願するように言うラウル。ジュールネは書類に穴が空かんばかりに凝視し考え込んでいたが、その一言に顔を上げ、ラウルに問いかける。

「ふうむ、ワシは魔法薬の事などは全然わからんのだが、これはどの程度の施設なのだ？」

その言葉に、ラウルは返答に困る。どの程度、と聞かれても規模の説明ができない。ただ、計画を立てる上で参考にしたのがオーヴェルニユの屋敷のことで、そこになるべく近づけようと思って見積もった値段だ。歴史のあるオーヴェルニユと比べれば数段は劣るが、まあ必要なものは大抵そろえた感じだ。それを説明しようと、ラウルは口を開く。

「えっと、必要なものは粗方そろえた感じですか……。それ以外で必要になる用途の限られた専門的なものは、借りるお金を返済し終わってから返そうと思います」

一息に説明を終わる。それを聞いたジュルネはさらなる質問をする。

「どこに建てるのかね」

「えっと、できればこの屋敷の隣、と言いたいところですが、森の中の土地をいただければありがたいです」

十歳に似合わぬ気づかいをするラウル。屋敷の隣になど建てようものなら面倒くさいことになる。たとえば、その建物を招いた貴族に興味をもたれれば紹介せざるを得なくなり、そして必然的にラウルのことが話に上がる。ジュルネは土のメイジである。今は亡き息子夫婦にも、自分の妻にも水のメイジはいない。先祖の資質が出ることがあるとはいえ、ラウルが水のメイジであれば本当にジュルネの孫かと疑いの目を向けられるのは必至だろう。そこまで読み、ラウルは森の中に自分の調査施設を作りたいと申し出たのだ。

「それは別に構わんが、この費用はもう少し何とかならんか？ いきなり四千エキュールなんぞ無心できる限界を超えておる……」

そこはトリステイン貴族の悲しいところだろう。歴史はあるがそれだけ。国力などはガリアやゲルマニアに比べれば雀の涙。プライドだけで生きているようなものなのだ。当然ジュルネも、日々の生活を維持して生きていくことには長けていても、金を稼ぐことは商の資質がないので難しいところだろう。」

「ああ、では土地だけすぐにいただいてもいいですか？ お金は魔法薬の収益でお支払いします」

「あ、ああ構わんが、それでいいのか？」

力になれず申し訳ない、といった感情を表情に表わしながら言うジュルネ。それにラウルは明るい笑顔で答える。

「はいっ！ 土地を開発する許可がもらえただけで大丈夫です。人海戦術は得意分野ですし、調査とかはしばらくは効率性は落ちますが森で直接します。それで、ある程度お金がたまってから施設建造に入りたいと思います」

「し、しかし大丈夫なのかね……どれくらいの期間で貯められるのだ？」

「えっと、建物を建てるのでも本で調べたところ二千エキュ……それだけ貯めるまでですか……。前居たところのルートをすべて使えば、月に六百エキュですから、大体四ヶ月もあれば貯まるかと」
「月に六百！ ワシの領地の一年分の金額ではないか！」

金は金のあるところに集まると言うように、よほどの大貴族が王家に仕える貴族でもない限り、入ってくる金は往々にしてたかが知れているものだ。それがさして目立つこともなく、中小の分類に分けられるスリユダー家では仕方のないものだろう。

「そうですね。来月から半年ほど、できれば帰りたくはないのです

が、身辺整理も含めて一度帰ってもいいですか。連れて来たい人たちもいるので」

神妙に考え込んでいたと思えば、ラウルはそう切り出した。

「む、むう。そうか、身辺整理も含んでいるとなると、否とは断じ辛い……」

「は、半年で必ず帰ってきます！ あ、そうだ！ 月に一度は必ず手紙を出しますよ！ 絶対に逃げませんし、身辺整理とお金を稼いでくるだけですから……ッ！」

一気にまくしたてるラウル。ジュルネは、ラウルから養子の返事がもらえたからといって自分の前から姿を消さないとは思っていない。そのために、メイド長に言い、専属という形で常にラウルに貼りつけて監視させているメイドもいるのだから。

「ぬう、はっ！ そうだ、ではお前の専属も連れていくというのなら許可しようではないか」

名案、とばかりに顔を明るくして言うジュルネ。その言葉に、ラウルはそれならば、と提案をする。

「それならば七ヶ月、いや七ヶ月と二週ください。二人を連れていくのであればあまり無茶な移動はできませんから」

それを聞いたジュルネは、初めてラウルと会った時のことを思い出す。森で突然襲ってきたワイバーンを仕留めたときのことを。ラウルはあの時は移動のことなど考えてはいなかったが、亜人や魔物の居る森を最短ルートで北へ突っ切って結果的にトリスティンに来た。今回、力のない二人が同行するとなると国境を越えるときはと

もかくとしてもある程度は遠回りする必要があるだろう。

その移動時間を含めての七ヶ月半。二人の同行でも半年でいいと言えは帰ってこない可能性も上がるのだが、移動時間などを含めての修正案を出したことで、帰ってくる気はあるとジュールネはラウルを信用する。

「わかった、七ヶ月と十六日だ。それまでに帰ってきてくれるのかな？」

「はい、必ず帰ってくると約束します」

ジュールネに来月からの旅の許可を貰い、同行することになったと二人に伝えに行く。

廊下を歩いていると、ラウルの方へ歩いてくる二人の姿が見えた。ラウルを見つけた一人が駆け寄ってきて、ラウルに文句を言う。

「もうっ！ ラウル様！ なんで起こしてくれないのさ？ おかげで寝坊しちゃったじゃないのさ！」

ガーネットが今日、寝坊したことについてラウルを責める。身分が違うとかそんなコンプレックスは年の近い三人の間では存在しない。

「それはあなたが浮かれてるだけじゃないの。掃除の仕事がなくなっただけだって、何もなくてもいいってわけじゃないんだからね」

「そうだよ。というか、なんで僕が起こさないと駄目なのさ。自分で起きるか、二ナに起こしてもらえばいいじゃないのさ」

ガーネットの逆切れに近い文句に反論される。あまり頭のよろしくない、考えるよりも行動派のガーネットは、二人の小言にさらに

逆切れする。

「う、うるさーい！ とにかく、私が起きれないときは二人のどつちかが起こしてくれたらいいの！ メイド長に私が怒られちゃうから！」

「ど、どうでもいい……」

「はい。というか、ガーネットが怒られようと私たちは知ったことじゃありませんけど」

二ナの突き放すような言葉を聞いたガーネットはショックを受けた表情になり、そのくりりと大きな茶色の瞳にはうるると涙が溜まっているのが見える。

「うおつとあー！ そういえばガーネット！ 後二ナも。来月、旅に出るんだけど付いてきてくれる？」

話題転換してガーネットの気を逸らそうとする。ガーネットがふえ？ と案の定作戦にかかり、二ナもガーネットの気を逸らすために話に乗る。

「旅、ですか？ 期間はどのくらいですか？」

「七ヶ月半」

「何処へ？」

「ガリア。それ以上は言えないよ」

「私たち、ですか？」

「うん。僕と二ナとガーネットの三人」

二ナの簡潔な質問に同じく簡潔に答えていくラウル。それはまるで流れ作業のようであった。

「旅行、私たちも行けるの？」

ガーネットが瞳に溜まった涙を拭いながら質問してくる。それを機嫌をそこねてまた泣かさないように明るく答える。

「うん、一緒に来てくれる？」

ガーネットはボーっとラウルを見つめていたと思えば次の瞬間には満面の笑顔になった。

「わーーーーー！ やったああーーーーー！！」

目を輝かせ、ぴよんぴよんと跳ねまわる。

「きゃっはー！ 旅行なんてはじめてー！ みんなに自慢しなくちゃ！」

そう言った次の瞬間には走りまわっていて、止める間もなく見えなくなる。

「……………機嫌が直って何よりですね」

「え、あ、まあ、そうなのかな？」

ガーネットの走り去った方を見ながら、二ナとラウルは茫然と立ち尽くしていた。

第29話 旅行出発（前書き）

んぬわぁぁぁぁぁ

短い！ 何より短いすみません！！

文才がないとあれなんですだから生温かい目で見守ってええええ…
…。。。

ああ、超死にたくなつた……期間空けてこの少なさ。罵られても甘んじて受ける覚悟ではありますが、あまり罵られると僕からキノコが生えてくるので飴と鞭方法でお願いします頑張ります。

第29話 旅行出発

「準備できました」

二ナは普段のメイド服ではなく、白いブラウスと紺色のスカート、そしていろいろな必需品が入っていきそうな鞆を持ってラウルの部屋へと来た。

ラウルも準備という準備は終えていて、いつもの白いシャツに黒のズボンという格好にマントと小さな背負い袋を加えて部屋の中で立っている。

「あとはガーネットだけだね。もしかしてまた寝坊？」

未だにやってこないガーネットに対し、いつもの事であろう予想を立てて二ナへ聞く。

「いえ。しっかりと起こしましたよ？ 一度目は」

「あ、はは………」

二ナの言葉に、二の句を継げず苦笑いするしかなかったラウル。一度は起こしたと言うところを強調する辺り、二度目でもしたんだろつと結論付ける。そして、ここにいない人のことよりも、今日の前に広がる新鮮な光景の事に思考を移す。

いつものメイド服は二ナの知的な雰囲気と相まってぴったりのイメージではあるが、普段着の二ナもなかなかどうしていいものじゃないですか。イメージは知的、というよりも清楚。白いブラウス

を適度に盛り上げている膨らみもポイントが高い。それに、スカートも黒ではなく紺色というところも一味加えた感じがしてグッドである。総合的に点数をつけるとなればファッションセンスは八十点くらいか。もう少し、主張するようなアクセントがあってもいいかもしれない。

「あ、あの、ラウル様……」

二ナがモジモジしながらラウルを見る。左手は右ひじに添えられて引かれる。それに伴って適度な膨らみもさらに寄せられる。ラウルはそれを凝視しながら返事をする。

「な、何かな、二ナ？」

「あ、あのですね……あまり、見ないでいただけないですか……」

赤面しながらもおおずおずと言つてのける二ナ。その発言に、改めてラウルは二ナの胸を凝視してしまっていたことに気付き、慌てて目を明後日の方向へと逸らす。

「あー、ううううううめん！」

「い、いえ……」

そこに、調子を見計らつたかのようにガーネットが勢いよく部屋へと入ってくる。

「ごつめーん、おまたせー！」

いつもの空気の読めていない発言ではあるが、いまは逆にそれがありがたかった。部屋にガーネットが入ってきたため、先程まであった気まずい雰囲気もりセットされ、調子を切り替えたラウルがす

かさず口を開く。

「さ、さあーと、皆準備できたみたいだし、行こうか。二人は玄関で待っていてくれる？ ジュルネさんに挨拶してから行くからさ」

「あ、はい。わかりました……」

その言葉に二ナが返事をする。返事を確認してから、ラウルはジュルネの部屋へ向かいべく歩をすすめた。

目的の部屋へ着き、ノックをする。すぐに入室の許可があり、部屋へ入る。

「おはようございます、ジュルネさん。今から出発します」

旅行へ行く前に家主であるジュルネに断りを入れる。

「ああ、おはよう、ラウル。気をつけて行くんだぞ？」

ラウルへ注意を促し、旅の無事を祈るジュルネ。生き残り方に掛けてはジュルネはラウルの実力を知っている為に心配などなかったが、万が一ということがあるために注意を促しておく。

「ええ、ありがとうございます。それでは」

「おっとつと、ラウルや、見送りくらいはさせてくれないか。これから半年以上会えなくなる訳だしな。顔を焼きつけておきたい」

そう言って席を立ち、ラウルと共に玄関へ向かって歩きだすジュ

ルネ。

ラウルはただ一言ありがとうございます、と言ってジュールネの横へとついた。

「気をつけていくのじゃぞ？」

「ええ、もちろん。二人もいますからね。安全最優先です」

「帰るのも、遅れないようにの」

「はい。余裕を持って帰るようにします」

「忘れ物はないか？」

「ちよ、そこまで心配してもらわなくても何とかありますから」

「そうか？ それならいいが……風邪はひかないようにの？」

ジュールネの心配は玄関に着くまで続いた。

「二人ともお待たせ。それじゃあ行こうか」

玄関に着き、ラウルはそこで待っていた二ナとガーネットに声を掛ける。

「はい」「はい」

二人の返事を聞き、ジュールネに再び最札をして出るラウル。見送りはジュールネと執事長とメイド長、そして玄関を掃除していた数人のメイドだけだった。

何も特別なことはなく見送られ、長いようで短い旅が今始まった。

第30話 行程

「ねえねえ、今どこ？　ここどこ？」

周囲を物珍しそうに眺めながらガーネットは前を歩く二人に質問する。

「さあ？」

「さあ？　って、ラウル様は解つてないと駄目ですよね？」

道端の草を適当に見繕つて耒りながら簡潔に答えるラウルへ、二ナは鋭い突っ込みを入れる。

「えっと、大丈夫。人の気配はこっちのほうが濃いから。スリュダ―から山一つ越えないと村に着かないんだってさ」

「濃いつて……なんですかそれ。そんなものがわかるんですか？」

少し考える素振りを見せながらも大丈夫な根拠を述べると二ナはそれに食いつく。同時に、初めてラウルと邂逅した時の汚れ具合も思い出し、まさか野生の人なのでは、と想像する。

「ああ、うん、まあね。でもあれだよ、ヴァリエール近辺の領地でもない限り、南に進んでれば絶対にガリアにつくんだよ。スリュダ―家はラグドリアン湖の西側にあるから問題なくガリアまで行ける」

クルデンホルフ大公国ほど西にあるわけでもないしね、と付け足すラウル。いくら普通の平民よりも学があり、頭のまわる二ナといっても地図や家名が頭に入っていなければ詳しいことはわからず、そうですかと答えるほかはなかった。

数か月前までガリアで住んでいたラウルがなぜそこまで知っているのかというと、ジュールネの徹底したトリステイン貴族化教育と、教えれば木綿のように吸収するラウルの頭のおかげだろう。

「今度、勉強とか教えてください」

解らなかったことに何か思うところでもあったのか年下であるラウルに教えを請う二ナ。ラウルは気にした風もなくいいよと答える。それから二ナとラウルは他愛のない世間話のようなものをしながら道中を歩く。

会話を始めた二人の後ろをはぐれないように歩くガーネットは、知識を得るよりも今を楽しむ方が大事なのか周囲の食べられそうな木の実などを見つけては採って食べていた。

「山を越えれば村か何かがあるのですか？」

「あー、確か街、だったかな。スリュダーで一番大きいの」

「街！？　ねえねえ、おいしいのある？　どんなのがおいしいの？」

街、という単語に反応し、さらに食にのみ思考が繋がるガーネット。そんな幸せな頭の少女に、ラウルは辛い現実を突きつける。

「いや、馬を買うだけ。流石に歩きは辛いし。そう言えば、二人は今から行く街には行ったことあったっけ？」

聞き忘れていた基本的なことを聞く。ここでもし、二人の内どちらかが言ったことがある、と答えていれば簡単な案内などを頼むつも

りでいたが、どちらも寄ったことがなかった。

というか、非公式とはいえ名目上の跡取り息子が小旅行にでるのだから、何かスリユダーの領内でのみ通用する許可証のような物を作ってもらえば良かったと後悔する。が、許可証なんてものを使えば足跡が残ってしまうと思ひ至り、やはり最低限の荷物と金だけを持ってきたのは正解だったか、と今の状態が正解だと結論づける。

「二人は、どういう経緯であの屋敷で奉公することになったの？」

なにか会話が無いかと考えていたらこれが思いつき、そう言えば聞いていなかったなと聞いてみる。

「私は、募集があると祖父に聞かされ、面接を受けたら受かったので奉公することになりました」

ほうほう。詳しく聞いてみればニナはスリユダー領内にある村の村長の孫で、長男となる弟が生まれ、その生活費を稼ぐために奉公にだされたのだという。あまり話のタネにはできないような理由だった。

「ごほん。と咳払いをして、空気を変えるために少し後ろを歩くガーネットに話を振る。」

「ガーネットは、どうして屋敷で奉公することになったの？」

ラウルの言葉を聞き、若干考える素振りを見せてから、思い出したと言うように顔が明るくなり笑顔で言う。

「ここだったらご飯がいっぱい食べられるーってお母さんが言ってたから！ あとお父さんが『くちへらしだー。どうじにかねもはいる、いっせきにちょうじゃー』ってよくわかんないこと言ってた」

さらに空気が重くなった。まさか二ナもそれなりではあったが、ガーネットもだとは……。というか父親最低だな。いつか会えばぶん殴ろう。というかこの空気をどうするんだよ切り替えるにもお前生半可な話題じゃ無理そうだぞ、とこんな話題を振った自分に後悔する。そういえば、スリュダー領内の平民の生活はそれほど裕福ではないようだ。少なくとも、数人の子供を同時に育てられる環境ではない。由々しき事態だ。もしこれが十年二十年と続けば領内の人口は減り、そうすれば税収も減り、ゆくゆくは領地の経営ができなくなってしまう。スリュダーを継ぐというのであればこういう状態は避けるためにどうにしなければならいだろう。

いつの間にかラウルの思考が重くなった空気の打開方法から領地の経営方針へと変わっている。それに気付かずさらに思考を深めていくラウル。すぐ後ろで二ナが急に静かになったラウルを気にしている。さらに後ろのガーネットに至っては咲きお度の話などなかったかのように振舞っている。両者ともに自分の身の上話のことなどなんとも思っていない様であった。

「あ、あれ。街壁ではないですか？」

その二ナの言葉に、ラウルは没頭していた思考の海から浮かび上がり、前方を見る。

「あ、ほんとだ。確かあれがスリュダーで一番大きい街だね」

スリュダーの屋敷から西に山を一つ越えたところに、スリュダー

領内最大の街、ユヴェーレンがある。スリユダーは領主が代々土のメイジであり、さらに稀少^{レアメタル}鉱物資源が豊富であることから別名宝石の町、とも呼ばれている。宝石を売ることで入ってくる税収は少なくはないはずではあったが、なぜか領主はもちろんのこと末端で働く平民にまで収入が届いていない。一体何が原因でこのような状況になっているのか、そのうち調べる必要がありそうだ。

「ってあれ？ これで一番大きいって、なんか小さくない？」

「そうでしょうか？ 私は十分大きいように思うのですが」

街壁に近づき、ラウルの拍子抜けしたというような発言に二ナが疑問を返す。

その拍子抜けしたような発言も、ラウルの出身を鑑みれば仕方のないことだった。ラウルの生家は、魔法薬を調合・販売していた。オーヴェルニユは領地の大半が高地である。そのため、主産業は農業・牧畜など直接生活に関係してくるものが殆どで、俗に第二次産業といわれるものはほとんどなかった。牧畜で得た肉も毛も、加工して売ってはいるのだが、それもほとんどが領外での取引なのでオーヴェルニユの収益となることは稀であった。ラウルはそれを聞いて先祖の商売への無頓着さを嘆き、直さなければいけないとも思っていたのだが、口出しする前に潰されてしまった。まあ何はともあれ、商売は下手でも民想いで知られているオーヴェルニユでは魔法薬販売で得た収益の幾許かを都市開発に充てていた。ガリア視点で見れば古くから存在しているゲルゴウイアは小さい規模であったが、トシステイン視点で見れば首都級であった。

さらに、ガリアでのスタンダードな都市設計をしつつも細かなところでラウルの意見を採っているクレルモン^{II}フェランでは、貯蓄されていた今後も使う予定のないであろう魔法薬の売り上げを投入し、ゲルゴウイアを凌ぐ規模になっている。そしてクレルモン^{II}フェランではラウルが問題視した加工・商談などが主に行われるよう

に都市設計されている。

故に、それらを見てきたラウルにとってはスヴェーレンはそれほど大きい規模には見えないのも無理はない。

「まあ、石の取り扱いとかがほとんどっていう街でも移動に使う馬くらいは売ってるでしょ。旅の資金もそこそこ持たせてくれたし、今日はここで泊って、明日二、三頭は買って出発しようか」

そう言いながらマントを丁寧にたたみ、杖と一緒に背負い袋にしまう。中に入っている途中で摘んだ薬草を潰さないように注意しながら。

閉まって前を向くと、前方で初めて見る街壁にテンションをあげてはしゃぎ回っているガーネットを横目に見ながら二ナへ相談するが、ここで、二ナが今まで眼中にすら入れていなかった問題点を申し訳なさそうに口にする。

「ラウル様。私と、おそらくガーネットもですが、馬に乗れません……」

それも当然だった。スリユダーの屋敷に奉公に出されてから遠出など一度もすることがなかったのだから、馬に乗れないことも仕方ないと言える。

「あー、そっか」

二人が乗れないということとを全く考えに入れていなかったラウルは、自分がその程度のところまで頭が回っていなかったことに辟易とする。

「なんで気付かなかったんだろ……」

木に寄りかかって落ち込んでいる。今にも両手両肘を地面につきそうな勢いである。そんなラウルをみて見惚れるような、今にでも涎をたらしそうな表情を浮かべていた二ナは、なんとかその表情を隠しながらもラウルのフォローをする。

「ラウルさま、とりあえず街に入りませんか？ それから考えても遅くないと思います」

咳払いをして気持ちを切り替えながら言う。そう言った二ナも、心なしかうずうずしているように見える。初めて訪れる街に興奮しているのだろうか。

まあまだ十四歳だしね、と一人納得し、二人に声を掛けて街へ歩き出すラウル一行。

第31話 ユヴェーレン

ユヴェーレン正門。そこでは左右の門の端に兵士が立っていた。それを眺め、練度が低いなどと分析しながら門を通りすぎる。

門を通過し、ある程度進んだところで、ラウルは思った疑問を口に出す。

「あれ？ 関税は？」

二人はなんのことが解らない、と首をかしげている。ということは、スリユダーでは取っていないのだろうか。まあ人の動きをそれで滞らせたりしたらいろいろ問題でくるし、いいのか？ と無理矢理納得してとりあえず宿を取るために歩く。

宿屋を見つけ、二人部屋一つと一人部屋を一つ取る。接客をしてきたのは四十代半ばほどのオッサンで、愛想は悪そうではあるが人は良さそうであった。ラウルにとっては店主の人となりよりも二ナとガーネットは同じ部屋では無いことをこねた事の方が問題ではあったが。

「じゃあ部屋に荷物を置いたらここに集合しようか。ご飯食べに行こう」

「えー！？ ご飯！！ わっきゃー！ 二ナはやくー！」

ガーネットはご飯という単語に反応し、テンションが最高潮にな

る。ガーネットに追従するように、ハイハイ、とため息混じりに言
つてついて行きながら此方に頭を下げ、ついて行く二ナ。相も変わ
らず二ナはメイドの鏡だな、とうんうんと頷いているラウルも、ガ
ーネットに機嫌を損ねられてはたまらないと借りた部屋へ歩いて行
く。

ユヴェーレンの街で高級そうな設えの料亭を見つけ、そこにはいる。

ガーネットはもつと庶民チックな場所に入りたそうではあったが、ラウルの服装はマントと杖は外しているとはいえ貴族、金持ちのそれだ。杖を持っていないのであればええとこの商人の御曹司で通るかも知れないが、まあ服装はおいおい考えるところとして、今回はガーネットに我慢してもらってラウルの服装に相応しそうな料亭に入る。

「ラウル様、私たち、場違いではないでしょうか」

「大丈夫、侍従ってわかると思うよ、ふた……一ナの態度で」

二人、と言おうとして言い直す。振り返りながら言っていたのだが、視界の端にガーネットが飛び跳ねているのが見え、言い直したのだ。それに気付いた二ナが、グワシッ！　とガーネットの頭を右手一本で掴んで耳元で何か囁く。

「ぴっ。びええええええええ！」

涙目になったかと思えば泣き出すガーネット。ラウルは慌てて右肩でガーネットの腰を抱え、空いている左手で二ナの手を引いて店

を出す。

しばらく小走りで進み、表の道から逸れて裏道に出たところで止まり、二人を離して言う。

「ちょ、二ナ！ ガーネット！ ここは屋敷じゃないんだからさ、もう少し侍従つぽくしてくれない？ 僕の面子とかはいいんだけど、そんなんじゃ怪しまれて飯も食えないよ」

二ナはシュンとして小声ですみません、と言っている。反省してくれているんだっいたらいいんだけどね、と考えながらガーネットの方を向く。

「えぐつ、ひぐつ、ぴ、ぴえええ」

いまだ溢れ出る涙。堪えようとするが、先ほどの二ナを思い出すのか泣きやむことはない。

どうしたものかとオロオロと周囲を見回していると、大きな建物から幌付きの馬車に乗った老人と、その隣に座る少女がこちらを見ていた。

パカパカと馬を進ませ、ラウルたちのいる方向に進んで来る。老人と少女が何か相談している。少女は口元を手で隠しているの、唇を読むことができない。老人は歳相応なのだろうか、もつさりとした髭が口全体を覆っていて同様に唇を読むことができない。

様子を見てみると、茶色がかった黄色の髪をした少女が、馬車から飛び降りてこちらに駆けてくる。

「ねえ、どうしたの？ そっちの子、どこか怪我してるの？」

話しかけられるとも思っていなかったラウルは、その少女が指さす方を見る。どうやらガーネットのことのようだ。二ナは調子を取

り戻したのか、知らない人が近づいてきて怖かったのか、ラウルの後ろに回り袖をきゅっと掴んでいる。

「ああ、いえ。先ほど怖いことがあったようで……」

ふーん、とさして興味がなさそうに返事をしてから、トットット、と小気味いい音を立てながら馬車の方へ戻っていく。なんだ？ 冷やかしに來ただけなのか？ と思っていると、幌の中から少女が何か持って出てくる。そして再びこちらに近づいてきて、持ってきた瓶に人指し指を入れたかと思うと、それをガーネットの指に突っ込んだ。

「ぴえんっ、んぬっ、ぬ……ぬ……ぬ!？」

何かに取りつかれたかのように一心不乱にその少女の指を舐め回すガーネット。少女が、指がくすぐったいのか、あっ、んっ、だめっ、などと声をあげている。なるほど、興奮する。二ナも何があったのかラウルの肩から顔を覗かせ、ガーネットと少女がいる方を見る。

「きゅぽっ、ん。これ蜂蜜!？ しかも採れたての新鮮なやつじゃない!! ねえもつとちようだい!!」

なんとまあ厚かましい子どもなのかしらガーネットちゃんたら。あなたさっきまで泣いてたじゃないの。というか初対面の人にいきなりもつとつてねだるとかどんだけ人見知りしないのよ二ナもちよつとはガーネットを見習ってもらわないとお母さん心配っ!

そんな母のような慈愛の目をしていると、少女がやっと立ち直ったのか息を荒らげながら会話に参加してくる。

「はあつ、はあ、駄目よ、蜂蜜は貴重なんだから。まあ、そのご主人さまっぽい坊ちゃまが買ってくれるって言っんなら別だけど……」

ちらり、とこちらにしなを作り、胸と蜂蜜の瓶を強調しながら流し眼を送ってくる。

まったく、商売上手な子だよ。というかその育ちすぎた胸は反則じゃないかな？

胸を意識しないようにしながらいくら？ と聞く。二ナがその少女の胸を見ながら、ラウルを掴む手の力が強くなる。一刻も早くその胸を強調するポーシングをやめていただかないと折れる折れる。

「まいどっ、銀貨二枚でいいよ」

レートも何も知らないの、いい値を渡す。少し驚いた顔をしながら受け取り、こちらに瓶を渡してくる。すかさず瓶をガーネットが奪おうとしてくるが、二ナに渡すことで抑止力にする。

「坊ちゃん、レートわかってるの？ 銀貨二枚あつたら平民が一週間には食える値段だよ？」

私が言えた義理じゃないけどさ、と言いながらも銀貨を一枚返してくる少女。

「へえ、そうなんだ。買い物なんてしたことがないからそういうのには疎くて……」

まあケチるほどしか金を持っていないわけでもなかったし、とは口が裂けても言わない。オーヴェルニユでは当主のほぼ趣味と言える魔法薬の調合で巨額の富を得ることができていた。ありがたいほど

高額のその収入があつたため、というのもあるが買物にはメイドやエドワードさんに任せていたので知らないのも無理はない。スリユダーでも、まだお金にかかわることはさせてもらっていないので、トリステインでのレートもわからないでいた。

「ふーん。あたしだからよかったけど、性根の腐つたやつには注意しなよ?」

じゃ、と言ってすぐ傍まで来ていた馬車に乗り込む。そこでラルは気付く。ああそうか、馬に乗れないなら馬車にすればいいじゃない、と。お金を払えばガリアまで乗せて貰えるかも。と考え至り、さっそく聞いてみる。

「すみません、これからどこへ行くのかお聞きしてもいいですか?」

丁寧に。まあこっちは貴族、あつちが平民の商人だけでもそれはそれ。礼儀は忘れてはいけない。

「え? あたしたち? えつと……、ねえおじいちゃん。どこに行くんだっけ? え? ああそうそう。えーっと、隣のピュルン伯爵領とかを通つて、最終的にはクルデンホルフ大公のところまで行くんだってさ」

ということとは西に行くのか……。なんとか交渉して南に進路をとつて貰えないだろうか。

「南に進路を取ってもらふことはできませんか? ちょっと乗せて行ってもらいたいんですけど」

貴族とは思えないほど腰は低くお願いする。少女は隣にいるおじ

いさんにお伺いを立てる。ラウルを送ることによって出る損害などを天秤にかけているのだろう。商いをするにあたって人の縄張り侵さないようにしたりと、商人は考えることが多そうである。

「ねえ、坊ちゃん。あんたを送ったら何か利益があるのかい？」

少女は簡潔に聞いてくる。そんなにあからさまに聞いてもいいのだろうか？　と思わなくも無いが、わかりやすくして俺にはやりやすい。

「言い値を渡しましょう」

笑顔で。これ以上ない程のニタリ、と腹に何か抱えていそうな笑顔を浮かべる。

少女が取引を間違えたか、という風な顔をしている。それでも怖じ気づく事無く値段を言ってくる。

「金貨十枚……いや、三十枚でどうだ！」

「はい、問題ないですよ」

「そうそう、私たちは安かないんだよって！！　うえええええええ！！！」

少女が目を剥いて驚き、叫ぶ。

「き、金貨三十枚よっ！？　新金貨じゃなくてもちろんエキューよ！？」

どうやらその金額のでかさに驚いているようだ。しかしラウルからすればそれほど大した値段であるように思えない。

ラウルが作る魔法薬の値段は物にもよるが、材料費を引いても大

体十エキユーの利益は下回らない。材料を自分で調達すれば売ったのがそのまま利益になる。そんな金銭感覚でいるから、先ほどの少女から小金をだまし取られそうになったわけだが、それで十年以上生きてきたので今更変えようとは思わないのが正直なところだ。

「まあ、それくらいなら魔法薬を二本か三本作ればできるし……」
「しかもそれは私達平民が汗水垂らして……って。魔法薬？」

少女が聞き返してくる。そういえば言っていなかったと思い、仰々しいお辞儀をしながら自己紹介する。

「どうも、スリユダー家次期当主。ラウル・ド・スリユダーです。系統は水。魔法薬の調合を得意としています」

第32話 商人の娘

「で、でええええええええええ！！」

少女が驚きから大声を上げる。先ほどから驚きすぎて開いた顎が塞がらなさそうな勢いである。

少女の後ろで、荷馬車に座っているお爺さんも目を剥いてこちらを見ている。その眼の色は少女と同じ茶色がかった黄色で、少女とは確かに血の繋がりが有りそうだと思わせるには十分であった。

「あ、ああああんた、貴族様だったの、ですか！？」

少女の大きな声に二ナとガーネットも蜂蜜争奪戦を中断してこちらを見ている。二人だけでなく、人通りの多くない裏通りにいる人間全員からの視線を一身に浴びている。

「うん、まあ」

頬を赤らめ、左下を見ながら照れくさそうに答えるラウル。そんなラウルの態度とは裏腹に、少女は顔を青くする。

「す、すすすみませんでしたあ！　な、なんとか命だけは助けてもらえないでしょうかああ！！」

腰を直角に折り、必死に謝る少女。その様子に周囲の視線は少女からラウルへと視線が移る。それを敏感に察知したラウルは慌てて、

頭を下げている少女に向かって頭を上げるように言う。

「ちょ、そんなかしこまらなくても何もしないから！　ちょ、お爺さん！　これ辞めさせてくださいよ！」

そんな必死なラウルの態度を見てか、御者台から動かなかったお爺さんがその重い腰を上げ、少女の横に立って同じく頭を下げる。

「孫の責任はワシの責任……どうか殺すならこの老いばれにしてくださいませ……」

空気も読まずに言った。それを確認した周囲はラウルへ不審な眼差しを向ける。そして、これだから貴族は。や、ためーらが生活できてんのは誰の血税だコラ。などといった文句も出てきた。

完全に悪者な空気になったラウルはとりあえず場所を変えようと思ひ、頭を下げる二人に願ひする。

「大丈夫、殺したりなんかしません。少し静かな場所で話したいので場所を変えてもらえませんか？　ここは居心地が悪いので……」

その言葉にとりあえずの危機を回避したと感じたのかお辞儀を辞め、ラウルと侍従二人を荷馬車の中に入れ、馬車を出す。

「坊ちゃん、どっちへ行きましょう？」

「とりあえず僕の取っている宿へ向かいませんか。あっちです」

とりあえず人気のないところであればどこでもいいのだが、それで思いついたのが貴族の見栄で取った大きめの自室のことだった。

自室へたどり着き、ラウル一行はベッドへ、商人一行は椅子へとそれぞれ座り、話を始める。ラウルが取った部屋は貴族の見栄で仕方なく取った、広めの部屋である。ざっと二ナとガーネットの部屋の二倍はある。日本人感覚で言えば七畳ほどのその部屋の右端にちよつと良さ気なベッド、入口の正面には木でできた窓が付いており、その手前にはベッドの半分くらいの大きさの机、その上に水が入っている瓶が置いてある。

「えっと、改めまして。僕はラウル・ド・スリュダー。このスリュダー領の次期当主の予定です。こっちは銀髪の方が二ナ、ツインテイルの方はガーネットです」

「よろしくお願いします」「よろしくー」

ラウルに名前を呼ばれ、行儀よくお辞儀をする二人。その自己紹介に呼応するように、少女も自己紹介をする。

「えと、改めまして。私はアキナ。こっちは私のお祖父ちゃんディウル」

アキナ、と自己紹介する少女。髪の色は茶色がかった黄色で、俗にカーキ色のような感じだ。ショートカットにっていて、ボーイッシュな印象であるが、彼女の胸部がそれを阻害している。二ナよりは年上であろうその少女の胸部にはそれなりな大きさのスイカが二つついている。アミーシャ程ではないが、この少女も十分以上の大きさである。服装はお爺さんと同じような感じで、茶色のズボン、元は白かったであろう少し汚れたＴシャツ。それをツリバンで押さえつけている。が、お爺さんとは違い、その主張の激しい胸がある

ため、お爺さんとは違い色々と艶めかしく見える。

アキナの声に合わせてお辞儀をするお爺さん。茶色いズボン、元は白かったであろう汚れたＴシャツ。それをツリバンで押さえつけている。少女と同じ服装ではあるが、その横に大きい体型や口全体と目を覆う白い髭と眉毛が好々爺な印象を与える。だが眉毛からこちらを覗いているその眼はラウルの一挙手一投足、それだけに限らずすべてを見逃さずに見透かそうとするような鋭い目つきであった。

「えと、それで送り届ける、っていう話なんだけど……」

「え、ああはい」

いきなり本題に突入するアキナ。オドオドしたその様子から見るに、まだ交渉事には慣れていないのかもしれない。

「本気？」

心底信じられないと言いたげな表情。それに怯むことなくラウルは表情を笑顔で固定したまま答える。

「ええ、もちろん」

「三十エキユーよ？」

「ええ、それが？」

「それがって……それがどんな大金かわかっているの？」

「さあ、知りません。でも、作るうと思えばいつでも作れますよ」

そう言うてのけるラウル。それにアキナは口端をヒクヒクさせる。彼女の祖父にも目を向けてみるが、じつとこちらを見ているだけだ。どうやらこの話に口を挟んでくることなく静観してくれるようだ。

「ゴホンッ！ 別に送るのはいいとしてもよ？ あんた本当にお金

持つてるの？」

「えっと、今はこれだけしか……」

笑顔を崩し、申し訳なさそうな表情をしながら腰につるしていた袋をアキナに渡す。

袋を受け取り、机の上に袋の中のお金を出す。

「金貨三枚と、銀貨八枚。銅貨が二十三枚……全然足りないじゃないの」

「えっと、後はこれを……」

そう言っマントを入れていた鞆から薬草類を取り出す。

「それは？」

「まあ見ていて下さい」

そう言っ杖と瓶を取り出し、机の上の数種類の薬草に集中しながら呪文を唱える。

「え……あんた何してるのよ？」

今更遅いが、主導権を取られまいと必死に声を出したアキナ。残りの三人は、ラウルの魔法行使に見入っている。

「――、と。後はこれを瓶に慎重に入れて……完成。魔法薬です。友好の証、という程でも無いですが、差し上げますよ」

そう言い、瓶に入れたばかりの魔法薬をアキナに渡す。

「魔法薬、って……これ一本いくらすると思ってるのよ……」

「え？ 別に珍しい素材は使っていないから、普通の魔法薬だけ……」

「なに言ってるの！ これだけでも貴族が凄い金額積んで買いに来るわよきつと！！」

興奮したように大きな声で言うアキナ。ラウルからしてみれば魔法覚え立てのごくごく初期から作っている一番ありふれた魔法薬なのだが、アキナには珍しかったようだ。まあ大抵の人間には珍しいだろうが。

「ちよつとこれ売ってくるわ！ まだ商会も開いてるだろうし！！お祖父ちゃん早くっ」

イウル爺さんを伴って宿を出るアキナ。こりやあ度肝抜かしてやるわあ！ あのタヌキヤロウツ！！ という声が出口からここまで聞こえてくる。それに、あの思い立ったら即行動な性格も好印象である。

「楽しそうな人だなあ」

一人窓の方を向いてアキナの直情的な性格にからかいがいがありそうだとにやにやするラウルだった。

第33話 仕切り直しの旅立ち前夜

「じゅ、十四エキュー……」

「あー、まあそれくらいでしょう」

帰ってきたアキナが漏らす言葉に応える。

「あんた……これがどれだけの大金か解ってないんじゃないの……？」

あきれるように答えながらも、アキナは手を差し出して来る。

「まあ良いわ。あんたが金づるだって分かったし、送ってってあげる。ねえお祖父ちゃん」

おじいさんを仰ぎ見るアキナ。おじいさんはそれを無言で小さく頷くだけで返す。

「じゃあこれからどうする？ 正直この街は見所なんて無いけど」「あー、任せます。そっちも全然解らないので。できるだけ遅くならないように目的地まで行ければ……あ、一つだけ。彼女たちが退屈しないように、少しだけ観光なんかも入れていただけるとありがたいです」

「わかったわ、観光もね？ それじゃ出発は明後日にしましょう。」

その様子じゃあ旅の準備も碌にしていんじゃない？ 明日一通り買いそろえましょう」

「あ、お願いします。正直何が必要か分かってなくて……」

必要なものと言えば、ラウルからすれば杖剣と杖だけで、それさえあれば錬金でもなんでもして必要なものはそろえられる。服装に関しても昔にアミーシャとの訓練で培われた経験もあるので、正直森で裸でも問題ない。ただ、それはラウル一人だった場合だけで、二ナとガーネットがいる今の状況では森を強行軍することも出来ない上に昼と夜の温度差に二人が耐えられるとも思えない。

「で、何は持つてるの？」

二人に対するその質問に、二ナとガーネットは首を傾げつつも答える。

「私たちは、三日分の着替えと食糧五日分です」

二ナが答え、ガーネットが頷く。そしてそれを聞いたアキナが額に手を当てて俯いている。

「……………あんた達、旅を舐めてんの？ 死にたいの？ 旅の必需品のローブ、火打石すら持つてないなんて、自殺願望としか思えないわ……………着替え持つ前に最低限そっちを持ってきなさいよ。ああ、頭痛くなってきた」

説教にも似た文句を言われ、己の常識の無さに少なくないショックを受けるラウル。返す言葉も見つからず、正座をしながら頭を垂れて聞いている。

「まあ、それらも含めて依頼を受けちゃったしね。面倒は見えてあげるわ。食費とか宿代はきっちり請求するから、そこんとこよろしく」
「……はい」

「それじゃあ私たちは宿に帰るわ。明日はこっちの宿に移るけど、ここの宿代も請求していい？」

「もちろんですよアキナさん」

完全に立場が逆転してしまっている気がする……。

「そう、ありがとう。さすが貴族様ね。それじゃあおやすみー」

そう言って祖父を連れて部屋を出ていくアキナ。部屋から出て行った商売上手な彼女に感心しつつ、ラウルは自分の常識力の無さを噛み締める。

その常識力の無さはアミーシャの特訓が原因の一端でもあるが、もちろん本人はそれに気づいていない。

「あの……ラウル様？」

落ち込んでいる背中におずおずと声をかける二ナ。ガーネットはベッドの感触を横になって楽しんでいるため、ラウルのことなどお構いなしである。

「二ナだけだよ……僕にやさしくしてくれるのは……」

「いえ、見損ないました、とだけ言いたくて……」

「……へ？」

二ナの口から信じたくない言葉が出てきた気がした。

「常識を持っていると思えば、全くなかったんですね。話を聞いて

も薬学とか魔法の知識がほとんどで私には意味の無いものでしたし。唯一つかえそうなのは兵法ですか？　それも、戦争や戦いが無ければ意味がありませんしね」

追い打ちをかけられ、さらに落ち込む。もはやベッドに腰掛けているのもおこがましい存在になってしまった気がしたラウルは、部屋の隅に三角座りした。その様子はいつべそと泣き出してもおかしくなさそうだった。そんなラウルの様子をみながら、二ナは誰にも気づかれないように頬を薄く紅潮させ、息も若干ながら荒くなっている。

「ふふ、ですがその造詣の深さはさすがとしか言いようがありません。さすがラウル様です。すごいです」

ラウルの耳がピクリと動く。

「その素晴らしい知識を私に教えてくださいよラウルさまっ」

しばらく沈黙が続くが、もぞもぞと揺れだしたラウルに確かな手応えを感じる二ナ。

「………… ホント？」

釣れたっ！　小さく握りこぶしを作り、感情が高ぶるが、それを表情に出さずに話を続ける。

「ええ、本当ですよ、ラウル様。私はラウル様以上にすごい人を未だ嘗て見たことがありません。ですから本を買ってください」

「いやあー。それほどでもないよ二ナさん。ところでどんな本がほしいの？　なんでも買ってあげるよ。というか僕が教えてあげるよ。」

僕が読んだことがあるものに限りだけどさ」

「結構です。もう夜も遅いので寝ます。本、楽しみにしてますね。ガーネット、行きましょう」

「はいはい」

すつ、と部屋を出ていく二ナにガーネットがパタパタと足音を響かせてついていく。部屋のドアが閉まり、なんとも言えない気持ちになったラウルは二ナに乘せられただけでも気付かず、というかそれに気付くと心が折れてしまいそうなので気付かないようにして、無言で着替えてベッドに横たわり、明日に備えて灯を消して寝た。瞳から流れる水は局地的な寝汗だと信じて。

アキナ一行と合流して朝食をとり、旅の必需品などを買ったために町を歩く。

「この街、というかこの領地、貧乏なの？ 宝石とか鉱石の採掘でそれなりにお金は入るはずなのに寂れた感じがするわよ」

「ああ、それは僕も思ってた。帰ったらジュルネさん……ああ、僕の祖父で今の当主なんだけど、その人に聞いてみるよ」

確かに、この領地は小さいながらも土地には恵まれているはずで、宝石や鉱石の類が多く採れる。とジュルネさんに自慢話の一つとして聞かされていた。それなのにこの寂れ具合。なにかおかしいのか言いようがない。利益をどこからかすめ取られているのではないかと考えてしまう。平民がそれほど辛そうにはしていないので、暮らしは悪くはないのであろうと思うが、よくもないだろう……。

旅行から帰れば精査しようと頭の片隅に置き、今日の主目的である必要なものの話しに戻る。

「とりあえず、ローブは買ったし、火打石も買った。その他の買い物もこつち持ちでいろいろ買った。他に必要なものは？」

軽くなった財布を気にしながらアキナを見る。ラウルの問いかけに彼女は少し考える素振りをして答える。

「そうね、挙げればキリが無いけどウチの馬車も五人乗ればそれほど空きスペースがあるわけじゃないから、あとはあんたの魔法に期待するわ」

「……お手柔らかに……」

こき使われるのを覚悟し、諦めの境地で答えるラウル。メイド二人といいアキナといい、貴族に対する礼儀を弁えていないのではないかと思ってしまうが、逆に貴族として恭しく接されるのもなんとなく嫌だったのでこのままでいいか、と結論に至ったところで、袖を引っ張られる感触に気付く。

「あの、ラウル様……」

皆がいるところでは大人しい二ナが、ラウルの袖を引っ張って必死に自己主張していた。

「あの……本が……」

二ナの目線の先には本屋がある。嗜好品のきらいが強く高い書物などは平民にとっては無用の長物と判断されるらしく、需要といえは貴族か物好きな商人、変わり者の人間と必要とする人間は少ない。

それがこんな街中で店を構えているのを不思議に思い、興味を惹かれた。二ナとラウルの視線に気付いたのかアキナも本屋を見る。

「あれ、本屋？ 珍しいわね。ちょっと寄ってく？」

えー、とガーネットが一人だけ嫌そうにするが、それ以外に反対意見が出ることもなかったので寄ることにする。ガーネットがしつこく反対していたが、二ナの一睨みで大人しくなった。

「へえ、いろいろあるね」

「ほう……」

周囲を見回し、感心したように呟くラウル。その横では、見惚れるようにして周囲を眺める二ナが感嘆の息を漏らしていた。

完全に自分の世界に入って本を見て回っている二ナを放置し、ラウルも自分の興味のある本を探そうと歩きだす。

アキナと爺さんもそれぞれ見て回っているようで、ここで昼食まで時間を潰すのも悪くはないと考えつつも興味の惹かれたタイトルの本をいくつか手元に引き寄せ、読む。

昼を少し過ぎ、ガーネットが退屈と空腹でノックダウン寸前になっているのに気付いたので昼食を食べようと皆に促して店を出る。二ナがいつまでも離れようとしなかったが、手元にキープしてある何冊かを自分の分とついでに会計を済ませることで二ナを動かすことに成功する。

「お金、無くなっただけ……」

やはり嗜好品であり、需要の少ないものは単体の値段が高くなる。元から心もとなかったジュールネさんに持たせてもらったお金は、残り銅貨数十枚に至るまで減っていた。

「……お金って無くなるものなんだね」

財布の中を覗き込みながら、全く見当違いな感想を述べるラウル。そこへ、アキナが無言で潜り込むようにして下方から迫り、天を劈くかの如くアッパーがラウルの顎に突き刺さる。

「ドアホ！　いくら貴族だからってお金の感覚なさすぎなんじゃないの！？　ってかあたしたち今から旅すんの！　それなのに本なんが買ってたんじゃないわよ！」

アッパーをくらって地面で仰け反って痛がっているラウルに対して吠えるアキナ。その目には金こそが全てであるといわんばかりの勢いがあつた。

「う、ぐふつ。な、ナイス突っ込みだよアキナ……」

長身のアキナが、アキナの胸ほどまでしかない身長の人形の下に潜り込めるほどの身体能力を有していたことに驚きつつも、なぜか本能によって避けてはいけなそうに思っていたアッパーの威力と突っ込みの的確さを褒めるラウル。

「そんなことは今問題じゃないの！　問題なのは、金がないのにこれからどうやって旅をするのかってことなのよ！」

腰に両手を当て、怒鳴るアキナ。呼吸するたびに上下するその胸をできる限り見ないように彼女の話聞くのは予想以上に精神力を磨り減らす作業だった。

精神力を磨り減らしながらも、ラウルはおねだりするように、一言発する。

「……貸して？」

コメカミに青筋が浮かんだかと思うと、ドゴツ、と上から全体重に重力をプラスしながらラウルの腹部に右足を突き落とすアキナ。さすがにそのやり過ぎな突っ込みに二ナが止めようとするが、それを横たわって踏まれているラウルが手で制す。

「ぐふっ、僕なら大丈夫だから二ナ……。これは、アキナの愛情表現にのっぴきりなんだよきつと……」

状況を理解していないラウルの言葉にさらに青筋を浮かべ、さらに数度、足を上下に踏み降ろす。

「そうつ、いうつ、はなしをつ、してんじゃっ、ないのよっ！」

端から見ればそれは十代中盤の少女が、十代前半の少年を踏みしだいている図にしか見えないが、誰も少年とは言え貴族を足蹴にできる少女達に関わるうとは思わず、触らぬ神にんとやらよろしく目を合わさないように足早に去っていく。

関わってきてもらってもありがたい事ではあるが、今の状況ではそれはそれで迷惑なのでこれで良いのではあるが、もし自分以外の人間がこんな状況に陥った場合は助けてもらわれることを切に望む、蹴られるラウルであった。

暫く蹴られ続けたが、忘れ去られたガーネットの空腹状況を思い出して急いで夕食が食べれるところに駆け込むラウル一行。ラウルは着替えており、昼間に買った平民風な服装に身を包んでいる。それは茶色い長ズボンに、若草色の七分丈のＴシャツであった。

「まあ、髪の毛の色は流石にどうしようもないけど、服装は変えるんだから、少しは状況に溶け込めるように努力しなさいよ……」

アキナのその言葉に、昔アミーシャと話したことを思い出す。『状況に見合った服装』。それを的確に選ぶことができれば、状況に馴染めず目立ってしまうことになる。そのことを改めて思い出したラウルは、言い返すことなくその言葉の大切さを改めて心に刻みつけた。

夕食を終え、ラウルの部屋に集まって明日から始まる旅に備えてミーティングをすることにした。昨日からの固定位置であるベッドの上にいるラウルは、蜂蜜を美味しそうになめている二ナとガーネットを傍らにアキナに対して正座してお願いしていた。

「向こうに着くまでお金を貸して下さい」

ベッドの上でこの世界にあるかも分からない土下座をしながら、

誠心誠意の気持ちを込めてアキナに願う。

その前で仁王立ちし、その大きな胸を腕を組むことでさらに強調しながらコメカミに青筋を浮かべながら聞いていた。

「なにとぞ平に、平につ……」

「だあーつもうつるさい！ わかったから頭上げなさい！ これじやあ話もできやしないわよ！」

「ほんとに!？」

ガバリ、と身体を起こし、アキナを見つめる。彼女は照れくさいのか機嫌が悪いのかそっぽを向いていたが、コメカミの青筋が無くなっていたので怒ってはいないのだらうと判断する。

「ええ。もちろん、あんたの言う目的地に着いたらその倍は払ってもらうから」

「それはもちろん！」

「それとお金の管理はこつちですから、あんた達は金輪際お金に触らないこと」

「了解！ なつ、二ナ、ガーネット」

コクコクと二人で蜂蜜をなめながら頷く二人。おそらく蜂蜜をなめるのに夢中で話を聞いていなかっただろうが、この際それは関係ない。

「交渉成立。流石金づる、話が早くて助かるわ。それじゃあ、本題に入ろうか」

そう言って明日からの事について話し合う。

移動経路、食事、途中で立ち寄る場所、護衛を雇うか否か、盗賊の危険性、目的地、亜人などの危険性、森を進むに当たっての注意

事項、さらには国境は正規で通過するのか、もしくは密入国するのか。話し合いは深夜にまで及んだ。

椅子に座って微動だにしないおじいさんは寝ているのか起きているのかわからなかったが、ニナとガーネットは後ろで完全に寝ていた。ニナは途中まで本を読んで起きようとしていたが、やはり睡魔には勝てず寝落ちしている。もちろん、歯磨きはさせた。蜂蜜なんて物を食べて歯磨きせずに寝るとか無茶無謀とは思えなかったし。

「ふう、これで大体決まったね……。確認のために繰り返すよ？」

順路は私とお祖父ちゃんの知っている道を取りあえず通る。食事はあんたが採ったり狩ったりできるときはそれを調理。それ以外は今日買ったやつで、無くなり次第随時村で補給って事で。護衛の件は、ガリアに入ってから傭兵を何人か雇ってみるって事で。盗賊、亜人に遭遇した場合、あんたの魔法で殲滅って事でいいね？ 信賴するよ？ で、目的地はオーヴェルニュ地方、と」

ラウルはコクリと頷き、続きを引き継ぐ。

「うん。で、国境を正規で通るのはいろいろまずいからばれないように森を移動するってことで」

ラウルの言葉を聞き、アキナは隠そうともせずになきなため息を漏らす。

「はあ、国境を通れないってあんた何したのさ……」

頭痛でもするのか片手を額に当てて俯きがちに言うアキナ。

「それにオーヴェルニュって……、最近事件が起こった所じゃないの……」

もう一度大きくため息をつく。

国境を非公式に越えることに難色を示しつつも否定はしてこないアキナ。それはとてもありがたく、決してお金だけで動いているのではない、と思えてしまう。それに、つい数ヶ月前に怒った事件がもう国を隔てた商人達にまで伝わっている事に、商人達の情報網を甘く見ていたことに気付く。

これは、魔法薬の流通経路は足が着かないようにもう一度見直さなければ駄目かも知れない。国がたいしたことなくても商人は関係なく強かだ。

「はあ、法の目をかいくぐるって頃は、料金割り増ししなくちゃっ」

下を向いて小声で言ったようだが、アミーシャに鍛えられたラルの耳は見逃さなかった。彼女はやはり、お金で動いているのかも知れない……。

第33話 仕切り直しの旅立ち前夜（後書き）

……実はラウルには金銭感覚がなかった。

第34話 旅路（前書き）

お、お待たせしました。。。

ああ、切られていても文句も言えないほどの期間の空き具合……。申し訳ありません。。。

やっと、USBショックから持ち直して書き直すかー。って気分になりました。。。

これから頑張ります。。。

第34話 旅路

旅立ちの日。まだ日も昇っていない程の早朝に、ラウル達は馬車で街を出発した。

「ふあ……はふ。こんな朝早くから出る意味はあつたんですか？」

好奇心旺盛なニナが、荷馬車の中から疑問を訪ねる。その足下では、ガーネットがニナの膝枕ですやすやと気持ちよさそうに寝ている。

「うん、朝だと人通りも少ないし、日が昇る前に出るんだから日が沈むまでにより遠くまでいけるから、だよ。アキナ」

「あー、そうそう。ふあ、あ……まだ眠いんやからちよつと寝させて……」

朝に弱いのか、馬車の中で横たわって布を被りながら布袋を抱きしめている。馭者はイウルの爺さんに丸投げしたみたいだ。

馭者台で寂しそうにしていた、という訳ではないが、なんとなく馭者台に出てイウルさんの隣に座る。

「イウルさん、馭者のやり方、教えてもらえませんか？」

できる事はどれだけあっても困らない。馭者はアキナとイウルさんがいるが、二人から離れれば馬車を動かせる人はいない。ラウルとしては、この不安を払拭させるためにもう一人は馭者が欲しかった。

た。二ナかガーネットもいたのだが、二人にできて自分ができないと言うのもやるせない話だったので、自分が率先して習っておこうと思ったわけだ。

イウルさんは若干驚いた目をして此方を見てから、今までやっていた作業をゆっくりにしてくれた。見て覚える、ということだろうか。

馭者台では会話もなく、ラウルはただ寡黙にイウルの手元の動作と馬の動きを追い続けている。それを見ながらも新しい魔法薬の調合表を考えていたので、退屈ということもなかった。

昼、街道から少し離れたところに広い場所を見つけ、そこで昼食を食べることにした。森の中に行つて狩つてきても良かったのだが、それは保存食が心許なくなつたときにすることにした。

干し肉と、日持ちのするライ麦パン。あと一人に一個、リンゴがあった。

「……豪勢だね」

手元に置かれたそれらの食材を見ながら、ラウルが呟く。

「まあ、初日やしな。それにクライアントもおるし、それで節約するほうが嘘やろ」

たしかにそうだ。と思いつつ、遠慮なく干肉に齧り付いた。

それからしばらくして全員が食べ終わつた食後、ラウルは齧りあがが無数についたリンゴを手元で弄びながら言った。

「そつえば、傭兵はどこで雇う？」

もはやラウルの中では決定事項であった傭兵の雇用であったが、アキナたちは初耳だったのか、呆然と、もしくは目を見開きながらラウルを見ている。

そんな中から、アキナが代表してラウルの発言に対して返答する。

「よ、傭兵つて、あの金払って戦わせるあの？」

「ん？ それ以外に傭兵つて何かあったっけ？」

純粋にクエスチョンマークを頭に浮かべながら問い返すラウルに、アキナは一度目を閉じ、言うべきことを整理してから確実に言葉を紡いでいく。

「傭兵つて、雇うのにどれだけお金が掛かるかわかってる？」

「さあ？ でも大丈夫でしょ」

何を根拠に言っているのか。全員がそれを思ったが、口に出せずにいた。

「まずは雇用費。人数にもよるが、命を対価にさせるんやから安くはない。それと、雇った奴らの生活費。当然、護衛させるんやし面倒みやなあかん。最後に、これが一番重要やけど、リスク。傭兵が逆に依頼主を襲わんか、とか金だけ受け取ってトンスラこかへんか、とか。それらを全て許容できて初めて、傭兵を雇うに至るんや。そのへんわかってんのんか？」

一息に言われてラウルはタジタジになる。解っているのかもなにも、最初からそんなに深くは考えてはいなかったし、数がいれば戦闘では有利だから欲しいかもしれない、程度の気持ちでいたのだ。雇用費、安全度、リスクなどは全く度外視してしまっていた。

それに、雇ったからと言って絶対に安全という訳ではないのも、寝耳に水だった。まさか、雇うことによってまた別の危険を抱えることになるなど、本当に全くの予想の外であった。

「えつと……」

「あーもー！ この際やから言わしてもらっけどな、大体あんたは金に疎すぎんねん！ 金貨を一瞬で使い果たすとか、ボンボンとかそんな次元の話やないで！ それに……」

アキナの小言モードのスイッチが入り、このまま説教モードかと二ナたちが外側から見守っていると、急にラウルが顔を上げ、右斜め後方を見つめ出した。

「ちよつと何処見て「シツ！」ンンツ！？」

静かになる。森の中を風が駆け抜け、木々の葉が擦れ合う音が周囲に木霊する。

「二十三……亜人、じゃないな。人間か。気配に疎くて良く生きてこれたな……」

小声で何かに対する評価を付けているラウル。その目は真剣そのもので、今までのどこか抜けた感じの雰囲気は微塵もなかった。

「この辺りを拠点にしているのか？ いや、それにしても動き方が妙だ。流れて来たのか……。それならまだやりようはある」

何かがラウルの中で決まり、早速行動に移そうと動き出す。

「みんなは馬車の中に入って、いつでも出られるようにしておいて。なにがあるかわからないから……」

「ちよつ、ラウル？　なにがあつたんや？」

アキナの何があつたのかわからないという声に、ラウルはそちらを見もせず簡潔に答える。

「……賊。たぶん二十三人か。あーえつと、アキナ、二ナ。ちよつと対処してくるよ」

「え、あちよ、まっ」

そう言つて走りだしたかと思うと、トンつとまるで重力でも無いかのように跳んで木の枝に飛び乗り、そのまま木の枝を次々と飛び跳ねていきあつという間に見えなくなる。それを見てしばらく啞然としていたアキナだが、やがてゆっくりと首を動かし、二ナに疑問をぶつける。

「あいつ、何者？」

「さあ、わかりませんよ私にも……」

何かを諦めているような様子の二ナが。溜め息交じりに呟いた。

ラウルは久しぶりに木の上を走る感覚に懐かしさを覚える。感覚は忘れていなかったようで、つんのめることもなく音も無くスイスイと樹上を跳び進む。

しばらく進んでから木の上でしゃがんで気配を消す。自然と一体化して木の一部になる。集中して、そこにラウルが居ると言われて見ても解らないほどに一体化していた。

約十分ほどそこじつとしていると、賊と思われる集団がすぐ下を通過する。進行方向は、なんの因果か偶然かアキナや二ナがいる、

荷馬車がある方向だった。さらにその先は、スリユダーで一番栄えていると言われている街である。どこから流れて来たのか知らないが、そうと解っていて見逃すわけにはいかない。賊には悪いが、運がなかったと諦めて排除されてもらうしかないだろう。

気配を消したまま、背中から折れた杖剣を取り出す。抜き放ったそれは、十歳の体格で使うには大きく見えるが、長さは半ばで折れたままので三十 سانتほどである。切っ先はなく、折れて放置されたままである。

呪文を唱え、水兵^{トリトン}を三十体出し、賊を囲むように配置させる。

完了したのを感覚共有で確認してから、それらを伏せたまま音も無く賊の最後尾に近づき、口を抑えて声を出せないようにしてから首を掻き切る。賊の首から鮮血が噴き出る。ラウルは間髪入れずにその進む血に向けて呪文を唱え、真っ赤な氷柱に変化させて前を歩いている賊達を奇襲する。

首を切られ、すでに息絶えた男を離し、次に近かった左前方の男に肉薄する。この男には鮮血の氷柱は当たらなかったようで、無傷の男は剣を抜き放って奇声を上げながら攻撃してきた。

「う、うおあああああああああ！」

大振りなその振り下ろしを難なく躲し、上段からの振り落として邪魔な剣をもった腕を肘から切り飛ばす。賊の腕がその身体から離れたのを確認してすぐさま呪文を唱え、左手に出現させた細長い氷柱を賊の首目掛けて投げつける。

「が、ごぼアッ」

がくりと、糸の切れた操り人形のように崩れ落ちる賊。さらに間髪入れずに赤い氷柱が刺さっている近くの賊目掛けて背中から心臓に剣を突き刺し、息の根を止める。

三人を殺したところで賊もさすがに状況を理解したのか、それぞれ剣を槍を弓を持ち、お粗末ながらも陣形を展開する。

「ちい、なんなんだデメエ……俺の手下が三人も……」

賊のリーダーらしき人間が、額から流れ出る血を拭いながらもラウルの前に出てくる。最初に放った鮮血の氷柱にあたったのだろう。傷は浅くても、額の傷は視覚を潰す。それは確実に戦力低下に繋がる。

「それに、貴族が……てめえら、気をつけろよ。呪文を唱えさせるな！ 囲め！」

賊のメイジに対する対応は合っている。いくら絶対的な力を持っているても所詮は人。呼吸や舌の回転にも限界はある。そこを突いていこうといった作戦だろう。

賊はへい！ と口々に答え、にじりにじりとラウルとの距離を詰めてくる。あと一歩踏み込まれば敵の攻撃範囲、というところでラウルは水兵の囲んでいた陣形を一気に狭め、賊を一網打尽にするべく包囲殲滅を開始する。賊は必死に逃げようとするが、一分の乱れもなく動くその陣形に抜け出せる隙があるわけもなく、賊共は一人また一人と打ち取られていく。数分後、しばらくは申し訳程度の抵抗をしていた賊ではあるが、リーダー一人を残してその集団は全滅していた。

「ひ、ひいいい」

先程までは自信に満ち溢れた顔をしていた賊のリーダーも、そのあまりの出来事に腰を抜かして怯えることしかできず、さらにその股間からは暖かい液体が湯気を上げながら流れていた。

「さて、いくつか答えていただきたいことがあるのですが」

折れて小太刀サイズになった杖剣に氷を纏わせ、六十 سانت程の元の剣の長さの半透明の刀身を作りながら、賊に語りかける。

賊は左右背後を振り返るが、生きているのは自分だけだと分かり、震えながらも返事をする。

「な、なんだ……でしょう……」

「返事が舐めてます。減点」

そう言つて賊の太腿に深々と透明の刀身が刺さる。

「ぎゃああああああああああ！ いでえええええああああああ

！」

「口の聞き方に気をつけてください。次は切り落とします」

とても十歳とは思えない程に冷たい、感情が伺えない表情をしながら賊を見下ろす。

「あなたは、何故この領地に来たんですか？」

「ひつ、いぎ、はは、話を聞いたんだ…… つぐ、ここは、金と女と酒が美味いって……」

「誰に？」

「し、知らねえ！ だが、聞いたのは隣の領地の……なんていったか忘れたがそこで聞いた！ それなりに良いなりをしてたやつだ！

『ここは最高の金づるだ、女もそこそこだし、なによりここで飲む酒は格別だ』って！ 俺たちはそれを聞いてきたんだ！ 本当だ！」

「その前はどこにいたんですか？」

「と、トリステインの領地を点々としてた……この国の貴族は村落が襲われても碌に兵も出さないから、俺達も生き残ってくる事が出来たんだ……」

賊に対してトリステインの貴族が碌に兵を出していない事実に苦虫を噛み潰したような顔をしつつ、まだ質問は終わっていないと気を取り直して質問を続ける。

「このことを言っていたのは誰ですか？」

「し、しらねえ！ それは知らねえんだ！ 本当だ！」

「嘘を吐かないでくださいよ」

杖剣を下から一閃、賊の右腕を切り飛ばす。

「ぎ、ぎゃあああああああああ！！」

「次に嘘を吐けば殺します」

「ああああ！ う、嘘じゃねえよおおお！ 本当だ！ 酒場で飲んでてまたま隣に座ってた奴らが言ってたんだよお！」

どうやら本当に知らないようだ判断し、質問の内容を変えて再度問い質す。

「た、たぶん貴族だ！ つ、杖を持っていやがった！ 隣の領主の関係者じゃないのか！」

よく観察している、とラウルは素直に感心する。これも長年生きてきた賊の勘か。そう感想を抱き、次に男の使い道を模索する。
(その領地の諜報で使えるかもしれないな。あそこはここと繋がり
が深いのに金回りが良くて怪しすぎる……)

「ねえ」

「ぐつ、うう、なんだ……まだなんかあんのかよ……ッガ！」

「その傷、放って置いたら死にますよ」

「あゝあ？ て、てめえがやったんだろぅがッ！」

賊は半ば切れ気味に、今にでも殴りかかって来そうなほどにラウルを睨みながら答える。窮鼠猫を噛む。そんな諺がふとラウルの脳裏に思い浮かんだ。

「そうですね。それで、もですから、僕もやりすぎたかもしれないと責任を感じているんです。それでモノは相談なのですが、これから僕に従ってもらえると約束して下るなら、治療してさしあげてもいいですよ」

額に脂汗をかきつつも何を言っているんだこのガキは。という顔をしながら、賊はラウルの顔を見る。

「あ、ああ？」

「ですから、僕の指示に従ってもらえるならこれを使う事も吝かではないと言ったんですよ」

そう言つて懷から水の秘薬を取り出す。それを見た瞬間、賊の目は飛び出るのではないかという程に見開かれ、ラウルと秘薬を交互に見る。

「右腕は、そうですね。今までの悪事の清算としておきましょう。これから僕の下でやり直してください」

真剣な表情で十歳の子供が、その何倍も生きているであろう薄汚れた男を勧誘している。賊はそれを疑った。メイジとはいえガキがそ

んな簡単に秘薬が使えるはずがない、と。だが、賊はこれを一笑で終わらせる事ができなかった。先ほどの戦い方はとても洗練されていたし、気配も全く読み取れなかったのだ。それになよりの極め付けは、この子供の醸し出す雰囲気だ。それが、何倍も生きている自分よりも逆らうことを許さないと云っているかのような言外の威圧を発揮していた。それにこのまま放っておいても死んでしまうのなら、藁でも子供でさえも縋り付きたくなるだろう。

「わ、わかった……」

「良い心がけです。ではこれを飲んで傷口をこちらに向けて下さい」

賊は秘薬を一気に飲み下し、黙って右肩口を差し出す。

「――。これで、とりあえずは塞がったでしょう。次は太股を」

賊の傷口を瞬く間に治し、さらに懷からもう一瓶秘薬を取り出し、賊に投げる。

「これ売って、今後しばらくの活動資金にしてください。拠点は、隣の領主が居る街で。探すので、その街には住んでいてください」

「わ、わかった……」

治された太股が何の違和感もなく動く驚きながら、いそいそと歩き出そうとする賊だった男。

「ああ、そう言えば」

びくーん！ と男は驚き、まだ何かあるのかと恐る恐る振り返る。

「名前は、なんというんですか？ そう言えば聞き忘れてました」

なんだ、そんなことか。と安堵しながらため息を吐き、男は名前を名乗る。

「ク、クロマでさ……」

「おっけー、クロマ。ああ、これからよろしく。僕はラウルです。ラウル・ド・スリュダー。覚えといてね」

「へ、へええ！」

ものすごい勢いでお辞儀してから、クロマは駆け足でラウルの前から隣の領地に向かって走っていった。その怪我をしていたと感じさせない男の動きに、ラウルは自分の治療に満足感を覚えた。

「で、賊の頭だけ逃がしたんかいな？ 秘薬渡して」

「うん」

トリトン
水兵や地面から生える氷柱を見せる事によってやっと賊を撃退してきたという話を信じてくれたと思ったら、今度はクロマを逃がした事について言及された。

「あんたアホか？ 賊なんやろ？ そのままネコババするかもしれんて考えんかったんか？」

「当然、それも考慮済み。もしもの為に、秘薬で俺の命令に無意識下で強制力があるようにしといたし」

どういうことが分らない、という顔を馭者台で隣に座るアキナや荷馬車の中の二ナがしていたので、説明する。

「えっと、あの程度の傷口を治すのに僕は秘薬を使う必要無いんだよ。でも、治しつつ気付かれないようにそういう暗示を掛けたかったから使ったんだ。使った方が効果が上がるのは確実だし」

ラウルの説明を理解した二人は肝を冷やした。つまり、ラウルの命令に本当は反対でも、その暗示を掛けられていたら賛成の方向に無意識的に傾いてしまう、という事だ。それはあくまで自分の意志で決めた、と思い込むことになり、気付かないうちにすでにラウルの手のひらの上で踊っていることになる。

「あ、大丈夫。普通は使わない手だから。それに、まああれは保険みたいなもんだよ。クロマは何もしなくても言っただころで住んでると思うよ」

怪我をしないように気を付けよう、と心に刻み込んだ二人だった。その横でラウルは、クロマの事まで言う必要は無かったかも、と少し後悔しながら、今後は伝える情報は選別しようとするのだった。

それから二回ほど野宿をして、一気にガリアとの国境に一番近い街に来た。そこに至るまでに普通は何度か亜人や魔獣と出くわしても良いはずだ、とアキナが不思議がっていたが、ラウルの存在に変に納得しているようだった。

街で一泊しつつ再度保存食の調達やいろいろな備品を買い込み、ガリアの国境へと向かった。

久しぶりのベッドにもう一泊とガーネットが駄々を捏ねたが、二

ナが管理している蜂蜜につられて一泊で済んだのだった。

朝に出発し、昼頃に国境に着く。馭者はイウルとアキナの祖父娘の商人コンビ。関税を少し多めに払い、さらに酒なども付けて口封じを兼ねて関所を通る。これで記録上では、今日ここを通ったのは商人の親子が一组、となっているだろう。腐敗がどうのと嘆いていたが、こういう時はその腐敗が役に立つ。嘆かわしいことに変わりが無いが。

それから馬車を動かし続け、二回野宿をした次の夕方頃に、ガリアのそこそこ大きめの街に着く。国境を越えてからここを目的地にしていたため、他の街を寄るルートを通らずに最短路である道を通ってきたのだ。危険と言われる場所を通ったりしたのだが、実力を弁えていない野生生物はいなかったのか、一度も出くわすことなくこの街まで来れた。

ここで、予てから言っていた傭兵の雇用を行ってから、最終目的地であるクレルモン^{カネ}＝フェランに向かうことになっている。

傭兵の雇用にもアキナと事前に話し合っていた条件があり、ラウルが認める程の実力者。悪意を持っていないこと。雇用は五人までなどなど。さらに細かい条件を挙げればキリが無いほどに雁字搦めにされていた。それほどアキナ達が不安、ということでもあったのだろうという事と、実力的にこれらの条件を満たしていないのに雇っても意味が無いということを考慮し、ラウルもこの意見を飲んだのだった。

そして街に着いた日の夜、これからこの街で一番賑わっている酒場に行き、傭兵を見繕いに行くところだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4109m/>

人生山あり谷あり

2011年10月3日14時31分発行